

---

# バカと日常と試験召喚戦争

NIGHT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと日常と試験召喚戦争

### 【Nコード】

N8302Q

### 【作者名】

NIGHT

### 【あらすじ】

一年前に文月学園を半壊させたと言いをかけられた吉井明久だったが彼は記憶喪失で何も覚えていない。疑いを晴らすために明久は二年Fクラスで共に過ごす事となるが、そのクラスには特異体質を持った生徒ばかりが集まる場所だった。天才にだけ与えられる『召喚獣の能力』VS バカでも与えられる『大神の才能』が今ここに試験召喚戦争の化学反応を引き起こす。

## 【第一問】 新学期（前書き）

（本作を読まれる前に）

この作品は登場人物の容姿や、召喚システムなどの初期設定のみを原作から借りています。

そのため登場人物の性格の変更や、召喚獣の腕輪の能力変更や能力名に造語の使用があり、原作とは全く違うストーリー展開です。そう言った設定が苦手な方は『戻る』を押ししてください。

【第一問】 新学期

B A K A T O T E S T

季節は新しい春を迎えた4月11日

新入生、新社会人といろいろな事が新しくなる季節である

ただ、新しい事には誰しも最初は緊張してしまう

そんな緊張を和らげてくれるのが桜である

今の季節、桜の花は満開を迎え、風に揺られて気持ちを落ち着かせてくれる

枝から離れた桜の花が風に乗って舞い落ちる景色が風流である

その光景に足を止め、桜の花を眺めている人もいる

だが一人だけ桜に目もくれず、息を切らせて走って来る男がいた

「やばい！このままじゃ遅刻だ」

新学期初日から遅刻を決めようとしているのは、  
吉井明久よしいあきひさ

今現在、遅刻ギリギリの状況に置かれている

「何で目覚ましが今日に限って止まってるのさ 初日から遅刻何て勘弁してほしいよお」

明久は全力で走りながら、愚痴をこぼしていた

しかし、徐々に走るスピードを緩めていく

明久は荒くなつた呼吸を整えながらも歩を進める

「はぁ……はぁ……いつもならこれぐらいで疲れなかったのに 春休みの間ずっとゲームしてたのがダメだったのかな」

さすがに疲れたのか明久はさらに歩くスピードを緩め、ついにはその場で止まってしまった

「はぁ……はぁ……はぁ ダメだ、ちよつと休憩しよう」

完全にダウンした明久は近くにあった『文月公園』で休むことにした

「ふう疲れた」

公園には巨大な桜の木が1本あり、木の根元はちょうど良い木陰ができていた

明久は木の根元に座り、そのまま木にもたれ掛り、ついでに足を延ばしてし字になる

「ここら辺、凄い桜の花びらだ」

さっきまでは全然見向きもしなかった桜にようやく目が届いた

「うああ……上の方凄いな」

桜の花びらが降ってくる方を見ると、空が見えない程大きな桜の木だと確認出来た

その木は、他の木よりも数百年は長く生きているのか、枝は子どもが乗っても折れないほど太くて丈夫になっていた

「あれから1年か……2年生になれば少しは思い出せるのかな」

何やら意味深な事を呟いた

そんな事を口にしたせいか、さっきまで見上げていた顔は桜で積った自分の足を見ていた

「  
僕の過去」

「あの、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

明久が何かを言いそうになった時、誰かが声をかけてきた

顔を上げ声のする方向に目をやると、一人の女子が明久の前に立っていた

「……………なに？」

「その制服って、『文月学園』の制服よね？」

明久の前に立っている女子は、明久と色違いの制服を着ていた

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「実はこの辺りの道に詳しくなくて、文月学園の行き方がわからないの」

女子は地図を片手に文月学園を探して道に迷ったらしい

真新しい制服とカバンを見て「ああなるほど」と明久は何か納得したかのように、首を縦に振った

「こんな事聞くのもあれだけど、もしかしてあなたも道に迷ったの？」

「僕は寝坊……………いや実は僕、この木の妖精なんだ」

「ゴメン嘘です 寝坊してました」

明久が冗談を言ったと同時に、女子が1歩下がる仕草をしたため慌てて本当の事を話した

「もし良かったら、一緒に文月学園までついて行ってもいい？」

「僕は別に構わないよ」

「ホント?! ありがとう」と女子は嬉しそうに笑顔を見せた

「っ……っ！」

その顔に思わず、心臓がドクンツと大きく動いたのがわかった

「そ、それじゃあ時間もないし行くこうか」

少し顔を赤らめた明久は、必死で何かの感情を押さえこもつと急いで立ち上がった

「あ、そう言えばまだ名前言ってなかったわね」

女子は思い出したかのように両手の掌をパンツと合わせる

「そうだったっけ? えっと僕の名前は、吉井明久って言うんだ」

「吉井: 明久 宜しくね吉井君」

「吉井で良いよ 明久でも良いけど」



「えっと……じゃあ吉井って呼ぶわね」

「うん 君は？」

「ウチは、島田しまだ美波みなみって言うの」

「島田さんか うん宜しく」

「人には呼び捨てなのに、自分は「さん」付けなの？」

「そっか えっと島田さ……島……島田さん」

「無理ならそれで良いわよ」

「何だか恥ずかしくて じゃあ改めて宜しく島田さん」

「「じちらこそ」」

お互い気が合ったのか、すぐに仲良くなれた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二問】 文月学園

B A K A T O T E S T

「はぁ……はぁ……何とか間に合ったよ」

「はぁ……はぁ……ウチ、こんなに走つたの日本で初めてかも」

「あはは、それは言い過ぎだよ島田さん」

「あ、ウチが言いたかったのはドイツ育ちで ってあれ？」

美波は明久が勘違いしているのだと思い、ちゃんと説明しようとするも明久はすでに美波の数メートル先を行っていた

「ほらほら、早く校門に入らないと閉められるよ」

「ちょ、ちょっと待ってよ」と美波は慌てて走っていった

明久たちは、ようやく文月学園に着く事が出来た

時間は少し間に合ったようで、まだ校門は閉められてはいなかった

「お前たち、初日から遅刻ギリギリとはたいした度胸だな」

校門に入ると、迫力のある低い声が聞こえてきた

「げっ……鉄人」

「鉄人じゃない西村先生と………ん？ 吉井、記憶が戻ったのか？」

「え？……まだですけど あれ何でだろう、無意識に『鉄人』って言ったような」

「………たく、もっと他のことを思い出してほしいものだ」

「すみません」

明久は1年ほど前に、ある事がキツカケで記憶をなくしている

その事は、鉄人こと西村先生や他の教師も知っている

「まあ良い……島田」

「は、はいっ」

明久と顔を合わせていた鉄人が突然、顔の向きを美波の方に変えて呼ぶ

鉄人に呼ばれ、一瞬ビクツと体を震わせた美波が緊張しながらも返事をする

「お前は、1階にある職員室に行って来なさい」

「はいっ」

やはり見た目が怖いのか、美波は2度目の返事もガチガチになりながら、言われた通り職員室の方へと逃げるように走っていった

「島田さん！」

明久に呼び止められた美波は慌てて止まり、明久の方に振り返る

「また会ったら、学園内の案内してあげるからね」

「あ、ありがとう またねっ！」

「うん またねっ！」

明久と美波はお互いに手を振り、美波は再び逃げるように走って校舎の中へと入って行った

2人が手を振っている間に鉄人は何かを思い出したのか、スーツのポケットに手を入れる

「吉井、お前も今日から2年生だからこれを渡すぞ」

そう言って、鉄人がポケットから取り出したのは1通の封筒だった

封筒には大きく縦書きで『吉井明久へ』と書いてある

「もしかして進学祝いとかですか？」

「開けてみればわかる」

「まったくもう、そんな気を使わなくてもいいんですよ？ さて幾ら入ってるかな」

明久は鉄人に手渡された封筒を貰い、太陽にかざすと少し大き目の紙のような物が入っていた

中身を破らないように、ビリビリと慎重に開けていく

そして、親指と人指し指を使って中身を引っ張りだす

中に入っていたのは、お金ではなく真っ白な紙が3枚折りになって入っていた

「あれ？ お金じゃないんですか？」

「お金より大事な物だ さっさと開けてみる」

そう言われ、明久は再び3枚折りになった紙を見て、重なった紙を開けていった

開いてみるとそこには『F』と言う文字が書道に使う筆で大胆に書かれていた

「吉井明久、お前は今日から最低のFクラスだ 1年間オレがミッ

チリ教え込んでやる」

「……………僕が……………F……………クラス？」

明久は鉄人にそう言われ、魂の抜けていくようだった

「何で僕が最低のFクラス何ですかっ！？ 僕は勉強ができる人間だっって言われましたよ！」

Fクラスに納得のいかない明久は、過去の記憶を知る者に聞いたところ自分は勉強が出来てFクラスになるなど可笑しいと批判した

「確かに、お前は勉強の出来るやつだった」

それは鉄人も認めていたらしい

「じゃあ何で」

「だがな」

明久が、反対しようとしたが鉄人の話はまだ続きがあった

「だがな、お前は1年生最後のAクラス〜Fクラスを決める『振り分け試験』の日に学園を休んでいたため試験を受けていない……………つまりお前は学年最低点数の0点なんだよ」

振り分け試験とは、文月学園の1年最後に行く特別なテストのことである

この振り分け試験は普通の試験と問題内容は変わらないが、テストの点数によって2年生になった時、Aクラス〜Fクラスの教室に振り分けられるため『振り分け試験』と呼ばれている

「……僕が最低点数……そんな……そんなの卑怯ですよ」

「何でだ」

「あの時、僕は病気やケガで動けなかった訳じゃない」

「体は十分正常だったんですから、振り分け試験ってやつに参加することが出来たじゃないですか」

明久が言う通り、それは正論だった

だが、明久には決定的に無理なことがあった

それは

「お前には停学処分が下されていたからだ」

そう停学中だったと言うことである

いくら元気な体だと言っても、停学中である以上学園の出入りは禁止されている

それを聞いた明久は「嘘だ……」と初めて聞かされた事に驚きを隠せなかった

「お前には、この事を事故での『休養』と言うことにしろと学園長から言われていたが、もうそれも意味をなしていないから、今ハッキリ言わせてもらおう」

そう言って、鉄人は大きく息を吸い込んだ

「吉井明久 お前は、文月学園から『嚴重注意人物』として監視されている」

「この事を気に、何か変なことを起こせば停学では済まなくなるぞ」

「僕が……嚴重注意人物？ 何で僕は監視されないといけないんだ」



「それはお前が

」

キ　　ンコ　　ンカ　　ンコンと予鈴のチャイムが同時に鳴り響いた

「　　だと言われているからだ」

鉄人が何かを明久に伝えると、崩れるように膝を落とした

鉄人から言われた事で理解できたことがあったのだろうか、「だからこの学園は……………」とこの学園の何かに気づいた明久

「まだお前の記憶が戻っていないから、真実かどうかはお前次第なんだ」

「だから、この1年間は監視と言う意味も兼ねてFクラスに入れたのが事実だ」

鉄人は明久をFクラスに入れたのは、振り分け試験をしなかったこ

とが原因ではなく本当は振り分け試験などしなくても、最初からFクラスに入れると言うことになっていたことを話す

「それとお前には『観察処分者』として、オレたち教師の雑用係にもなってもらってから覚悟しておくんだな」

観察処分者とは、学年の各クラスで最も成績の悪かった生徒に与えられる称号である

明久は、テストを受けておらず学園で最も低い点数のため必然的に与えられる

「……………なら、」

少しの間、黙ったままだった明久が口を開いた

「なら、僕の記憶を取り戻して『真実』って言うのを見つければ良いんですよね」

「ああ……………学園長はお前の事を信じている　だが、それにはお前の記憶が必要なんだ」

「もちろんオレや他の教師もそう思っている」

「わかりました 僕が記憶を戻して、真実を知るためならFクラス  
だろうと監視されようと思ったことじゃない」

「……そうか お前が望んで記憶を取り戻そうとしてくれるのは助  
かる だがな」

「真実が悪い方向だった時は、停学では済まされない ですよ  
ね」

鉄人が後付けで言おうとした事を、明久が変わりに伝える

「……そうだ」

こうして明久は覚悟を決め、Fクラスで記憶を探し真実を見つける  
ことを決心した

「話が長くなつたな 急いで教室に行つてこい」

「はいっ」

その目には、何かに燃えるかのような目をしていた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三問】 学園の秘密

B A K A T O T E S T

「えつと僕の下駄箱は……つと、ここだ」

吉井と書かれた下駄箱に手をかけ、履いていた靴をそこに入れた

「やっぱAクラスは設備が違うよな」

「ああオレもAクラスになりたかったよ」

どこからかそんな声が聞こえてきた

「Aクラス……そう言えば、Aクラスは学園の中でも一番良い設備だったはず」

ここ文月学園は、1年生最後の試験である、振り分け試験によって2年生になった時の教室が決まる

クラスは高成績だった者が入れるAクラスから、勉強が出来ないFクラスまでがある

明久は、最低のFクラスと言うことになったのは説明済みである

さらに、教室の設備はAクラスを最高設備としBCDEF……とクラスが下がることに設備配給が悪くなっていき、AクラスとFクラ

入の設備の差は天と地ほどと言っても過言ではない

「もう遅刻してるし、ちょっとぐらい遅れても変わりないよね」

明久はすでに授業が始まっていることに、ふっきれたのかそんな事を言い始める

「これも記憶探しの1つってことで、噂のAクラスの教室見て来よつと」

カバンから取り出した上靴に履き替え、Fクラスに近い旧校舎の階段ではなく、旧校舎と新校舎の間にある階段を上ってAクラスへ向かった

二階に上がると、左手の方向に豪華な教室が見えた

「うああっ！ここがAクラスの教室か さすが新校舎ってだけあるな」

Aクラスと言うだけあって、教室は外壁まで豪華な造りになっていた  
教室の窓から覗くと、まるで別世界のようなところだった

「凄っ！ 最新のパソコンまで設備されるようになったのか」

文月学園は新校舎と旧校舎がちょうど真ん中で分けられている

正門から見て右側が新校舎、左側が旧校舎になっている

AクラスからDクラスまでは今年から新校舎

EクラスとFクラスは改築されず何十年も建っている旧校舎のままだった

もともと廃校だったこの学校を、今の学園長である藤堂カヲルがそのままの形で残し、とある設備を備えて文月学園を造った

ではなぜ今の学園は半分だけが新校舎になっているのか

それは、1年前にこの吉井明久が今の新校舎になっているところを何らかの方法で破壊して、文月学園を半壊させたからである

先ほど校門前でチャイムが鳴った時に鉄人が明久に言っていたのはこの事だった

原因は今現在も不明だが、学園が半壊した時に明久だけが瓦礫の中から見つかったことから、明久が半壊させたと言われていた

しかし、病院で目を覚ました明久に思いもよらぬ事が起きていた

「あの、あなたは誰何ですか？」

そう記憶喪失だった

これにより、真実を知る情報がゼロになってしまった

明久は記憶を探すため1年間だけ休養することになり、その1年が経過した

2年生になった今日、明久は今だに記憶が戻ってはいなかったが、それでも自分の事、近所の事、学園の事については少しばかり覚えることができたため、留年はせず2年に上がることを許された

それだけで留年しないのは変な話である

実は、明久には留年しなくても大丈夫だった理由があったからである

「ま、この教室も僕が学園を壊さなかったら、普通の設備だったかもしれないんだから、ちょっとは感謝してもらいたいものだよ」

自分の過ちをなぜかポジティブに考える明久

「そんなところで何をしてる、授業はとっくに始まっているぞ。それに君はこのクラスの生徒じゃないだろ？」

明久が窓からAクラスを覗きこんでいたのがバレたのか、教室の中

から1人の男子生徒が出て来た

「あ、いや……ちょっと羨ましかったから見学に来てたんだよ」

「ふん……羨ましいのなら、もっと勉強して成績を上げておけば良かったな」

「まあ今さら勉強したところで、学年次席の僕には追いつけないだろうけどね」

癖なのだろうかメガネのフレームを中指でクイツと上げて、男は教室の中へと入って行った

「なんだよあの態度、自分が優等生だからってちょっとムカつくな」

さっきまでの楽しい時間を壊されたのが気に入らなかつたのか、明久は自分の教室に向かうことにした

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



## 【第四問】 出会いの教室

B A K A T O T E S T

「間に合った!？」

明久はFクラスの教室に行き、教室の扉であろうポロポロになった障子に手をかけ、勢い良く開けた

「遅刻だ」

教壇の上に立っている男は、怒っているのを表現するような赤い髪が逆立っていた

同じ制服を着ていることから、教師ではないのが確認できる

「……………ですよねえ」

「さっさと座れ」

「えっと僕の席ってど？」

「……………ちっ、席は空いてるところに適当に座ってる」

不機嫌そうな男は無愛想に首で指示する

「えっとじゃあ、あそこにしようかな」

明久が教室を見渡し、真ん中の最後列に誰も座っていない席を見つけた

「やっぱり後ろは落ち着くよ」

卓袱台ちゃぶだいの上にカバンを置くとギシギシと、軋む音が聞こえる

「ふう……やっと座れるよ」

明久は敷いてあった座布団に座るとドスンと硬い音がした

座布団にはほとんど綿が入っておらず、そのまま畳みの上に座ったと言っても変わりなかった

Fクラスの設備は、机は卓袱台、椅子は座布団、窓は古いガラスでところどころセロテープで補強してあるが隙間風が入って教室は外の気温とほとんど変わらなかった

明久が座ると「おい、お前」と教壇の上に立つ男子が明久を呼ぶ

しかし、明久は呼ばれているのに気付かなかった

「Fクラスは酷い教室だって聞いてたけど、まさかこれほどまでとは思ってもみなかったよ」

「聞いているのか」と再度明久を呼び掛ける

「でもこれぐらい、いつもの僕の生活とほとんど変わらないかっ！」

「デメエ！聞いているのか！」

バンツと教卓を叩く音と共に、男子は教室に響き渡るほどの声を出した

「えっ?! な、何だよ そんなに大声出さなくても良いじゃないか」

「お前がオレの事に気づかないから大声出したんだ」

「あ、そうだったのゴメン……で、僕に何か用？」

「今お前が座ってる席は、オレの席だ」

それを聞いた明久は卓袱台の下を覗くと、確かに誰かのカバンが置いてあるのに気づいた

「ご、ゴメン気づかなかったよ じゃあこっちにするよ」

明久から見て左の席も空いていたが、教壇の男の横に座るのは嫌だったのか、さらに横の窓際の席に座ることにした

この時、机である卓袱台は明久と教壇の男との間に1つ、そしてまだ他に1つ空いているところがあった

恐らく、後2人は遅刻していることになる

初日から遅刻する生徒がこれほどいるのは、さすが最低クラスと言ったところだ

「それでだ」と教壇の男は明久に注意をした後、再び話し始めた

「はぁ……新学期初日から遅刻はするし、嫌なやつに怒られるし、今日についてはないよ」

明久がため息混じりに独り言を言っていると、前に座っていた生徒が振り向いてきた

「お主、朝から大変じゃの」

「……好きだ」

明久は前の生徒の顔を見るなり、告白をした

「お主、今変なことを言わなかったかの？」と首をかしげる生徒

「い、いやっ何でもないよ　そうだよね初対面にいきなり告白はないよね」

「……？　何のことじゃ？」

前に座っていた生徒は、老人のような独特の喋り方をしている

この生徒は、制服は男子の物なのに非常に可愛らしい顔をしている  
……性別はどちらなのだろうか

明久が告白するぐらいなら、もしかすると男子用制服を着た女子と  
言うことかもしれない

「気にしないで それよりあの教壇の上に立っているのって誰なの  
?」

「あの者はこのFクラスの代表をすることになった、坂本雄二さかもと ゆうじじゃ

「坂本雄二か……代表って言うのは?」

「クラスで成績が一番の者が代表に選ばれるらしいぞ」

「あいつが、このクラスの代表なんだ でもちよつと態度悪くない  
?」

明久から見た雄二の印象は、あまり良いものではなかった

「態度が悪いのは性格の問題じゃが あの者は1年の時、学年トッ  
プに……いや、正確には後に学年トップになったと言われておっ  
たの」

「あいつが学年トップ? まさか、何かの冗談でしょ」

「なんじゃ、お主は知らぬのか? 『神童の坂本』と呼ばれておる  
ほど有名じゃがの」

「実は僕、去年からの記憶がなくてさ 学園の事を全然知らないんだ」

「そうじゃったのか それはスマンの」

「全然気にしてないから大丈夫 それより、もし良かったら、もっと色々教えてくれない？」

「ワシで良ければ、何でも教えてやるぞ」

「ありがとう それじゃあさっそく何だけど聞いても良いかな」

「うむ 何が聞きたいのじゃ？」

「好きな男性のタイプは？」

「質問の意味がわからぬから、答えられん」

「あ、つい本音が出ちゃった」と小さい声で呟いた

「そうじゃなくて、君の名前は何て言うの？ ちなみに僕は吉井明久」

「ワシは、きのしたひでよし木下秀吉じゃ お主にも間違えられたが、ワシは男じゃからの……………って聞いておるかの？」

明久は秀吉の話の途中までしか聞いていなかった

秀吉が良い名前だ　でも、いきなり付き合つのは無理だ  
つたから……

「友達から良いので、お願いします！」

「うむ、友達ならワシは大歓迎じゃぞ」

「やったっ！」

明久は、嬉しさのあまりガッツポーズをとる

「これから宜しくの吉井」

「僕の場合は『明久』って呼んでほしいな」

やっぱり、恋人同士は名前で呼び合うのが常識だもんね

「わかったのじゃ　ならワシのことは秀吉で良いぞ」

「これから、お互いの事いろいろ教えていこうね秀吉」

「うむ　宜しくの」

こうして明久は、秀吉と付き合う事を前提に友達になったと勘違  
てしまった

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第五問】 桜の木の下で

B A K A T O T E S T

ガラガラと教室の扉が開いた

「スマンな坂本 会議で遅れてしまった」

そこに現れたのは、鉄人だった

「ちょうど終わったとこだったんで良いですよ」

そう言つて雄二は自分の席へと戻つた

鉄人は雄二のいた教壇の上に立ち生徒名簿を教卓の上に置き、そのまま両手でドンツと体重を置いた

「今日からFクラスの担任になつた西村だ これから1年宜しくな」

「はいっ！」

生徒たちは声を揃えて答えた

鉄人の恐ろしさは1年の時から身に染みているため、この文月学園の全生徒は鉄人に逆らう事ができなかった

「遅れてしまった事の詫びとしてだが、今日は転校生を連れて来た

ぞ

「女子っすか?! 女子っすか?!」

転校生……それは男子共にとって青春の1つである

「喜べお前たち、転校生は女子だぞ」

「いやっほ つ!!」

教室中が祭りのように大騒ぎとなった

「お前たち、あんまり騒ぐな 緊張して入って来れないだろ」

鉄人の一言で、騒ぎの炎は鎮火した

『生活指導の鬼』とも言われるほどの事がある

生徒たちの扱いには慣れているのだろう

「入って来なさい」

すると、教室の外で待機していた転校生が入ってきた

勝気な目と髪に大きな黄色いリボンで束ねられたポニーテールが特徴の

「……………えっ？」

静かな教室に1人の驚いた声が聞こえた

その声は明久だった

「島田美波です 宜しくお願いします」

その転校生とは明久が朝、文月公園で出会った美波だった

「島田はドイツからの帰国子女だそうだ 日本の文化にまだ慣れていないだろうから、お前たちで教えてやると良い」

何と美波はドイツ育ちの帰国子女だった

「し、島田さん!？」と明久は立ち上がり驚いた様子で美波を見る

「えっ嘘っ!？」と立ち上がった明久を見た美波も同じく驚いていた

「島田さん、転校生だったの?!」

「あの時は、ありがとうね」

「おいっ! あの美女とはどういふ関係だ説明しろっ!」

明久と美波の会話を聞いていた、Fクラスの生徒たちが問い詰める

「そう言えばお前たち2人は一緒に登校していたな 知り合いなら、あいつの横に座ると良い その方が気が楽だろ」

鉄人は緊張する美波を見て、明久の横なら少しは気を落ち着かせられるだろうと気を配る

「はいっ」と嬉しそうに返事をした美波は、空いていた明久の横に座ることになった

「まさか、こんな形で再会できるなんてね」

「島田さん転校生だったんだ 道がわからないって言ってたから、てっきり1年生かと思ってたよ」

「ウチ、そんなに幼く見える？」

「そ、そう言う意味じゃなくてっ」

「ふふっ冗談よ これから宜しくね」

「うん 島田さんと一緒のクラスで良かったよ」

「島田よ、ワシは木下秀吉じゃ 今後とも宜しく頼むぞ」

「宜しくね、木下……君？」

「なぜ疑問形なのじゃよ ワシは男じゃぞ」

「そ、そうよね あんまりにも可愛くて それにしても、これで安心できるわね」

「……何が？」

「ほら転校生って、最初は誰も知らない訳だし、正直怖かったのよ」

「そっか 僕も同じだから凄く嬉しいよ」

「え？……もしかして、あなたも転校生だったの？」

「まあある意味、転校生かな？」

「僕は記憶喪失で、今までの事を覚えていないんだ だから今日が初めての学園生活って感じなんだ」

「記憶喪失……ゴメン ウチったら何も知らないでそんなこと聞いて」

「何で島田さんが謝るのさ？ それに全然気にしてないから大丈夫だよ」

「それにしても、こつも早く友人が出来るとは嬉しいの ワシはFクラスになって良かったぞ」

「僕だって最初、Fクラスは最悪だって思ってたけど、秀吉と島田さんに会えたからFクラスがちょっと好きになったよ」

こつして学園生活初日で、3人は知り合いとなった

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六問】 天才と天才

B A K A T O T E S T

「それじゃあ、今日のLHRはこれで終わりだ 明日からは通常授業に入るから休むんじゃないぞ」

HRの時間が終わり、鉄人が教室を出ると同時に教室の後ろから同じ文月学園の制服を着た女子が入れ違いに入ってきた

長い黒髪を揺らしながら、目的の場所があるのか一直線に歩いて行く

そして、女子はそのまま雄二の前で立ち止まった

「入る時ぐらいノックでもしたらどうだ？」

「ボロボロの障子だから出来ない」

「そりやどうも で？Aクラス代表のお嬢さんがボロボロのFクラスに何の用だ？」

「坂本雄二、何であなたがFクラスにいるの？ 約束が違うじゃない」

「いきなり何を聞くのかと思えば、そんなことかよ」

「成績優秀のあなたがFクラスにいる何て、何か悪い事を考えてい

るとしか思えない」

そんな会話を聞いて、明久は秀吉に小さい声で話かける

「ねえ秀吉、あの人誰？ 何だか凄く怒ってるみたいだけど」

「あの者は、霧島翔子きりしましょうこ Aクラスの代表じゃ」

秀吉も明久同様に、雄二には聞こえないよう小さい声で答える

「噂では、『完全記憶【フルコンプリート】』と呼ばれる特殊な才能を生まれつき持っておるらしい」

「『完全記憶【フルコンプリート】』？」

「何でも、視界に入ったものは例え些細な事だとしても全て記憶してしまうそうじゃ しかもその記憶は一生忘れないと言われている」

「そんな才能が生まれつきある何て凄いね」

「人間には、まだまだ解明されておらぬ力があるそうじゃよ 霧島の才能もその一つと言う訳じゃな」

「そんな凄い人が何でここに……」

「さあの、坂本に何か伝えることがあるのではなかるうか？」

明久と秀吉は2人の会話にまた耳を傾ける



「別に悪い事は考えてねーよ　ただ、ちょっと面白そうなことを考えただけだ」

「面白い事？」

「霧島なら知ってるだろ、『試験召喚戦争』のこと」

「1年の時の基礎中の基礎　誰でも知ってる」

「……………僕は知らないんだけど　秀吉、試験ナントカって何なの？」

「試験召喚戦争とは、自分のテストの点数を元に召喚獣で戦うシステムじゃ」

この学園には『試験召喚システム』と言うものがある

それは、化学とオカルトと偶然によって完成した『試験召喚システム』によって召喚者をデフォルメした姿の分身を出現させる事が出来る

デフォルメした姿の分身の事を『召喚獣』と言い、その召喚獣を使って戦うことができると言うものだ

それが　試験召喚戦争である

通称『試召戦争』と呼ばれるこの戦争は、最後に行った試験によって獲得した点数がそのまま召喚獣のヒットポイントとなり、それは攻撃や防御をすることに減少していく

点数が0になつた召喚獣は『戦死』となり、戦死した召喚獣の召喚者は戦争終結後、補習室での地獄の補習を受けることとなる

先ほど出現させると言ったが、実際に召喚獣が現れる訳ではなくホログラムのようなもので映しているため、人が召喚獣に触れることや召喚獣が物体に触れることはできないようになっている

ただ、『観察処分者』の明久と生徒会と教師の召喚獣は物理干渉能力を持っており実在する物を持つ事ができる

また、試験召喚戦争では、指定もしくはランダムで選ばれた1教科の点数で戦うことになる

教科は現代国語、古典、数学、物理、化学、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育の10教科に加え、それらの合計である「総合教科」の11教科である

成績の高い者ほど攻撃力や防御力が上がり、1科目で400点以上の者には召喚獣に特殊な腕輪を装備することができる。ただし、総合教科の場合は総合得点が400点以上であれば召喚獣の腕輪を使用できるが、1教科の場合、使用できるのは400点以上の教科のみとなる

腕輪の能力は通常的能力に加え、さらに攻撃力や防御力を上乘せることが出来たり、有利になることや妨害するものと種類は様々である

この腕輪を持つ者は、ほとんどがAクラスの生徒だけで、Bクラス以下で持っている生徒は少ない

「それで、試験召喚戦争がどうかしたの？」

「オレたちFクラスは、Aクラスに宣戦布告をする」

その言葉に、教室で聞いていた生徒たちが驚いた

「坂本っ！どう言うことだよ Aクラスと試験召喚戦争だと？」

「オレたちが勝てる訳ないだろっ！ しかも負けたクラスの設備はさらに悪くなるんだぞっ！」

試験召喚戦争は、勝利したクラスと負けたクラスの設備を交換できる特権がある

だが、宣戦布告したクラスが負けると今までの設備が1ランク下げられてしまう

Fクラスは、ただでさえボロボロな設備なため、これ以上どうなるのかわかったものではない

「あの人たちの言う通り、私たちに勝てる訳がない そんな意味のない戦いで他の人に迷惑をかける気？」

「……………お前が悪いんだぞ」

「……………？」

「お前がオレを超えようとしなからだぞっ！」

「何を言っているのかわからない Fクラスになって、バカになったの？」

「霧島、お前もオレがテストで勝ってからバカになったんじゃないのか？ オレが勝ってから1回も勝てなかっただろ」

「それはあなたが私よりも学力が上だったって」

「負けたのを認めたくないから言い訳か」

翔子は、その言葉に途中で口が止まってしまった

「何とでも言っつて構わない それであなたが満足なら」

「…………ちっ…………あの時からオレはお前をライバルだっつて思ったの  
にっよ」

あの時とは、雄二がまだ小学5年生の時だった

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七問】 天才が歩んだ過去1

B A K A T O T E S T

「ただいまっ！ 母さん見て見てっ僕 っ！」

「あら、ゆう君お帰りなさい」

雄二が自宅の玄関を開けると、雄二の母とお客さんが世間話をして  
いた

「この子、雄二君？ まあまあずいぶんと大きくなっただわね」

「ほら、ゆう君ご挨拶は？」

「……こんにちは」

雄二は被っていた学校指定の帽子を取り、ペコリと頭を下げた

「はい、こんにちは 礼儀の良い子なのね うちの子も、ちゃんと  
してくれたら良いのだけど」

「何を言っているんですか霧島さん お宅の翔子ちゃん、学年トッ  
プですし礼儀正しい子じゃありませんか」

「あの子、恥ずかしがり屋で自分からは挨拶できないのよ」

「女の子は恥ずかしがり屋が一番可愛いものですよ」

「そう言うものかしら」

「うちの雄二も、一度ぐらい翔子ちゃんにテストで勝ってくれと嬉しいのですけどね」

何が面白いのか、2人はそんな会話で笑っていた

雄二には、それを理解できなかった

「あらやだ、もうこんな時間だったわ ゴメンなさいね長々と」

「いえ、お茶も出さずにすいませんでした」

「そんな気を使わないで それじゃあお邪魔しました 雄二君、またね」

雄二は、またペコリと頭を下げた

お客さんが帰ったのを確認した母は「ゴメンね、ゆー君」と雄二を待たせてしまったことを謝る

「うっん良いよ」

「ところで、ゆー君、お母さんに何か見せたかった物があるんじゃないの？」

雄二は手に持っていた紙を、とっさに後ろに隠す

「……………あ、何でもない 僕、部屋に居るね」

世間話のせいで、雄二は母に伝えたかった事が言えなかった

玄関で靴を脱ぎ、きちんと揃えて階段を上って行く

ボタンと部屋の扉を閉めると「……………くそっ」と悔しさが込み上げて来た

部屋に入るなり雄二は、手に持っていたテストの解答用紙を投げ捨てた

「何だよ……………オレだって頑張ってるのに」

さっきの何気ない大人の会話は、雄二にとって大きな傷となってしまうた

「母さんは、オレの今の点数じゃ喜んでくれないのか？」

雄二は母の喜ぶ顔を見るのが大好きで、いつもテストは高得点を取れるように毎日勉強して母を喜ばせていた

そして、今日もテストの解答用紙が戻って来て、急いで母の喜ぶ顔が見たかった

だが

「うちの雄二も、一度ぐらい翔子ちゃんにテストで勝ってくれと嬉しいんですけどね」

母にあんなことを言われた雄二は不機嫌になるのも当たり前だった  
もちろん、母は本気でそう思っている訳ではない

世間体を気にしなければならぬ大人の世界

悪気はなくても、自分の子どものことを自慢するどころか、けなし  
てしまうものだ

それが暗黙の了解と言っただろうか

大人は自慢する事は相手に嫌われてしまつと勘違いしている

お互い冗談も交えながら話していると、ついつい大げさに言っ  
てしまつ時がある

今日の2人もそう言っつ会話だったのだろうか

それが子どもの雄二には、わからなかった

「もっともっと勉強して、母さんの喜ぶ顔を見るんだっ！」



雄二はカバンをベッドの上に置き、中から使い古された筆箱とノートを取り出し、勉強机に置いた

「よしっ！」

パンツと両手でほつぺたを叩き、自分に気合を入れた雄二は驚異的な集中力で勉強を始めた

この時、雄二には翔子のような特殊な才能が芽生えていた

その才能はやがて雄二を苦しめることになってしまう

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第八問】 天才が歩んだ過去2

B A K A T O T E S T

「ゆー君、ご飯出来たわよ」

一階から母が夕飯の準備が出来たため、雄二を呼ぶ

しかし、雄二はそれに返事をしなかった

ペタンペタンとスリッパの擦れる音が、徐々に近づいてくる

母が階段を上って来て、コンコンと雄二の部屋の扉を叩く

「ゆー君、寝てるの？ ご飯冷めちゃうわよ？」

それでも、返事がなかったため母は「入るわよ？」と言って、扉を開ける

部屋の中は真っ暗で、扉近くの壁にある電気スイッチを手探りで探しパチンと付ける

「ゆー君、居るなら返事しなさいよ お母さん何度も呼んでたですよ？」

母がその場で雄二を呼ぶが反応がなかった

「聞いているの、ゆう君」

雄二は椅子に座って黙ったままだった

母が雄二の元へと歩いて行く途中で「……………母さん」と、ずっと沈黙だった雄二がようやく口を開いた

「どうしたの？」

母は返事が来た時、その場で足を止めた

「……………僕、絶対一番になるから、その時は喜んでくれるよね？」

勉強机の椅子に座ったまま、振り返った雄二の目は充血して大粒の涙を流していた

ノートは何度も何度も同じ漢字を書いて覚えていたのだろう、だがそのノートは涙で滲んで文字が崩れていた

「っ……………！ゆう君、もしかして、さっきのお母さんの話を」

母もすぐに雄二の言いたかった事が理解できた

そして、ガバツと雄二を背中から包み込んだ

「ゴメンね……ゴメンね……お母さんは、今のゆう君で十分幸せなのだから、自分を責めないでお願い」

母もまた、雄二と同じように大粒の涙を流した

「良かった……僕……嫌われてなかったんだね」

雄二は母の言葉に安心したのか、そのまま眠ってしまった

「……………あれ？」

目が覚めると、見慣れた天井が目に入った

そこは、いつも雄二の寝ているベッドだった

そして右手には温かい感触があり、横になったまま首だけをそっちにやると、母が雄二の手を握り眠っていた

「……………母さん」

その声に、母は目を覚ました

「あ、ゆう君起きた？ やだ、お母さんも一緒に寝ちゃったみたいね」

雄二が体を起こして、目を擦る

まだ目には涙が残っていた

「落ち着いた？」と母はエプロンで雄二の目に残る涙を拭いてあげる

「うん さっきは取り乱してゴメン」

「ゆー君、子どもにそんな言葉は似合わないわよ」

「母さん、僕……………」

「お母さんね、凄く嬉しかった」

「え……………」

「ゆー君が、お母さんを喜ばせてくれるために一生懸命頑張ってくれたんだよね それが凄く嬉しかったな」

「でもね、それでゆー君が辛い思いをするのならお母さんは嬉しくないな」

その言葉に、雄二は下を向いてしまった

「今度からは、お母さんもゆー君も笑顔になれるように頑張っているからね……………約束できる？」

「……………うんっ」

「ふふっやっとなんて笑ってくれた やっぱりゆー君は笑ってくれるのが

お母さんの一番の喜び」

「ありがとう、母さん　そう言えば夕飯できてたんだよね？　僕、お腹空いちゃった」

「そうだったわね　ご飯冷めちゃったから、温め直したら呼んであげるから落ち着いたら降りてきなさい」

「うん、わかった」

母は雄二の手を離し、一階へと降りて行った

「母さん、オレ新しい目標できたよ」

「だけど目標のためには母さんの笑顔が見れなくなるかもしれない……」  
「ゴメン」

「でも、必ず……必ずオレは……学年トップになってみせるから」

目標とは、雄二の通う水無月小学校で学年のトップになることだった

「霧島……翔子か」

雄二はすでに神童と呼ばれるほど、学力は優秀だった

しかし、さらに勉強のできる『霧島翔子』と言つ名前に対してライバル心を灯した

「絶対に追い越してやるからな、霧島翔子」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第九問】 天才が歩んだ過去3

B A K A T O T E S T

そして、年月が経った

雄二は、水無月小学校の6年生になっていた

この日は、雄二たち6年生の卒業式だった

「じい卒業おめでとじいぞいます」

そんな声が、あちらこちらから聞こえていた

一緒に写真を取る人、泣きじゃくる人、いつも通りの人、卒業生はそれぞれの思いに浸っていた

雄二はと言うと、教室で荷物をまとめていた

「おい雄二っ！ お前、凄いな！学年で2位だったなんてオレは嬉しーぞ」



そこに現れたのは、雄二の近所に住む友達だった

小学1年の時から一緒に、雄二にとって一番の親友だった

「止めるよ気持ち悪いな そんな事よりお前はどっだったんだよ」

「ん？オレか？ オレはあれだ……まあ良いだろ」

「……ふっ お前は最後まで普通だったな」

「ああっ！ お前、今笑っただろ！ 普通が一番なんだぞっ！」

「わかつたって悪かったよ」

「っーかき、1位だったやつ見たか？ すっげー美人だったぜ」

「っ……！ お前、霧島翔子見たのか？！ どこだ、どこで見たっ？！」

突然、雄二が目の色を変えて友達のを両手で掴む

「なっ、どっしたんだよ雄二」

「……わ、悪い ちょっと気が動転してた」

「名前はわからねーけど 長い黒髪に白い髪留めが2つあったな 純和風って感じのまさに日本人の鏡ってところかな」

「長い黒髪……白い髪留めが2つ どこで見た!？」

「さっきここに来る時に廊下で　　っておい！　もう帰っちゃまったって」

雄二はそれを聞くなり、教室を出て行った

「どこだ……黒髪で白い髪留め……どこだ、どこだ……」

廊下で最後の別れをしている人たちを避けながら、情報である黒髪と白い髪留めの霧島翔子を探す

「っ……！　見つけたっ！」

追いついたのか、雄二は右手を延ばし女子の左肩を持ち、こちらに無理やり振り向かせた

「……はぁ……はぁ……お前……霧島翔子か？……はぁ……はぁ」

息を切らせて走って来た雄二に困惑する女子

下を向いて息を整えている雄二は、まだ顔を見ていない

だが

「あ、あの……私、霧島さんじゃないよ？」

「……………」

その言葉に、無意識に顔が上がった

そこい居たのは、黒髪で白い髪留めをした女子……しかし、セミロングほどの長さで長髪とは言えなかった

「霧島さん探してるの？ 霧島さんなら、先に帰って行ったよ？」

「そんな……………」

顔の知らないライバルにやっと会えると思った雄二は、その場で膝から崩れ落ちた

この日、坂本雄二は顔の知らない霧島翔子との戦いに負けたまま卒業となった

キ  
ンコ  
ンカ  
ンコ  
ン

まるで試合終了の鐘が鳴らされたかのように、学校のチャイムが鳴り響いた

春休みを挟み、雄二は中学生となる

『霧島翔子』と言う見知らぬライバルのおかげなのか、雄二は小学5年生の時に志望していた中学校よりも上の神無月中学校に入ることができた

その神無月中学校で雄二は、運命的な出会い……いや必然的な出会いがあった

「新入生の皆さん、ご入学おめでとございます」

雄二は、神無月中学校の入学式に出ていた

そこでは、全く知らない学内や人でキョロキョロと観察している生徒があちこちにいた

だが雄二は、持ち前の集中力で校長先生の話を見事に聞いていた

「続きまして、新入生代表2名による挨拶です 代表2名、前へ」

「「はいつ！」」

代表の一人に選ばれた雄二と、もう一人の代表が声を揃えて立ち上がる

その声は、雄二の真横から聞こえた

そこにいたのは、長髪の黒い髪に、白い髪留めを2本していた女子だった

「っ……………！」

まるで宝くじが当たったかのように、目を見開いた

人は本当に驚いた時、目の前の光景が信じられなくて声が出なくなる  
持ち前の集中力で周りを見ていなかった雄二は、横にいた翔子の存在に気づいていなかった

「坂本っ！何してる、早く上がるんだ」

雄二の担任が小さい声で雄二を呼ぶことで、ようやく我に戻った雄二は慌てて舞台の上上がった

「以上を言葉とさせていただきます」

「代表 霧島翔子」

「……………」

「坂本っ！返事返事」

「またも担任の先生が雄二を呼ぶ」

「お、同じく代表 坂本雄二」

「無理もない、長年探し求めていた人物とついに出会ったのだから」

「入学式が終わり、教室に戻った雄二が自分の席についていた」

「坂本雄二」と誰かに名前を呼ばれた雄二が、顔を上げるとそこには翔子が不機嫌な顔で立っていた

「どうやら翔子と雄二は同じクラスだったらしい」

「初めて2人は喋ることになる」

「……何だよ」

その顔を見たからか、雄二もまた不機嫌な返事をする  
お互い最初はあまり良い印象を持てなかった

「代表の挨拶、もう少しちゃんとしてほしかった」

「……知るかよ あんなの何でも良いじゃねーか」

「代表として、もっと自覚するべきだと私は思う」

「代表代表ってな、オレは2番目で代表になった覚えはない」

「そう……なら良いわ」

「ちょっと待てよ、お前の態度気に入らねーな 学年トップがそんなに偉いのかよ」

「……別にそんなこと思っていない」

「だったら、出しゃばるなよ!」

雄二が机を叩き、威嚇するかのようにつまえる

「ちょ、ちょっと誰か先生呼んで来た方が良いんじゃない?」

そんな声が辺りから聞こえてきた

翔子は雄二の威嚇にも動じない

「……………負け犬は、そうやって吠えていたら良い」

この言葉にぶち切れた雄二は机を思いつきり蹴り飛ばし教室を出て行った

「くそっ……………絶対……………絶対に勝つてやるからな霧島」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第十問】 天才が歩んだ過去4

B A K A T O T E S T

そして勉強の成果がついに出了たのか、中学2年の最後の学年テストで雄二は念願の学年トップに立った

「やったっ！」

雄二は思わずその場でガッツポーズを取った

それを見ていた、翔子は「おめでとう」と手を差し伸べて来る

「ああ、ありがとう！」

雄二はそれに対して素直に答え、手を交わした

学年トップだった翔子を超えることが出来て、心から喜んだ

「これからは、学年の代表として見本の鏡になるように頑張ってる」

ドクンッ

『学年の代表』と言う言葉を聞いた雄二の心臓が大きく動いた

何を思ったのか「ちょっと待てよ」と雄二の前から立ち去ろうとしていた翔子の足を止める

「……………何か変なこと言ったかしら？」

「お前、今回のテストでわざと点数低くしただろ」

突然、雄二は訳のわからないことを言い始めた

「……………そんな事する訳ない」

「だったら、何でオレが学年トップになったんだよ」

「それはあなたの実力が私を超えた……………ただそれだけの話でしょ」

「違う……………オレは、お前を超えるほどの実力はないんだよっ！」

「今回は、超えたってことじゃないの？」

「オレは、今まで持てる全ての実力を出してきた。だが、お前にはずっと勝てなかった。なのに、何で今回は勝てたんだよっ！」

何かに焦る雄二に対して、冷静に答える翔子

「私に聞かれても知らない……………学年トップになれたのだから、もう少し喜んだらどう？」

「……………ちっ、次の試験は全力で来い。オレはお前の全力を超える

「ことに意味があるんだよ」

「……勝手にしたら良い」

だが今回の試験以降、翔子が2位で雄二が1位と言う結果ばかりだった

それは卒業するまで同じ結果で終わった

そして卒業式の時、雄二は翔子の前に現れた

「何で全力で来なかった」

「私はあれで全力だった……だから、あなたは私を超えたってこと」

学年でトップになれた

雄二にとって、それは一番の目標だった

なのに、トップになったと同時に何かモヤモヤする物が雄二を悩ませていた

「翔子ちゃん、卒業おめでとう！ 高校って、あの『文月学園』なんだってね！」

翔子の友達が、祝杯をしてくれた

「……お前、文月学園に行くのか？」

友達の言った『文月学園』と言う言葉にピクリと眉が動いた

「そつだよお？ 翔子ちゃんは頭が良いから文月学園の代表候補なの」

「香奈、そんな事まで言わなくても良い」

「だってだって、私嬉しくて ね？ 凄いやね坂本君」

「霧島、オレも文月学園に入ることになっている」

「えっ？ 坂本君もなの？ やっぱりみんな頭が良いんだね」

「香奈、ちょっと向こうで待っていてくれる？」

「あ、うんわかった 学校の校門で待ってるね」

状況を把握したのか、翔子の友達はその場を後にした

「坂本……私と本気で戦いたいのよね？」

「ああ、そつだ……」

「わかった 文月学園で私の本気……今以上の本気を見せてあげる」

「やっと本気になってくれるんだな お前の全力をオレにぶつけて  
っす」

2人が睨みをきかせ、その後無言で振り返って別れた

小学5年生だったあの日、雄二にはある才能が芽を出していた

才能の名は『完全攻略【クリアハンドレット】』

この才能によって、学年トップになった雄二の心にある恐怖が生まれてしまったことが原因で、突然訳のわからないことを言い始めたのだった

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第十一問】 最強と最弱

B A K A T O T E S T

雄二は文月学園に入学した

文月学園に入ったと同時に実力テストが行われ、1週間後、最初に行われた実力テストの結果を張り出されたと聞いた雄二は、さっそく掲示板のところへ走っていく

あの時、翔子が自ら全力で戦うと言ってくれた事は、雄二にとって凄く嬉しかったのだろう

足早に掲示板のところまで行き、張られた順位を下から見上げていった

「……………嘘だろ？」

掲示板に張られていた順位を見た、雄二は言葉を失った

一番上に書かれていた名前は、『坂本雄二』でも『霧島翔子』でもなかった

そこに書かれていたのは

「……………吉井明久 492点」

そう、明久が学年トップだった

学年の実力テストは国語・社会・数学・理科・英語の5教科を500点満点で行われ、その1位は明久の492点だった

雄二の名前は明久の下に書いてあり、翔子はその下だった

雄二は悔しさのあまり俯むすぶいてしまった

全力を出して行ったテストだったため、よほどショックだったのだらうと誰もが思った

しかし、それは違った

「くくくっ……………」と突然、笑いが込み上げてきた

普通なら悔しい思いをするはずだが、雄二にとっては負けることは最高の気分だった

これが雄二の才能『完全攻略【クリアハンドレッド】』の恐ろしいところだ

雄二にとって、どんなことでも『超える』ことをしないと気が済まない性格

その才能のおかげで、常に学年トップを目指してきた

そしてついに、念願だった学年トップへと上り詰めた雄二は達成感に浸った

しかしそれと同時にこの才能は『負の才能』へと変わってしまう

この才能は、トップになればそこで終わりではない

常に才能は『超える』と言う考えが働いている



雄二が学年トップになったと言うことは、これ以上雄二にとって『超える存在』はいない

つまり、雄二が初めて翔子に勝った時、突然訳のわからない事を言い始めたのは、この才能のせいで自分を超える存在を見つけたかったからだ

翔子はあの時、雄二の異変に気づいていた

だから文月学園でのテストで全力を出すと说っていたのだろう

翔子は約束した通りに全力で試験を受けていたが、結果は雄二に勝てることはできなかった

このままでは雄二が何か事件を起こすのではないかと焦っていた

しかし、その焦りを止めてくれたのは明久の登場だった

明久の学力は雄二も翔子も超える実力の持ち主だった

あれだけ実力差があれば、絶対に明久には勝てないと思っていたからだ

これで『超えること』は出来ないが『超えるための相手』が出来たことで、一安心だと翔子はそのまま雄二には何を言わずその場を去った

だがこのテストを最後に明久が学園に来ていなかった事で、再び翔子は雄二の『超えるための相手』になってしまった

それ以来、翔子は雄二のために必死で勝とうと頑張った

しかし、それほどまでして雄二の相手になるのはなぜなのか

いくら『超える相手』として選ばれたからと言って、無視してれば良かったのではないだろうか

それでも翔子はテストの度に雄二と競い合っていた

だが2年になった時、今まで学年トップを維持して来た雄二が突然Fクラスにまで落ちた

この事が理解できなかった翔子は新学期初日の今日、雄二の元へとやってきたのだ

「あの時からオレはお前をライバルだって思ってたのによ、もう今のお前に興味が持てねえな」

「だからと言って今まで競い合ってきたのに、どうして急にFクラスにまで落ちたの？」

「1年最後の時に、2年からはAクラスとFクラスに教室を振り分けられるって知って、オレはある事を思いついたんだ」

「……………ある事？」

「バカが天才に勝ったら、学年トップになるだけじゃなく負けた奴らの悔しがる顔を見て、さぞ気分が良いだろうと思つてな」

「そんな事で、Fクラスになったの？ あなたは神童と呼ばれるほどの天才で今までトップを守つてこられたじゃないの それを自ら落ちるなんて」

「だから、つまらないんだよ 勝負してくる奴ら全員オレに勝てるやつがない だったらオレが他のやつらより弱くなって勝負を仕掛けてボコボコにしてやるんだよ」

「そんな事のために……………試験召喚戦争は私利私欲のためにあるんじゃない 皆で力を合わせて戦うためにあるのよ」

「こいつらはオレの欲望を叶えるためのコマに過ぎないんだよ！」

「……………最低ね」

その言葉に、呆れた翔子はため息混じりに答える

「こいつらだって、Aクラスに勝てるんだ 文句の言いようがないだろ」

「……………わかった そこまで言うのなら明後日の午後、AクラスはFクラスとの試験召喚戦争を受けてあげる」

「決まりだ せいぜい、最後のAクラスを良く見ておくんだな」

まだ新学期に入ったばかりで、授業は午前中で終了するためAクラスとFクラスの試験召喚戦争は午後から行われる事になった

「この戦いであなたの目を覚まさせてあげる」

こうして、新学年そうそうFクラスはAクラスと試験召喚戦争をすることになった

試験召喚戦争開始まで

残り2日

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第十二問】 新たな出会い

B A K A T O T E S T

次の日

トイレから帰った明久が教室の扉に手をかけようとする、ガラガラと自動で開いた

「…………えっ？」と言った瞬間

ドンッ

何かとぶつかった

「…………いてて あっ、大丈夫？」

明久の目の前には一人の男子生徒が明久と同じように尻もちをついていた

「…………大丈夫だ こちらこそ、すまなかった」

男子生徒は、そう言って立ちあがりそのままどこかへ行ってしまった

「あんな人、Fクラスに居たかな？」

立ち上がるうとした時、何かが落ちているのに気がついた

「……何だろこれ？　もしかしてさっきの人が落としたのかな？」

裏返っていた物をひっくり返して見るとそれは写真だった

そこに写されている物を見てみる

「これって……っ！」

写真に写るものを見た明久は、血相を変えた

そして、先ほど出て行った男子生徒の元へと走った

「ちょっと待って　　っ！！」

明久の声に気がついた男子生徒は、血相を変えて走ってくる明久を見て……逃げた

「えっ？　ちょ、ちょっと何で逃げるのさ？　　て言うか走るの早っ！！」

男子生徒は、あっという間に明久との距離を広げていく

男子生徒がAクラス手前の階段を降りようとした時

「あ、ムツッリーニ君おはよう」と声をかけられた男子はようやく

立ち止まった

「……………はあ……………はあ……………やっと追い付いた」

それほど距離はなかったが、思いのほか早くて全力で走ってきた明久は息を荒げていた

「君は……………確か吉井君だったよね？ どうしてそんなに息を切らしてるの？」

そこにいたのは、ベリーショートでボーイッシュな容姿の、くどうあ工藤愛子いとこだった

「もしかして、ボクを見て興奮しちゃったのかな？ 今日、ブラシてないからあんまりジロジロ見ちゃダメだよ？」

愛子は女子でありながら、一人称を『ボク』と言っている貴重な人のため、一部の男子から人気になっている

「なっ僕がそんなこと」

その瞬間、明久の目の前に赤い液体が飛び散った

「……………へ？」と拍子抜けたような声を出す明久　あまりの出来事に、状況を理解できなかった

「あらら、今日も豪快に鼻血出しちゃったね　大丈夫？ムッツリー

「二君」

良く見ると、先ほど走って逃げていた男子生徒が血だらけになって倒れていた

「た、大変だ！？ きゅ、救急車！ 誰かお医者様はいませんか？！」

「吉井君、落ち着きなよ 大丈夫だから」

「で、でも、凄い出血だ どこかケガをしてるんじゃない」

「これ……………全部鼻血 ほらムツツリー二君、血液パック」

血液パックを男子生徒のポケットから取り出し、テキパキと点滴の用意を行う愛子

どうも、これが初めてではないのか手際が良い

そして、血液が戻ったのか男子が目を覚ました

「……………く、工藤 いつもすまない」

「良いの良いの、もうボクも慣れちゃったからね」

ムツツリー二は、また意識をなくした

「えっと、工藤さん……………だっけ？ この人はいつも鼻血出すの？」

「そうなんだよね ボクがムツツリー二君の前に現れると必ず鼻血



を出すの」

「ムツツリーニ？ それがこの人の名前なの？ ずいぶん変わった名前だけど」

「まさか、違っつて『ムツツリーニ』って言うのはボクが勝手に付けたあだ名 本当の名前は、土屋康太つちや こうたって言うの」

「あ……そ、そつだよね さすがにそんな名前だったら人生終わってるなつて思っっちゃつたよ」

「ところで吉井君は、何でムツツリーニ君を追いかけてたの？」

「そつだ、この写真」

明久が手に持っていた写真を愛子に見せた

「この人……優子……あ、この髪型はFクラスの木下君か 木下君がどつかしたの？」

「実は僕、秀吉が好きなんだ」

「いきなり凄い爆弾発言だね……もしかして、木下君の写真をムツツリー二君が持ってたから怒ったの？」

「あ、そう言う事じゃなくて、この秀吉の写真をどこでもらったのかなって思っただけ。こんなに綺麗に撮れる何て素人じゃ無理だよ。だからこれを撮った人を教えてもらいたいなって」

「それならボクが教えてあげようか？」

「ホント?! 工藤さんも知ってたんだ! その人はどこで会えるの?」

「……ん」と愛子が指を下に指さした

「……ん?」と明久が下を見ると、ムツツリー二がいた

「え?……もしかして、もしかすると?」

「この写真、ここにいるムツツリー二君が撮った写真だよ」

「ええええ?!」

明久が探していた人物はずいぶん近くに、そして簡単に見つかった

B A K A T O T E S T

【第十三問】 嵐の予兆

B A K A T O T E S T

「……………っ　ここは……………」

明久の驚いた声で、気を失っていたムツツリーニが目を覚ました

「あ、やっと気がついたよ　大丈夫だった？」

「……………今日も、綺麗な川が見えた」

「それ渡っちゃダメだからねっ！」と明久はムツツリーニの体を揺らす

「……………お前はさっきの……………まだいたのか」

「起きていきなりで悪いんだけど、この写真で君が撮った写真なの？」

「……………工藤、教えたのか」

「あれ？何か不味かったかな？」

「……………いや別に良い　確かにその写真はオレが撮った写真だが、それがどうした？」

「君ってもしかして……………秀吉のファン？」

「……………違う」

「何だぁ……………ちよつとショックだな　せつかく秀吉のファンクラブに入れると思つたのに」

「あらら、そんなこと優子が聞いたら怒っちゃうな」

「……………優子？」

「木下君の瓜二つのお姉さん、木下優子きのした ゆうじだよ」

「ボクと同じAクラスに居るんだけど、優子より秀吉おと吉の木下君の方が、人気が高いのが気に入らないみたいなんだよね」

「秀吉のお姉さんかぁ……………秀吉にそっくりなら、さぞ可愛いんだろ  
うな」

「優子、そこで何してるの？」

「あちゃ………タイミングが良すぎるよ優子」

優子と聞いた瞬間、明久は瞬時に後ろを振り向いた

「……っ！」

そこには確かに秀吉そっくりな生徒がいた

だが、明久はと言うと

「………秀吉の方が可愛い」とガツカリする

「あなた今、何て言った？ 秀吉の方が何て言ったのかしら」

優子の後ろからゴゴゴゴと聞こえてきそうなオーラが出ている

「そ、そうだ優子、さっきの授業でわからなかった問題あるから教えてくれないかな？」

「その前に、あたしに教えてくれる愛子？　今、この人何て言ったのか」

「……………吉井君！ムツツリー二君を連れて逃げてっ！」

「え？あ、うんっ！」

慌てて明久は点滴中のムツツリー二を引っ張りながら逃げた

「ちょっと待ちなさいよっ！」と言う頃には明久たちは優子たちの前から消えていた

「何て逃げ足なの……………今度、見つけたら問い詰めてやるんだから」

「……………あれ？　何だろこれ」

明久たちが立ち去った後、その場に何か紙のような物が落ちているのを愛子が見つけた

「写真……………？　えっ?!嘘……………」

愛子が拾ったのは写真で、その写真には水泳部の更衣室で着替える愛子の姿が写っていた

「何よこれっ?!　誰がこんな写真を」

愛子の拾った写真を見て優子は驚いていた

「まさか、ムツツリー二君が……………?」

ムツツリー二はなぜ愛子の写真を持っていたのか

そんなことが起きているのも知らずに明久たちは、優子から逃げきって教室に戻っていた

「何じゃお主ら、ずいぶんと急いで教室に入ってきたの 授業はまだ始まらぬぞ？」

「ああ秀吉 やっぱりこつちの秀吉は可愛いよ」

「何を言っておるのじゃ明久よ それに『こつちの』とはどういうことじゃ？」

「ワシは一人しかおらぬだろうに……っ！まさか明久よ、ワシの姉上に会ったのではなかるうな」

「うん ちょっとだけど、会ったよ？」

「あ、姉上には何も言っておらぬだろうの?!」

「秀吉の方が可愛いって言うただけだよ？」

「何てことじゃ……姉上に殺されてしまう」

秀吉は見る見る顔色が悪くなっていく

それだけ姉の優子には頭が上がらないのだろうか

「自信持って秀吉 僕は断然、秀吉の方が可愛いと思ってるから  
そう言っつて明久は親指を立てる

キ  
ンコ  
ンカ  
ンコ  
ン

「……………次の授業が終わったら、姉上が来る前に逃げなければならぬの」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第十四問】 裏切り

B A K A T O T E S T

そして授業が終わると同時に、教室の後ろの扉を壊れるのではないかと云うぐらい強い力で開けて優子とその後ろから愛子が入ってきた

「土屋っ！ あなた愛子に何て酷いことするの！」

「ちょ、ちょっと優子 まだそうと決まった訳じゃないんだから」

「……………工藤 何の事だ」

「じ、実はね……………その」

「この写真、あなたが撮った物でしょ！ 正直に白状しなさいっ！」

「……………っ！」

写真を見た瞬間、ムツツリーニはズボンのポケットに手を入れる

「……………ない」

それを見た愛子は「この写真、やっぱりムツツリー二君が？」と優しく問う

「……………」

しかし、愛子の質問にムツツリー二は黙ってしまっ

「何か言ったらどうなの！」

「優子、ちょっと落ち着いて ムツツリー二君が怖がってるよ」

「何言ってるのよ こんな事された、愛子の方が怖い思いしてるじゃない」

「ボクは大丈夫だから ちょっと落ち着いて……………ね？」

「……………わかった」

「ムツツリー二君、この写真は本当にムツツリー二君が撮ったの？」

「……………そうだ」

ついに重い口を開いたムッツリーニの答えは黒だった

「そんな……………どうしてこんな事を」

「…………それは言えない」

「あなたね、この期に及んで……………っ!」

優子がまた出て来たため、愛子が優子の肩をポンポンと叩き横に首を振った

「ムッツリーニ君、言えない理由があるなら今は言わなくて良いよ」

「愛子、そんなことじゃ」

「優子、ボクとムッツリーニ君は長い付き合い……………あ、そう言う意味じゃなくて、幼馴染ってやつなの だから、何か本当の理由があるんだと思う ボクはムッツリーニ君を信じてる」

その言葉にムッツリーニの返事はなかった

キ      ンコ      ンカ      ンコン

「次の授業始まっちゃった　じゃあねムツツリー二君」

「土屋、もし愛子に変な事するようなら、あたしが黙ってないからね……………それと秀吉っ！」

状況が状況で逃げるタイミングがなかった秀吉は隅の方で隠れていた

「な、何じゃ姉上突然に?!」

「あんだ、今日帰ってきたら大事な話があるから早く帰ってくるのよ」

「す、すまぬ姉上、今日は大事な用事が」

「わかった?」

「……………はい」

まるで小動物のように小さくまるまる秀吉　よほど優子の事が怖いのだろう

そして2人はまるで嵐のように去って行った

「ん?　何だお前たち、黒板はこっちだぞ」

鉄人が入って来ると、生徒たちは全員、後ろの教室を見ている不思議な光景に『?』が浮かんでいた

「愛子、いくら幼馴染だからってこんな写真撮られたら怒るのが当たり前でしょ？」

「この写真はムッツリー二君が撮った写真じゃないよ」

「えっ?! で、でも本人が自分で撮ったって言ったじゃないの」

「ムッツリー二君は、いつも女の子の写真を撮っているけど、絶対に着替え写真とかは撮らないの。それが彼なりのポリシーなのかな」

「そうだとしても、もしかすると今回が初めてかもしれないじゃない。そんな事が理由には」

「優子は気づかなかったよね」

「……………え?」

「優子がボクの着替え写真をムッツリー二君に見せた時、鼻血を出さなかった」

確かに、あの時はムツツリーニが鼻血を出さなかった

愛子のちよつとエツチな仕草だけで大量に血を出していたのに、あの時だけは血を出していなかった

普通なら誰も気づかないことを、愛子だけは気づいていた

長年の付き合いだからこそ、ムツツリーニの事をよく理解しているのだろう

「あれは何か他のこと……隠している何かがあつて、それをボクにバレないように考えていたんじゃないかな」

「愛子がそこまで信頼する何て……もしかして、土屋のこと好きなの？」

「えっ?! そ、そんな訳ないよ ボクはムツツリーニ君をイジめるのが好きなだけだつてば」

愛子は顔を真っ赤にして答える

否定するも、顔には正直な答えを出していた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第十五問】 真実を求めて

B A K A T O T E S T

「ねえムッツリーニ、今の本当なの？」

「……………関係ない それより、その写真を返してくれ」

「それはワシのセリフじゃぞ ムッツリーニとやら、いつの間にかワシの写真を撮っておったのじゃ」

「……………企業秘密」

ムッツリーニはスッと立ち上がり、教室を出て行った

「あ、どこへ行くのじゃ 待つんじゃムッツリーニよ」

「待ってよ秀吉、僕も行くよ」

2人はムッツリーニの後を追う事にした

「ムッツリーニ、僕らにだけ本当のこと話してよ」

「……関係ない者には話せない」

「僕ら同じクラスの仲間じゃないか それでも話せないって言うの？」

「……関係ない」

ムッツリーニは同じクラスだろうと、本当のことを言わなかった

「お主が本当のことを話せないのはわかった じゃが、つまりそれはお主があの写真を撮った犯人ではないと言うことを自分から自由しておるようなものじゃぞ」

秀吉の言葉に、ムッツリーニの足が止まった

「………確かにそうだ」と隠しても無駄だと思い諦めた  
ムッツリーニ

「やはりそうじゃったか」

愛子の考えていたことが的中した



ムツツリーニは本当にあの写真を撮っていなかった

ムツツリーニが自分で撮ったと嘘をついたのは、どこの誰に撮られたかわからない恐怖よりも犯人がわかっていた方がマシだと言いつさの判断だった

しかし、そんなことをしなくても愛子にはバレバレだったらしい

「でも、ムツツリーニが撮ったんじゃないのに、どうして写真を持つてたの？」

「……あの写真は偶然、廊下に落ちていたのを見つけたんだ 先に言っておくが、オレは写真を撮るのは好きだが写真を見るのには興味を持っていない」

「じゃあ何で写真を？」

「……工藤はオレにとって唯一、信頼できる仲間だ」

「でも、いくら工藤さんが写っているからって、持っているのは犯罪でしょ？」

「……言っただけだ オレは写真に興味はないと」

「え？ でも工藤さんが写っていたからあの写真を」

「あの写真は見るためではなく、写真を撮った犯人の証拠として持つておったと言う訳じゃない」

「……………（コクリ）」とムッツリーニが秀吉の答えに頷いた

「どうやら秀吉にはムッツリーニの行動が何なのかがわかってきたらしい」

「だが明久には相変わらず状況が飲み込めなかった」

「おおむね状況はわかったのじゃ。しかし、あの写真を撮った犯人と言つのはどうやって見つけ出せば良いものか」

「……………あれは元々カメラで撮った物じゃない……………動画の一部を画像に変換した物だ。普段から写真を撮っているオレには判別するのは簡単だ」

「……………あの写真を撮った犯人は盗撮カメラで動画を撮り、その後、写真に変換したんだろ」

「て言うことは、パソコンが携帯の中にあの写真の動画を犯人が持つてるってことか！」

「……………そう思つてオレはパソコン部のパソコンの中身を調べ……………動画をみつけた」

「よく見つけれられたの」

「……………オレは『不正入手【フリーダム】』と言う才能を持っているだからハッキングするのは簡単だ」

「ムッツリーニの持つ『不正入手【フリーダム】』とは、あらゆるパスワードを瞬時に解析したり、奥深くに隠してある秘蔵ファイルも

簡単に見つけ出してしまふ才能

そのため、いくら嚴重にロックをかけたたり、カモフラージュしたところでムツツリー二には関係なかった

今の情報社会、この才能を持つ者の中には、犯罪に使うなどが多く見られる

さすがのムツツリー二はそこまではしないようだ

「それで、パソコンの中から動画が見つかったのなら、パソコン部の誰かが犯人だって決まったじゃないか　なのに、何で捕まえないのさ」

「……動画はデータだから、犯人だと言っても他のやつらから貰ったなどと言われれば勝ち目はない　まああの写真を持っていた時点で犯罪だがな」

「ならどうすれば……」

「……犯人の目星はついている」

「えっ犯人わかったの?」

「犯人は恐らく、水泳部のやつだ」

「水泳部?　パソコン部じゃないの?」

「パソコン部は今、誰も所属していない」

「じゃが、なぜ水泳部が犯人だとわかったのじゃ？」

「……………写真に写っていた場所は、水泳部の女子更衣室だ　男子更衣室も同じ形だから調べなくてもわかった」

愛子は、水泳部に所属している

全国大会に出るほどの実力で、将来的にも期待されている

しかし、愛子はあくまでスポーツとして水泳をしているためプロになると言つ目標はないらしい

「今の季節、授業のないプールで水泳部の更衣室に部活関係のやつ以外が入れば怪しまれる　だから可能性があるとするれば水泳部の男子……………もしくは男子たち」

「さすがにないと思うけど、顧問の先生とかは？」

「……………水泳部は鉄人が顧問をしているから、それは絶対ない」

鉄人は趣味でトライアスロンをしているため、色々な部活の顧問を引き受けている

40代とは思えないあの体力は、トライアスロンで鍛えた体があるからだ

「……………方法はあるが捕まえられない」

「どうして？　方法があるなら捕まえられないか」

「明久よ、まずは方法とやらを聞いてみなければわからぬではなからうか？」

「あ、そうだよね」

「してムツツリー二よ 方法とはいかほどのものかの？」

「……オレたちの人数では証言者が足りない だから大勢のやつらがああの動画を見れば証拠は十分になる」

「じゃがそれでは、工藤の着替えを大勢に見せることになるではないか 犯人を捕まえれるとしても、それでは逆効果ではなからうか？」

「………なら、動画を開いた瞬間、動画が壊れるウイルスを一齐送信する 恐らく、犯人はデータを無線で飛ばして写真や動画を売っている」

「ワシはパソコンに詳しくないのじゃが、そのウイルスとやらは違法なのではないのか？」

「………犯人だつて、違法なことをしているんだ それぐらいの罰を与えないと気が済まない」

「それでは、犯人と同じことをすることになるじゃろ それで工藤は喜ぶとでも思っておるのか」

「……………ぐっ」

秀吉の言う通り、それは犯人として同じことが同じだった

そこまでして、犯人を追い詰めたいのはムッツリーニにとって工藤は特別な存在なのだろう

「それならば、こう言うのはどうかな？」

何やら明久が作戦を閃いたのか、2人の耳元で作戦を立てた

「そのためには、盗撮カメラの移動が必要じゃから更衣室に侵入せねばならないか？」

「……オレなら、人目を避けて更衣室に侵入できるから任せろだが、その後はどうするんだ？」

「その後なら、ワシの才能を使えば効果的かもしれんの」

「それじゃあ、僕の作戦で実行に移ってもいいね？」

それを聞いた秀吉とムッツリーニは親指を立てる

こうして作戦を実行することになった

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第十六問】 幼馴染の絆

B A K A T O T E S T

そして、作戦が実行されたのは夕方頃だった

明久たちはパソコン部の近くで隠れて待機していた

「来たっ！」と明久が小さな声で叫んだ

パソコン部の前に現れたのは、水泳部の男子だった

「やっぱり……水泳部が犯人だったんだ」

辺りを警戒して、人がいないのを確認したのか中へと入っていった

そして、しばらくすると

「ぎゃああああああ！」

部室の中から、まるで化け物を見たかのような悲鳴がパソコン室から聞こえてきた

「な、何だよこれっ！ 何てもの見せてくれるんだ！」

そして辺りからも、同じように「ぎゃああああ！」と悲鳴を上げる声が聞こえてきた

ムツツリー二の作戦にあつた、動画を開くと同時に一斉送信される方法で他の生徒たちにも同様の動画が送信されたようだ

ただウイルスが送信されると言うところはさすがに却下となった

しかしウイルスよりも、ある意味強力なウイルスによって作戦は成功した

そのある意味強力なウイルスとは

シャワー室で汗を流す、鉄人の全裸映像だった

鉄人は、放課後になると体力作りのために学園を走っている それ



を昨日の帰りに見ていた明久が作戦に取り入れたいらしい

「作戦成功 それじゃあ僕は次の作戦に出るからね」

明久は、そう言ってどこかへ行ってしまった

「さて、ここからはワシの出番じゃな」

そう言って秀吉はパソコン部の中へと入って行った

「何事じゃ！………お、お主は何と言うものを見ておるのじゃ！」

まるで本当に驚いているかのようなリアルな演技を見せる秀吉

それもそのはず

秀吉は『真相心理【ポーカーフェイス】』の才能を持っているからだ

『真相心理【ポーカーフェイス】』は、ドラマでも通用するような演技力が発揮される

ドラマで活躍する女優や俳優のほとんどが、この『真相心理【ポーカーフェイス】』の才能を持っていると言われている

そのため秀吉も、文月学園に入ってから演劇部に所属して、部員からは『学園のホープ』と呼ばれているほどの期待の星である

演劇部のホープと言うだけあって、その声は学園に響いた

「何だ何だ？」

その声を聞きつけた学生がどんどんと集まって来る

そして

「どう言うことだよこれっ！ 何でこんな動画を送りつけて来たんだ！」

複数のカモが釣られにやって来た

「お前たち、そこで何をしているんだ」

そこに現れたのは鉄人だった

明久はこの騒ぎが起きたと同時に鉄人を呼びに行っていた

「こんなところで何をしているんだ貴様らっ！ それに何だその動画はっ！ お前たち職員室に来いっ！」

水泳部の男子と、それに関わっていた生徒たちが鉄人によって連れ出された

部室から出て来た水泳部の前にムッツリーニが立っていた

「……………この画像をバラ撒かれなくなかったら、二度と工藤に近づくな」

ムツツリーニの持つ写真は、先ほど水泳部が開いた鉄人のシャワーシーンの動画に水泳部の顔写真を加工したものだっ

それを見た水泳部の男は「……………わかった」と唇を噛みしめていたその後、パソコンの中から愛子の写真を撮っていた事が判明し水泳部の男は退学となり、関わっていた男子たちも鉄人による地獄の生徒指導が待っていた

「ムツツリーニ君……………」

騒ぎの中、ムツツリーニを呼ぶ声が聞こえた

「……………工藤、見てたのか」

「もしかして、これのために……………？」

騒ぎに気付いた愛子が、パソコン部の所に来て現場を目撃していた手には愛子の着替え写真を持っていた

それを見たムツツリーニが愛子の持つ写真を取り上げる

「……………工藤、この写真が最後でお前の苦しみは消える」

そう言って、ムツツリーニはビリビリと写真を破いていった

「ありがとうムツツリーニ君……………でもその写真、後でムツツリーニ君にあげようかと思って残しておいたんだけど、言うのが遅かったね」

「なっ……………!!」

「あはは ゴメンね、ムツツリーニ君」

ムツツリーニは破れた写真を見て、愕然とした

「……………もっと早く言ってくれ工藤」

そのままムツツリーニは崩れ落ちていった

「あらら、そんなに欲しかったのなら後で撮らせてあげよっか？

もちろん……………2人きりでね」

「2人……………きり」

ムツツリーニは何を想像したのか、それを聞いた瞬間大量の鼻血とともに倒れた

「あははっ、やっぱりムツツリーニ君は面白いや　はい、輸血パツク」

笑顔を見せる愛子を見て、ムツツリーニの心は晴れたようだ

ムツツリーニは、写真に興味はないと言っていたのにも関わらず、愛子の写真を手に出来なかつた事がショックだったのは、もしかするとムツツリーニは愛子の事を意識しているのかもしれない

そして愛子もまた、ムツツリーニに鼻血を出させて楽しんでいるのは、愛子なりの告白なのかもしれない

不器用な2人だが、それは不器用な者同士だからこそ、伝えたい気持ちで伝わっているのだろう

「……………いつもすまない工藤」

「もう慣れちゃったからね」

ようやくいつもの2人に戻り、文月学園は平和……………いや

「秀吉、後で僕と2人きりで

」

「お断りじゃ」

「そんなあ！」

「今日も、いつも通りだった」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第十七問】 寂しがり屋のあなたへ

B A K A T O T E S T

そして、ついにAクラスとの試験召喚戦争の日がやってきた

この日は、生憎の曇りで天気予報では夕方頃からは雷のマークが付いていた

そんな曇天の中、Fクラスでは朝から作戦を考えていた

「いいかお前ら、これが試験召喚戦争の基礎だ」

雄二はそう言って、黒板をバンツと叩く

黒板には基礎となる戦い方や学園の構造などが事細かに書かれている

「まず、オレたちFクラスがここだ」

雄二が白いチョークを取り、Fクラスをグルグルと丸で囲む

そしてその線は、廊下を出て真っ直ぐ行ったAクラスの教室にまで伸びて行く

「方法は、いたって簡単な話だ。Aクラスのところまでお前たちが道を作る」

「その後はどうするんだよ。オレたちじゃAクラスの代表を倒すこと何て無理だぞ」

いくら運が良かったとしても、最強と最弱では天と地ほどの実力差がある

それなのに、雄二は何か策があるのだろうか話を続けた

「お前たちの言うことは確かにそうだ。だがそこは考えてあるから安心しろ」

「それじゃあ僕らはAクラスまで集団行動で進んで行けば良いんだね？」

「そうだ。ただガムシヤラに行くだけじゃ勝てない」

「出来るだけAクラスのやつらを引きつけて時間稼ぎをしてくれ。後はオレが何とかする」

「んーまあ、それぐらいなら簡単にできると思っけど」

「なら、作戦はそれで決まりだ」

作戦はAクラスまで道を作り、その後は雄二の作戦が実行されるまで時間を稼ぐと言う何ともFクラスらしい単純な作戦だった

作戦が決まったところで「あの」と誰かが手を上げた



「どうした島田？」

それは美波だった

「あの……ウチはまだ転校したばかりで、学園長から召喚獣の使用許可を貰ってないんだけど」

まさかの出来事だった

美波はこの文月学園に転校すると言っ連絡が遅れたため、まだ召喚獣を使う許可を貰えていなかった

「なら、僕と一緒に今から学園長に許可を貰いに行こうよ 試験召喚戦争が始まるまで時間もあまるし」

「そうだな ならちよっくら行って召喚許可を貰ってきれくれ」

「うん」と嬉しそうに答える美波は、明久と共に学園長のところへと召喚許可を貰いに行った

学園長室の前に来た明久が扉を2回叩くと、「開いてるよ 入って来な」と声が聞こえてきた

中に入ると、一番奥に学園長である藤堂カヲルが座っていた

その横には、学年主任であり翔子たちAクラスの担任でもある高橋

洋子、通称『高橋女史』が立っていた

「あんたたちはFクラスの生徒だね あたしに何か用かい？」

「あの学園長」と美波が話をきりだした

「今日、Aクラスと試験召喚戦争をすることになっているのですが、ウチはまだ召喚獣の許可を貰ってなくて戦えないのですが」

「ああ、あんたが転校してきた島田だね すまないね、こちらの連絡ミスで召喚獣との契約が遅れちまつてるんだ」

「そ、それじゃあウチは試験召喚戦争に参加できないのですか？」

「大丈夫だよ あたしだって何も考えていない訳じゃないんだから」「あれを持って来てくれるかい」と言うと、横にいた高橋先生が隣の部屋から何かを持ってきた

「何ですかそれ？」

「こいつは、あたしが開発した『代理型召喚獣』だよ」

学園長が考えていたこととは、代理型召喚獣と言うものだった

大きさは他の召喚獣と同じぐらいの大きさで、見た目は子どものような容姿で、服装は文月学園指定の男子用制服を着ていた

「代理型召喚獣？ 何ですかそれ」

「もし召喚獣の召喚が出来なくなった時に非常用として作った召喚獣のことさね」

「11回も試行錯誤して、ようやくここまで完成させることが出来たよ」

「そんなに試行錯誤して、お金大丈夫なんですか？」

「もうこの学園に1銭もない、貧乏学園になっちまったよ」

「何て物、作ってんだっ!!」

「そんなに怒らなくても良いだろ ほら案外気に入られているみたいだよ」

怒る明久に対して、美波は代理型召喚獣に見惚れていた

「本当に召喚獣を触っているみたいよ ほら吉井も触ってみなさいよ」

「え？ あ、うん」と明久も代理型召喚獣を触ってみた

「ホントだ、僕も観察処分者の能力で召喚獣を触れるけど、まだ召喚したことなかったから初めて触ったよ」

代理型召喚獣の触り心地は、まるで動物を触っているかのようにフワフワとした毛をしていた

「学園長、この子に名前はないのですか？」と美波は触りながら学園長に質問した

「名前かい？ そう言えば名前を付けてなかったね 良かったらあんたが決めると良いよ」

「ホントですか?!」と、美波は思わず立ち上がった

「そいつも最初に使われる召喚者に名前を付けてもらう方が幸せだろうしね」

「ありがとうございますっ！ 何にしようかなあ」

美波は頭の中で、どんな名前が良いか考え始める

「それにしても、11回も試行錯誤する何て、それだけこの代理型召喚獣を作るのが難しかったんですね」

「さすがのあんたでも11回と聞くと、あたしの苦労がわかるんだね」

「学園長が僕をバカにしたっ！ ねえ島田さん聞いた？ 今、僕をバカにしたよね」

美波は明久に聞く耳を持たなかった

「代理……………召喚……………バカ……………試行錯誤……………11回……………1  
1……………」

「……………エルフ」

「決めたっ！ この子の名前は、『代理型召喚獣【エルフ】』にする！」

「エルフ？ エルフって『妖精』とかの意味だったよね？」

「それもあるけど、ドイツ語で『11』の事を『エルフ』って言うのほら、試行錯誤したのが11回だって言ってたから」

「『代理型召喚獣【エルフ】』か うん良いんじゃないかな！」

明久もその名前に賛成だった

「決まりねっ！ 今日は宜しくねエルフ」

「おっと、重要な事を忘れていたよ」と何かを思い出した学園長が椅子から立ち上がり、エルフのところに来た

「重要なことですか？」

「こいつを起動させなかったら、代理型召喚獣にならないだろ？」

「あ、そっか」と明久は納得したのか、手をポンツと叩く

「起動はこの首元にある『文』と書かれたバッチを押せば起動できるよ 試しに押してみな」

「はいっ」

美波は言われた通り、首元のバッチを押すと

パソコンのような起動音になり、しばらくすると自動で立ち上がった

「うあっ！」と思わず驚いて尻もちをついてしまう明久

美波は、立ち上がったエルフを見て、目をキラキラさせていた

「上手く起動してくれてー安心だよ ここで動かなかったら話にならないからね」

エルフはまるで人間のように、歩き始めた

「動きの基礎はすでにプログラムしてあるから、多少の行動はしてくれるよ」

エルフはバッテリーの使用で動いているが、バッテリー自体の性能が高く、1ヶ月は余裕で動く事ができる

ただ、試験召喚戦争などで使用するため、実際の連続使用時間は短くなってしまっ

「これから代理型召喚獣の使用方法とか説明していくよ」

「まず起動方法は、さつき教えた通りにすれば起動してくれる。逆に停止させる時もそのバッチを押せば止まってくれる。」

「次に召喚獣との戦いだけど、そいつは武器を持っていないから素手で戦ってもらおうよ。」

「ちょっと予算がなくてそこまで用意はできなかったんだよ………  
って聞いているのかい？」

明久と美波は、エルフに夢中で学園長の説明をしつかり聞いていなかった。

「………まあ今のガキたちは説明するよりも実践で覚える方が早い  
かね。」

キ            ン            コ            ン            カ            ン            コ            ン

1時間目の授業が始まるチャイムが鳴った

「ほらほら、あんたたち授業が始まったよ。また試験召喚戦争が始  
まったら連れて行ってやりな。」

「はい。失礼しました。」と2人は、まだ見続けたかったのか、  
シブシブ教室に戻ることにした。

「そうだ吉井、ちょっと待ちな。」と学園長室を出ようとした明久を

止める

「何ですか？」

「お前さんは確か、振り分け試験を受けていないから今の点数は0点だったね」

「はい、そうですけど、それがどうかしたのですか？」

「これからAクラスと試験召喚戦争をするつてのに、点数が0点のままじゃ話にならないだろ」

「試験召喚戦争が始まってから回復試験を受けたって、受けている間に終戦していたら意味ないからね。だから、お前さんには今回、特別に点数をあげるよ」

「えっ?! 本当ですか!!」

「最後に受けた試験の点数は確か5教科の492点だったね……それじゃあ、お前さんの1教科の点数は100点にしてやるよ」

「100点?! そんなに貰っても大丈夫なのですか？」

「ただし、5教科以外の教科は受けていないんだから、そこは諦めるか回復試験を受けることだね」

「100点も貰えるならそれで十分ですよ。ありがとうございます!」

「良かったわね吉井。これでAクラスに勝てるかもしれないわよ」



「うんっ 頑張ろっね島田さん！」

「あたしの話は以上だ さっさと教室に戻りな」

「はいっ！ 失礼します！」と明久は喜びながら学園長室を後にした

「まったく、元気なやつだよ……………それにしても『代理型召喚獣  
エルフ』か お前さんにはピッタリの名前じゃないか」

そう言っつて、学園長はエルフのバッチを押して起動を止める

キューンと、パソコンの電源を切るような音でエルフの動きは止ま  
った

「ん……………？ 今、何か聞こえたような気がしたんだけどね」

電源を落とした瞬間、何か聞こえたかのようにだったが気のせいだっ  
たらしく、学園長はエルフの最終調整をするために隣の部屋へと入  
って行く

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第十八問】 試験召喚戦争 開幕

B A K A T O T E S T

そして授業が終わって、昼食を済ませた午後2時 ついに試験召喚戦争が始まった

『これより、Aクラス VS Fクラスの試験召喚戦争を開始する』  
放送室から鉄人の声が、学園に響いた

「作戦開始だ野郎共っ！！」

「おおおおおおおっ！！」

雄二の合図で、Fクラスの士気が最高潮になった

まず、Fクラスの生徒たちは作戦通り全員が廊下に出て行き、さっそくAクラスと鉢合わせになった

「Aクラスの力を見せてあげる 先生、お願いします」

Aクラスの女子が、試験召喚許可を貰う

「試験召喚を許可します」

教師が右手を上上げると、試験召喚フィールドが出現した

「行けええええええええええ！」

だが、Fクラスたちは止まることなくAクラスの女子を素通りしていった

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ！」

まさかの状況に、Aクラスの女子は焦っていた

「ここはオレたちが相手だっ！」

そこにいたのはFクラスの男子2人

FクラスはAクラス1人に対して、2人で勝負をするようだ

「まさか素通りされちゃう何て思わなかった……………この屈辱、絶対に許さないわよ」

「『試験召喚獣召喚【サモン】』」

試験召喚獣召喚【サモン】とは、召喚フィールド内で召喚者が召喚獣を召喚するための起動言葉である

3人がそう叫ぶと、目の前に幾何学的な魔法陣が現れ、Aクラスの生徒の前には『A』と、Fクラス2人の生徒の前には『F』と書かれた魔法陣の中から召喚者をデフォルメしたような召喚獣が現れた

「Fクラスの力、見せつけてやるぞおおおお！」

ついに、最初の試験召喚バトルが始まった

一方、先陣をきったFクラス集団はと言うと

Aクラスが現れる毎に誰かが勝負を挑み、残りはまた先ほどと同じように素通りして行った

しかし、Aクラスの教室に近づく毎にAクラスの生徒は増えて行き、Fクラスの集団は徐々に減少していった

「代表っ！ Fクラスが集団で来ました！」

外で見張っていた監視役のAクラスの男子が慌てて代表である翔子に報告する

「……………はぁ」と優子が大きなため息を出す

「力任せで、あたしたちAクラスに勝てるんでも思ってるのかしら」

「……………Fクラスの集団はそのままこちらに来させて良い。ただし、ザコは片づけておいて」

「わかりましたっ！」

翔子の言葉を聞いた男子生徒は急いで、報告に戻った

「代表、良いんですか？ あんなやつらをAクラスに入れて」

「……………少しぐらい相手をしないと、面白くない」

「ボクもムツツリー二君と戦ってみたかったんだよね」

「愛子まで……………なら、あたしは秀吉と戦うわよ」

鉄壁の女子3人は、明久たちが来るのを堂々と構えていた

「Fクラスが教室に入ってきてま……………うああああああ！」

監視役だった男子生徒が悲鳴を上げると

ドンッ

Aクラスの扉を壊すかのように、荒々しく開ける

最初、集団でAクラスに向かったFクラスの生徒たちは、Aクラスに入るまでに減少していき、教室に入ってきたのは

たったの4人だった

「代表さん、見つけた！」と明久が翔子に指を指す

「……よくここまで残れたわね 正直、驚いた」

「僕らも驚いたよ……… Aクラスの人たちがFクラスを4人も入れてくれる何てね」

「あなたねっ！ 代表はわざと入れてあげたって言うのに……っ！

代表……」

翔子の手が優子の前にサツと出される

「ここからは誰も邪魔しない それぞれ1対1で勝負しましょう」

そう言つて、Aクラス女子3人が明久たちの前へと歩いて行く

「ちょっと待つてよ、僕ら4人に対してそっちは3人じゃないか」

「私たちは3人でも十分勝てるから大丈夫」

「それじゃあ困るよお………負けた時に、それを言い訳にされるかもしれないからね」

最初笑つていた明久の顔が、とてつもなく悪い顔になっている

「だったら僕が参加しよう」

そこに現れたのは、メガネをかけた男子生徒だった

癖なのだろうか、右手の中指でクイツとフレームを上げる

「……………久保」

「僕が参加すれば4対4……………これで文句はないだろ？」

「……………ふん、十分だよ」

明らかに天才の部類に入ると思えるオーラを感じた明久の額からは、1粒の汗が流れた

そして、それぞれが対戦相手を選んだ

「秀吉、あんたはあたしが倒してあげる」

「やはり姉上が相手かの……………出来れば避けたかったのじゃが」

優子はまだ昨日のことを根に持っているのか、とてつもなく怒っている目をしている

「ムツツリー二君……………あの時はありがとね　でもあれはあれ、今回は今回だから手加減はなしだよ？」

「……………わかっている　オレも全力で戦つてやる」

「そうそう、ボク痛いのは嫌いだから……………優しく・し・て・ね」

愛子は召喚戦争中だと言うのに、色気でムツツリー二を誘惑している

「……………っ！　だ、騙されないぞ工藤……………ここで血を出せば負ける」



それに対して、鼻血を出さないように必死で堪えるムッツリーニ

「んゝ残念だな　じゃあここからは本気で行くよムッツリーニ君」

「吉井、あなたは霧島さんと戦って　ウチには勝てそうにないから……そう言う訳で、久保君の相手はウチよ」

「女性と勝負すると言つのは非常に戦にくい……だからと言って手は抜かない　学年次席の実力を見せてあげるよ」

久保利光くほ としみつは翔子の次に成績が良い、学年次席である

明久が新学期初日に、Aクラスを覗いていて注意してきたのは久保だった

そんな相手に、美波は勝てるのだろうか

「霧島さんは僕が相手になることになったよ……宜しくね」

「Fクラスだからって、手加減はしない　私は全力であなたを倒す」

全員が挨拶を交わしたところで、試合は始まった

B A K A T O T E S T

## 【第十九問】 それぞれの力1

### B A K A T O T E S T

「試験召喚獣召喚【サモン】」と一斉に召喚獣を召喚した

そして足元に幾何学的な魔法陣が現れ、姿を見せる召喚獣たち

美波の『代理型召喚獣【エルフ】』は、学園長に教えてもらった通りに首元のバッチを押して起動させた

召喚獣は召喚者をデフォルメしたような姿をしているが、それぞれ装備している武器や防具が違う

「それでは、先に試験内容を説明します」と、Aクラスの担任である高橋先生が戦いのルール説明を始めた

「まず、召喚フィールドの範囲はAクラス全域です。今出している召喚フィールドは設定調整をしたため、それぞれの教科はランダムで選択されます」

この試験召喚戦争では、教科ごとの点数で戦うことになる

教科は現代国語、古典、数学、物理、化学、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育の10教科に加え、それらの合計である「総合教科」の11教科である

今回の戦いは教科のランダム制になっており、4人とも違う教科で勝負することになった

「そして、基本的に勝者した者は他の召喚戦争中の手助けをしても構いません。ただし勝敗に負けた戦死者は後に3時間の補習授業を

行っていたいただきます」

「以上が、今回の試験召喚戦争のルールです。それでは各自始めてくださいっ!!」

説明が終わると、それぞれ勝負となる教科がランダムに選ばれた

「ふん……僕らの教科は『現代国語』か。帰国子女の君には不利な教科だね」

さっそく、勝負を始めたのは久保と美波のところだった

久保の武器は死神が持っているような三日月型の鎌を右手で持ち、鎌の根元から鎖が伸びているのを左手で持っている

美波は、代理型召喚獣のため武器は素手になっているため、両手両足に多少の強化装備が施されているだけだった

ちなみに美波と明久は召喚獣を使うのが初めてのため、午前中の休み時間を利用して、秀吉とムツツリーニから召喚獣の操作方法を学んでいた

エルフが自動で動いてくれるとは言え、さすがに1時間ほどで覚えただけでは慣れる事が難しかった

試合が始まり久保は、学年次席の余裕なのか試合中にも関わらず、片手で持てるほどの本を読み始めた

「その本、参考書か何か？　ならウチが久保君に問題を出してあげる」

美波はそれにムツとしたのか、突然問題を出し始めた  
それと同時に、『現代国語』の点数がお互いの召喚獣の頭に表示された

しかし、久保はFクラスに負けるはずもないと点数には目もくれずに本を読んでいる

『現代国語　Aクラス　久保利光　403点』

VS

『現代国語　Fクラス　島田美波　428点』

「問題だと……良いだろう、僕に答えられない問題などない」

「ウチ、ドイツ育ちの帰国子女だけど昨日今日、日本に来たばかりなのに日本語がペラペラなのはどうしてでしょう？」

「……………ちょっと考えさせてくれ」と今までの余裕がどこかへ飛んでいき、読んでいた本から目を離れた

昨日今日で、日本語がペラペラだと？ そんな事が出来るのか？……………しかし、現に日本語はペラペラ……………わからない……………わからないぞっ！

思いもよらぬ問題に、久保は頭を抱えていた

「……………ドイツ人は日本語を使っているから」

頭が暴走したのか久保の答えは意味がわからなかった

「残念でした」と腕をクロスさせてバツテンマークを作った

「正解はウチには、『絶対音感【サウンドレコーダー】』って言う言葉を翻訳する才能があるの、これのおかげで、初めて聞いた世界中の言葉でも聞き分けたり話をしたりすることが出来る他に、文字

を見るだけで言葉の意味とかも翻訳出来るから、国語とか英語の語学の教科は得意中の得意なのだから、語学だけはAクラスのトップかもしれないわね。ただ、化学の実験方法とか数学の数式を見てわからないからウチはFクラスになっちゃったけどね」

美波の『絶対音感【サウンドレコーダー】』は、全ての言葉を理解できる才能

この才能によつて、ドイツから来たばかりの美波が日本語ペラペラになったり、教科書や辞典に載っている言葉を見るだけで、意味が頭の中に現れると言うもの

ただし、化学などに使う道具の言葉はわかってても実際に実験で使うのは不得意らしい

「なっ……………まさかつ！」と久保がようやく美波の召喚獣であるエルフの頭に表示された点数に目をやった

「ゴメンね久保君……………この勝負はウチの勝ちよっ！！」

美波は、まだ操作に慣れていないが『代理型召喚獣【エルフ】』の自己管理能力で上手く動いてくれた

完全に美波を見くびっていた久保は、美波の問題に全神経を尖らせていたため召喚獣に意識していなかった

その間に距離を縮めてきたエルフは容赦なしの重い拳が顔面をめり込ませて、その衝撃で久保の召喚獣を2mほど後ろに吹き飛ばす

「くっ……………」

久保の召喚獣が吹き飛んだ瞬間、エルフはその場で高く飛びあがっ

て仰向けで倒れている久保の召喚獣の腹部に強烈な、かかと踵落としが決まった

そして、久保の召喚獣は攻撃どころか動くことすら出来ないまま戦死となった

「僕が負けるだって?! そんなバカな話が……………」

「人を見た目で判断するのは止めた方が良いわよ? ウチみたいな変わった人間がいるんだからね」

『現代国語 Aクラス 久保利光 0点』

VS

『現代国語 Fクラス 島田美波 415点』

勝者 『島田美波』

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十問】 それぞれの力2

B A K A T O T E S T

「ワンワンワンワンッ！」と突然、教室の中から犬の鳴き声が聞こえた

美波が振り返るとそこには優子と秀吉が戦っていた  
声の主は本物の犬ではなく、秀吉が犬のように吠えていた  
だがその声はまるで本物のような声で、勝負中だった明久たちも思わず視線をそっちに向けていた

「い、犬……嫌あああああ！」

秀吉の犬の鳴き声に悲鳴を上げたのは優子だった

「相変わらず、姉上は犬が嫌いじゃの」

優子がまるまって耳を閉じているところに、秀吉の召喚獣の武器である薙刀で優子の召喚獣を斬りつける

どうやら優子は犬が大の苦手らしい さすが、姉秀吉きょうだいと言ったところか、姉である優子の弱点を秀吉は知っていたため犬の鳴き真似をして攻撃の隙を作る作戦だった

秀吉の声が犬にそっくりなのは、秀吉の才能『真相心理』『ポーカ―フェイス』<sup>㊦</sup>の能力なのだろうか

演劇と言うのは、なりきる事が重要のため声真似も才能の能力なのかもしれない



「秀吉っ！ よくもやってくれたわねっ！」

「これも作戦じゃ姉上」

また秀吉が、犬の鳴き声を出すと、先ほどと同じように優子は耳を塞いでまるくなっている

「これでワシの一方的勝利じゃ姉上っ！！」

再度、攻撃をしかける秀吉

しかし

「やっぱり、あんたはバカね秀吉」

「なっ………?!」

先ほどまで、耳を塞いでまるくなっていた優子が突然立ち上がったそして、攻撃をしようと突っ込んで来た秀吉の召喚獣を優子の召喚獣の武器である片手剣でカウンターを狙った

一瞬の出来事に秀吉は、避けなければ！、と考える余裕もなく、そのまま優子の召喚獣の攻撃が直撃した

もともと苦手だった教科が当たってしまった秀吉は、優子のカウン

ター1撃で負けてしまった

「な……………なぜじゃ姉上 犬が嫌いではなかったのかの?!」

「犬は大嫌いよ」

「なら、なぜ怖がらなかったのじゃ」

「これをしていたからよ」

優子が耳に手を入れ、何かを取り出した

「それは……………耳栓」

優子は、先ほど耳を押さえて丸くなっていたのは、怖がっていると同時に耳栓を入れていたのだ

「秀吉、あなたはあたしと違って『真相心理【ポーカーフェイス】』の才能を持っている だから声真似が得意なのも知ってる」

やはり、『真相心理【ポーカーフェイス】』の能力は声真似の能力でもあった

「ワシが姉上の犬嫌いを知っておるから、それを利用すると考えておったのか」

「あんたはバカだから、これぐらいの作戦しか思いつかないと思ったのよ」

「くっ……………ワシとした事が……………屈辱じゃ」

「頭は学力だけじゃない……………知恵も必要なのよ秀吉 良く覚えておきなさい」

『化学 Aクラス 木下優子 358点』

VS

『化学 Fクラス 木下秀吉 0点』

勝者 『木下優子』

余裕の表情を見せる優子だが、実はこの勝負は秀吉が勝っていたしかし、ある理由で秀吉は負けるしかなかった  
もしあれがバレてしまつてはワシに命の保障はない、と秀吉は優子には言えない秘密を持っていたため、犬の鳴き真似と言つふざけた

作戦でしか戦えなかった  
そう、優子は知らなかった……

『真相心理【ポーカーフェイス】』の本当の能力が、どれほど強く恐ろしいのか

「おっと、危ない危ない いきなり攻撃はないんじゃないかな、ムツツリー二君？」

「……………余所見をするのが悪い」

こちらは愛子とムツツリー二の戦い  
教科は保健体育が選ばれた

Aクラスの愛子は、言うまでもなく高得点  
そして驚いたことにFクラスにもかかわらず、Aクラストップの点数を持つムツツリー二

『保健体育            Aクラス            工藤愛子            372点』

VS

『保健体育            Fクラス            土屋康太            513点』

「まさかムツツリー二君がそこまで点数が高いとは思わなかったよ」

「……日頃から知識を集めているからな」

「ムツツリー二君と一緒になら、色々楽しめそうだよ」

先制攻撃をしかけたのは、愛子

セーラー服と何とも可愛らしい装備とは裏腹に、武器は巨大な斧だった

愛子の召喚獣は重そうな巨大斧を両手で持ち上げ、風を斬るように振り下ろす

それに対してムツツリー二の武器は小太刀こたちの二刀流武器の大きさでは圧倒的に不利だった

ムツツリー二の召喚獣は装備が忍者のような装束だからか、忍びのような素早い動きが特徴的である

「……大きい武器は攻撃の後の隙も大きい」

愛子の召喚獣が振り下ろした攻撃を忍者のように避ける

そして、斧を振り下ろした力が殺しきれない隙について、ムツツリー二の召喚獣が攻撃する

「……終わりだ」と愛子の召喚獣の喉元目がけて小太刀で斬りつけた

ガキンツと金属を叩くような音が響いた

ムツツリー二の小太刀が弾かれたからである

「……っ!？」

「危ない危ない……もう少しで負けちゃうところだったよ」

「……………斧が……………2本だと」

ムツツリー二の小太刀を弾いたのは、何と2本目の斧だった

「隠すつもりはなかったんだけど、こんなに早く負けちゃうのはっ

まらないかなって思ってたさ」

「……何で斧が2本もあるんだ」

「……ん？ ああこれね ボクの武器はもともと2本の斧なんだよ  
ちよつとハンデがいるかなって思ってた組み合わせで1本にしたた  
んだ ゴメンね」

愛子の斧はもともと2本あったもので、それを組み合わせることで  
1本の強力な斧になっていた

「……それで良い 何も隠さずに勝負しろ」

「何も隠さず……？ それじゃあ、この制服も脱がなくちゃね」

そう言つて、愛子は自分の制服を脱ぐ仕草をする

本当に脱ぐ訳ではないのに「っ……………！ 鼻血が……………」と思わずタ  
ラリと鼻血が出てくるのを必至で押さえる

視線が愛子の方に向つていたムツツリー二を見て、愛子がすぐさま  
ムツツリー二の召喚獣に斧を斬りつけた

「ぐっ……………」

「ダメだよムツツリー二君 ボクに何か見惚れてないで召喚獣に気  
をつけないと」

ムツツリー二はギリギリで直撃を免れたが、かなりの点数が下がっ  
ていた

最初は500点近くあった点数も、今ので426点まで減っていた

「やっぱり2本になると攻撃力が下がっちゃうかあ」

「……………そろそろあれを使うか」とムツツリーニは小声で何かつぶやいた

「何か言ったムツツリーニ君？」

「……………一気に決着をつけさせてもらおうぞ工藤」  
ムツツリーニの目つきが変わった

「良いよ ボクも斧を1本に戻して攻撃力を上げさせてもらおうよ」  
2体の召喚獣が、構える  
そして、

「やあああああー！」

先手は愛子からだった、空中で2本の斧を1本に組み換え、1回転して破壊力を増幅させる  
何をするつもりなのか、ムツツリーニはその場から1歩も動かない



「……『四面楚歌【ルバートカルテット】』」

するとムツツリーニの召喚獣の左腕につけられた腕輪のようなアク  
セサリーが光った

「な、何をする気なの!？」

光った腕輪はやがて4つの光となり、ムツツリーニの召喚獣の後ろ  
に落ちた

そこに現れたのは……

「ムツツリーニ君の召喚獣が………5体に?!」

光の正体はムッツリー二の召喚獣と同じ姿、同じ小太刀の武器を持った召喚獣4体だった

その4体はすぐさま空中で攻撃をしてきている愛子の召喚獣のところへ飛んでいき、右腕、左腕、右足、左足を4体それぞれが持ち、空中で動けなくした

身動きを封じられた愛子の召喚獣はそのまま落下していく

「お前の負けだ………工藤」

最後に本体の召喚獣が、落ちて来る愛子の召喚獣の喉元を小太刀で斬りつけた

召喚獣にも弱点があり、喉元を攻撃された愛子の召喚獣は1撃で負けた

「………勝負あったな」

「そんな……ボクがムッツリー二君に負けちゃうなんて」

「………保健体育でオレが負けるわけがない」

「それにしても、凄い腕輪持ってるんだね　それが噂の400点以上の人に与えられる召喚獣の腕輪なの？」

「………そうだ　工藤は400点以上にはならなかったんだな」

「ボクはもう少しのところで400点以上になれるんだけどね　なかなか点数を稼げないんだ」

「それより、さっきの能力って何なの？　ムッツリー二君の召喚獣が増えたのには驚いちゃったよ」

「……………『四面楚歌【ルバートカルテット】』……………それが、オレの能力だ」

「『四面楚歌【ルバートカルテット】』？」

「……………使用者の召喚獣と同じ召喚獣を4体作り出す この4体はオレが操作する訳ではなく、それぞれが意志を持って行動してくれる」  
「それって5対1の勝負じゃんか……………参ったな、そりゃ勝てないよ」

『保健体育      Aクラス      工藤愛子      0点』

VS

『保健体育      Fクラス      土屋康太      386点』

勝者 『土屋康太』

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十一問】 天才の実力

B A K A T O T E S T

「そろそろ僕たちも、勝負を始めようか霧島さん」

他の召喚獣たちの戦いを見ていた明久がようやく勝負を始めようと言った  
前を向いた

「その前に聞きたいことがある」と翔子が、気合を入れて構えていた明久に待ったをかける

「聞きたいこと……？」

「あなた、吉井って呼ばれてたけど、もしかして吉井明久なの？」

翔子は、明久が吉井明久だと言うことをまだ知らなかった

「そうだけど……それがどうかしたの？」

「あなたは1年生の時、どうして文月学園から姿を消していたの？」

翔子は、文月学園に入って一番最初の実力テストで学年トップの成績だった明久に、姿を消して学園に来なかった理由をどうしても聞きたかった

「詳しい事は言えないけど、僕は記憶喪失になって去年1年間だけ

自宅で休んでたんだよ」

「……………」

記憶喪失、その言葉を聞いた翔子は何かを言い出したかったが言えなかった

恐らく明久があのまま学園にいたら雄二が翔子に敵対視を向けることもなく、明久と言う天才に雄二がずっと勝てない事で才能の暴走を止められたかもしれないのに、と思っていたのかもしれないしかし、記憶喪失と言う事情を聞いて、それが言い出せなくなっただろうか

「教えてくれて、ありがとう 記憶、戻ると良いわね」

「うん、心配してくれてありがとう」と言うも明久は、なぜ名前を聞かれたのか分からず頭に疑問符が出ていた

「そろそろ私たちも召喚バトルを始めましょうか ここからはAクラス代表として吉井明久……あなたを全力で倒す」

「僕だって、負けるつもりはないからっ！」

翔子の召喚獣は、武者鎧に日本刀の武器を持っている

明久の召喚獣の装備は、少し昔風の学ランに武器は木刀と何とも見た目に華のない召喚獣だった

選ばれた教科は『得意教科』と書かれていた  
それを見た、高橋先生が慌てて説明に入った

「申し訳ありません その『得意教科』についての説明をしませんでした その得意教科は文字通り、それぞれの得意教科で召喚

バトルする事ができるようになっていますので、一番点数の高い教科を指定してください」

「私は『数学』をお願いします」

「それじゃあ僕は、『英語』をお願いします」

明久は学園長から特別に貰った100点が使える英語を得意教科に選んだ

2人が選んだ教科が、それぞれの召喚獣の頭上に表示された

明久は言わずとも、英語の100点

翔子は、Aクラス代表と言うだけあって数学452点だった

点数差は、恐らく明久は1撃を食らえば即死か瀕死の二択だった

『数学            Aクラス            霧島翔子            452点』

VS

『英語            Fクラス            吉井明久            100点』

「それでは、召喚バトルを再開してください！」

高橋先生の合図で、先に動いたのは翔子だった  
翔子の召喚獣は、左手で日本刀の鞘さやを持ち、右手で柄つかを握り締めて  
構え、鞘を持ったまま親指で鐔つばを軽く押し上げて柄を一気に引き抜  
いた

来るっ！と明久は心の中で叫び、召喚獣を攻撃に備えて防  
御させようとした

「遅い……………」

しかし、それは一瞬だった

明久が召喚獣に防御させようとした時、翔子の召喚獣が光に包まれ  
て消えたと思えば、いつの間にか明久の召喚獣の横を翔子の召喚獣  
が刀身を振り終わって立っていた

それに気づいた頃にようやく明久の召喚獣の腹部が斬られたことに  
気づく

そして、観察処分者には召喚獣が受けた痛みをフィードバックする  
ようになっており、召喚者である明久にも斬られた痛みが腹部に走  
った

「ぐああああああっ！！」

痛みは本当に斬られたかのように明久は腹部を押さえて倒れ込んだ  
ただ、本当に斬られる訳ではないため、血が出るどころか痛みも  
激痛とまではいかない それでも痛いことには変わりないため明久  
は思わず叫んでしまうほどだった  
明久は、腹部を押さえて痛みが消えるのを我慢するが、耐えられな  
くなりその場で片膝を地面につける

「い、いったい何が……………何が起こったんだ」

「私の召喚獣の腕輪、『光解離領域【フォトンベルト】』を使った  
の」

「えっ!?!」

「…………私の能力は『特殊系能力【キネシス】』で、見えない太刀筋  
があなたの召喚獣を斬りつけた」

「『特殊系能力【キネシス】』?……………『光解離領域【フォトンベ



ルト』? いったい何の事なのさっ?!」

「召喚獣の腕輪について知らないのね」

「召喚獣の腕輪? もしかして、さっきムツツリーニが使ってたやつのこと?」

試験召喚戦争が始まる前の午前中、ムツツリーニと秀吉から召喚獣についての勉強は召喚獣の動かし方などの基礎だけしか教える時間がなかったため、召喚獣の腕輪については説明できなかった。そのため、突然言われた聞き覚えのない特別な言葉に明久は混乱していた

「そうね、少しばかり勉強の時間にしましょうか」と翔子は攻撃体制を崩して、何も知らない明久に召喚獣の腕輪について話し始めた

「『特殊系能力【キネシス】』と言うのは、1教科の点数が400点以上の召喚獣に与えられる特殊な腕輪の種類別に分けられた名前のこと」

先ほど、ムツツリーニが使用した『四面楚歌【ルバートカルテット】』も、この『特殊系能力【キネシス】』と呼ばれる能力だった

「そして、その特殊な腕輪の能力は人それぞれ違って、私の能力は『光解離領域【フォトンベルト】』 この能力は『光の領域』に入つて、光速で移動することができる。光は常に全身に当たっているから、私の攻撃はゼロ距離で召喚獣を斬りつける事が出来るというわけ」

「……………光の領域に入ってゼロ距離攻撃? そんなメチャクチャな

能力、誰も勝ち目がないじゃないか！」

「今まで私が負けたのは1度だけ たった1人だけ『光解離領域【フォトンベルト】』が通用せずに負けたことがあった」

「これを止められる人がいたの?!」

「その人の召喚獣の能力『遅刻厳守【タイムカード】』は、私の能力が全く通用しなかった……正確には能力を使う時間もなかった  
でも、もうあの人はここには居ない だから、私の攻撃を止められる人は誰も居ない」

どこから攻撃がくるかわからない明久は、構えるしかなかった  
翔子の召喚獣が日本刀を構えた瞬間、光の領域に入って攻撃する

するとガキンツと金属を弾く音が聞こえた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十二問】 勝ち目のない戦い

B A K A T O T E S T

「っ……?! 私の攻撃が……止められた?」

光の領域に入った翔子の召喚獣の攻撃が止められていた  
あまりに一瞬でわからなかったが、明久の召喚獣の目の前にはムツツリーニの召喚獣が日本刀を防いでいた

「ムツツリーニ!」

「……さっきの話で情報を解析させてもらった 光の領域に入つて攻撃しようと、最後は出て来なければ攻撃できない それに召喚獣は自らの意思で動いている訳ではない だから見えない物を操作するには召喚者が目で見ていなければならぬため召喚獣が光の領域に入つていては召喚者にも見えていないと言うわけだ つまり、お前の『光解離領域【フォトンベルト】』は直線攻撃しかできない 行動範囲がわかっていれば、タイミングを合わせれば防げないこともない」

お前の能力は見切ったぞ、と言いつ聞かせるかのように、普段ほとんど口を出さないムツツリーニが翔子の能力を事細かに語りだした

これもムツツリーニの才能『不正入手【フリーダム】』によるものだった

ムツツリーニの『不正入手【フリーダム】』は、全ての情報を解析

する才能　つまり人間の考えている思考すらも解析してしまう力がある

スポーツや格闘ゲームなど、普通は相手が次にどんな行動をしてくるのかを予測して動かなければならない確率の問題がある　どちらかが正解、どちらかが不正解の二択だが予測する事が多ければハズれる可能性がある　しかしムツツリー二の才能『不正入手【フリーダム】』には、確率など関係なかった　それは、相手が考えている次の行動パターンがムツツリー二には解析されてしまっているからだ　相手が次は右に行動するぞ！、と考えると、それをムツツリー二が無断で相手の思考に侵入して不正に情報を盗んでしまう

ただし、情報を盗めるのは次の行動のみ　もし相手が裏をかいていたとしてもムツツリー二には、その裏の情報までは解析できない　裏をかいていると知る事ができるのは、次の行動が出された後にのみ解析できる

今回、翔子は明久の目の前に出れば勝てるかと複雑な考えをしていなかったため、ムツツリー二は翔子の召喚獣がどこから攻撃してくるかわかっていた

「さすがね土屋……確かにあなたの言う通り、この光の領域からの攻撃は私にも見えない　だからと言って、この『光解離領域【フォトンベルト】』を封じられた訳じゃない」

「……その通りだ」

「な、何でさ?!　防げるならあの攻撃に当たらないじゃないか！」

「……いくら防げても、防ぐごとに体力は減っていく　それに、見えない相手に反撃はできない」

普通なら相手の行動がわかっていれば、カウンターで倒す事ができるのだが、翔子の召喚獣は光の領域と言う見えない相手と戦っているようなものだから、次にどこから攻撃をしてくるのかを知る事ができたとしても、いつ、どのタイミングで、どう攻撃してくるのか、そう言った事までは情報を盗む事ができない。そこばかりは、ムッツリー二の洞察力が勝負のカギとなる。

「そんな………やっぱり倒すのは無理なの？」

Aクラス代表の力は、誰にも勝てない最強の能力の持ち主だった。ムッツリー二の召喚獣も翔子の召喚獣からの攻撃を防いでいる今でも、どんどん体力を削られている。

得意教科で戦う事ができるため、ムッツリー二は『保健体育』を選択したが、すでに愛子のとの勝負で保健体育の点数が400点以下になってしまっているため、ムッツリー二の『四面楚歌』『ルバートカルテット』は使えなかった。それでも必死で戦っている姿を見て明久は、唇を噛みしめ何もできない自分の弱さに怒りを覚えた。

それを見たムッツリー二が「……………時間稼ぎだ」と翔子に聞こえない小さな声で明久に言った。

「えっ……?」

「……坂本が言っていただろ、あいつが来るまで出来るだけ時間を稼いでいろ」と

そう、この試験召喚戦争が始まる前、雄二は何か作戦があると言つて時間稼ぎをするようにFクラスに説明していた

「そう言えば……そんな事を言つてた」

「……坂本が何を考えているのかオレにはわからないが 代表なりの作戦を考えているのだろう だから、オレはそれに答える」

「わかつた……僕も出来るだけ時間を稼ぐよ」

「……あいつの攻撃はオレが押さえる、その隙に明久は島田を呼んで2人で攻撃をするんだ」

明久は「うん」と首を縦に振り、ムツツリーニから離れた

「何か作戦を考えていたみたいだけど、私には通用しない」

翔子の召喚獣は一度、ムツツリーニから離れて翔子の元へと戻と、  
またも攻撃態勢に入るために日本刀を鞘に納める

「何度防ごうと、結局は私が勝つ」

また光の領域に入り一瞬でムツツリーニの目の前に現れるが、『不正入手【フリーダム】』と驚異的な洞察力によって行動を見極めてムツツリーニは攻撃の軌道を読み小太刀で防いだ

「うおおおおおお！」

「やああああああ！」

ムツツリーニが攻撃を防いだ瞬間、明久と勝負の終わった美波が同時に翔子の召喚獣に攻撃を繰り返した

「無駄なことを」と翔子の召喚獣は攻撃の当たる前に、また光の領域に入りこんでしまった

そして、明久と美波の召喚獣がムツツリーニの召喚獣の前に来てしまい3人がまとまってしまった

「っ……………！！ ヤバイっ！全員離れる！！！」

普段あまり大声を出さないムツツリー二が叫んだ

翔子が考えている思考を解析することで、次の行動がわかった。1人なら避けれたのだが、その事を他の2人に伝える時間が必要だったためムツツリー二を含めた3人は翔子の攻撃に反応できなかった

「遅い……………」と、翔子は『光解離領域【フォトンベルト】』の能力は使わず、脚力で3人の集まる場所まで距離を縮め、翔子の召喚獣が日本刀を横に構えて研ぎ澄まされた刀で3人の召喚獣はまとめて斬られた

「ぐああああああ！！」とフィードバックした痛みで叫ぶ明久

翔子は、3人に圧倒的な力の差を見せつけた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第二十三問】 知られざる力

B A K A T O T E S T

明久の召喚獣が、翔子の召喚獣から2撃目を食らってしまい戦死した

「ぐっ……… 2人は大丈夫？」

「……オレは大丈夫だ まだ点数が少し残っている」

「ウチも少しだけ でも、次の攻撃を食らったら戦死するわね」

あの1撃でも、得意教科を選べた事で美波とムツツリー二の召喚獣は生き残る事ができ、戦死することはなかった 先ほどの攻撃で明久は戦死してしまったが、補習はこの試験召喚戦争が終わってからになる

「私の『光解離領域【フォトンベルト】』は光と光を瞬間的に移動しているだけだから、移動速度の力はゼロになる だから攻撃力は従来の威力よりも少し下がってしまうのが難点だけど、さっきの攻撃は速度の威力も加えた1撃……… そう強がったところで瀕死には変わらない」

明久が1撃目で戦死しなかったのは、翔子の召喚獣の攻撃力が少し下がっていたためだった しかし、それでも100点では2撃を耐える事は不可能だったようだ

「そんな事を僕らに教えて良いの？……弱点は隠しておくのが普通でしょ」

「あなたたちに教えたところで私の攻撃を防ぐことはできない」

翔子は余裕の表情を見せ、圧倒的な力の差を見せつける

「最後の攻撃………これで、あなたたちの負けよ」と、また翔子は召喚獣を自分の前へと戻して日本刀を鞘に納めて構えさせる

「くっそおおおおおお！」

明久の叫びも虚しく、翔子の召喚獣が光の領域へと入っていった

その時だった

「お前ら、時間稼ぎ助かったぞ」

「っ……!!!?!」

全員が声のする方へ振り返ると、そこには雄二の姿があった

「どうして坂本がAクラスに……？ あなたFクラスの代表じゃないの」

雄二の登場に、思わず翔子は召喚獣を光の領域から出してしまった

「試験召喚戦争で、代表がクラスから出る事が禁止とは言われてないんだから、別にオレがここに来てても違反じゃないだろ？」

代表である雄二や翔子は学園の中であれば、隠れようと相手の教室へ突入しようと違反にはならない

「代表がこんなところに来る何て、負けに来たようなものじゃない」

「それはどうかな？」

自信ありげな雄二は、召喚獣を召喚した

「試験召喚獣召喚【サモン】」と叫ぶと、幾何学的な魔法陣が雄二の前に現れた

魔法陣の中心には『F』と書かれており、そこから雄二の召喚獣が出現した

雄二の召喚獣の装備は特攻服で、武器は召喚獣よりも少し長い銀色のコルセスカの槍を持っていた コルセスカは、長い穂<sup>ね</sup>先の根元左右に2つの刃がついている槍のことである

出現した召喚獣の頭に教科の点数が表示された

「っ……………！！ その点数……………いつの間に」

その点数を見た翔子は目を疑った

『数学 Aクラス 霧島翔子 432点』

V S

『数学 Fクラス 坂本雄二 812点』

『英語 Fクラス 島田美波 234点』

『保健 Fクラス 土屋康太 215点』

雄二の召喚獣は翔子の点数を遥かに超える800点オーバーだった

「オレは試験召喚戦争が始まってから、今までずっと補給室で『回復試験』を受けていたんだ。しかも得意教科で数学を選べたおかげで、オレの本来の……いやそれ以上の点数で戦うことができる。」

雄二の言う『回復試験』とは、試験召喚戦争中でも回復できるシステムのことで試験召喚戦争の途中で点数を回復して体制を立て直すことができる。

回復試験は試験召喚戦争中、補給室に行くことで点数を回復するための試験が受けられる。

これにより、戦争中も体力を大幅に回復できることになる。

時間は無制限で、試験召喚戦争中であればいつまでもテストを行うことができ、前回獲得した点数に回復試験で点数を上乗せすることで、より強い点数を手にする事が可能。

雄二は、Aクラスとの戦いが始まってからずっと補給室で回復試験を受けていた。

そのおかげで、今までの点数に加え、時間稼ぎしていた分を合わせた雄二の点数は翔子の点数を超えていた。

「さあ……始めようか……」

圧倒的な力の差と余裕を見せる雄二に思わず1歩下がる翔子。

「っ……………！」

その瞬間、先制攻撃を取ったのは雄二だった。

800点オーバーと言うあまりにも強力な脚力は、まるで音速だった行動が遅れた翔子は『光解離領域【フォトンベルト】』を使う余裕

がなかったため、攻撃の軌道を読み、なんとか横に避けて回避する  
いくら光の領域に入れると言っても、そこに入るまでに最低でも1  
秒はかかってしまう

普通の召喚獣が相手なら1秒は余裕の時間だったが、今の相手は音  
速並みの速さで近付いて来る雄二の召喚獣だったため使用できな  
かった

回避した翔子の召喚獣に、休む間もなく続けざまに雄二の召喚獣が  
槍で攻撃する

翔子の召喚獣は、日本刀で弾きながら距離を測るが、雄二の召喚獣  
による槍攻撃は連続攻撃で翔子は防御するのが精一杯だった

「……………早いっ」

「お前が遅いんだよっ！」

防御した日本刀が上に弾かれた

「あっ……………！」

その瞬間を雄二は逃さなかった

そして、雄二の召喚獣が翔子の召喚獣に向かって槍を突き刺した

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十四問】 容赦なき強さ

B A K A T O T E S T

しかし、雄二の召喚獣の槍が当たる寸前で翔子の召喚獣が光の領域へと入って何とか回避した

「ちっ………逃げたか」

さっきの攻撃で雄二の召喚獣の行動を学んだらしく、翔子はすでに見切っていた

これが翔子の才能、『完全記憶【フルコンプリート】』の力だった一度、視界に入ったものは一瞬の出来事ですら記憶してしまうこの力のおかげで翔子は雄二の音速にも目が追いつけるようになったそして、雄二の召喚獣から少し離れたところから出て来る

「それがお前の召喚獣の能力か ずいぶんと良い能力を手に入れたな」

「いくら坂本の攻撃力が高いからって、私の能力には勝てない」

「坂本っ！ 霧島さんの能力は『光解離領域【フォトンベルト】』って言う、光の領域に入り込んで攻撃してくるんだ！ ただし、攻撃は直線しかできなくて攻撃する直前に領域から出てこないダメなんだ！」

明久はムツッリー二の集めた情報を何も知らない雄二に教える

それを聞いた雄二は「なるほどな」とすぐに情報を飲み込んだ

「つまり、光がなければその能力は使えないって訳だ」

翔子の能力を聞いてもなお、雄二の顔にはどこか余裕の表情を見せていた

「今からブレイカーを落とそうと考えても無駄よっ！」

また翔子の召喚獣が光の領域へと入っていく

しかし雄二は、攻撃に備えて武器を構えようとしな

「もう諦めたの？ もう少し戦いたかったけど……これで終わりにするっ！」

翔子の召喚獣は、光を通過して雄二の目の前で現れ

なかった

「えっ………?!」



光の領域から出て来たのは、雄二の召喚獣に攻撃が当たる範囲よりも前に出てきてしまった  
だが、そんなことよりも翔子は目の前の光景に目を疑っていた

「何なの……………その黒い球体は……………」

突如雄二の召喚獣の前に、バランスボールほどの大きさの真っ黒な球体が出現した  
黒い球体は、まるでブラックホールのように周りの光を吸収してどんどん大きくなっていく  
光の領域に入っていた翔子の召喚獣は、その黒い球体の光を吸収する力で光の領域から出てきてしまったらしい

「これは、暗黒物質……………」

「その通り、オレの出した暗黒物質は『光』を食らって威力が上昇する能力だ」

「光を食らう能力……………それが坂本の『特殊系能力【キネシス】』」

なのね」

「……いや正確には、『範囲系能力【レインヂ】』だ」

『範囲系能力【レインヂ】』とは、翔子やムツツリーニの『特殊系能力【キネシス】』と同じく、腕輪の能力の種類の一つである。召喚獣が持っている、それぞれの腕輪には、以下の3つの種類が存在する。

『特殊系能力【キネシス】』

翔子やムツツリーニの持つ『特殊系能力【キネシス】』は主に、光の領域や分身と言った特殊な能力で、ほとんどの召喚獣はこの能力に関する腕輪を持っている。能力によっては効果が強くなるほど、使用条件が必要になってくる物もある。

『範囲系能力【レインヂ】』

雄二の持つ『範囲系能力【レインヂ】』は名の通り、攻撃対象が複数の範囲に及ぶ能力なのだが、使用には召喚獣の体力を大量に使用する。

この腕輪を持っている召喚獣は少なく、3種類の能力の中で最も稀少種である

『打撃系能力【インファイト】』

そして、もう1つは『打撃系能力【インファイト】』と呼ばれる能力  
これは、召喚獣そのものに攻撃力強化に関する能力だが、攻撃力の上昇が高まる程、効果が切れた時の副作用によって召喚獣の点数が下がってしまう

召喚獣の腕輪は、『特殊系能力【キネシス】』 『範囲系能力【レンジ】』 『打撃系能力【インファイト】』の3つで分けられている

誰が、どんな能力を持っているのかは学園長が知っており、それを入学した時に教えられるようになっていた  
明久も、入学した時に教えられているのだが、記憶喪失でどんな能力だったのかを忘れてしまった

「オレの召喚獣の能力は、『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』  
いでに言っておくと、この能力は700点以上で使える腕輪だ  
つまりオレには700点以上で使える『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』  
の能力と、400点以上で使えるもう1つの能力を持っている」

「700点以上でまた腕輪が……？」

「生徒で700点以上取れる奴なんて、そういないからな オレも今回は時間があつたから700点以上取れただけだしな」

「甘く見過ぎていた……………まさか坂本がこれほどまで強かつた何て」

翔子は今まで戦ってきた雄二の本当の力に圧倒され、思わず下を向いてしまった

「気をつけな 膨大な光の容量に耐えきれなくなったその球体は、もうすぐ『爆発【ビッグバン】』が起きて召喚フィールドは灼熱地獄だ」

「……………っ！！」と慌てて顔を上げる翔子

「代表！逃げてくださいっ！」と優子の召喚獣が翔子の前に立って盾になった

だがその瞬間、さつきまで黒かった球体の中が真っ赤に燃えあがり、耐えきれなくなった熱は球体の中で大爆発を起こした  
そして逃げ場のない爆風は球体を破壊して一瞬でAクラス全域を炎で焼きつくした

翔子は優子に言われた通り、光の領域に逃げようとしたが攻撃範囲は召喚フィールド全域に及んだ

炎自体も、現実のものではないため人間には何の影響もないが召喚獣にはそれが当たってしまう

そのため、優子の召喚獣が盾になるも後ろにいた翔子の召喚獣は全身に大ヤケドをおった  
それだけではない、ムッツリー二と美波の召喚獣まで爆発に巻き込まれた

そして、あまりの威力にムッツリー二、美波、優子の召喚獣は全員戦死してしまった

『数学 Aクラス 霧島翔子 178点』

『化学 Aクラス 木下優子 0点』

V S

『数学 Fクラス 坂本雄二 312点』

『英語 Fクラス 島田美波 0点』

『保健 Fクラス 土屋康太 0点』

B A K A T O T E S T

【第二十五問】 試験召喚戦争 終幕

B A K A T O T E S T

「まさか、こんな能力を持っている何て……………」

圧倒的な力の差で動揺が隠せない翔子

それに対して、まだまだ余裕の表情を見せる雄二

「『範囲系能力【レンジ】』は、かなりの体力を消費するのが難点だな もう400点以下になつてやがる」

雄二の『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』は攻撃力が非常に高く、1度の使用で500点の点数消費が使用条件だった

そのため、800点以上あった点数もあつと言う間に400点以下となり『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』は使用できなくなつた翔子もまた、先ほどの雄二の攻撃で400点以下になつてしまったため、お互い腕輪の能力の使用は不可能になつてしまった

決着をつけるには、召喚獣同士の直接対決になるかと思いきや、まだ先ほどのダメージで翔子の召喚獣が体制を戻せていないのにも関わらず、雄二の召喚獣が槍の矛先を向けて突進して来た

そして、防御する暇も与えられず槍が翔子の召喚獣の体に突き刺さり、雄二の召喚獣はそのまま力を殺さずに突き刺さつた状態で翔子の召喚獣を壁へと激突させた

「これで、終わりだあああああっ！」

ドンッ

壁に激突した衝撃で大きな音がAクラスに響いた

翔子の召喚獣は雄二の召喚獣の槍が突き刺さったまま壁に激突して  
ピクリとも動かなかった

それを確認した審判である高橋先生による試合終了の合図が出された

「  
Aクラス代表の戦死により、勝者はFクラスです」

「そんな……………私の負け……………？」

予想もしなかった出来事にショックで翔子は立っていられず、その  
場で膝から崩れ落ちた

「所詮オレには勝てないってことだな霧島 Aクラスはオレたちの  
物だ」

「私の……負け……嘘……皆がFクラスになる……」

「代表っ！ 気をしっかり持って下さい！」

「ボクたちは大丈夫ですから、自分を責めないで下さい！」

優子と愛子が翔子に駆け寄るが、翔子の容体はどんどん悪化していった

いつもの冷静さを完全に失い、まるで恐怖に怯えるように両手で自分の体を抱きしめる

「ゴメンなさい……私が……私が……ゴメンなさい……ゴメンなさい」

精神が不安定になり、翔子は体を震わせながら謝り続けた  
そして、限界を超えて耐えきれなくなった翔子はそのまま気を失った  
キツ……と雄二を睨みつける優子

「おいおい、オレは別に何もしてないだろ そいつが勝手に気絶しただけだ」

「あなた、いくら勝負に勝ちたいからって、そこまでする何て人として最低よ！」

「……どうとでも言ってる」

「久保君、代表を保健室に連れて行くから手伝って」

優子に呼ばれた久保が翔子の元へと駆け寄り、翔子は優子と愛子と



久保が保健室へと連れて行った

「ちっ……あれぐらいで倒れるとは、代表失格だな」

雄二に対して不満を持ったのは、Aクラスだけじゃなかった

「坂本！何で仲間の召喚獣まで戦死させたんだよっ！」

後ろで雄二たちの戦いを見ていた明久が雄二の前にやってくる

「何言ってるんだ、これは勝負だぞ？ 甘い考えは捨てるのが当たり前だ」

「だけど、あんな戦い方をしなくても良かったらろっ！」

「……うるせーな オレに齒向かうってのか」

「ああ、こんなやつがFクラスの代表かと思うと、虫酸むしむが走るよ」

「だったら、オレと勝負するか？」

「それは良い話だ ちょうど僕も同じ事を言うつもりだったから」

「……良いだろう お前もオレに逆らうのならボコボコにしてやる  
「よ」

「それは無理な話だ」

「何だ、勝負の前からずいぶんと弱腰だな そんなのでオレに勝  
「

「お前は僕に勝てない だからボコボコにするのは無理だ」

「……言っじゃねーか お前の補習が終わった放課後、Fクラスで  
勝負してやる」

「ああわかった」

「ちよつと、坂本っ！ あんた代表なんだからしつかりしなさいよ  
それに吉井も勝負しようなんて考えるんじゃないわよ」

「……………今、何て言った島田」

「え…………？」

「こいつの名前、何て言ったんだって聞いてるんだよ」

「僕は吉井明久だよ そんなに僕の名前が珍しいのかな？」

翔子にも同じように名前を聞かれた明久は、なぜ自分の名前を聞かれるのか不思議だった

「お前が…………吉井明久だったのか まさかこんなに近くにいるとは思わなかったぞ 何で今まで学園にいなかったんだ」

「僕は文月学園に入学してすぐに記憶をなくしている だから、1年間は学園にいなかった」

「記憶喪失だと……………まあ良い、今度こそお前を倒してオレは学年最強になってやる」

試験召喚戦争はこれで終わりではなく始まりだった

空はまるで、2人の心を映しているかのように、見る見る暗雲が広がっていく

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十六問】 闇に潜む黒い影

B A K A T O T E S T

「あいつが吉井明久だったとはな……………」

雄二は試験召喚戦争が終わり、1人で廊下を歩いていた

「ちょっと良いかな？」

「ああ？」

そこに現れたのは、中年と言つには若い年齢の男がタバコをくわえて雄二の前に現れた

「そんな怖い顔するなって」

「ここは禁煙だぞ……………お前、教師じゃないな」

「おっと悪いな 君をずっと待ってたら口が寂しくなってるな」

男は、くわえていたタバコを携帯用灰皿に入れた

「……………オレに何か用か」

「ああそうそう、さっきの戦い見せてもらったよ 実に面白かった」

「っ……………！」

「君、強いんだな」

「……………知るかよ 今は気分が悪い、話なら他のやつにしろ」

雄二は、男の横を通り抜けようとする。「そうはいかないよ」と雄二の肩を掴む

「うるさいな さっさとオレの前から」

雄二が振り返ると男は、手に持ったある物を見せた

「……………これ、使ってみないか？」

男は見た事のない形の物を持っていた

見た目は召喚獣の腕輪のような物だが、人が付ける普通の腕輪と言  
うにはあまりにも大きい

「何だそれは……」

「オレの言うことを聞いてくれるなら、教えてあげるし貸してあげ  
る」

「……いらね」

肩に置かれた手をサッと払いのけ、雄二が立ち去ろうとした

「  
君を超える人と戦いたいんだろ？ それ叶えてやる  
うか」

「何だと……？」

その言葉に、思わず足が立ち止まってしまった

「『完全攻略【クリアハンドレッド】』、その才能で君の強さをも  
っと世間に見せつけてやらないか？」

「何でオレがあんたに指図されなきゃならねーんだよ」

「オレも君と同じように才能を持つてるんだよ。ただ君とは似ているようで全く違うけどね」

「で、オレの才能ってのが

」

「『不完全攻略【デバッグミス】』」

「オレは生まれてから、そういう名の『負の才能』を持っている。この意味わかるか？」

「『負の才能』……不完全……だと」

「そ、オレはどんなに努力したところで、絶対に最後は結果を残せない。だから他の実力を持つやつに、オレの力を代わりに使ってもらいたい」

「それでオレに、お前の力を使えって言いたいのか」

「……悪い話じゃないだろ？ オレの実績と君の実力で、この文月学園で最強は誰なのか思い知らせてやるっじゃないか」

「ふん……最強か その響き良いな、面白そうだ」

「じゃあ、使ってくれるんだな!？」

「ああ、あんたの力になってやるよ」

「……結果を楽しみにしているぞ」

雄二は男から腕輪を預かり右手首にはめた

「そっいや、あんた名前は？」

「これはすまない 名も知らないまま、手を組むところだったな」

「オレの名前は」

コロコロコロ

突然、カミナリが鳴り始めた



夕方頃から、天気が悪くなると予報に出ていたのが当たったようだ  
まるでこれから何か不吉なことが起きることを知らせるかのように、  
どんとんと黒い雲が近付いてきていた

「……こりゃ驚いたな」

「オレの名前は、内緒の方向で頼むぞ」

「わかってるよ 後はどこかで見物してると良い」

「そつちをせてもらっつよ」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十七問】 最後の試験召喚戦争 開幕

B A K A T O T E S T

そして、放課後になり他の生徒たちは帰宅して教室は静まり返っていた

部活も雨が降って来たため中止となり、教師たちも帰って行ったか新校舎にある職員室にいるぐらいで、旧校舎には今、明久と雄二しかいない

「そろそろ良いだろ」

明久の補習が終わり、約束通り雄二と明久はFクラスの教室に集まっていた

「勝負は良いけど、召喚フィールドを出す先生はどうするのさ？」

「教師なんていらねーよ」

「……どう言う事？」

召喚獣を召喚するためには、召喚フィールドが必要になる

召喚フィールドは生徒が無断で使用することは不可能なため、教師の許可が必要だった

しかし雄二には、その必要がないと言い明久は疑問に思った

「召喚フィールドはオレが出してやる」

「何言ってるのさ、そんなことできる訳ないだろ」

召喚フィールドを出す事は、教師にしか不可能であるはずなのに、それを雄二は自分で出すと言い始めた

「ま、説明するより見せた方が早いだろ」

雄二は、腕輪のような物をはめた右腕を上には伸ばした  
そして、

「『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』」

すると雄二の右腕に付けられた腕輪が起動したのか光だした  
そして、いつも教師が出す召喚フィールドが学園の半分を覆い尽くすようにして現れた

雄二は本当に教師にしかできない、召喚フィールドの出現を自分でやっけてのけたのだ

「ほお……これは便利な道具だ」

「な………何で坂本が召喚フィールドを出せるのさ?!」

「この腕輪は『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』と言ってな、教師しか召喚許可を出せない召喚フィールドを擬似的に真似できる腕輪だ。これで教師がいない時も、どこでも召喚獣を呼び出す事ができる」

「何でそんな物を持って………誰かに貰ったのか?」

「それは秘密だ」と雄二は誰に貰ったのか答えなかった

明久は何気なく雄二の持つ腕輪を見た時だった

「っ……………!!! うああっ!!!」

突然、明久が声を上げて、両手で頭を押さえた。頭痛が起きたのだ

ろつか、その場で立っていられず明久は両膝を地面に置いて、土下座するように両手で抱えた頭も地面に置いた  
そして明久には、まるで白昼夢のように頭の中に映像が滝のように流れて、頭が割れるのではないかと言うぐらいの頭痛に襲われた

しばらく、と言っても10秒ほどで頭痛の症状は治まったのだが、白昼夢の映像で何か思いあたる事があったのか明久は信じられないような顔をして心が乱れていた

「……………そんな……………まさか本当に僕が」

「どうしたんだ？」と少し気になった雄二が質問するが、「大丈夫、ちょっと寝不足で頭痛が起こっただけだよ」と言って、明久は痛みがなくなったのか再び立ち上がる

気のせいだろうか、先ほどまでの明久とどこか雰囲気違って見えた

「そうか なら教師に見つかる前に、さっさと始めようぜ」

「試験召喚獣召喚【サモン】」と2人が同時に召喚獣を召喚した

すると2人の目の前に幾何学的な魔法陣が現れ、姿を見せる明久と雄二の召喚獣

明久の召喚獣は、木刀を装備している  
雄二の召喚獣は、長槍を装備している

これと言って、さっきと変わりはなかった……………だが

「っ……………！？ な、何だよその点数！」と雄二が明久の召喚獣の点数を見た瞬間、思いもよらぬ事に目を疑った

『数学      Fクラス      坂本雄二      305点』

VS

『数学      Fクラス      吉井明久      352点』

「352点だと!？」

明久の召喚獣は先ほどのAクラス戦とは比べ物にならないほどの点数だった

「僕もこんなに点数が取れるとは思わなかったよ」

「どう言う事だよ……………まさか、記憶を思い出したのか!？」

「思い出した訳じゃないよ」

「だったら何でそんな点数が取れるんだよ」

「僕は補習の時間で『学習装置【ワーキングメモリ】』って言う短期記憶能力の才能を開花させたんだ」

「短期記憶能力……………そうか、記憶がなくても一時的な勉強で点数が取れたって事か」

「もともと僕は記憶力の良い人間だったみたいで、この才能の力がフルに発揮されて時間一杯補習テストで点数を回復させる事ができたよ」

明久は学年トップになるほど今まで教科書や参考書に埋もれて勉強をしていた。しかし1年前のあの事件以来は、毎日ゲームばかりで教科書も参考書も見なくなって記憶を取り戻すキツカケがなかったのだが、補習で山積みになされた参考書を見た明久記憶を取り戻す代わりに、『学習装置【ワーキングメモリ】』と言う才能を開花させる事で雄二と妥当な学力を覚えていた

「才能が開花したのには驚いたが、よく考えれば所詮点数は同じぐらいしか回復していないんじゃないや驚くほどでもないわな」

雄二が嫌な顔で笑う

それに対して、明久もつられて笑う

「じゃあ、驚くような事を今から教えてあげるよ」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第二十八問】 真実の記憶

B A K A T O T E S T

「藤堂歩とうどうあゆむ この名前に覚えがあるよね？」

「っ……………！！！」

明久が突然、ある人物の名前を言うと、雄二は反射的に一瞬だけ体を震わせた

「さあな、そんな名前のやつはオレの記憶にないな」

「僕は全ての真実を知っているから隠したって無駄だよ 藤堂歩は文月学園の学園長である藤堂カヲルの孫 そして坂本の持っている、その『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』の腕輪は藤堂歩が開発した『擬似召喚フィールド』だよ」

明久は雄二の持つ腕輪の正体と藤堂歩と言う人物は学園長の孫だと言う事も知っていた

「……………何で、お前がそこまで知ってるんだよっ！」

「1年前に起こった文月学園崩壊事件は、その『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』を僕が使用したことで起こった事件だ」

「なっ……………？」

明久が起こした事件、それは1年前の学園崩壊事件の真実だった

「僕は1年の時に行われた実力テストを受けた数日後、テストが学年トップだと言う事を知った藤堂歩が、僕に接触してきて提案を出した」

実力テストが掲示板に貼りつけられたのは、実力テストから1週間後に発表される

しかし藤堂歩と言う男は、実力テストから数日後で明久が学年トップになった事を知っていた

つまり、これは祖母である藤堂カヲルと何か関係あるのかもしれない

「……提案だと？」

「藤堂歩の技術と僕の学力で、世の中を変えないかってね」

藤堂歩と言う男は、雄二と同じような事を明久にも言っていたのだ  
つた

つまり、藤堂歩は『雄二の力』ではなく、『勉学の力』を求めている  
ただけだった

「当時は藤堂カヲルの孫と言うのが頭にあつたから疑いはしなかった  
た 召喚獣を使えば世の中が便利になることも確かだったからね  
僕も実力を認めてもらいたいために、勉強を頑張ってきたから、その  
気持ちは痛いほど伝わってきた だから僕は藤堂の力になると約束  
束した」

そして1年前の事件は起こった

明久は、藤堂歩と接触した夜に誰もいない文月学園に入り、雄二が持っている『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』の腕輪を起動した

『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】！』

すると、藤堂歩に言われた通り教師と同じ召喚フィールドの疑似召喚フィールドを出現させることに成功した 疑似召喚フィールドは文月学園の今の新校舎がある場所を包み込むように現れた

そして、まだ召喚獣の召喚方法を教えられていなかったため、明久は藤堂歩から召喚方法を教えてもらい、言われた通りに召喚獣を出した

『試験召喚獣召喚【サモン】』

すると、明久の前に幾何学的な魔法陣が現れ、そこからデフォルメされた召喚獣を召喚することも成功した

「藤堂歩から言われた起動実験はここまでだったから、僕は結果を報告しようと疑似召喚フィールドを解除した……………だけど、そこ

で問題が起きた」

「……………問題？」

「召喚フィールドの融合」

召喚フィールドの融合とは、擬似召喚フィールドを出した時、この学園に搭載されている『召喚フィールド』と腕輪の『擬似召喚フィールド』が融合してしまい、擬似召喚フィールドを解除した時、文月学園に搭載されている召喚フィールドまで一緒に解除されてしまった

文月学園には、召喚フィールドを出現させるために建物に特殊な施しがされており、擬似召喚フィールドの融合は、文月学園の建物にされている特殊な施しまでもが融合してしまい解除されて建物に影響を及ぼし学園が崩れ始めた

「建物は廃校で古い学校を改造したことの影響もあってボロボロと簡単に天井が崩れてきたよ その時、僕は実験動物のように捨て駒されただけのバカなんだって気付いたよ それでも僕は急いで学園の外に出ようと走った……………だが、学園が崩れる方が早かった 天井

が崩れて大量の瓦礫が落ちてきて、僕はそのまま意識をなくした  
あ後は記憶をなくしているからわからないけど、運良く瓦礫の隙  
間に挟まれたため、命に別条はなかったんだろうね でもそれが原  
因で、記憶喪失になってしまった」

明久の記憶は、あの1年前の学園崩壊事件の真相の記憶も取り戻し  
ていた

恐らく、雄二の持つ『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』を  
見て、眠っていた記憶を呼び戻したのだろう

それと同時に、自分が文月学園を崩壊させ命の危機に陥ったと言う  
事実も思い出してしまった

「その腕輪は不幸を招く物だ そんな危険な物、今すぐ捨てて負け  
を認めてくれ」

「……負けを認めるだと？」

「今の實力では僕に勝てない」

「こんな便利な道具を手にして負けを認められるかっての！ さっ  
さと、オレと決着つける吉井明久！」

「言っても無駄だったか………やっぱりお前の目を覚まさせるには、  
こいつが一番だな」

明久は右手で拳を作り、左手のひらを殴った

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第二十九問】 隠された秘策

B A K A T O T E S T

そして、ついに明久と雄二の戦いが始まった

「オレは誰にも負けられないんだっ！！」

槍を両手で剣道のように構えた雄二の召喚獣が足を踏み込み、明久の召喚獣目がけて突っ込んで来る

明久は一瞬遅れを出しつつも、木刀を両手で握りしめて雄二の召喚獣の行動を観察する

「おらあああああああ！」

明久の召喚獣の2mほど手前で飛んだ雄二の召喚獣が両手で構えた槍を叩きつけるように振り下ろした

明久の召喚獣はそれを受け止めるかのように、木刀で防ぐ

「ぐっ……」

だが雄二の攻撃は空中からの重力も加わり攻撃が重い  
必死で耐える明久の召喚獣は全身に力を入れ押し返す

「はあああああああ！」

押し返された雄二の召喚獣は空中でクルリと回転して体制を立て直

していると「次はこっちからだっ！！」と雄二の召喚獣が着地する前に明久の召喚獣が動いた  
明久の召喚獣は、さっきの雄二の召喚獣と同じように途中で空中に飛んで木刀を振り下ろそうとした

「攻撃パターンが見えてるぞっ！」

今度は雄二の召喚獣が、木刀を防ぐための槍を横に持ち両手で構える

だが、

「懐ふところが、ガラ空きだっ！！！」

明久は空中で木刀を構えたまま振り下ろすフリをして雄二の召喚獣に攻撃はせず、そのまま構えた状態で着地してすぐに、槍を構えてガラ空きの懐に入った

「吹っ飛べええええええ！」

「っ……！！ しまっ

！！！」



雄二の詰まる声が出た瞬間、ドン、とぶつかるような音が教室に響いた

「 、なんてな」

明久の召喚獣が無防備だった雄二の召喚獣の体に強烈な突きの1撃を当てたと思っただが実際は違った

雄二の召喚獣ではなく明久の召喚獣が吹き飛び教室の壁にぶつかった

「……………えっ?! な、何で僕の召喚獣が!」

「だから言っただろ、攻撃パターンが見えてるってな 最初からオレはお前が懐に入ってくるのを予想してたんだよ」

「くそっ……………そう言う事が」

明久はまだ召喚バトルに慣れていない

だから、こう言った戦略を簡単に読まれて逆に攻撃させられました雄二は、今まで自分よりも強いやつを探すために戦い抜いてきただからこそ、こんな簡単な戦略など無謀に等しかった

明久と雄二の点数は、お互い300点を切った  
すでに、召喚獣の腕輪を使う事は不可能

「これで丁度、同じぐらいの点数になった訳か どうだ、いつまでも、ちまちました戦いを続けるよりも全力の攻撃で戦いを終わりにしようか」

「わかった……………この1撃で坂本の目を覚まさせてやる 最後の勝負だ、これで決着をつけよう」

「オレの目は、ずっと前から覚めてるよ」

2人の召喚獣は次の1撃が当たれば勝負が決まるようだ

その1撃を賭けて、最後の戦いが始まった

明久の召喚獣が、その場で木刀を一振りして気合いを入れ直した

「いくぞおおおおお!!」

明久の召喚獣が先に動く

雄二の召喚獣も槍を構えて飛び付いた

「うおおおおお!!」

互いに武器が何度も重なり合う どちらも負けじと反撃を繰り返す

「こっちだ召喚獣!」と明久が自分の召喚獣を振り向かせた

明久は近くにあった小火器を自分の召喚獣に投げつけた  
すると、明久の召喚獣はその小火器を木刀で破壊した

「っ!!!」

小火器を破壊する大きな音で掻き消されたが、明久は何かを叫んでいた

そして、小火器の中身が破裂し、辺りは真っ白になった

「ちっ……何のつもりだ吉井！」

だが、雄二の質問に反応はなかった

「今さら戦意喪失で逃げるつもりか」

「誰が逃げるって？」と明久は窓を開けると、真っ白な景色は徐々に晴れていった

明久の召喚獣が動いた気配もなく、先ほどと状況は何も変わっていなかった

「テメエ……何をした」

「ちよつと物を壊したくなっただけだよ」

「バカの考える事はわからねーな」

「それは好都合で助かるよ」

「ふざけんじゃねーぞ！」

その言葉に頭に來たのか雄二は攻撃を再開して、空中に飛んだ

その時だった

小火器の白い煙の中から突然、雄一の召喚獣の後ろに明久の召喚獣  
が現れたのだ

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十問】 最後の試験召喚戦争 終幕

B A K A T O T E S T

「くそっ……どうなってんだよ！」

目の前にいるはずの明久の召喚獣が、なぜか雄二の召喚獣の後ろから現れた

雄二は慌てて召喚獣を後ろに振り向かせ、明久の召喚獣の攻撃を防ぐために守りの入り、何とか明久の召喚獣の攻撃を防ぐことに間に合った

「……はっ、こんな子ども騙しでオレを

」

「後ろは最大の死角だ」

小火器の白い煙が晴れていくと、雄二の召喚獣の目の前にいるはず

の明久の召喚獣が後ろに、つまり明久の前で木刀を構えていた

「なっ……………！」

今、雄二の召喚獣が明久の召喚獣の攻撃を防いでいるはずなのに、明久の前にも召喚獣が武器を構えて空中から落ちて来る雄二の召喚獣を待っていたのだ

そして、空中で身動きが取れない状態で、後ろにいた明久の召喚獣による突き攻撃が、雄二の召喚獣の背中を突き刺した

そのまま雄二の召喚獣は、噴水のように空中に飛ばされ空中で体制を立て直す余裕がなく背中から落ちた

後ろから出現した明久の召喚獣は、いつの間にか姿を消した

「やっぱり、この方法じゃ1撃で倒すのは無理だったか……………」と明久は呟いた

明久の点数は雄二を1撃で倒せたはずだった、なのになぜ1撃で倒せなかったのか

「テメエ今の何だ！ 何で召喚獣が2体もいたんだよっ！」

「2体？ 何言ってるのさ、召喚獣が2体もいるはずないでしょ？ ほら良く見てよ、僕の召喚獣は僕の目の前にいる、この1体しかないじゃんか もしかしてFクラスに入ってからバカになったんじゃないの坂本」

ニヤリと笑う明久に、雄二の怒りはさらに上昇した

「ぶざけんじゃねーっ！ お前も藤堂から何か貰ったんだろ！」

「まあそつだね 貰ったよ」

「何を貰った！教える！」

「坂本だつて教えてくれなかったじゃないか……だから僕も教えない」

「ダメエ……」

「それじゃあ、本当に最後の1撃……これで勝負をつけようか」

明久の召喚獣に刺された雄二の召喚獣は、激痛を堪えて槍を杖代わりにして立ち上がる

先ほどの攻撃は、思った以上にダメージは大きかったようだ

「お前がオレに攻撃できるのは、さっきので最後だ もう二度と当たらねーからな」

「せいぜい背中には気をつけてね」

「言われなくてもわかってる！！」

先制攻撃をしかけたのは雄二、明久はまだ攻撃をしかけない

一瞬にして、明久の召喚獣の懐に入った雄二の召喚獣は槍を顔目がけて突き上げる

ギリギリのところでは避ける明久の召喚獣は右足を1歩下げ、構えた木刀で、まだ突き上げた力が殺せてない雄二の召喚獣に突きを入れるが明久の攻撃はギリギリ槍で防がれた

その反動で、体制がお互い後ろに下がる

だが、同時に足で踏み込んで再び構え直した武器が重なる

「くそっ……さっきのダメージが」と雄二の召喚獣の体制がグラッと動く

雄二は試験召喚戦争が終わってから回復試験を受けられずAクラス戦での点数のままだったため、ほとんどの点数を削られていた

回復試験は、試験召喚戦争中で行うことができない

明久の場合は『戦死』による補習授業のテストで回復することができたため、点数に差がある

雄二の召喚獣が一瞬、体制を崩したところを見逃さず明久の召喚獣が、渾身の力を出して、雄二の槍を押しつける

「おおおおおおお！」

雄二の召喚獣は明久の召喚獣に押し戻されて後ろに下がってしまったよろけたところを明久の最後の力を振り絞って木刀に出せる力全てを込めようとした

だが、最後の最後で明久の召喚獣ではなく、明久本人の体力が限界を超えてしまった



「……そんな……こんな時に」

観察処分者には、召喚獣のダメージが召喚者にフィードバックしてしまう

長期の戦いで、明久の体力はすでに限界だった

明久の召喚獣の攻撃体制が崩れた隙を雄二は見逃さず、雄二の召喚獣は明久に止めを刺すために、その場で空中に高く飛び教室の天井で一度足をつき、バネのように明久の召喚獣目がけて突進した

「お前の負けだあああああああ！」

隙をつかれた明久の召喚獣は反応できずにその場で動けなかった  
勝利を確信した雄二

だが、これを待ってましたと言わんばかりの、明久の顔が何かを企んでいるのか口の端が引つ張られ悪い顔をした

「『擬似複製【ダミーアカウント】』！！」

明久がそう叫ぶと、明久本人の右腕に今まで隠していた腕輪が起動し、明久の召喚獣が全身光りだした

その光は左右に分裂すると先ほどまでの明久の点数が半分になって召喚獣は1体から2体の分身となって現れた

明久の発動した『擬似複製【ダミーアカウント】』とは、自分の点数を均等に分けあって2体の召喚獣になる能力だった

これは、ムツツリー二の召喚獣の能力、『四面楚歌【ルバートカルテット】』に似ている

明久が召喚獣を2体にした事で、さっきまでいたところに照準を合わせていた雄二の召喚獣の攻撃は2体の分身の間を貫くことになり、槍がそのまま床に突き刺さってしまった

その瞬間、明久の召喚獣2体が木刀を握り締める

「お前の……………」と明久が言うと、明久の召喚獣2体は握り締めた木刀を槍を抜こうとしている雄二の召喚獣の顔面に思いっきり叩きこんだ

「負けだああああああああっ！！」

木刀が軋むような音を出して顔面にめり込むほどの攻撃は雄二の召喚獣を教室の後ろまで吹き飛ばした  
壁に激突した雄二の召喚獣は立ち上がろうとするが、力尽きてそのまま地面に倒れた

そして、最後の試験召喚戦争に決着がついた

「……………オレが負けただと？」

負けるなど予想もなかった出来事がショックだったのか、雄二は

その場で崩れるようにして両膝を落とした

「何でだ……………何でオレがお前如きに負けるんだよっ！」

その言葉に明久は「勝つためには学力だけが全てじゃない」と答えた

「っ……………！！！」

「学力だけが全てじゃない……………自分のためじゃなく、一番大切な人のために戦う力は絶対に誰にも超えられない」

「僕にとって大切な人は『友達』だから僕の大切な人を傷つけた坂本に僕は負けることはない」

「ふざけるなっ！ オレは何でも超える才能を持っているんだぞ！」

「坂本には『守るべき相手』がない……………そんな奴が、僕の超える力に勝てるはずないだろ」

「っ……………！ くそっ……………」

言い返す言葉が見つからなかった雄二は悔しさのあまり涙を流して  
負けを認めた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十一問】 過去が再び

B A K A T O T E S T

「ふう……………この腕輪のおかげで助かった」

「お前、その腕輪も藤堂からもらったのか」

「藤堂に間違いないけど、藤堂は藤堂でも学園長のほうだけどね」

「学園長だと？」

明久の持っている腕輪は、雄二の腕輪と似ているがその性能は全く違った

そして、何より作った人が学園長だった

「学園長は観察処分者の僕を雑用係として使うなら、召喚獣の能力で2体使える方が効率的に良いと言ったんだけど、学園長が僕の点数を見て、『400点以上ないと使えないならポンコツ能力だから200点以上で使用可能にしてやるよ』と言って、僕にこの『条件召喚型腕輪 絶対領域【レッドライン】』の腕輪を渡してくれたんだよ」

「……………そう言うことかよ」

明久が学園長から貰った腕輪は、『条件召喚型腕輪 絶対領域【レッドライン】』と言う物だった

この腕輪は、本来400点以上で使用可能になる腕輪を200点以上で使用可能になり、雄二が使っていた700点以上で使用可能の腕輪を500点以上で使用可能になると言う条件に変更できる腕輪だった

決着がつき、擬似召喚フィールドが解除された時だった

トトトトトトトトト

突然、地響きのような音が学園中に鳴り響いた

「じ、地震か?!」

「この感覚……どこかで………っ！ 坂本！今すぐ外に逃げるんだっ！」

何かを思い出した明久は突然、学園の外へと逃げるように坂本に忠告した

「あの時みたいに、またこの学園は崩壊するんだっ！」

「くそっ…………オレもお前と同じように実験動物にされたのかよ！」  
旧校舎が揺れてから、すでにあちこちで学園が壊れ始めて瓦礫が落ち始めていた

「今ならまだ間に合う、逃げっ！」

2人は落ちてくる瓦礫に気を付けながら、Fクラスを出ようとしたしかし教室を出ようとした時、途中で雄二が立ち止まった

「何してるのさ！早く逃げない！」

「ヤバイっ！ あいつ保健室で寝たままかもしれないぞっ！」

「あいつ？ あいつって誰の事だよ」

「翔……霧島の事だ Aクラス戦であいつ保健室に連れて行くって言うてただろ」

「霧島さんなら、もう帰った可能性だってあるじゃないか！ もしそれでいなかったら坂本が学園から逃げられなくなるぞっ！」

「お前は先に、逃げるんだっ！ もし学園が崩れても戻らなかったら、お前の時みたいに瓦礫の中から見つけてくれっ！！」

雄二は明久の忠告を聞かず、Fクラスを出て新校舎と旧校舎の間にある階段を下りて、翔子のいると思われる新校舎1階の保健室へと走っていった





突然聞こえて来た声の方向に目をやると、教室の前の扉に1人の希望が立っていた

「し、島田さん!？」

教室に入って来たのは、美波だった

「文月学園の近くを通ったら、あんたたちの声が聞こえたから来てみたのは良かったけど、何が起こったの？」

「何でここに来たんだよっ！ この学園はもうすぐ壊れるんだよっ?!」

「そんなこと、言われなくてもわかるわよ だから助けに来たんじやないの ほら、ウチが一緒に行つてあげるから2人を早く助けに行くわよ」

「何で島田さんがそこまでしてくれるのさ……?」

「友達を助けるために理由がいるの?」

美波は自分の右肩に明久の右手を乗せて、動けない明久を立ち上げらせる

「……………ありがとう島田さん この借りは必ず返すからね」

こうして美波の後押しにより、明久たちは雄二と翔子を助けに行くため、雄二と同じように新校舎と旧校舎の間にある階段を下りて、新校舎1階の保健室に向かった

一方、雄二は新校舎にある保健室に着いた

「翔子!どこだ!」

扉を開けると同時に、大声で翔子を探す

今まで、『霧島』と呼んでいた雄二は気が動転しているのか『翔子』と呼んでいた

だが、その声に返事はなかった

静まり返った保健室には誰もいなかった

「そうか、保健室の先生と一緒に逃げたのか」

そう思いホツとした雄二は、自分の身が危ないことに気づき急いで昇降口へと向かった

旧校舎側は、すでにあちこちで天井が崩れ瓦礫が落ちていた

雄二は昇降口まで崩れるまでに来れた

と言うのも、新校舎は1年前の出来事もあり耐久性を強くして全くと言って良いほど丈夫だった

「……………？ 何だあれ」

雄二が新校舎にある3年の昇降口から外に出ようとした時、旧校舎側の廊下の瓦礫の横に目がいつて何か落ちていたのに気がついた。文月学園の昇降口は、新校舎に3年生の下駄箱、旧校舎に2年生と1年生の下駄箱が設置されている。

その旧校舎の下駄箱付近の廊下に瓦礫と共に何か白い物があるのに気がついた雄二が、出口が近くにあつて余裕と、どこかで見覚えのあるような気がした雄二は新校舎の昇降口を通り過ぎ、落ちている物を確認するために旧校舎に行つてしまう。

「これって……………」

そこに落ちていたのは、見覚えのある白いリボンの形をした髪留めだった。

それは、翔子が小学生の時から付けていた白い髪留めだった。毎日、見ていた雄二にとって見間違いであつてほしいと思つた。それは、雄二が旧校舎の廊下の先を見てしまったからだ。

ドクンッ

信じたくなかつたが、現実を受け入れると雄二の鼓動が大きく動き始めた。

「嘘だろ……………」

雄二が見た先には、血のようなものがポツポツと道を示していた  
血が旧校舎の中へと続いていくのを見ると、鼓動がどんどん早まっ  
ていくのがわかる

「くそっ……………どこだ……………どこにいるんだよ翔子」

雄二は、白いリボンを握り締め、血の道をたどって再び旧校舎へと  
入っていった

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十二問】 命の重さ

B A K A T O T E S T

「ここか……」

血の道が行きついた先は、新校舎の昇降口から旧校舎に入ったすぐの旧校舎1階にある旧保健室だった  
すでに新校舎に保健室が作られていたため、ここは薬品の保管場所となっていた

旧校舎1階は、保健室や準備室に使われて、ほとんどが空の教室だった

保健室の扉は、変形して斜めになっていたが、すでに翔子が入ったのだろうか扉は開いていた

そのまま保健室の中に入ると、そこには悲惨な光景が目に入った  
旧保健室もすでに天井が崩れて瓦礫が落ちており薬品などが床に散乱して、窓も扉と同様変形していて開けられなかった

「……たす……けて」

普通なら瓦礫の崩れる音で聞き逃しているほど小さな声を雄二は聞き逃さなかった

それは長年の付き合いで聞き慣れた声だったからだ

声のする方に向かうと、ベッドがあった

天井が崩れて、ベッドはかなり変形していた

声はその下から聞こえたため、雄二がベッドの下を覗き込むと、翔子はベッドの下で小さくなっていた

「翔子っ！ 大丈夫か！」

「さか……もと？ 何であなたがここに」

「そんなこと後でいい！ それより早くここから逃げるんだ！」

しかし、翔子は学園が崩れる恐怖でそこから出られなかった

「何で私を助けるの？ あなたは私が嫌いなはず、助ける理由なんてない」

さらにはAクラス戦での戦いで精神的にもダメージがあり雄二が怖かった

「助ける理由なんて何でも良いだろ！ ほら早くオレの手を掴め！」

ベッドの奥にいる翔子に手を伸ばす雄二

しかし、雄二側だけでは手が届かなかった

「理由は、どうせ私を助けて、また超えるべき相手にするためなんでしょ？ それなら私はここで死んだ方がいい」

「違うっ！ オレはそんな理由で助けるんじゃない！」

「それなら、他になにが理由で」

「オレは翔子のことが好きだから助けるんだよっ！」

思いもよらぬ言葉に、今にも閉じそうだった目が大きく開いた

「な、何を言ってるの？ 私のことが嫌いなんでしょ？」

「ああ、確かに自分よりが学力のある翔子のこと嫌いだったよ」

「やっぱりそうよね……………私なんかを……………」と少し哀しい表情を見せる翔子



しかし雄二の話には続きがあった

「最初はお前の事が嫌いだった……ただ何年も競い合っていたら、いつの間にか勝負に勝つ楽しさよりも、翔子と一緒にいるのが楽しくなっちまったんだよ。それなのに、オレの『超える』っていう意味のわからねー才能が邪魔をして今回の試験召喚戦争でお前を傷つけてしまった……本当は戦いたくなかった……本当はお前を傷つけたくなかったんだよっ！」

それは意外な真実だった  
あれだけ翔子のことを敵視していた雄二が、まさかこんなことを思っているとは誰にもわからなかった  
そして『超える』と言う才能は、自分で自分を苦しめていたことを打ち明けた

雄二の本当の気持ちは、人を悲しませるようなことをしたくなかったのだ

「オレは必死で自分の才能を押さえ込もうとしたが『超える』と言う才能が止まることはなかった。それどころか才能が暴走したんだ……それからは、もう自分が何を言っているのかわからなくなったんだよ」

雄二の才能は、風邪のようなもの  
負の才能と言う菌が体に侵入して、それが雄二の心を蝕んでいった  
その風邪は初めて雄二が翔子に学力で勝った時、雄二は心から喜んだ事で菌は消えたかのように思えた

しかし、菌は繁殖力の強さで雄二の心を再び支配していった  
これを止めようとした雄二だったが、才能を押さえるダムが決壊し、雄二の心は崩壊してしまい、学力だけで勝とうとしていたのが、勝

つたためなら人を傷つける事に対して何の感情も持たない非道な人間になってしまった

暴走した雄二は、翔子を傷つけ完全に心が崩壊した  
そこに別の菌である、藤堂歩の影だった

これにより雄二は、昔のような学力で勝って母を喜ばせると言う思いは消えた

ただ自分よりも上の憎い人間を力でねじ伏せる破壊兵器のようなものだった

絶望的な前に、一人の希望が雄二の前に現れた

「闇に落ちたオレを吉井が目を覚まさせてくれた あいつの声がオレを引き戻してくれた」

今でも、明久から聞いた声が何度も何度も雄二を負の才能から助けてくれた

「もう絶対に翔子を傷つけない……………だから……………だから、オレと付き合ってくれ翔子っ！ オレの才能は人を傷つけるための才能なんかじゃない！」

雄二は、もう一度大きく息を吸い込み、崩れる瓦礫の音に掻き消されないように全ての言葉を翔子の耳に届けた

「誰よりも、翔子を守る想いを超えるためにあるんだ！」

学力だけが全てじゃない……………自分のためじゃなく、一番大切な人のために戦う力は絶対に誰にも超えられない

あの時の明久の言葉が雄二の目が覚めた

『超える』と言う目標は何も学力のためだけではない

雄二は『超える』と言う目標を誰かのために使う才能なんだと気づいた

その結果、雄二の出した答えは『翔子を守る』と言うものだった  
大切な人を守ると言うのは、簡単なことではない

だから才能は常に『超える』と言う力が正常に動き続け、雄二を苦しめることはない

「頼む……………翔子……………オレはお前を守りたいんだ」

雄二が必死に手を伸ばしているが、すでに腕は限界に近かった

「っそお……………」

徐々に伸ばした腕が重力に引っ張られて地面へと落ちていく

これほど重力を恨んだ事はない

もし少しでも、ほんの少しでも重力をなくしてほしい、そう願った

突然腕が軽くなった

「っ……………!!」

本当に願いが叶ったのか？、神様がオレの願いを叶えてくれたのか？  
違う、それは雄二の手を翔子が両手で握り締めていたからだっ

「その告白、雄二と付き合わなかったら私、助けられないじゃない  
いな」

「でも、私も雄二と一緒にいるのが楽しかったから許してあげる」  
と翔子は涙を流しながらそう言った

温かい手の温もりが雄二の心を癒してくれる  
その温かさは雄二が小学5年生だったあの日、母に握ってもらった  
時と同じだった

「ありがとう……………ありがとう翔子 本当にありがとう……………」

雄二の目からは今までのいろんな辛い気持ち涙となって流れてい

った

「私の手……離したらダメだからね」

「絶対だ、絶対に離さない」と硬く誓った雄二は翔子の手をしつかりと掴み、翔子をベッドの下から出した

翔子を助ける事ができたが、思いのほか時間がかかってしまったのか、いつの間にか瓦礫が増えていた

「翔子、歩けるか？」

「……………ダメ、足がもう動かないの」

翔子は外に出る時は必ず靴を履く習慣が身に染みていたため2年生の下駄箱のある旧校舎に危険を承知で行ってしまい結果、不安定な足場によって途中で瓦礫に足を切ってしまった

几帳面な性格が裏目に出ってしまった

翔子は、足をケガしてしまい近くの旧保健室で薬と包帯を貰いに行こうといていた

そんな事よりも逃げるべきだったのだが、あの時の翔子は精神的にダメージを受けていたため正常に判断できなかつたのだろう

薬はすでに散乱していたため、血を止めるために保健室のベッドの

シートで包帯代わりにしようとベッドに近付いたところで大きな瓦礫が落ちて来たため翔子はベッドの下に逃げ込んでいた

「歩けないなら、オレが足になってやれば良いだけだ」と雄二が翔子を背中に乗せた

「ちょ、ちょっと何してるのっ?!」

慌てて雄二から降りようとする翔子が暴れる

「おい動くなよ、落ちるだろ」

「私、重いから降りる」

「これぐらいの体重なら何とか歩けるから大丈夫だ」

「……それ私が重いって言うてるのと同じ事」

雄二は乙女心をわかっていなかった

「それにオレからすれば、この重さ何てオレが翔子を傷つけた罪の重さと比べれば全然軽いからな」

乙女心がわかっていなかったのでなかった

雄二は自分の過ちがそれだけ重たいんだと翔子に伝えたかったのだ  
それを聞いた翔子は、雄二から降りようとするのを止めた

「落ちないようにしっかりと掴ってるよ！」

「うんっ！」と幸せそうな顔をして雄二から離れないようにしっかりと制服を握っていた

雄二の本当の気持ちに、深く傷ついていた翔子の心は癒された  
翔子にとって、この瞬間のためだけに今まで雄二を見捨てずに一緒に戦って来たのかもしれない  
ようやく叶った願いは、二人を決して離さない鎖となる

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十三問】 信頼

B A K A T O T E S T

「もうすぐ昇降口だ 頑張れよ」

「うん大丈夫」

だが、

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

またも大きな揺れが起き、しかも建物を支える柱が壊れたのか先ほどよりも大きな揺れだった

「くそつ、またこの揺れか！」

その時だった、

ガラガラガラガラガラと雄二と翔子の目の前で巨大な瓦礫が道を塞いでしまった

二人の絆を切り離してやるつと悪魔が悪戯したかのように

「そんな……こんなデカイ一枚岩、どうやって動かすんだよ」



雄二たちは後少しのところまで逃げ場を失った  
崩れてきた天井の上からかろうじて通り抜ける道はあるが、瓦礫を  
登っていかなければ通れないほどの高さだった  
さらには試験召喚戦争での体力消耗もあり、足をケガした翔子を背  
負ったままで、これを登るのは雄二には不可能だった

「……ゴメンね雄二 私がこんな事にならなかつたら」

「元はと言えばオレが悪かつたんだ 全てはオレに責任がある 絶  
対に助けてやるから諦めるなよ翔子」

その時、瓦礫の向こうから声が聞こえてきた

「坂本っ！そこにいるの?!」

「その声……吉井か?!」

明久たちは、雄二を追って新校舎の階段から降りたのだが、明久は  
体力的に厳しく歩く時間がかかってしまった

そのため、雄二が新校舎の保健室に行き、そのまま旧校舎の保健室  
に行った時によやく明久たちは新校舎にまで辿り着いていた

雄二が翔子を助けて、昇降口に向かっている時に明久たちも昇降口

に向かつて鉢合わせした

「お前、先に逃げろって言っただろ」

「そんなことより、霧島さんは大丈夫なの？」

「ああ、今オレと一緒にいるぞ」

「良かった無事だったんだね」

「だが、この瓦礫が邪魔で逃げる道がなくなっただ　そっちから、オレたちを助けられないか？」

「誰が、助けるって言った？」

「……は？」雄二は、何を言っているんだこいつは、と理解できなかった

この状況で、そんな言葉を耳にするなんて思ってもいない

「僕が助けに来たのは霧島さんだけだ　誰が坂本なんか助けるって言った」

「そうだな、オレもお前に助けてもらうなら、ここで死んだほうがマシだ………だが、翔子だけは絶対助けてくれっ！」

「言われなくてもわかってるよ………ま、霧島さんを助けるには僕  
の力だけじゃ無理だけどね」

それは、雄二の力が必要だと言っている事と同じだった

「………上等だ 何か策でもあるんだろうな？」

「もちろんだよ」

「何だ？」

「坂本の擬似召喚フィールドと、僕の観察処分者の物理干渉能力で  
この瓦礫を壊す」

「なっ、」

無茶苦茶な方法で、思わず声が詰まった

「いくらお前の召喚獣に物理干渉能力があるからって、この岩を壊  
すのは無理だろ！」

明久は、言われてみれば、と解決策があると言っておきながら作戦  
はバカだった

もともと頭の良い明久だが、今ではそれは忘れている

「だったら僕の召喚獣がそっちに行って、この上から助ける 召喚  
獣は人間の数倍力持ちなんだ、これぐらい楽勝だよ」

「……………」

突然、雄二は黙ってしまった

「何してるのさ早く擬似召喚フィールドを出してよ」

「やっぱり、お前に力を借りるのは止めておく　オレは自分で守らなくちゃならない」

「今は、そんな事言ってる暇ないだろ！　もう学園が崩れるんだぞっ！」

「……………」

それでも雄二の返事はなかったため、ついに明久はキレた

「調子に乗ってんじゃねーぞ！　お前の小さいプライド何てどうでも良いんだよっ！」

「オレにだってプライドがあるんだよ！　お前に力を借りるようではオレの守るものが守れなくなるんだよ！」

「そうやって自分は強くなったとでも思ってたのか！　だったら、お前は全然弱い！　大切な人を助けられなかったのは自分のプライドでした何て言ってるじゃねーぞ負け犬がっ！」

「何でお前は、オレの邪魔をしようとするんだよっ！」

「今のお前じゃ霧島さんを助けられないからだよっ！」

「っ……………」

冷静になれば分かる事だった

今の状況を理解すれば簡単に助けを求める事ができた  
オレの力で翔子を守る、その想いだけで考えていた

「何でだよ……………」

雄二は自分の不甲斐なさに沸点を超えそうだった

「何で目の前の大切なものが見えてなかったんだよ 何が神童だよ、  
こんな事もわからない何てバカじゃねーかよ」

「……………雄二、」

背中で背負われている翔子が震える雄二に心配そうな声で話かけると雄二の震えが止まった

この後、翔子が言う言葉が何かを理解したからである

「大丈夫だ翔子 ちょっとだけ降りて待っていてくれ、今助けてやる  
からな」

ケガをした足を触れさせないように、慎重に翔子を瓦礫の落ちていないところに下ろした

雄二は、翔子から少し離れて右腕を天に向けた

「『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』！」

すると擬似召喚フィールドが学園を包み込んだ

藤堂歩の腕輪は、携帯用の簡易召喚フィールドでもあり、学園の召喚フィールドが壊れていても起動できた

「お前の力を貸してくれ吉井」

「任せて！ まずは僕の召喚獣がそっちに行くから、こっちは状況がわからないから坂本が指示して」

「わかった」

「試験召喚獣召喚【サモン】」

明久は召喚獣を出現させ、瓦礫を飛び越え雄二たちの元へ行く

「翔子、もう少しで助かるから頑張れよ」

「うん」

「こっちはOKだ 翔子をお前の召喚獣の背中に乗せたぞ」

「了解 それじゃあ今から登るから指示をして！」

明久からは召喚獣の位置が確認できないため雄二の指示に合わせて瓦礫を慎重に登ることにした

雄二の的確な指示により、明久の召喚獣はまるで雄二が操作しているかのようにスイスイと瓦礫を登って行った

そして瓦礫の向こう側、つまり明久たちのところに翔子を連れ来ることができた

「坂本っ！ 霧島さんは無事に助けたよ！」

「サンキューな」

再び、明久の召喚獣が瓦礫を登って向こう側にいる雄二のところへ行った

「さっ、早く坂本もっ！」と明久が雄二に召喚獣の背中に乗るように指示した時だった

大きな揺れと同時に、唯一の抜け道だった天井が再び落ちて来た瓦礫によって完全に塞がれた

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十四問】 貫き通す心

B A K A T O T E S T

逃げ道を失い後ろを振り返った雄二は絶望した  
旧校舎の階段に行く道が塞がれている  
雄二の隣にある空き教室は鍵がかかって開かない

「待つてる坂本っ！　すぐに瓦礫をどけるからなっ！」

焦る明久の声に対して雄二は冷静に、それも恐怖と言つ言葉すら感じないほどの落ち付いた声だった

「吉井、もういい　オレを助ける時間があるなら、さっさとここから逃げる」

「雄二っ！　雄二も一緒に逃げるの！」

「ダメ霧島さん！」

必死で雄二を説得する翔子だが、美波は必死で瓦礫に近づけないように押さえる

「翔子、オレはお前を守るって約束しただろ……だからこれで良いんだよ」

「私の手を絶対離さないって約束したじゃないっ！」



心を突き刺されたかのようにだった

そこから溢れて来たのは血ではなく約束を守れなかった悔しさ  
何もできない自分の非力さ

こんな簡単に約束を果たさせてくれない目の前の瓦礫に恨んだ  
自分の心に恨んだ

だが、そんな事を考えたところで無駄なんだ、と……………

「ゴメンな翔子、オレが守れるのはここまでみたいだ」

翔子は声が出なかった

口は開いているのに息が出て来ない

必死で言葉を探すが見つからない

ここで息を吐き出さなかったら雄二がどこかへ行ってしまう

わかっていているのに、何を言ったら良いのかと言う言葉が頭の中を埋  
め尽くしていく

その間は3秒

たった3秒だけの沈黙で、翔子は声を出せる状況はなくなった

沈黙した時間は、雄二に対抗する言葉の権利が破棄され、最後に出  
たのは声ではなく涙

目を閉じて止めようとしても止まらない

私が出したいのは涙じゃない、

自分に言い聞かせても涙は止まらない

翔子は両手を顔で覆い、その場で崩れる

耳には瓦礫の音だけが永遠に繰り返されるかのように一定の音程が  
聞こえてくる

何もかもが夢であってほしい、そう願った時だった

「……………っ！」

カンッ、カンッ

瓦礫の崩れる音ではない他の何か音が立てた

誰かの声ではない、何かの響く音

それは雄二を助けようとしていた明久の召喚獣が木刀で瓦礫を叩きつけた音だった

「なっ！？ お前、何してんだよ！」

明久の行動により、雄二が声を出し沈黙は途絶えた  
再び、止まった時間が動きだす

「この瓦礫を壊してお前のバカげた顔を見てやる」

「止めるっ！ こんな瓦礫、壊せる訳ないだろっ！」

「お前はそこで黙ってる！！」

明久の召喚獣は木刀を構え、瓦礫に叩きつける

だが瓦礫は少ししか壊れない

コンクリート自体が硬いのもあるが、明久はすでに点数が残っていない  
なかったため攻撃力はかなり弱い

それでも明久の召喚獣は攻撃の手を止めない

フィードバックした痛みで途中、何度も木刀を落とすが止めない

「無理だ吉井！ オレは良いから早く翔子を連れて逃げろって言うてるだろっ！」

「何が良いんだよっ！ お前が死んだら霧島さんが悲しむだろうがっ！ 霧島さんを助けるために自分は格好良く死のうってか？ ふざけんじゃねーっ！ 何が守るだ、何が助けるだ、今ここで死んじまったら霧島さんの涙を誰が止めるんだよっ！ 命を賭けて助けたいのなら、爺さんになるうが婆さんになるうが、大切な人だったら涙を流させないように最後まで守り通しやがれバカ雄二がっ！！」

最後まで守り通す……この言葉に雄二の心臓がドクンツと動く死を待つだけの雄二に血液が急速に循環する

「1体でダメならこれならどうだっ！ 『擬似複製【ダミーアカウント】』……！」

明久は召喚獣の能力『擬似複製【ダミーアカウント】』により、もう1体の明久の召喚獣を喚び出した

「何してんだ吉井！ その能力はお前の点数を半分にしただけで状況は変わっていないんだぞっ！ それに、その能力は召喚者にとってもない疲労になるんだぞっ！ 今のお前が使ったら死んじまうかもしれないんだ！」

「死んじまうのは、お前だろうがっ!!」

その瞬間、雄二側で瓦礫を破壊している2体の明久の召喚獣に異変が起こった

明久の召喚獣が見えるのは雄二だけだったため、明久自身もそれには気づいていなかった

その信じられない光景に雄二は目を疑った

「点数が……上昇してるだど……?」

明久の召喚獣はさっきの戦いでほとんど残っていないかった

それなのに、今の明久の召喚獣の点数がどんどん上昇していく

補給テストも受けていない明久がなぜ……そんな疑問が浮かんでいた

「僕は絶対に諦めないぞっ! 今ここで諦めたら、僕をここまで後押ししてくれた島田さんに一生の恥をさらすことになるんだよっ!

だから死ぬようなことは絶対に許さないんだよ……！」

明久の召喚獣が渾身の力で、亀裂の入った隙間に木刀を突き刺した

「いい加減、ぶっ壊れやがれ　　っ……！」

渾身の一撃は、何度も攻撃してヒビが入っていた、そのど真ん中に木刀が突き刺さった

そして、ミシミシと大きな亀裂が入っていき、ガラガラガラと壁が砕けて崩れていき、ついに厚い壁を破壊した

「はぁ……はぁ……はぁ……やっとバカげた顔が見れたよ」

「ホントに……壊しやがった」

「……ほら、起きられないなら手伝ってあげようか？」

明久が雄二の前に来て、手を差し伸べる

「言っただろ、お前の助けはいらないって」

雄二は明久の手をはらいのけ、自らの力で立ち上がりそのまま翔子の前へと歩いて行き「ゴメンな翔子」と雄二は翔子を抱きしめた

「今回は見逃してあげる　だから、もう二度と約束を破らないで……約束だからね？」

「ああ、絶対に約束は守る　絶対だっ」

明久は雄二を助けて翔子の涙が止まったのを見ると、安心したのか地面に吸い寄せられるかのように体が倒れていく

「もう、自分の体のことを心配しなさいよね」

明久が倒れる寸前で、美波が明久を支えてくれた

「あはは、最後まで迷惑かけてゴメンね島田さん　おかげで助かったよ」

「気を抜くのは、この学園から逃げてからにしなさいよね　ほらっ、坂本たちも早くここから逃げるわよ」

雄二は翔子を支えて、美波は明久を支えて4人は学園が崩れ落ちる前に逃げだした

お前のおかげで、また翔子を守る事ができる  
……明久  
……ありがとう……

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十五問】 全ての終わりがここに

B A K A T O T E S T

明久たち4人が外に出ると、学園はどんどん崩れ落ちていった  
そして、支えとなっていた柱が壊れたのか、あっと言う間に旧校舎  
は全てが瓦礫となった

新校舎には擬似召喚フィールドの影響を受けなかったためか、まっ  
たくの無傷で済んだが恐ろしい事が2度も起こってしまった

「お前さんたち、大丈夫かい?!」

4人が崩れ去った学園を見ていると、学園長が走ってこちらに来て  
いた

学園の様子がおかしいと連絡が入り、大急ぎで学園に来たらしい

「あの……学園長……」

「すまなかったね」と学園長は、4人の前で深く頭を下げた

「えっ……?」



明久と雄二が学園のことを謝ろうとしたら、なぜか学園長が先に謝ってきた

「あんたたち、無事で本当に良かった」

「な、何で学園長が謝るんですか 学園を壊したのは僕たちですよ」

「オレたちじゃないオレが悪いんだ 学園長も悪くないんだ簡単に頭を下げないでくれ」

それでも学園長は頭を上げようとはしなかった

「本当にすまない……………こんな事で、許される何て思っちゃいけないけど、今はこれしかできないんだ」

学園の崩壊によって、大切な生徒を失うところだった

それを思った学園長は、4人の前で深く頭を下げて謝り続けた

「そつだ学園長」と雄二が突然思い出したかのように学園長を呼ぶ

「何だい？」

「1年前の学園崩壊事件だが明久は被害者だ オレも今回、同じ目にあつてこうなったんだ」

「なら犯人を知っているのかい？」

それに対して雄二は

「残念だが犯人の顔を見ていない その代わりこれを渡された」

「これは……あたしの作った腕輪に似ているね」

「それは『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』と言って、擬似的に召喚フィールドを出せる腕輪だった 恐らく犯人は、学園の技術を盗んで開発したんだろ」

「擬似召喚フィールドね……」と学園長は呟いた

「そいつは不良品だ だから学園長の手で破壊してほしい」

「いいや、これは壊さないよ」と学園長が腕輪を見ながら言った

「これだけの完成品なら、あたしの技術を追加すれば、これを使用しても学園に影響のない物が作れるよ」と自信ありげな顔で雄二を見る

「それに犯人の手掛かりになるかもしれないしね そう言う訳でこれは当分あたしが管理しておくよ」

「わかりました」

今回の学園崩壊事件で、真犯人の正体がわかった

そして、明久は事件の被害者で学園崩壊の犯人ではなかった

ただ、学園長は自分の孫がこの事件の犯人だと言う事は知らなかった 明久と雄二も、学園長のことを思っただけか真実を話すことはしなかった

「それにしても坂本と霧島さん、ずいぶん仲が良いみたいだけど何かあったの？ 霧島さんにいたっては色々あったのに何だか幸せそうだけど」

2人の変わりっぷりに美波は不思議に思っていた

「あ、いやこれはだな……………何でもないよな翔子？」

慌てる雄二が翔子に話のバトンを渡すが

「雄二が私と結婚してくれるって言うてくれたから」

「なっ……………！ ちょ、ちょっと待て翔子 オレがいつそんな事を言っただんだ?!」

それは逆効果と言う結果になった

「私を助けてくれる時、雄二がそう言うてくれた」

「待て待てっあれは、そう言う意味で言った訳じゃないんだぞ」

「良かったね霧島さん お幸せに」

「うん」

「話を進めるな明久っ！ 翔子、それはお前の頭の中での事だ オレはそんな気は全くないんだぞ」

「……………私は、ただの遊び相手なの？」

「いや違つが……ああもつっ！ 好きにしろ！」

こうして、Aクラスとの戦い………いや、坂本雄二の『才能』との長い長い戦いは幕を閉じた

だが、この事件は始まりに過ぎなかった

とある酒場の片隅にいるのは、雄二に腕輪を渡した藤堂歩だった。酒場は落ち着いた雰囲気の特徴で、仕事の終わる時間帯になつたため疲れを取ろうとサラリーマンがカウンターで数人がすでに出来上がっていた。

藤堂はカウンターではなく、木製の丸いテーブルに木製の椅子が2つ並んでいる1つに座っている。

グラスを片手に酒の味を楽しみながら、テーブルに置かれた掌に乗る程の黒い小型機械からコードが耳のところまで伸びて、耳にはイヤホンがついていた。イヤホンの中から聞こえるのは競馬の実況でも野球の実況でもなく、先ほどまでFクラスで戦っていた雄二と明

久の声だった

「今回も失敗作だったか……………だが、十分に実験動物として働いてくれたな」

音声は、2人の戦いが終わりブツリと雑音が入ったと同時に聞こえなくなった。どうやら、擬似召喚フィールドが解除された時に盗聴器も壊れたのだろう。

「オレの計画は順調に進んでいる。これならあと数回の実験で完成する」

藤堂は学園長のPCをハッキングして、生徒名簿を盗んでいた。つまり、1年前に明久が実力テストの点数を数日後には情報を手にしていたのは藤堂歩が文月学園の内部に侵入していたからだった。これにより、学園長が藤堂歩と関わっている事はないと断定できる。

「ババアは科学とオカルトと偶然で手に入れた召喚獣をガキに遊ばせて楽しい老後を満喫するつもりのようなだな」

藤堂はグラスに入った酒を一気に飲み干し、ドン、とテーブルにグラスを置いて空のグラスの中で氷が暴れる。

「だったら、そのガキ共はオレが責任を持って預かってやるよ」

藤堂歩の唇の両端が上がり前歯が不気味な白さをみせる

「……………道具としてな」

全ては終わったかのように思えたが、これは全ての始まりに過ぎなかった

明久たちの知らないところで、小さな火種が静かに燃え始めた。今は誰も気づかない小さな火種はやがて何もかもを焼き払ってしまうかもしれない

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十五問】 全ての終わりがここに（後書き）

これにて、第一章完結となります。

謝罪

3月11日に起きた東北関東大震災から2日後に作者の作品で地震（学園が崩壊する）に関する場面がありました。

投稿前に変更を考えていましたが、文月学園が崩壊する内容を第一章の目的としていたので、変更せず投稿させていただきました。

これについて不謹慎、不愉快と言った声はありませんでしたが、投稿内容を読んで地震の事が連想された方々もおられると思います。作者の軽率な判断で投稿してしまった事を、ここで深くお詫び申し上げます。

【第三十六問】 召喚者の才能 召喚獣の能力（前書き）

ここでは、第一章の才能と召喚獣の腕輪について書かれています。  
まだ第一章を途中までしか読んでいない人は、ネタバレ部分がありますので戻る事をお勧めします。



【第三十六問】 召喚者の才能 召喚獣の能力

B A K A T O T E S T

【Fクラス】

・吉井明久

<才能> 『学習装置【ワーキングメモリ】』  
補習授業によって開花させた才能。

学力の記憶をなくしていた明久だったが、短期記憶能力によってAクラス並みの学力を持てるようになった。

<明久の腕輪> 『条件召喚型腕輪 絶対領域【レッドライン】』  
400点以上で使用可能な召喚獣の腕輪を、200点以上で使用する事が可能になる。

ただ、『学習装置【ワーキングメモリ】』で学力が上がったため、この腕輪を使用せずとも召喚獣の腕輪が使えるようになった。

<召喚獣の腕輪> 『擬似複製【ダミーアカウント】』  
召喚獣が二体に分裂する事が可能。

ただし点数を二分割させて召喚させるため、一体の攻撃力は半減されている。

本体である召喚獣を『主獣【メイン】』  
分裂させて召喚した召喚獣を『副獣【オプション】』

召喚者である明久が腕輪の能力を解除すれば召喚獣の点数が元に戻る。

・坂本雄二

<才能> 『完全攻略【クリアハンドレット】』  
小学五年生の時に開花させた才能。

全てにおいて『超える』と言う考えが働いている。

現在は、誰よりも翔子を守る想いを超えるために才能が働いている。

<雄二の腕輪> 『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』

本来、教師にしか起動できない召喚フィールドを擬似的に召喚可能にさせる腕輪。

擬似召喚フィールドの使用可能領域は制限されていないため、どこでも使用可能になっている。

現在は、学園長に渡っているため不明。

<召喚獣の腕輪> 『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』

700点以上を超える時に使用可能な腕輪。

現時点では、雄二のみ700点以上の腕輪が使える。

黒い球体が『光』を食らい、膨大な光を食らいきれなくなると爆発を起こして召喚フィールド内全てを焼き尽くす。

ただし、使用後に500点を消費する。

現時点では、400点以上の腕輪の能力は不明。

・木下秀吉

<才能> 『真相心理【ポーカーフェイス】』  
生まれつき持っている才能。

他の人の声や動物の鳴き真似が可能な才能。

しかし、姉である優子にも言えない才能の本当の能力があるらしい。

<召喚獣の腕輪>

現時点では不明。

・土屋康太

<才能> 『不正入手【フリーダム】』

生まれつき持っている才能。

あらゆる情報を不正に入手する才能。

この能力によつて、相手の行動を先読みする事が可能。

<召喚獣の腕輪> 『四面楚歌【ルバートカルテット】』

本体以外に、同じ姿をした四体の召喚獣を出現させる事ができる。

ことわざにある四面楚歌のように、敵を四体で囲い込み本体である召喚獣が止めを刺す。

・島田美波

<才能> 『絶対音感【サウンドレコーダー】』  
生まれつき持っている才能。

全ての言葉を理解する事ができる才能。

ドイツから帰国したばかりの美波は、すぐに日本語に適應する事が可能だったため苦労はしていない。

他にも、教科書やノートに書かれた文字を見るだけで名前がわかる。ただ、化学の実験や数学の数式の意味がわかっていても使い方や応用がわからないため語学以外は苦手。

<召喚獣の腕輪>

急な転校で召喚獣と契約ができていないため、召喚獣の代わりとなる『代理型召喚獣【エルフ】』を学園長から借りて使用している。腕輪は設定されていないため使えない。

## 【Aクラス】

・霧島翔子

<才能> 『完全記憶【フルコンプリート】』  
生まれつき持っている才能。

一度見たものは全て覚えてしまう才能。

これにより、どれだけ難しい問題でも一度理解すれば、一生忘れる事がない。

応用として、相手の動きや癖を記憶して、行動パターンを先読みする。

<召喚獣の腕輪> 『光解離領域【フォトンベルト】』  
『光の領域』と呼ばれる空間に入る事ができ、光のように一瞬にして移動する事が可能。  
ただし、召喚獣を攻撃するためには光の領域から出てこなければ攻撃できず、さらには召喚者にも光の領域の中は見えていないため直線攻撃しか出来ないのが弱点でもある。  
雄二の召喚獣の能力には、能力効果が無効になってしまう。

・工藤愛子

<才能>  
現時点では不明。

<召喚獣の腕輪>  
点数が400点以上に達していないため、現時点では不明。

・木下優子

<才能>  
現時点では不明。  
もしあるとしても、秀吉と同じ才能ではないと言う事だけが判明している。

<召喚獣の腕輪>

点数が400点以上に達していないため、現時点では不明。

・久保利光

<才能>

現時点では不明。

<召喚獣の腕輪>

400点以上に達しているのだが、試験召喚戦争で美波を見くびって一瞬で負けたため現時点では不明。

<召喚獣の腕輪の種類>

『特殊系能力【キネシス】』

光の領域や分身と言った特殊な能力が使えるようになる。ほとんどの召喚獣はこの能力に関する腕輪を持っている。能力によっては効果が強くなるほど、使用条件が必要になってくる物もある。

該当能力

『擬似複製【ダミーアカウント】』

『四面楚歌【ルバートカルテット】』

『光解離領域【フォトンベルト】』

『範囲系能力【レインヂ】』

攻撃対象が複数の範囲に及ぶ能力なのだが、使用には召喚獣の体力を大量に使用する。

この腕輪を持っている召喚獣は少なく、3種類の能力の中で最も稀少種である。

該当能力

『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』

『打撃系能力【インファイト】』

召喚獣そのものに攻撃力強化に関する能力だが、攻撃力の上昇が高まる程、効果が切れた時の副作用によって召喚獣の点数が下がってしまう。

該当能力

現時点では不明。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十七問】 小さな女の子

B A K A T O T E S T

新学期が始まってから、早くも一週間が経とうとしていた。

今日は、四月一七日の日曜日。

雲一つない晴天だが、まだ春の暖かさに混じって冬の寒さが残っている。

文月学園崩壊事件の後、旧校舎を利用していたFクラスとEクラスは、旧校舎が再建するまで、それぞれ新校舎の一階にある空き教室に『仮Fクラス』、『仮Eクラス』を作ってそこで授業を受けることになった。

最初は新校舎で良い設備の教室になると喜んでいた明久たちだったが、学園長が『代理型召喚獣【エルフ】』を作ったため、文月学園には設備を整える資金が一銭もなかった。

そのため、倉庫に保管されていた予備机などで簡単な教室が出来上がった。

Eクラスは、今までと変わらない設備で大して反応はなかったが、Fクラスにとってはボロボロの卓袱台と綿のない座布団から、標準の机と椅子となりランクアップする事が出来たため文句は言えなかった。

FクラスはAクラスに試験召喚戦争で勝ったため本来なら教室変更されているのだが、交換許可のハンコを押す学園長はあの事件で忙しく、まだ教室入れ替えはされていなかった。

旧校舎には明久たち二年生だけではなく、三年生のEクラスやFクラス、さらには一年生全員も使用していたため、旧校舎三階の三年生EクラスとFクラスは、新校舎三階の三年Aクラスの横にある



空き教室と同じくBクラスの横の空き教室を利用している。

二階で言う学園長室の上になる。

旧校舎一階の一年生たちは、四階にある普段は準備室や音楽室などの部活用として使われているのだが、そこにも少しばかりの空き教室があつたため、ここに一年生は全員が入ることになった。

旧校舎が建て直されるのは、およそ二ヶ月かかる。今からだと六月ぐらいになる。

その学園は今、誰もいない静かなところとなっている。

それは事件性の高い事から警察が調べているからだつた。

もし改築工事なら学園はいつも通りに授業が再開されていたが学園が崩壊した事についての事件性を調べるために文月学園は現在休校となっている。

そして、ようやく明日から学園が再開するため明久は休校最後の休日を満喫していた。

ここは文月公園。

明久の家（三階建てのマンション）から一〇分もあれば着く文月町唯一の公園広場で、学校の校庭を一周一〇〇mで走ったぐらいの範囲しかない。

そんな狭い一角で明久は白の塗料が剥がれ落ちた三人用の手すりのないベンチに仰向けで寝転がっている。

Aクラスとの試験召喚戦争や学園崩壊があつて疲れが溜っているのだろうか雲一つない空を眺めていた。

「ああやっぱり休みは最高だよ。補習で『学習装置【ワーキングメモリ】』の能力を手に入れてからずっと勉強してきたけど、たま

にはこう言う休憩も必要だよね」

短期記憶能力。

これが明久の開花した才能で、普通の人が一〇個の漢字を覚えるのに例えば平均が一五分だとすると、明久は三分も満たない速さで覚える。

本来、短期記憶能力とは一時的な記憶であり翔子の才能、『完全記憶【フルコンプリート】』のように永久的に覚える事は出来ない。しかし明久は、もともと学習能力が高いため短期記憶能力で覚えた内容をそのまま自分の脳に上書き保存して消えないようになっている。

が、

忘れていけないのが、これはあくまで短期記憶能力であるため情報処理能力が明久自身の頭には日常で使う数値の数倍の疲労が蓄積され疲れてしまったため、すぐに疲れてしまう。

人間、集中できる時間はそれぞれだが、だいたい授業を受ける一時間程度が目安になるが明久は本来の時間（一時間）を圧縮して短期時間で覚えるために一度の集中時間は五分が限界。

そのため休日と言う息抜きとして近くの文月公園に来ていた。

「一人だと静かに休日を過ごせるのは嬉しいけど、それはそれで何だか寂しいな」

明久は視界を空から横に見える公園に移した。

だが文月公園は遊具の老朽化のためか休日だと言うのに、あまり公園に遊びに来る子どもたちはいなかった。

球状の回る遊具が風の力で勝手に動き、錆びついた部品が悲鳴を上げているかのように高い音を鳴らしている。

するとその近くにある大きな桜の木の下で誰かが立っているのに気がついた。

耳を澄ませると声が聞こえてきた。

「何だお前、オレたちに何か用か？」

「強くなるにはどうすればいいですか？」

声は聞こえるが、遠くて姿がハッキリとは見えない。

見た感じだが中学生ぐらいの男の子三人と、小学生の五年生か六年生ぐらいの女の子一人が大きな桜の木の下で話をしていた。

男の子が三人に対して、女の子一人が何かを聞いている。

「何してるんだろ？……もしかしてイジメ？　ここは大人の僕が一言言つてあげないとな」

明久は、寝転んでいた体を起こしてベンチから離れ、子どもたちの集まる桜の木の下へと小走りで向かった。

その間にも、桜の木の下にいる小学生と中学生が話をしている。

「教えてください。　どうしたら強くなれるですか？」

「強くつてな、お前女だろ。　女は強くなれないんだぞ」

「どうしても強くなりたいです！　お兄さんたちはどうやって強くなったですか？」

「オレたちは男だから、もともと体が強いんだよ。　でも、お前は女だから無理だつて」

「お兄さんたちみたいに、この桜の木を登ったら強くなれるですか？」

先ほどまで、中学生たちは大きな桜の木を登っていたのを女の子は見えていたらしい。

だからこの木を登れば、自分も強くなれると思ったのだろう。

そんな変わった女の子に困っていた男の子たちのところに明久が女の子の後ろからやってきた。

「君たち、女の子をイジメる何て男として情けないぞ」

「えっ……ち、違うよ　オレたちは何もしてないつて」

女の子と話していた真ん中の男の子が明久を見て慌てた声で答えた。

明久は足を曲げて女の子の視線と自分の視線を合わせた。

「じゃあどうしてこの子は泣きそうな顔をしてるんだ？　何もしてないのに泣くわけがないだろ」

「だから、オレたちは何にもしてないつて言ってるだろ」

明久が改めて女の子を視界に入れる。

そこには背中まである赤髪を両側で束ねて黒い生地をベースに白い色が端に色付けられているリボンで結びツインテールにしている可愛らしい女の子だった。

ん？ と一瞬だけ明久はある人物の顔が浮かんで気になったのだが、それよりも気になったのが今にも泣きそうな顔をしてエメラルドカラーの目がウルウルと宝石のように光っていた。

明久は視線を男の子たちそれぞれに左から右にゆっくり移動させていく。

「い、行こうぜお前ら」

男の子たちは逃げるように走っていった。

「あ、こら待てっ！」と明久が男の子たちを止めようと立ち上がったのだが後ろに引つ張られて思わず足が止まってしまった。

明久が振り返ると女の子に袖を掴まれていた。

ウルウルとした宝石が明久を見つめる。

宝石とは普通、女の人が好む物だが、いま目の前にある宝石は明久の心の灯に揺らめきがあった。

しかたなく明久は追いかけるのを諦め、女の子の視線を合わせるために足を曲げて、頭にポンと手を置いた。

「大丈夫だった？ 中学生相手に女の子が話かける何て危ないじゃないか」

女の子はすすり泣きをして答えた。

「お兄ちゃん、強くなるにはどうすれば良いですか？」

「強くなる？ どうして強くなりたいの？」

「大好きなお姉ちゃんに守られてばかりで、お姉ちゃんに迷惑かけちゃってるです。それに最近、元気がないのも葉月はづきはづきを守ってくれてるからです。だから、葉月が強くなって今度はお姉ちゃんを守るですっ！」

その言葉に、明久のある記憶が頭から現れた。

そこは病院だった。明久が、最初の学園崩壊事件を起こした去年の四月十九日から二日後の四月二一日。

白い部屋、白いベッド、洗いたてのような白い服。

清潔。この言葉が最も該当すると言っても過言ではないほどの汚れ一つない綺麗なところに、角度の上がったベッドで横になっている明久と、その横の棚に置かれている花瓶に花を生ける明久よりも年上の二〇歳ぐらいの女性がいた。

『どうしたのですかアキ君。先ほどから姉さんの事をずっと見ていますが』

花を生け終わると、女性は目の前にある椅子に座る。

近い距離に明久は思わず視線を前に移して壁に話しかける。

『いや……あの、あなたが僕の姉だと言うのはわかりました。ですが、どうしてそこまでして僕の事を大切にしてくれるのですか？

僕が入院してから毎日ここに来てくれますけど、あなたにも予定があるはずですよ。これでは、あなたの体力が持ちませんよ？』

『アキ君は、姉さんが病院に来るのが嫌ですか？』

『そ、そう言う意味では』

しまった、と明久がとつさに顔を横に向けると、そこには笑顔の人が座っていた。

『それなら、姉さんは毎日ここに来ますね』

『なっ……………、なんで僕のためにそこまでしてくれるんですかっ！』

『姉さんは、アキ君の姉さんだからです』

『……………』

あの時の言葉の意味がようやくわかったような気がした。

一年間もの間、それに気がつかなかった明久は目の前で自分と同じ女の子がいる事でやっと気がついた。

兄や姉と言うのは弟や妹の親のようなものだった。

「葉月ちゃん、それは違うよ。お姉ちゃんと言うのは大切な妹のために守らなくちゃならないんだよ。大切な人を守れなくなつた

ら、人は寂しい気持ちになる。だから迷惑だ何て思ったら、お姉ちゃんが寂しいでしょ？」

「……でも」

「それにお姉ちゃんを元気にするなら、何も強くなる事だけじゃないでしょ？ そうだな、例えばお姉ちゃんが好きなプレゼントを買ってあげるのはどうかな？」

「プレゼントですか？」

「うん 元気がない時はプレゼントをしてあげると喜んでくれると思うよ」

「葉月、お姉ちゃんの好きな物をプレゼントするですっ！」

先ほどまで泣いていた葉月の目は、嬉しそうに笑っていた。

「プレゼントとなると、やっぱり文月デパートが一番品揃えしてるかな。もし良かったら、僕も一緒にプレゼントを探してあげようか？」

「ありがとうございますっ！」

「それじゃあ、さっそく行こうか」

こうして明久は最後の休日をお姉ちゃんのために頑張る女の子とデパートに行く事になった。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十八問】 文月デパート

B A K A T O T E S T

明久たちは公園を出てから文月駅で電車を乗り継ぎ、十数分で目的地の文月デパートにやって来た。

休日と言っただけあって、凄い数の人がデパートに来ている。

明久たちは取り合えず、一階のデパート案内掲示板のところまで、どうするか話し合っていた。

文月デパートは六階建てで、この辺りのデパートの中で最も品が揃っている。

一階の食料売り場から、三階には本屋、四階には映画館があったり、六階にはゲームセンターがある。

文月町は、どちらかと言うと田舎よりの町。そのため、これだけの場所が一つにまとまっていれば文月町の住人にとっては夢のような場所だった。

ちなみに、文月学園が文月町に作られたのは土地が安い事と、ここでは特殊な才能を持った人間が多く存在する事から、試験召喚獣の開発に関わった藤堂カヲルが文月学園を建てた。

「さて、どんなプレゼントを買ってあげようか？」

「お姉ちゃん、ぬいぐるみが好きですから、動物さんのぬいぐるみにしようと思ってるです」

「ぬいぐるみか、えっとそれだとおもちゃ売り場だから……………」

明久も、文月町の住人の一人として文月デパートに来るのはよくある事。しかしおもちゃ屋と言うのは年齢的にも足を踏み入れるところではない。ついでに言ってしまうえば、明久は姉弟の中で一番下のため弟や妹もない。

とりあえず、案内掲示板を下から見ると五階におもちゃ売り場のマークがあるのに気付いた。

「あっ、葉月ちゃんあったよ。おもちゃ屋は五階にあるみたいだね」

「さっそくおもちゃ売り場に行くですよっ！」

明久は、エレベーターを見つけて行こうとすると「待つてですよ兄ちゃん！」と葉月が明久を呼び止める。

振り返ると葉月が首をブンブンと振っていた。

「どうしたの葉月ちゃん？」

「これだけ人が多いと迷子になっちゃうかもしれないから、手を繋いで行きます」

そう言つて、葉月は明久の手を握った。

妹のいない明久にとって新鮮ではあるが、どこか恥ずかしかった。周りの人に変に見られていないよね？

こう言つところは真面目になる明久だった。

「お兄ちゃん、どうしたですか？」

「え？ あ、ううん何でもないよ」

明久たちは人混みを避けながら、エレベーターに乗ると子供が喜びそうな詰め込まれたお菓子のようには満員だった。

「葉月ちゃん、大丈夫？」

「はいです」

エレベーターのボタンは、三階から上すべてが黄色く色ついていました。

明久たちの目的地、五階も先に入った子供連れの人が押したのだらう。

『ドアが閉まります。ご注意ください』



エレベーターの警告アナウンスで、ドアが半分ほど閉まったところで、

「オレたちも乗せてくれ！」

慌てて走ってくるのは、明久と同じぐらいの背丈と明久より見た目少し上の年齢の男子二人だった。

声を出した男はモヒカンのようなモヒカンでもない、でもモヒカンぽい髪形の男と、その後ろから走ってくるのはスキンヘッドの男。その声に、エレベーターのボタンに近かった客の一人が『開』のボタンを押して閉まるドアを開けた。

二人の男は、ゴールテープを切るようにそのままエレベーターの中にゴールインした。

『ドアが閉まります。ご注意ください』

再び警告アナウンスとともに、今度はちゃんとドアが閉まった。

「危ねえ危ねえ。もう少しで階段使って六階まで行くところだったぜ」

「まったく、なんでゲーセンが六階にあんだってんだ、一階に造れよって話だ」

「まったくだぜ」

ガハハハと、周りの事も気にせずスキンヘッドの言葉で笑うモヒカン頭。

その汚い笑い声に明久は無意識に葉月の手を強く握ってしまった。

「お兄ちゃん？」

「ん？ あ、ゴメンね」

葉月の声で明久の力が弱まった。

狭いエレベーターの中で、モヒカン頭とスキンヘッドが声のトーンも気にせず話続けている間に三階、四階とエレベーターがちゃくちゃくと上昇していく。

『ドアが閉まります。ご注意ください』

次の目的地である五階に上昇し始めたエレベーター。

三階と四階で、最初は満員電車だった箱の中もいまでは、昼間の

電車のように自由に座れるほどの余裕があった。

ただ、六階を目的地としているモヒカン頭とスキンヘッドはまだ乗っている。しかも話はまだ続いている。

明久は、その非常識な行動に苛立ちながらモヒカンたちを見ていた。

「……………、なんだお前」

モヒカン頭の声でハツとした明久。

いつの間にか睨みつけていたのか、声をかけられてしまった。

目を付けられたのなら後戻りはできない。この際言つてやろう。

「あんたたち、後から乗ってきたにも関わらず先に乗つてた乗客に礼の一つもないのか」

モヒカン頭が明久に近づく。狭いエレベーターのため二、三歩で二人の距離は五十センチメートル。

ギユツ。葉月がモヒカン頭の顔を見て明久の手を強く握り後ろに身を隠す。

「お前、どこかで見た顔だな？」

「気のせいじゃない？ 僕はあんたみたいな変な……………失礼。個性的な顔を見た事がないよ」

「んだとっ！」

体がフワツと持ち上げられる感覚と同時にエレベーターが止まり音声が鳴った。

『五階です』

「お兄ちゃん、早く行くです」

ぐいぐいと葉月に引つ張られる明久は、モヒカン頭の横を通り抜けるまで視線を外さなかった。

『ドアが閉まります。ご注意ください』

ドアが閉まるまで、モヒカン頭はこちらを睨みつけていたかもしれない。だが明久は横切った後はいつさい後ろを振り向かなかった。

怖かったあああああああ、明久の足はガクガクと震えていた。

あのまま、あの人たちが五階に降りてきたらどうしようと思ったよ。だからダメなんだよ、何も考えないで首を突っ込んでう癪が出ちゃったな。

「お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「ん、大丈夫だよ葉月ちゃん。ゴメンね怖い思いをさせちゃって」  
葉月は首を左右に首を一回振った。

「あのお兄さんたち怖くて嫌いだったです。でもお兄ちゃんがお兄さんたちを怒ってくれてスッキリしたです。それに、すっごく格好良かったですよ！」

「ありがとう葉月ちゃん。さて、気を取り直しておもちゃ屋を探そうか」

すると葉月が明久の手を離して走り出した。

ん、と明久が葉月を目で追うと、エレベーターを出てすぐ目の前によっこそおもちゃ売り場へ、と言わんばかりの広いおもちゃ売り場が視界に入ってきた。

見上げると『ZOOの広場』と書かれた大きな看板に、もう少し店の名前を考えられなかったのかな、と軽くツツコミを入れる明久だったが、

「ほうあ！ おもちゃがいっぱいあるですっ！」

そんな事を気にする、と言うよりも英語が読めない葉月にとっては関係なかった。

葉月はまだ小学生だけあって、おもちゃに興味津々だった。

「……………」  
明久は嬉しそうな顔をしている葉月を見て、少し思った事があった。

「僕も、昔はこんな子供だったのかな？」

明久は小学生の記憶が飛んでいる。だから自分が葉月ぐらいの年齢だった時も同じような反応だったのかなと少し自分の記憶の事を考えてしまった。

昔の自分はどんな性格でどんな人間関係を持っていたのだろうか。

もし誰かを傷つけるような事をしていたらどうしよう。

明久は首を横に振って、もやもやとした雲を払いのけた。

こんな時にネガティブは事を考えてどうするんだ。

明久は気持ちを切り替えて、葉月のところに歩いていく。

「これだけあると、どれを買えば良いのか迷っちゃうね」

「……………」

突然、考え事をしているのか葉月は黙ってしまった。

「どうしたの葉月ちゃん？」

葉月は隣に立っている明久を見上げて真剣な顔で答えた。

「お兄ちゃん。やっぱりここからは、葉月一人で探してみます。

せつかく一緒に来てくれたのにゴメンなさいです」

今の小学生は、本当に出来た子だと少しばかり驚いた明久。

足を下げて葉月の目線に合わせる。

「僕は葉月ちゃんの付き添いだから、そんな事気にしなくても大丈夫だよ。

気に入ってもらえるプレゼントが見つかるの良いね」

「はいです。また後で、ここに来てくださいです」

「うんわかった。僕は五階で適当に歩いてるから少し時間が経つ

たら戻って来るからね」

明久は、葉月に手を振っておもちゃ売り場を後にした。

ちょうど明久が葉月から離れた時に五階に着いたエレベーターが

開いた。

エレベーターはドアが閉まり、そのまま四階へと下がっていった。

「おやおや、大切な妹の手を離れたらダメだぜ」

六階のエレベーターから降りてきたのは、つい先ほど聞いた声だ

った。

モヒカンのようなモヒカンではない、でもモヒカン頭の男。

「へへへ、こいつはラッキーですな」

そして、モヒカン頭の子分のような喋り方のスキンヘッドの男。

「迷子になるといけないから、オレたちが代わりに見てやるぜ」明

久お兄ちゃん」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第三十九問】 過去を知る者

B A K A T O T E S T

「さて、せっかく来た事だし何か見て行こうかな」

一人になってしまった明久は、特に予定になかったデパートに来たため、適当にウロウロしていた。

すると、おもちゃ売り場から店を二つ挟んだ店から、動物の鳴き声が聞こえてきた。

まるで呼ばれるように足を止め、顔を上に上げると看板がある。

「ん……？　ここは動物専門店か。　ちよつと見てみようかな」

特に予定もない明久は、動物専門店の中へと入っていった。

店内は動物たちの独特なニオイと動物の鳴き声がBGMになっている。

中に入ると、いかにも店員ですと言わんばかりの女性が動物の工プロンを着て待っていた。

茶色の髪の毛の左半分を束ねてゴム製の髪留めをして左肩に乗せているため一瞬、動物が乗ってるのか？　と思ってしまうた明久が女性の肩に目を向ける。

いらつしやいませ、と営業スマイルが眩しい人（店員さん確定）

が明久を迎えてくれると、慌てて視線を店員さんに移した。

「ど、どうも」

なぜか客であるはずの明久が低い腰になり、あたふたとして頭を軽く下げてその場から離れた。

専門店の中には、見慣れた犬や猫から見た事もない海外の動物、そして水槽には魚が多く展示されていた。

少し広い場所では白い柵で囲まれた中に五匹のそれぞれ種類の違

う犬が自由に触れるようになっていた。

明久がそこに行くと言っていると自分を感じてくれ、と言っているかのように犬たちが明久のもとへ近づいて尻尾を振ってキャンキャンと鳴いている。

そこで、気に入った一匹の柴犬を明久が持ち上げる。

「やっぱり動物は癒されるよ。このモフモフ感が召喚獣と同じで気持ち良いんだよね」

もともと召喚獣たちは、動物のようなイメージで作られているため、どこか動物の特徴が出ている。

ちなみに明久の召喚獣の場合、キツネのような尻尾がついている。明久は柴犬を柵に戻して頭を軽く撫でてからさらに奥の展示コーナーに入ってしまった。

たくさんいる動物をいろいろ見ていると、あるコーナーの前で足を止めた。

見上げるとそこには看板があり、

「<sup>うさぎ</sup>兎年の今年は、ウサギで癒されませんか？」

今年は兎年の年だったため、動物専門店では兎年にちなんでウサギの特別展示コーナーが設けられていた。

「そっか今年って兎年だったんだ。あんまり意識してないから、つい忘れちゃうよ」

視界を上から、コーナーの入口に移した。

「せっかくだし、ウサギでも見に行こうかな」

そう言って、明久の足はウサギ展示コーナーの中へと入っていた。

中に入ると、ウサギ専用コーナーと言うだけあって、世界中のウサギたちが展示されていた。

日本でよく見る普通のウサギや、大きなウサギ、耳の垂れたウサギと知らないウサギだらけのウサギ好きにとっては天国のような場所だった。

「へえ、ウサギって結構種類がいるんだ」

明久は先ほどのように白い柵に囲まれて展示されていた一匹のウサギを抱きかかえてモフモフと自分の顔に擦りつけた。

大きなウサギだったため、明久の顔がウサギで隠れてしまうほどだった。

「その持ち方では、ウサギさんに負担がかかってしまいますよ？  
きちんとお尻を手で支えてあげないと」

明久の前に立っていると思われる（明久は前が見えないためわからない）女の人の優しい声が聞こえた。

しまった、と思った明久は「ご、ゴメンなさい」と相手の顔を見る前に謝り顔を上げると、

「えっ？」

そこには店員さんの作業着である動物のエプロンではない普通の可愛らしい服を着たお客さんの一人だった。

明久の目の前にいたのは、背中まで伸ばしたとても綺麗な桜色の髪と明久が公園で見っていたような雲一つないスカイブルーの瞳で、十七歳、大人のような容姿から十八歳にも見える女子が姿勢よく立っていた。

え……、彼女も驚いているが、気持ちの方が大きく驚いたためか声は小さかった。

「明久君……？ 明久君ですよね？」

？ 明久は自分の名前を言われたが彼女の事は知らなかった。

それを知らない彼女は嬉しそうに話を続けた。

「良かった！ やつと会えました！ 今までどこに行ってたんですか？」

ずいずいと明久に迫ってくる彼女に対して「あ……、えっと」と困惑した表情で答える。

「中学生の時に突然いなくなっと思ったたら、去年の文月学園のテストで名前があったのにはビックリしちゃいました。でもどうしてまた学園から姿を消したんですか？ 私、ずっと探してたんですよ」



それとは逆に、彼女は明久に会えたことがよほど嬉しかったのだろう。彼女は微笑んでいるが、その笑みが明久にとって辛<sup>つら</sup>かった。明久は文月学園に入る前の記憶をなくしている。

もし彼女と関わりがあるのだとすれば次に言う言葉でどれだけショックを受けるのかと考<sup>く</sup>えただけで悲しみが込み上げてきそうだった。

それでも明久は記憶喪失だと言う事を隠す事はしなかった。ハッキリと自分の現状を伝えなければならぬと思ったから。

「あの……、すみません。実は僕、記憶喪失で君に会ったのが初めてなんだ」

？ 疑問符が浮かんだ。言っている事の意味がわからない彼女は聞き違<sup>ちが</sup>いだと思った。

「何を言<sup>い</sup>って……、もしかして冗談ですか？」

「いきなりこんなこと言<sup>い</sup>って信じてもらえないかもしれないけど、本当に覚えてないんだ」

明久の言葉に耳を貸さない彼女は、まだ明久を信じてはくれない。「そう言えば明久君は私を騙<sup>か</sup>して遊<sup>あそ</sup>んでましたもんね。もう久しぶりで騙<sup>か</sup>されちゃいました」

「違<sup>ちが</sup>う……僕は……」

「私だつてバカじゃないですよ。もう騙<sup>か</sup>されませんからね」  
「……………」

沈黙。そして視線を離した。

彼女は諦<sup>あきら</sup>めなかった。

「私です。姫路瑞希<sup>ひめじ みずき</sup>ですよ？」

それを聞いて明久は改めて女子の顔を確認した。

姫路と言う言葉から、明久は自分の頭の中に集中した。

よく物の名前を忘れて思い出そうとすると、喉の部分を抑えてここまで出<sup>で</sup>てるのと言<sup>い</sup>った状況で、どこかで聞いたような言葉、アクセント、だがシルエツトのように形はハッキリしているのに何だったのか思い出せなかった。

「ゴメン……姫路さん」

明久が申し訳なさそうに答えると姫路は何かを理解したのか一歩下がった。

「本当に私のことを……」

相手は知っているのに自分だけ何も知らない事が、これほど辛いのかと明久は記憶喪失になった事が悔しかった。

もしあの時、藤堂歩に手を貸していなかったら姫路の事を覚えていて、違った再開があったのかも知れない。

姫路は信じられないのか少しばかり沈黙を置くと、理解したのか、私もゴメンなさい。明久君の事を考えずに。一番辛いのは明

久君ですもんね」

明久は言葉を考えた。

諦めた時が一番辛いのだから何か言葉を言うべきなのではないかと。

だが、明久には言える言葉が見つからなかった。考えもしない言葉が彼女を傷つけてしまふと思ったから。

明久は空気を入れ替えた。

場所が動物専門店だったのが功を奏した。

「あ、そう言えばウサギの持ち方教えてくれてありがとう。姫路さんはウサギ好きなの？」

姫路も状況が状況に、明久に話を合わせる。

「小さい頃からウサギが大好きで、今日は展示コーナーがあると聞いてやってきたんです」

「そうなんだ。今年は兎年だから、君の好きな年だね」と明久が姫路に目をやると、姫路のスカイブルーから滴がこぼれそうだった。

「姫路……さん？」

明久の声で姫路は涙を右手の人差し指で拭き取り「ゴメンなさい、私ったらまた暗い空気になってしまつて」と潤んだ瞳で明久に笑顔を見せる。

その笑顔に嘘はない。だが、明久は喉に魚の骨が詰まったかのように違和感があった。

「あの……もし、僕といるのが辛いのだっいたら……その」

「そんな事ありませんよ。むしろ一緒に居たいぐらいですから明久が言いきる前に笑顔をそのままに姫路の答えが返ってきた。

それも、『よくできましたハンコ』が押されたかのようなおまけ付きで。

予想外の返答に「……へ？」とバカっぽい声を出す明久。

まさかこれは、僕に好意を持っている？！

青春を知らない明久の脳内で何かを考え始めた。明久にとって、デートと言う物は初めてである。

もしかすると、僕って記憶にないだけで昔はモテモテだったのかも！　ここは、格好良くデートの誘いを試してみるのもありかもしれない！　だけど何て誘えば良いんだ？　好きです？……バカか、そんな事は後々になってだな。　ここは冷静に……そう冷静になって誘ってみるんだ。

明久は一人で心の中の何かと戦っていた。

一度、視界を姫路から上に上げる。そして大きく深呼吸をして酸素を入れ替える。

よしっ！と明久は再度姫路に焦点を合わせる。

「あ、あのっ！！」と緊張のため声が裏返ってしまった。

「はい？」

もう後戻りはできないと思った明久は、覚悟を決めた。

「す、好きです！　で、ででででデートに付き合ってください！！」

数秒だけ時間が止まった。

明久の頭の上に現れたのは、明久をデフォルメした天使と悪魔だった。

『おかしい。僕は今、何て言ったの？』

悪魔が答えた。

「デパートに付き合ってください」

「さようなら、僕の青春」

文字通り殻に籠ろうとした明久だったが、「ちょっと待ちなよ」と少し高めの声で明久が閉じ籠る寸前で答えるのは明久の天使。

「いきなり付き合ってください何て天使の僕としてはお勧めできないよ。だからデパートって言ったのは正解かもしれないよ」

「そ、そうだよ」と明久は高い声で答える。

「でもよ、デパートに付き合う事ができたとしても、どうするんだよ？ ダンナは葉月嬢の付き添いで来ただけなんだろう？ 目的もなしに付き合っつてのはどうなんだ」

「そ、そうだよ」と先ほどよりも少しトーンが下がった。

「男の人は女の人の買物に付き合うのも紳士の嗜みってやつだよ。だから、マスターの判断は正解だつてば」

「紳士つてな、ダンナみたいな初心なやつがなれるのか？」

「それは否定できない」

天使が負けた。

「そう……だよ」

そして明久も撃沈して明久の心に咲いた満開の桜の花がドサツと積もった雪が落ちるかのようにまとめて落ちてきた。

「聞いてますか明久君？」

止まった時間を動かすと、姫路が明久を呼んでいた。

「私もデパート好きですから、もちろん良いですよ」

その言葉を理解するまで五秒。

「よ、喜んでお供します！」

明久は、水の溜まったシシオドシの如く直立したまま真っ直ぐ頭を下げた。

ただし水を流したのにも関わらず、その場で頭の角度を停止して本来戻った時に鳴るカコンツと石を叩く音が聞こえない。

あまりの嬉しさに明久は頭を上げる動作を忘れてしまった。

「や、止めて下さい明久君。 他のお客さんが見てますから」

姫路はキヨロキヨロと辺りを見て、この場にいる事が恥ずかしくなり明久の手を掴み動物専門店を後にした。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十問】 最後の卓袱台（前書き）

バカと日常戦争も、ついに四十問目となりました。

そこで、今回からはバカとテストと召喚獣名物『バカテスト』を追加していこうと思います。

バカテストは、すでに作者が投稿したテストの中で、気に入っている内容を投稿していく予定です。あくまで『おまけ』と言うことで。

本編の内容があまりにも重いので、少しバカっぽい内容を入れて気分を変えていただければ幸いです。

ちなみに明久の解答は原作のようなバカになっています。

【第四十問】 最後の卓袱台

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『何事も成果が出るまでに相応の年月がかかること』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「桃栗3年、柿8年【ももくりさんねんかきはちねん】」

姫路「桃と栗は芽生えてから3年、柿は8年で実を結ぶと言つこと」

【教師のコメント】

福原「正解です。実はそのことわざには続きがあるのを知っていましたか？」

福原「桃栗3年、柿8年、梅はすいすい13年、柚子は大馬鹿18年、林檎ニコニコ25年、女房の不作は60年、亭主の不作はこれまた一生、と続きます」

福原「この他にも地方によっては違った言葉があるそうなので、興味があれば調べてみてはどうでしょうか？」

【坂本雄二の答え】

雄二「普通は3年、明久8年」

雄二「学園生活は3年で卒業できるが、明久は卒業まで8年かかった」

【教師のコメント】

福原「坂本君の解答を見て急遽会議を行うことになりました。君のおかげで先生方が指導強化をしてもらえるようです」

【吉井明久の答え】

明久「秀吉3年、美波は8年、姫路さんは収穫祭」

明久「ある部分が僕好みに成長するためにかかる年月を意味します」

【教師のコメント】

福原「吉井君。少しお話があるので職員室に来てください」



「もう、私まで恥ずかしい思いをしちゃったじゃないですか」

「あはは、ゴメンゴメン。嬉しくてつい。ちよつとそこで休憩しようか」

明久が指差したところは、デパートの休憩所。

同じ五階の少し広めの場所に十人は座れる長椅子がところどころに配置されているのだが、結構な数の人が座っていた。それも、ほとんどの人が大人の男性で三段、四段、多いところでは六段、七段と積み重なっている包装紙で包まれた大きな箱と一緒に。

いわゆる荷物持ち。

明久が辺りを見て空いている席を探していると「明久君、あそこなら二人座れそうですよ」と姫路の声を聞いた明久が視線を姫路の指先に移し、そのまま直線に視界を持っていくと確かにちようど二人が座れるところがあった。

あくまでちようど二人が座れるところ。例えるなら、そこは朝の満員電車で隣の人と接触するほどの詰め込んだところにちようど二人が座れるほどの空席。

ゴクリ。

明久は少し興奮していた。

「ん？」

ふと空席の隣に視界を動かした明久は包装紙で包まれた六段重ねになっっている高さ三〇センチメートルの箱と同じく包装紙に包まれた三段重ねの三〇センチメートルの箱に挟まれて座っている、逆立った赤い髪の男が椅子の腰掛けに両肘を置いて全体重を委ね、首を天井に向けてぐったりとしていた。

「あ、雄二だ」

「……………」

明久の声に雄二らしき人が、腰掛けに体重を委ねたまま、ゆっく

りと首を曲げてこちらを向いた。

疲れているのか反応するまで二秒ほどかかり、ようやく理解したのか明久を見て「なんだ明久かよ」と言って、また天井に顔を向ける。

一秒後。

「っ……!!」

寝坊して布団から飛び起きたかのように体を起して立ち上がった。今度は明久ではなく、隣にいた姫路に視線がいつていた。

姫路は体を一瞬震わせる。

「こ、こんにちは」

明久には普通に接していた姫路だが雄二に対して明らかに怖がっている。

雄二がこちらに歩いて来ると身を守るように両手を曲げて防御態勢に入っている。

「どうしたの？」

「い、いえ、何でもありません」

姫路はどんどん視線を下に向けていく。

「ああ悪い。こんな顔だが別に怖いやつじゃないから安心してくれ」

顔を上げる姫路。そこには怖い顔には似合わない、そしてぎこちない笑顔があった。

「そっか。雄二の顔ってブサイクだから怖いもんね」

「お前に言われたかねーよ、初代ブサイクが」

「ぼ、僕はこれでも昔はモテたんだからねっ！」

「昔の事を覚えてないやつが何言ってるんだよ」

そうだった、と明久は口を開けていると、クスツと笑い声が聞こえた。

姫路が雄二と明久を見て微笑んでいた。

それを見た雄二と明久も口がクロワツサンのように両端が上にあがった。

「二人とも仲が良いんですね」

「全然っ！」

明久と雄二の声が重なり合い、二人が互いに睨みつける。

「そう言えば、明久。なんでお前が女子と一緒にデパートに来てんだ？ 最初見たときは驚いたぞ」

雄二が椅子から飛び上がったのは明久と姫路が一緒にいたのを見たからだった。

妹にしては大人。姉にしては似ていない。幼馴染はありえない。

雄二には恋人関係と言うジャンルは登録されていなかった。

「あ、えっと、それはデ、デー」

「お買い物のお付き合いです」と姫路が明久の代わりに説明を入れる。

違うんだ姫路さん！ 確かにデパートに付き合っただけとは言ったけど違うんだ！

明久は心の中で叫ぶも、それは姫路に届くはずがなかった。

「へえ、明久と……えっと」と雄二が姫路に目を合わせる。

「あ、姫路です。 姫路瑞希って言います」

「そうか。 オレは坂本雄二だ宜しくな」

「こちらこそ宜しくお願ひします」

雄二がふと考えた。

「ん……、姫路瑞希……？ 姫路って確かFクラスの生徒に同じ名前があつたな」

「そうなの？」

「もしかして、坂本君も文月学園の学生なんですか？」

「え……、って言うことは姫路さんも文月学園の」

「はい。 私は文月学園二年のFクラスの生徒です」

確かにさつき姫路が明久を去年の文月学園のテストで名前を見たとは言っていたが、まさかの姫路も明久たちと同じ学年。 しかも同じクラスだった。

それを知った明久は嬉しそうに言った。

「僕も雄二もFクラスなんだよっ！」

「そうなんですか?!」

「あれ? でも同じクラスなら姫路さんのことを知ってるはずなんだけどな」

明久の記憶喪失は文月学園一年の時以前の事。そのため二年になつてからは忘れる事がなければ覚えていくはずだった。

それに明久が惚れるほどの姫路を一度見れば忘れる事はまずない。だが明久は姫路の事を知らなかった。

「実は私、新学期初日から風邪を引いてしまつて休んでたんです。三日で治つたんですが、学園が壊れて休校になつてしまつたので、まだ誰にも会つてないんです」

確かに新学期初日、明久が遅れてFクラスに入ってから二席の卓袱台が空いていた。

一つは転校してきた美波。だがそれからは後に来る者はいなかった。

それは姫路が風邪で休んでいたからだつた。

「そ、そうだったんだ。まったく学園が壊れる何てねえ。ねえ雄二?」

「あ、ああ。学園を壊す奴らの顔が見てみたいものだ」

明久と雄二は互いに顔を見る。そして互いに引きつった顔をしている。

? その光景に姫路の頭には疑問符が浮かぶ。

明久は学園崩壊に関する事には触れないでおこうと話を切り替えた。

「そ、そう言えば雄二こそ、デパートで買い物?」

と、明久が体を横に反らして雄二の後ろに置いてある包装紙を見る。

「まさか、あれ全部一人で買ったの?」

「お前はバカか。あれは全部、翔子の買い物だ」

「なるほど、霧島さんのだったのか」

そう言って視線を左右に動かして周りを見た明久だが翔子の姿はどこにもなかった。

「そう言えば霧島さんは？」

「っ……！」

雄二が咄嗟に右腕に付けられた時計を見ると時刻は三時一二分。

「ヤベっ！ 三時に来いって言われてたんだ」

慌てて後ろを振り返り、先ほどまで座っていたところに置いてある箱を二列にして両手で持ち上げる。

「悪い、今から翔子を迎えにおもちゃ売り場行ってくるわ」

「あ、うんじゃあね」

雄二が血相変えて走って行く。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十一問】 記憶の欠片

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『この世の中で、恐ろしいものに順序をつけて言ったこと』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「地震・雷・火事・親父【じしん・かみなり・かじ・おやじ】」

【教師のコメント】

福原「正解です。実は最後の『親父』とは、『お父さん』のことではないんですよ？」

福原「『親父』とは『台風』のことなのです」

福原「その『台風』のことを『おおやまじ大山風』と言い、やがて言葉の変化によって『親父』となったそうです」

福原「昔のお父さんは厳しく怖かったと言われていたので、それも

関係しているのかもしれないね」

【土屋康太の答え】

ムツツ「地震・雷・火事・工藤愛子」

【教師のコメント】

福原「工藤さんはとても優しい方ですよ？」

【坂本雄二の答え】

雄二「地震・雷・家事するおふくろ」

【教師のコメント】

福原「家庭訪問でお会いした時は怖いお母様には見えませんでした  
が」

B A K A T O T E S T

「姫路さん、あその席ちょうど座れるから、ちょっと休憩しよう  
か」

雄二が翔子のところへ行っただため、ちょうど二人が座っても距離  
も近すぎない間隔が開いていた。

そこに明久と姫路は座った。

「坂本君、最初は怖い人と思いましたが、凄く優しい人ですね」

「いやいや、そうでもないよ」

明久は手を左右に振る。

「あれでも、この前まで僕らのことを戦力の手ゴマだとか言ってたやつだからね」

「そうなんですか？ 私にはそんな酷いことをするような人には見えなかったのですが」

「まあ霧島さんのおかげで雄二も心を入れ替えたのかな？」

「霧島さんと言うのは？」

「……あ、霧島さんは同じ文月学園の生徒で、今は二年Aクラスの代表の人で、さらに雄二の婚約者なんだ」

姫路は驚いたように両手で口を押さえる。

「霧島さんと坂本君は、もう婚約するほどの仲なんですか」

「霧島さんは凄いですよ。一度雄二から酷いことを言われたのに、それから逆に雄二の心を取り戻したんだから。愛って言うのは本当に凄いよね」

「それはきつと明久君のおかげでもあるんだと思います」

明久はギョツとした目で姫路を見る。

「姫路さん……いくら何でもそれはないよ。僕だって女の人が好きなんだから」

「えっ……？ あ、いや、そう言う意味ではないですよ！ 明久君が男の人には興味がないことぐらい知ってますからね」

「そ、そうだよ。 はははっ」

ふう……危うく変な人間だと思われるところだったよ。 また変な話になるのはゴメンだから、ここは話を変えていこう。

「そうだ。 姫路さんは僕の昔のことを知ってるんだよね？」

少し真剣な顔になる明久に、姫路も笑っていた口元を戻す。

そして明久から視線を外し、前を向いた。

「明久君とは、中学生の時から一緒に仲良くしていました」

中学生……、僕の知らない過去か。



「もし良かったら、僕の中学生の時のことを教えてくれないかな？  
もしかすると記憶が戻るかもしれないから」

「わかりました。ではどこから話せば良いですか？」

明久は少し考えて、

「それじゃあ、僕ってどんな性格だった？」

葉月のことが脳裏に浮かんだ。

葉月がおもちゃ売り場に来た時の嬉しそうな顔を見た明久が、自分の昔の性格について少し気になっていたから。

「明久君の性格ですか……そうですね」

姫路は右手の人差指を口元に当てて考える。

「すっごい意地悪な人でした」

「ええっ!？」と思わず明久が声を大にしてしまったため、周りの客が明久に注目する。

慌てて頭を下げ、平常心を取り戻す。

「僕が意地悪な性格だったって本当なの？」

「はい。今、私の目の前にいる明久君の性格が信じられないほど意地悪でした」

意外な答えに明久はガツクリと肩を落とした。

僕が意地悪な性格だったなんてな……。

「えっと、ちなみに姫路さんに何か意地悪的なこととかは……」

姫路は恥ずかしそうに、小声で答える。

「何度かスカートを……めくられてました」

ズシンッ、と明久の頭の上に巨大な岩でも落ちてくるかのようだった。

まさか僕がそんなことを……。これじゃあムツツリー二より酷いよ。

「は、ははは。僕がそんなことを……ね」

完全に引きつった顔で、明久は知らない過去だが真実だと言う複雑な気持ちで心が折れそうだった。

「あ、でも明久君は生徒会会長をしているほど頭の良い人でしたよ

「っ」  
姫路は明久の今にも灰になって消えそうなところに良い知らせを伝える。

「僕が生徒会会長？ まさか、それこそ信じられないよ」

「本当ですって。 私が副会長をしていたので間違いないですから」

「生徒会会長かあ。 変態の……ね」

「そ、そう言う意味ではないですから。 ちゃんとした生徒会会長でしたから！」

「だ、だよな？ 何だか頭の中がごちゃごちゃになってるよ」

ん〜、と生徒会と言う言葉をもとに明久は記憶を探すがやはりそう簡単には見つかるはずもなかった。

代わりに違うことを思い出した。

「そう言えば、さっき会った時に僕が突然姿を消したって言ったよね？ あれってどう言うことなの？」

「あれは、中学三年の時です。 明久君とは帰り道が同じでいつも一緒に帰っていたんですが、ある日を境に突然、私の前から姿を消して今日のこの日まで所在がわからなかったんです」

「姿を消したって言うのは、僕が理由もなしに消えたってことだよね？」

「はい。 いつもものように帰っていたんですが、途中の帰り道で別れて以来ずっと」

なぜ姫路の前から姿を消したのかは思い出すしかないが、これも記憶の一部。 不可能だった。

「ダメだ。 そのことも全然思い出せないよ……って言うか、僕の記憶を無くす前って結構凄い人生を歩んでたんだ」

「あの、もしかして明久君が文月学園のテスト順位表に名前があったのに学園に来ていなかった理由と言うのは」

「うん。 僕は文月学園に入学してから事故で記憶をなくしているんだ」

さすがにここで、学園を崩壊させて記憶がなくなっただとは言える

はずもなかった。

それは姫路に迷惑をかける可能性もあると言つことでもあった。

「そうだったんですか。怪我の方は大丈夫だったんですか？」

「体の方は全然大丈夫だよ。丈夫なのが取り柄みたいなものだからさ」

「記憶のことは残念ですが、体が無事で良かったです」

「心配してくれてありがとう姫路さん。それと僕の過去が色々わかって良かったよ」

「私に出来る事なら何でも聞いてくださいね」

「また聞かせてもらうよ。あ、そうだ少し用事思い出したからここで待つてもらっても良い？」

「わかりました。私の事は気にしなくても大丈夫ですから急がなくても良いですからね」

「ありがとう。あ、良かったらこれ食べて」

明久がポケットから取り出したのは、五センチ四方の市販されているチヨコレートだった。

チヨコレートは銀紙で包まれて、その上に紙が巻かれている。

例えるなら、お寿司の卵巻きのような感じで。

明久はそれを姫路の前にもっていき、姫路が水を掬うかのように手を合わせて、そこにチヨコレートを二つ置いた。

「ありがとうございます」

「じゃあ、ちよつと行ってくるね」

明久は雄二が走っていった方向と同じ方向に走って行った。

【第四十二問】 少女の行方

B A K A T O T E S T

【問題】 『化学 元素記号』

問 以下の問に答えなさい

福原「N O F S K C u A s B a R a  
」

福原「以上の9つの元素名を答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「N 〓窒素 O 〓酸素 F 〓フッ素 S 〓イオウ K 〓カリウ  
ム」

姫路「C u 〓銅 A s 〓ヒ素 B a 〓バリウム R a 〓ラジウム」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムツツ「N O F S K C u A s B a R a」

ムツツ「N o フック アスバラ」

【教師のコメント】

福原「アスバラとはなんででしょうか？」

【坂本雄二の答え】

雄二「F C u R a S N O B a K A s」

雄二「F ク ラ ス の バ カ たち」

【教師のコメント】

福原「先生は決してそんな事を思って、この問題を作った訳ではありませんよ」

B A K A T O T E S T

「葉月ちゃん、そろそろお姉ちゃんのプレゼント決まったかな？」

葉月と別れてから、三十分近く経っていた。さすがにまだ無理かな、と思いつつも雄二がおもちゃ屋に向かうと言ってから、どうしても葉月の事が気になってしまった。

先ほど姫路と出会った動物専門店の前を通り抜ける。後は二店舗を抜ければ、おもちゃ屋に着く。

すると、明久の足が止まった。 ゆっくり速度を落とすのではなく、まるで床に瞬間接着剤が塗られているかのようにピタリと止まった。

場所はまだ、おもちゃ屋の隣にある雑貨屋の前。 雑貨屋で葉月の姿を見て止まったのかと思っただが明久の視界は手芸店の店内に一切入っていない。 今、明久の視界に入っているのは、三十分前に見た顔。

「よお、また会ったな」

二人組の男の一人、モヒカン頭の男がガムを噛んでケラケラと笑いながら明久に話しかける。 エレベーターで出会った、あのマナーの悪い客だ。

「げっ……」と苦虫を噛み潰したような引きつった顔をする明久は「はぁ……」とやっぱり関わらなかつたらよかったと後悔しながらため息をついた。

「せっかくの再会なんだ。 もっと喜べってんだ」  
「……、」

無言のまま、明久の足は再び前へと動き出した。 客の流れに任せて、モヒカンたちとは顔を合わせず明久は店内側にコースを移動させて二人の横を通り過ぎた。 さすがに、これほどの人前では二人組も手を出せる状況ではなかつたのか、明久に手を出す事はなかつた。

通り過ぎる間、息を止めていた明久は解放されたかのように新鮮な酸素を取り入れようとした時、モヒカン頭が人を苛立たせるような口調で言った。

「お兄ちゃん、助けてえ」

振り返った。 物音に敏感な動物のように反射的に振り返った。 一度足を止めるのではなく、足を止める動作すらも追いつかないほどの速さで180度。 つまりモヒカン頭たちに顔を向けた。

「……お前ら、葉月ちゃんに何かしたのか」

予想通りの展開に喜ぶ二人。 この展開、この笑い。 信じたく

はないが考えさせられる。

明久は考えた。もし次の言葉が予想していた言葉だったらと。

明久は考えた。自分のせいで他人を巻き込んだのではないかと。

明久は考えた。モヒカン頭が見せつけるかのように手にしている黒いリボンが何なのかと。

「黙ってオレたちについて来い」

考えた結果が出た。答え合わせは満点だった。普通のテスト

だったら大喜びしたいところだ。

だが違う。今の状況でその満点は赤点以上に辛い補習が待っているかのよう。

鼓動が早い。早く強くなっていく感覚が全身に伝わる。

「……わかった」

あのリボンが葉月のだと言う確証はない。一番早いのは、目前に迫ったおもちゃ売り場で葉月の姿を確認すれば良い。距離はそう遠くはないのだから、少しだけ歩けばわかる。だが、それが出来ないからこそ明久はモヒカン頭たちに無条件で行くしかなかった。

明久は後悔した。自分のせいで葉月を巻き込んでしまった事に。心の底から自分を殴り飛ばしたかった。今は変に事を起こせなかったため、明久は力の入った拳と奥歯を噛みしめて出来る限りの方法で自分に怒りをぶつけた。足は動かないように自らの意思でデパートの床に縫い付けた。

今は動くな。そうしていなければ、目の前のクソ野郎どもを殴り飛ばしてしまえばよかったから。

クイツ、とモヒカン頭が明久を呼び寄せ、先ほどまで走ってきたところを逆戻りする。明久が歩くにつれ一步一步、葉月のいるおもちゃ売り場から離れて行く。いや、この場合は一步一步、葉月に近づいていると考えるべきなのか。とくかく明久は葉月の安否が知りたい。だからこそ、こいつらの言う事を素直に聞いておかなければならない。

明久が来た道を逆戻りすると言うことは、途中で姫路を待たせている休憩所の前を過ぎる。明久はモヒカン頭とスキンヘッドよりも後ろになるように感づかれぬ程度で徐々に最後尾を歩くようにした。

そして休憩所の前を通ると案の定、姫路が明久に気がつくが明久は、ジェスチャーでモヒカン頭たちに指を差して片目を瞑って両手を合わせる。

『ゴメンね。こいつらの買い物に付き合わされて』と言う言葉を動きで伝えた。

姫路は笑顔で答えた。明久の作戦はうまくいったと考えるべきか。とにかく、疑われるような表情はしていない。

これで姫路さんが僕の後を追いかけて来る事はないな。

姫路は明久が通り過ぎて行くのを見て視界を足元に移した。

そこには、先ほど明久から貰ったチョココレートが二つ。その一つのチョココレートの紙を剥がして銀紙も取ると、当たり前だがチョココレートが顔を出した。特にアーモンドが入っている訳でも高級そうなロゴが入っているワケでもない普通のチョココレート。

姫路は、チョココレートを口に運んで、二回三回で味覚が味の判定をした。

「美味しい……」

小さなチョココレートをゆっくりと味わって食べるが、すぐに溶けてなくなってしまった。

残ったもう一つのチョココレートを食べようと紙を剥がしていると銀紙の上に一粒の滴が落ちてきた。まるで水道の蛇口を少し閉め忘れてポツポツと落ちて来るかのように。

「……記憶がなくなっても、相変わらずチョココレートは食べてるんですね」

懐かしい声が聞こえてくるかのように姫路の頭の中は過去へ戻っていく。



B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十三問】 二月十四日

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『何とかしてあげたいと思っても、お金や力などではないので、どうする事も出来ない』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「無い袖は振れぬ【ないそではふれぬ】」

【教師のコメント】

福原「正解です」

福原「一見、ことわざと意味が合っていないように思えますが、『袖』と言うのは『お金』の例えなのです」

【土屋康太の答え】

ムッツ「……それはそれで良い」

【教師のコメント】

福原「意味を理解していない証拠ですね」

【吉井明久の答え】

明久「無い胸は振れぬ」

【教師のコメント】

福原「セクハラ発言は控えてください」

B A K A T O T E S T

チヨコレートは姫路の過去を呼び戻す。

『瑞希、おい瑞希』

姫路を呼ぶ声は今から二年前の文月中学校の三年三組の教室からだった。

二月十四日。その何気ない日常は昨日と変わらない、いつもと同じ学校の朝。

『な〜にい?』

『その脱力感……さてはお前、今日も朝食抜いて来ただろ?』  
教室で自分の机にうつ伏せになっている姫路の前の椅子に座っているのは明久。

茶色い髪に、少し高い声。

姫路は目を閉じていても、嫌でもハッキリと顔が映っている。

文月中学校に入学してから二人とも生徒会をしていたためお互い顔をよく覚えていた。

と言うより、そもそも姫路に話しかけて来るのは明久か教室の後ろで立っている、

『また吉井君が瑞希と話してるし。ム力つくわね』

『ホント。あんな不細工のどこが良いのかしら』

『絶対に私たちの方が可愛いのにね』

姫路を敵対視する女子三人組ぐらい。

姫路は今と違って、少し体重が増えている。あまり女性に体重の事を言うのは失礼に値するため高校生平均体重よりも少し上とだけ言っておく。

それが昔からのコンプレックスで姫路はなかなか他の人と喋る事ができなかつた。

ただ目の前に座っているであろう吉井明久を除いて。

明久は雄二と同じように学力優秀と言うのが知られている。それは文月中学校どころか生徒の親にまで名を知られているほど。

そんな有名な明久に声をかけられている事が教室の後ろのロッカーに集まる女子三人組は気に入らなかつた。

言葉を口に出した順番に、濃い黄色の髪で横の髪の一部を束ねてカールさせている女子。

緑の瞳に、青い髪がツインテールになっている女子。

三人の中で最もオシャレ（学校指定の制服のためアクセサリを中心）に気を使っている、茶色の髪の先がウェーブしている女子。

もともと明久から姫路に声をかけたのがキツカケだったが、いつの間にか女子三人組は姫路に敵対視するようになり目をつけられた。

ただでさえ、人とのコミュニケーションが苦手な姫路にとって、敵対視される事が普通よりも怖くて恐ろしかった。

その明らかに聞こえてくる、三人の嫌味が姫路の殻をさらに閉ざしてしまう。

『まったく、あんなやつら気にするなって。お前はお前だろうが』

うつ伏せのまま姫路が答える。

『何で私は太ってるの？』

『そりゃ食い過ぎだ』

ムスツ、とほっぺたをハムスターのように膨らませる姫路の顔がようやく見えた。

『私、そんなに食べてないもん』

明久は姫路の顔を見て思わず息を噴き出した。

『瑞希は怒っても怒ってなくても一緒の顔だな』

『っ……！ 明久君のバカッ！』

ドスツ！ 姫路の拳が明久の頬にクリティカルヒットして、姫路は再びうつ伏せになる。

『おま、グーはなしだって言ってるだろ。俺まで瑞希みたな顔になっちまうぞ』

うつ伏せ状態で標準を合わせていない拳が明久に追撃した。

顔面に。

すると明久の声が消えた。

『！？』

まさか打ち所が悪かったのかと心配になった姫路は顔を上げると、明久は笑っていた。それも騙されてやんの、と腹を抱えてバカにしたかのような顔で。

『明久君なんて大嫌い』

またも、うつ伏せになる。姫路にとって目を閉じる事が一番安心できるのだろうか。それとも明久と喋っていると周りから見られるのが怖いのか。

彼女にとって、明久は最も話せる相手であり、最もギスギスした相手でもある。

『あはは、大嫌いつてか。また今日も嫌われ記録更新だな』

明久は笑ってそんな事を言い、『んじゃ、今日はこれぐらいにするかな』

席を立って本来の自分の席に戻った。

「……………」  
席を立ったのを耳で確認した姫路が顔を上げると、姫路の机の上には五センチ四方の銀紙に包まれたチヨコレートが一つ置いてあった。

姫路がチヨコレートから明久に視線を変える。それに気がついた明久が机に肘を置いて頬に手を当てながら口の両端を上げて楽しそうに微笑んでいる。

再び、視線をチヨコレートに戻す。

「はあ……またチヨコレート」

姫路はチヨコレートを手に取り鞆に入れた。

今日は二月十四日。それは誰もが知るバレンタインデーだった。本来、バレンタインデーとは女子が好きな男子にチヨコをプレゼントするものだが、ご覧の通り吉井明久は真正正銘の男。別に男が女子にチヨコレートを渡しても何の罪に問われることはない。

ただ明久にとって別に今日が特別な日だとは思っていない。最近流行っている友チヨコと言うやつでもなく、特に理由もない普通のチヨコレートなのだろう。

「私が太ってるの知ってて、何で渡してくるんだろう。そもそも何で毎日チヨコレートを持ってるのかな」

明久から貰ったチヨコレートは、これが初めてではない。それにこの二月十四日と言う特別な日だけではなく、法則性もなく明久は気分でチヨコレートを渡している。

姫路は明久と出会って三年目。つまり文月中学校に入学してから知り合った姫路にとって最初の友達なのだが、初めてチヨコレートを渡された時から、ずっと謎めいた行動が不思議に思っていた姫路だったが、明久に聞くのが何だか気に食わなかったため今までずっと聞いてみようとは思わなかった。

鞆に入れたチヨコレートは食べる気はないらしい。それは学校の中と言う事もあるのだが、姫路にとって甘い物は今、最も敵対視している物だからだった。

それゆえ、今まで貰ったとされるチョコレートは姫路の自宅に保存されている。そして今日貰ったチョコレートも同じように保存されるのだろう。

いらぬのなら、他の誰かにあげれば良い。それなのに姫路は明久から貰ったチョコレートを一つも他の誰にも渡した事はない。

そして何より姫路はこんな事をされていて明久に文句の一つも言わない。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十四問】 残された気持ち

B A K A T O T E S T

【問題】 『化学 元素記号』

問 以下の問に答えなさい

福原「N S i K G a Y I H o O s U D s」

福原「以上の10個の元素名を答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「N 窒素 S i ケイ素 K カリウム G a ガリウム」

姫路「Y イットリウム I ヨウ素 H o ホルミウム」

姫路「O s オスミウム U ウラン D s ダーウムスタチウム」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】



ムツツ「N S i K G a Y I H o O s U D s」

ムツツ「シカが違法オスです」

【教師のコメント】

福原「違法なオスの意味を知りたいですね」

【久保利光の答え】

久保「Y O s I K U N G a H o S i D s」

久保「吉井君が欲しいです」

【教師のコメント】

福原「先生に言われても困ります」

B A K A T O T E S T

その日の放課後。夕方になり部活のない大半の生徒は帰宅して学校内は吹奏楽部の演奏が廊下から聞こえてくると、とある部屋から明久の声が聞こえて来る。そこは生徒会室だった。

中はそれほど広い部屋でもないため、資料や荷物が壁を狭めて、明久を含めた五人の生徒会役員が円形状のテーブルを囲んで座っているのがやっとだった。

『明日の生徒会の仕事だが、三月から行われる卒業式についての話

し合いを行うから必ず出席するように。もし遅刻、欠席するなら連絡必須。分かったな？」

明久は三年生で、もう生徒会の仕事は終わっているはずだった。だが自分の仕事は最後までやり遂げる。それが明久の目標でも前生徒会長としての仕事を担っている。ちなみに姫路は生徒会副会長を引き継いでもらって引退している。

『じゃあ、今日はこれで終わりだ。長時間お苦勞様』

そう言っただけで明久は生徒会の生徒たちに持っていたチョコレートを手渡していく。今朝、姫路に渡したのと同じ義理でもなんでもない普通のチョコレート。

『頭を使った後は、チョコレート』

これが明久の口癖だった。

明久が毎日チョコレートを持つてくるのは、頭を使う事が多いからだ。明久は文月中学で学年トップ。毎日の勉強は甘い物が欲しくなるのだろう。

『そんじゃ、俺はこれで帰るわ』

『ありがとうございますました吉井先輩。お疲れ様でした』

明久は生徒会室のドアに向かって歩きながら、右手を上げてヒラヒラと振った。

三組の教室。授業が終わり用もない生徒は全員帰っている。

教室はガランとしているが、そこに一人で本を読んでいる女子がいた。あまりに静かで時計の針がカチカチと聞こえるのではないかと聞くほど彼女は静かに本を読んでいた。

『遅くなって悪いな瑞希』

明久が教室に入って来たのに気が付かなかったのか、姫路は声の聞こえた方に振り返ると、その髪は一瞬だけブツと広がり放課後の夕焼けで赤く染まっていた。

『……やっと終わったの？ もう帰ろうと思ってたところだよ』

『悪い悪い。でも結局は最後まで待つててくれるのが瑞希の良いところだよな』

ムスツとハムスターのように頬を膨らませる姫路は頬が赤く染まっ  
っているようだった。

それは夕焼けの色なのか、心拍数が上がったからなのかは分から  
ない。

パタンツ 教科書ほどの大きさの本を両手で閉じると高い音が教  
室に響く。

机の横にある鞆に手を持っていき、本を鞆の中に入れて姫路が立  
ち上がった。

コトンツ

姫路が立ち上がった時、何かがポケットから落ちて軽い音が鳴っ  
た。

それは手のひらに乗るぐらいの大きさの包装された箱だった。

『!?!?』

慌てて姫路は拾い上げる。

『何だそれ? もしかして食い物か?』

『ち、違っよ。それより早く帰ろっよ』

慌てた様子で姫路は先に教室を出た。

明久は疑問符を浮かべつつも、特に興味はなかったためそれ以上  
は深く考えはしなかった。

二人の家は方向が同じで、いつも一緒に帰っている。

他人からは付き合っているカップルとしか見えないが、明久と姫  
路は別に付き合っていると言った関係は持っていない。

一緒に帰るようになったキツカケは一年生の時に生徒会の仕事で  
遅くなったため当時の生徒会会長が明久に姫路と一緒に帰るよう  
にと言われたからだった。

最初は仕方なくと言った感じで一緒に帰っていた明久だったが、  
それが三年間も続けば、いつの間にか一緒に帰る事が当たり前にな  
っていた。

帰り道の途中で、姫路は疑問に思っていた事を聞いた。

『ねえ明久君』

『ん？』

『何で今でも生徒会の仕事を引き受けてるの？ 今の生徒会会長じや任せられないとか？』

『いや。 あいつは十分に俺たち生徒会の歴史を背負ってくれてるよ』

『それなら、どうしていつまでも生徒会に参加してるの』

『俺は大切なものを守るためにやってるんだよ』

『大切なもの？』

『文月中学の生徒全員だ』

姫路は発声練習のように口から息が抜けた。

『良いじゃんヒーローみたいで……ってこの歳でヒーローはないか』

姫路はトコトコと歩く速度を速めて明久を追い越して振り返った。

『でも明久君は本当にヒーローなのかもしれないよ。 だって『精神浄化【カタルシス】』でいつも元気を貰ってるから学校に来れるようになったんだもん』

『才能ねえ……。 どうせなら、もっと格好良い才能が欲しかったんだけどな』

明久の才能、『精神浄化【カタルシス】』。

外見の傷は回復出来ないが、精神面の傷はどれほど深い傷だろうと完治させるほどの才能。

今の世の中、ストレス社会と言っているほど人間は精神を傷だらけにしている。 鬱、人間不信、破壊衝動、無差別殺人。 少し考えただけでこれだけ出て来る。 それだけ人間のストレスと言うのは恐ろしいのに、今の医学では治療は不可能とされている。 だからこそ明久の才能の名前は神に化ける「神化」とも言われている。

『私は、明久君の才能はそれで良かったと思う。 だって人を助ける才能って明久君の思っている大切なものを守る事が出来るんだよ』  
『おお！ そう言えばそうだな。 そんなじゃこの才能はありがたく』

貰っておくか』

(それに私も明久君に助けて貰ったから、その才能はいつまでも持つていてほしい)

姫路は小学生の頃、体型の事で虐められていた。人を殴ったワケでもない、人を蹴り飛ばしたワケでもない、人を刺したワケでもない、人を殺したワケでもない。それなのに、姫路は周りから酷い扱いを受けた。まるで姫路が悪い事をした罰だと思われるかのように、周りの人間は笑っていた。だから姫路は人が怖い。人を信じられなかった。

それからは人が種族の違う生き物で言葉が通じないのではないかと思った姫路は、誰とも喋る事を拒否していた。だが文月中学に入ってから明久と出会った。

姫路も最初は誰とも喋る事がなかったのだが明久が気軽に話しかけてくれた事で心の傷が少しずつ消えていった。

今の姫路があるのは明久と出会ったから、姫路は明久に感謝しているのだろう。

いつもは意地悪してくる明久だが、なぜか心に傷は付かない。

それどころか明久の顔を見ているだけで心の傷がどんどん消えて行くかのように。

『それじゃあ、気をつけて帰れよ』

いつの間にか、いつも別れるY字になった分かれ道まで歩いていった。

明久が手を振って自分の帰り道に向いた時だった。

『あ、明久君!』

呼ばれた明久が振り返って姫路を視界に入れた。そこには両手を後ろに隠している姫路の姿があった。

『どうしたんだ?』

『えっとね……、その……や、やっぱり何でもない!』と少し作り笑いをしているのか微笑んでいるようで微笑んではない表情だった。

『そ、それじゃあ私こつちだから』

『瑞希!』と走り去る姫路を明久が止めた。 今度は姫路が明久の方に振り返った。

『また明日、学校でな』

夕焼けが明久の顔を隠していた。

笑っているのか。 悲しんでいるのか。 泣いているのか。 怒っているのか。

どんな表情だったのかは姫路には分からなかったが、いつも通りの顔だろうと考えはしなかったから、

『うんっまた明日』と今度は作り笑いではなく、本当に楽しそうに笑って手を振った。

二月十四日。

それを最後に吉井明久は姫路瑞希の前から姿を消した。

何の前触れもなく。 そこに吉井明久と言う存在がいなかったかのように綺麗に消えた。

姫路の渡したかった気持ちは明久に届かないまま。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十五問】 あの手が再び

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『何の手ごたえもなく張り合いがないこと』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「暖簾に腕押し【のれんにうで押し】」

姫路「糠に釘【ぬかにくぎ】」

【教師のコメント】

福原「2つとも正解です。他にもいろいろありますね」

福原「『暖簾に腕押し』のことわざには2つの解釈があります」

福原「1つ目は、『暖簾を手で押すようなもの』と一つ一般的な解釈」

福原「2つ目は、『腕押し』とは『腕相撲』のことで、『暖簾と腕相撲をしても張り合いがない』と言う解釈もあるのですよ」

【吉井明久の答え】

明久「美波の胸に腕押し」

【教師のコメント】

福原「セクハラです」

【島田美波の答え】

美波「アキに釘」

【教師のコメント】

福原「今回はそれぐらいの罰を与えても良いでしょう」

B A K A T O T E S T

明久がモヒカン頭とスキンヘッドに連れて来られたのは、文月デパートの屋上だった。

昔のような子供が遊べる小さな遊園地はなく、普通のコンクリートだけの寂しい場所。

明久は辺りを見渡すが、どこにも葉月の姿がなかった。



「葉月ちゃんはどこにいるんだ？」

「さあな」

「エレベーターであんたたちに関わったのは僕だけだ。葉月ちゃん  
んは関係ないだろ」

「ああそうだな。別にあのガキに罪はねーな」

？ 明久はどう言う事なのか分からなかった。そもそも葉月を  
狙う理由が何なのかがわからない。こいつらは何が目的で葉月を  
連れ出し、明久をここへ呼びだしたのか。

「だったら、葉月ちゃんを解放しろよっ！ あの子はまだ小学生な  
んだぞっ！」

「お前、Fクラスの吉井明久だよな？」

モヒカン頭の男は明久の質問には答えず逆に質問をぶつけてきた。  
モヒカン頭にとって葉月の話はどうでもいいのか？

「何で僕の名前を知ってるんだ……っ！ まさか……」

「へへへ。その通りだ。オレたちはお前の」

「僕のストーリーカードだったのか」

二人の頭からボタンがちぎれるような音が聞こえた。

「悪いけど、僕は男に興味はないんだよ。だから諦めて葉月ちゃん  
を返してもらおうか」

「お前バカかよっ！ 誰がお前のストーリーカードなんてするか！ オレ  
たちは試験召喚戦争でお前の事を知ったんだ！」

「！」

試験召喚戦争。文月学園の学園長、藤堂カヲルによって造られ  
た学園システム。

その言葉を良く耳にするのは文月学園の中。つまり、

「あんたたち、文月学園の生徒だったのか。それに試験召喚戦争  
で僕を知ったって事は」

明久たちが試験召喚戦争を行ったのは一度だけ。

「やっと分かったか。オレは二年Aクラス、常村勇作だ」

「同じく夏川俊平だ」

モヒカン頭の男が常村、スキンヘッドの男が夏川らしい。どちらも明久は初めて聞く名前。恐らく試験召喚戦争では手合わせしなかったか、他のFクラスの生徒が対戦しているところを素通りしたのかもしれない。

『冷血の常夏コンビ』って聞いた事あるだろ？ あれはオレたちの事だよ」

明久は考えた。常夏なのに冷血と言う意味のわからない二つ名は熱いのか冷たいのかハッキリしてほしいと思いつつ、

「……えつとお、うん。カッコイイと思うよ」

モヒカン頭とスキンヘッドは口を開けて呆然とした。

そんな事よりもだな、とモヒカン頭は咳払いをして話を切り替えた。どうやら相当恥ずかしかったのか耳を真っ赤にしている。

「あの時はよくもAクラスを負かしてくれたな。覚悟はちゃんと出来てるだろうな？」

「あれはちゃんとしたルールで勝負したじゃないか。恨みを買われるようなことはしてないだろ」

「ルールとかどうでも良いんだよ。オレたちはな、負けるってことが大嫌いなんだよ。しかもよりによってFクラスだ？ そんなんで黙ってられるかっての」

復讐、と言ったところか。

Aクラス戦で負けた常夏コンビは偶然明久を見つけて葉月を連れ去ったのだろう。そもそも見た目Fクラスの奴が成績Aクラスと言うのは、人は見掛によらないと言ったものだ。こんな顔でも成績ではこいつらの方が上と思うと人生何が起こるかわかったものじゃない。

「あなたたちがAクラスだなんて、Aクラスってのは優秀なやつばかりとは限らないんだね」

「テメエ。元学年トップだからって、あんま調子乗ってんじゃねーぞ。こちらら現在進行形で学年優秀コンビなんだからな」

「へえ、じゃあその優秀な生徒さんが、暴力で解決しようって言う

の？ これはまた優秀な生徒がするようにには思えないけど。 それに下手したら退学にもなるよ」

「誰が暴力で解決するって？ オレたちには暴力よりも楽しい楽しい遊び道具があるだろ？」

「……………」

モヒカン頭が右腕を天に向けた。すると右腕に付けられた見覚えのある腕輪が起動した事を証明するかのように光った。

「『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』」  
「なっ……………！」

聞き覚えのある言葉。<sup>キワード</sup>二度とその言葉を聞きたくなかった言葉。<sup>あくむ</sup>

「まさか……………」

モヒカン頭がニヤリと笑い、噛みあわせた歯を見せる。

「『試験召喚獣召喚【サモン】』」

モヒカン頭の目の前に幾何学的な魔方陣が出現した。その中央には『A』と書かれたAクラスを象徴するマーク。

一秒後。床から現れた魔方陣の空中に『群れをなす狼』という言葉が浮かび上がり、それがガラスのように砕けると魔方陣の中からプログラムされた物体が足元から形を形成されていった。そこに現れたのは召喚したモヒカン頭をデフォルメした姿の召喚獣だった。

『群れをなす狼』と言うのは召喚獣のテーマのようなもの。赤茶色の毛皮のような服装と茶色いマント。リング状の武器、チャクラム。これがモヒカン頭の召喚獣。

「『試験召喚獣召喚【サモン】』」

モヒカン頭の召喚が終わわり、スキンヘッドも召喚許可を出した。スキンヘッドも同じく目の前に現れた幾何学的な魔方陣の中央に『A』と書かれている。

先ほどと同じようにデフォルメした姿を足元から形成していき召喚獣が姿を現した。

スキンヘッドの召喚獣のテーマは『色彩の猿』。

王様が着ているような赤いコートに背中に天使の羽根のように生える孔雀の羽根。

コートの下からは、猿の尻尾のようなものが伸びている。スキンヘッドの顔はまるで猿。それが召喚獣にも影響したのかもしれない。

最後に出て来たのは重量感のあるハンマー。これがスキンヘッドの召喚獣の武器なのだろう。

二人が召喚獣を出現させると明久は息を飲んだ。

「何で……何でお前たちが召喚フィールドを出せるんだよ」  
理由は分かっている。

この場合、なぜ疑似召喚フィールドの腕輪を持っているんだ、と聞くべきなのだが、それを言ってしまうえば明久が藤堂歩に関わっているとバレル恐れがあった。

「便利だろこれ。こいつがあれば学園外でも召喚許可が出せるんだぜ」

腕を上げて、まるで宝石でも見せびらかすようにモヒカン頭は腕輪のことを話している。

案の定、モヒカン頭に腕輪を渡したのは藤堂歩だろう。また藤堂歩が何かを起こしている。そう思った明久は十本の指に力が入る。

「さっさとお前も召喚獣を出しな。もし逃げるような真似すれば……分かるよな？」

その言葉で、明久は本来の目的を忘れるところだった。あまりの予想外な展開が重なり、葉月の安否を忘れてしまうところだった。今は腕輪の事じゃない、葉月ちゃんの安否を一番に考える吉井明久。なあに簡単な事だ、たった二人をぶっ飛ばせば良い簡単な作業なんだからよ。

明久は両手の力を抜いて、右手を前に出した。

「『試験召喚獣召喚【サモン】』」

明久の目の前に幾何学的な魔方陣が現れた。今度は魔方陣の中

央に『F』と書かれている。

プログラムされた召喚獣が徐々に姿を現し、武器である木刀が出現するとそれを手に取り一振り。

明久の召喚獣のテーマは『強がり狐』。

学ランのボタンを外して中から赤いTシャツが顔を出している。

そして狐のようにフワフワした尻尾が動いている。

全員が揃ったところで、それぞれの召喚獣の頭上に点数が表示された。

|        |      |      |      |
|--------|------|------|------|
| 『現代国語』 | Aクラス | 常村勇作 | 212点 |
| 『現代国語』 | Aクラス | 夏川俊平 | 199点 |

VS

|        |      |      |      |
|--------|------|------|------|
| 『現代国語』 | Fクラス | 吉井明久 | 286点 |
|--------|------|------|------|

点数はほぼ互角。常夏コンビの点数があると言っことは、試験召喚戦争で負けて補習テストを受けていたのだろう。明久も同様に補習テストで回復している。

「戦う前に聞かせてほしい」と明久は今にも噛みついて来そうなモヒカン頭に目を合わせる。

「なんだ？ 一対一で戦わないのは卑怯だとも言いたいのか？

だったら仲間でも呼んで来て良いんだぜ？ 仲間がいるのならば！」

「この戦いで二人に勝ったら、葉月ちゃんの解放とその腕輪の事について教えてほしい」

「んん？ そんな事かよ。 ああ良いぜ、オレだって男だ。 約

束はちゃんと守ってやるよ」

意外にもモヒカン頭はあっさりと承諾した。それは相手は明久

一人だからと言う余裕があるからなのか。

そんな事は、明久にとって考える事でもなかった。今はただ、目の前にいるクソ野郎から葉月を解放させる事だけしか考えていない。

「それだけが聞きたかった。それじゃあ始めようか」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十六問】 覚悟の違い

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『世間でいくらか評判になっても、七十五日も経てば自然に忘れられるということ』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「人の噂も七十五日【ひとのうわさもしちじゅうごにち】」

【教師のコメント】

福原「正解です」

福原「この『七十五日』には色々な説があります」

福原「その1つの説として、野菜などの種をまいて収穫するまで約75日かかると言う事で、ひとつの区切りとして75日になったと言われています」

【土屋康太の答え】  
ムッツ「今でも売れ行き好調」

【教師のコメント】  
福原「捕まらないで下さいね……」

【吉井明久の答え】  
明久「あの噂から、七十六日目……僕は何を信じて生きていけばいいのでしょうか」

【教師のコメント】  
福原「明日に望みを賭けましょう」

B A K A T O T E S T

明久は目を閉じた。体の中にある酸素をすべて吐き出し、新鮮な酸素を血液に取り込んだ。目を開けた明久の目つきが変わっていた。

その瞬間、  
明久の召喚獣がつま先を立てて地面を蹴って屋上のコンクリートが押しつぶされた。

それと同時に常夏コンビも動いた。速度は点数によって変化するため、モヒカン頭と明久の動きはほぼ同等の速さ。これなら追



いつけない事はない。スキンヘッドの召喚獣はハンマーが重いのか動きは少し遅れて接近して来た。

距離は六メートル。

まずはチャクラムを持つモヒカン頭を視界に入れる。

モヒカン頭の召喚獣はチャクラムを持つ両手をクロスさせて勢いに乗せて投げ飛ばした。

距離は四メートル。

まだ召喚獣同士の距離はあるが、先に接触したのは明久の召喚獣とチャクラム。

軌道を曲げながら明久の召喚獣を狙うチャクラムを明久の召喚獣は、ほぼ同時の早さで向かってくるチャクラムに対して地面を蹴って空に飛んで避けた。

地面を蹴った力と走った力をそのままキープして、一気にモヒカン頭の一メートル前まで距離を縮めた。

空中で一回転して威力を増幅させて振り上げた木刀を振り下ろしながら落ちて来る。

モヒカン頭の武器は飛んでいる。

「食らえええええつ！」

その瞬間。

明久の召喚獣の目の前にスキンヘッドが視界に入った。

「出直して来なバカがつ！」

木刀とハンマーがぶつかり合った。

「つつ……」

ハンマーの硬さが木刀を通して両腕に衝撃として伝わってきた。

それでも明久は力を緩めない。空中からの攻撃と一回転した回転速度。そして何より負けられない思いが力を加えた。

三秒ほどぶつかり合った時、スキンヘッドの召喚獣が笑った。

ヒューン、と風を斬るような音がどんどん近付いて来たと思っ  
た瞬間には何かか明久の召喚獣の背中を斬りつけていた。

「ぐあつ！」

フィードバックした痛みが明久を襲い、その場で膝と両手をコンクリートについた。

「オレのチャクラムは遠隔操作でブーメランみたいに戻って来るんだよ。攻撃を避けるよりも弾き返した方が正解だったな」

痛みで明久の視界はコンクリートを見ていた。

「くそっ……」

激痛が背中に走るが明久は再び視線を自分の召喚獣に合わせた。

そこには重量感のあるハンマーを持ち上げて今にも叩きつけられそうな場面が視界に入った。

「こいつで終いだあああああっ！！！」

地面に伝わる衝撃と共に轟音が屋上で響き、周囲を叩き割った。

とは言っても実際にデパートの屋上が壊れると言う訳ではなく、これも召喚フィールドの技術。

召喚フィールド内はプログラムによって物が壊れたり叩きつけた本物の音が聞こえたりと臨場感を味わう事ができる仕組みになっている。

例えば平坦なところに出っ張りがあるとする。

そこに召喚フィールドを出現させると、召喚フィールドはその出っ張り部分をプログラムで疑似的にコピーする事ができる。

そして召喚獣がその出っ張りを破壊したとしても、それはコピープログラムのため本物には何の影響も及ばない。

ただ明久の場合は物理干渉能力があるため、本物のコンクリートを壊してしまう事にもなる。召喚獣は本来、学園内での使用が目的とされているため、もしデパートを壊してしまえば大問題になる。それを知ってか知らずか、明久の召喚獣は木刀を武器としているため屋上を壊すような事はないと思う。

衝撃によって出た煙が晴れていく。重量感のある大きなハンマーでスキンヘッドからは見えないが明久の召喚獣は潰れたのだろうか。

それを確認するためにスキンヘッドの召喚獣が重いハンマーを両

手で持ち上げた。

ニヤリと笑うスキンヘッドの召喚獣。

ニヤリと笑うスキンヘッドの召喚獣の目の前にいる二体の明久の召喚獣。

「なっ……!!」

スキンヘッドの召喚獣の目の前に現れた、二体の召喚獣。

それは明久の召喚獣の能力、『疑似複製【ダミーアカウント】』をスキンヘッドのハンマーに当たる前に使用していた。

どうやら、ハンマーが明久の召喚獣に当たる瞬間に、分身の一体『副獣【オプション】』が『主獣【メイン】』の背中を引っ張ってハンマーの攻撃範囲から逃れていた。

重いハンマーのせいで動けないスキンヘッドに「まずは、」で明久の召喚獣たちが武器を握りしめる。そして一直線に伸びた木刀は容赦なしの強烈な一撃を同時に食らわせた。

「一体目だあああああ!!」

「しまっ……」

……た、と言いきる前に突き刺されたスキンヘッドの召喚獣が後ろに吹き飛んだ。

「ヤバイッ……!!」

スキンヘッドの召喚獣の後ろにいたモヒカン頭の召喚獣も、スキンヘッドもろとも後ろへ吹き飛んだ。

二メートル。三メートル。まだ吹き飛ぶ。

五メートル。六メートル。ようやく地面に着くが滑るように後ろに吹き飛ぶ。

ガシャン、十メートル先の屋上の転落防止用のフェンスにぶつかりようやく止まった。

衝撃で揺れるフェンスを掴んだスキンヘッドの召喚獣。

よろめきながらも、モヒカン頭の召喚獣はまだ立ち上がってきた。

「わりい常村。大丈夫か？」

「ああ。ちよっと油断したみたいだ」

木刀によってダメージを負ったスキンヘッドと、吹き飛ばされたスキンヘッドに巻き込まれてクッション代わりになったモヒカン頭の召喚獣。

一撃で決めるつもりだったが、モヒカン頭のせいでスキンヘッドの召喚獣は倒せなかった。だが、それでも十分ダメージは与えた。これが吉井明久の実力と言っやつだった。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十七問】 本気と焦り

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『家の中の物をかすめ取る者』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「頭の黒い鼠【あたまのくろいねずみ】」

【教師のコメント】

福原「正解です」

福原「頭の黒い鼠とは『黒髪の間』の事です」

福原「語源は鼠が物を盗むように家の中の物がなくなった時などに、それを盗んだのは頭が鼠色の鼠でなく頭の黒い鼠＝人間だった事から来ています」

【土屋康太の答え】  
ムッツ「泥棒」

【教師のコメント】  
福原「……ことわざでも何でもありませんね」

【吉井明久の答え】  
明久「ミッ　ーマウス」

【教師のコメント】  
福原「彼はそんなことをしません」

B A K A T O T E S T

二人は見合った後、明久に視線を変えた。あまりの威嚇した目に一歩後ろに下がった。さすがにこの展開をメモに書かれていなかったのか、二人はさっきまで本気ではなかったと言う表情を浮かべて来る。

額から一滴の嫌な汗が顎に向かって流れていく。  
そして、その一滴が重力に向かって落ちていき腕に付けられた明久の腕輪で弾けた。

「『副獣召喚解除【オプションカット】』」  
明久は一度、『副獣【オプション】』を腕輪の中に戻した。

二体相手にして神経を使っているのに、そこに自分の召喚獣を二体同時に操作するのは無理があった。

もし明久の頭がスーパーコンピュータになっていれば不可能ではなかっただろうが明久は人間。仕方なく召喚獣を引っ込めるしかなかった。

そして一体になった召喚獣に神経を尖らせた。

「やってくれるじゃねーかテメエ。まさかここまで召喚獣が使いこなせてるとはな」

「だが遊びはここまでだ。ここからはAクラスの力つてのを見せてやるよ」

二体の召喚獣が地面を蹴った瞬間、

「あなたたち何してるんですか！」と屋上の扉を開けて叫んだのは姫路瑞希。その声に、モヒカン頭とスキンヘッドの召喚獣が動きを止めた。

「明久君、大丈夫ですか？」

「姫路さん……？ どうしてここに」

「屋上から凄い音が聞こえて、もしかしたら明久君の身に何かあったのかと思って来たんです」

姫路は辺りを見渡す。召喚フィールドに召喚獣、そして先ほど見た明久の友達二人組。このありえない状況を理解するのに時間がかかっている。

「これって召喚フィールドですよ？ どうしてこんなところで召喚戦争が出来るんですか」

「……えっとそれは……、あのモヒカン頭が持つてる腕輪で召喚フィールドが使えるみたいなんだ」

姫路には腕輪の事であまり話したくはなかった明久だったが、この状況で嘘を考える余裕はなかったのか、腕輪に関する事だけ本当の事を教えた。

「おいテメエ！ 人がせつかく楽しんでたつてのに、邪魔すんじゃねーよ」

「あなたたち、二対一で戦う何て恥ずかしくないんですか」

「恥ずかしいだ？ 勝負つてのは勝てるなら何でもやっても良いんだよ、何でもな。なあ夏川」

「ああそうだな。それに二対一が卑怯って言うならお前も参加すればいいだろ」

？ 何であいつ姫路さんが召喚獣を使えるのを知ってるんだ。

さっき姫路が明久に召喚ワールドの事を言っていたが、明久たちとモヒカン頭たちの距離は少し離れている。つまり、モヒカン頭たちは姫路と明久の会話は聞こえていなかったはず。なのにスキンヘッドは姫路が召喚獣を使えると知っていた。

こいつ、地獄耳でも持つているのか。とにかくあまり情報を口に出さない方が良いな。

「わかりました。それなら二対二で平等な戦いになりますね」

「ちょ、ちよつと姫路さん。何も姫路さんまで戦いに参加しなくても良いじゃないか。これは僕が招いた事なんだよ。だから姫路さんには関係ないじゃないか」

「『試験召喚獣召喚【サモン】』」

姫路がキーワードを唱えると幾何学的な魔方陣が目の前に出現した。

姫路の召喚獣のテーマは『紅桜の乙女』。西洋風の鎧を身にまとい、その身柄に不釣り合いの大剣が出現した。

「明久君は、記憶喪失で覚えていないかもしれませんが、私は明久君にいつも助けてもらってました。だから……だから今度は私が明久君を助ける番です」

|        |      |      |      |
|--------|------|------|------|
| 『現代国語』 | Aクラス | 常村勇作 | 164点 |
| 『現代国語』 | Aクラス | 夏川俊平 | 132点 |



|        |      |      |      |
|--------|------|------|------|
| 『現代国語』 | Fクラス | 吉井明久 | 286点 |
| 『現代国語』 | Fクラス | 姫路瑞希 | 75点  |

「ははははっ！ 何だよその点数！ そんな点数でオレたちに勝とうつての？ バツカじゃねーの」

「こいつは傑作だわっ！ 遅れてやってきた救世主は最弱女神だつてか。 テメエはとことん運がねーみたいだな吉井！」

モヒカン頭たちは人をバカにするような汚い笑い声が飛んできた。それに対して明久も肉を噛み切る狂犬のように吠え返そうとした。

「お前らなっ！」

「大丈夫ですよ明久君」

しかし、そこで姫路の優しい声が明久の怒りを不発にさせる。

「姫路さん、どうして止めるのさ。 あんな事言われたら普通は怒るじゃないか」

「明久君もあの点数を見ればわかりますよね？ あの人たちが言ってるのは正しい事です」

「だけど……、」

とそこまで言って明久はある事を思い出した。

そう言えば、さっき中学生の時は副会長をしていたって。 それなら点数はAクラス並みになっていてもおかしくないよな……。

「明久君、来ますよ！」

「っ……！」

明久がふと考え事をしている間に、モヒカン頭たちが動き始めていた。 モヒカン頭の召喚獣はその場でチャクラムを構えてスキンヘッドがハンマーを持ち上げて走ってくる。 それに対して、明久はモヒカン頭の召喚獣に、姫路の召喚獣がスキンヘッドの召喚獣に向かつて武器を構えて走る。

モヒカン頭の召喚獣は右手のチャクラムを投げるが明久の召喚獣

はそれを避けて一気に距離を縮めて木刀を振り下ろした。

ガキンツ！ とチャクラムと木刀が重なり合うと、先ほど投げたチャクラムがブーメランのように返って来た。

「これで勝負あったな吉井。あのチャクラムを避けた瞬間、お前の負けは決まりだ」

「ふんっ………何で避ける必要があるのさ。僕にはまだ召喚獣がいるの忘れたの？」

「……、！」

ニヤリと笑う明久は、「『疑似複製【ダミーアカウント】』」とキーワードを唱えると召喚獣の腕輪によって明久の召喚獣が二体に増えた。

「この勝負、僕の勝ちだモヒカン野郎」

明久の召喚獣はチャクラムを弾き返すのではなく、円形状のチャクラムを木刀で引っ掛け、勢いに乗せた木刀によって速さを増幅させたチャクラムがモヒカン頭の召喚獣に直撃した。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第四十八問】 心が揺れる

B A K A T O T E S T

【問題】 『化学 元素記号』

問 以下の問いに答えなさい

福原「H C O S i S K G a A s I n I D Y  
H O E S N o」

福原「以上の14個の元素名を答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「H 水素 C 炭素 O 酸素 S i ケイ素」

姫路「S イオウ K カリウム G a ガリウム」

姫路「A S ヒ素 I n インジウム I ヨウ素」

姫路「D Y ジスプロシウム H o ホルミウム」

姫路「E S アインスタイニウム N o ノーベリウム」

【教師のコメント】  
福原「正解です」

【土屋康太の答え】  
ムツツ「H C O S i S K G a A s I n I D Y  
H O E S N o」

ムツツ「一酸化死す 蚊が死に デフォ イスの」

【教師のコメント】  
福原「CO<sub>2</sub>一酸化ですか 失礼ですが、よく覚えていましたね」

【吉井明久の答え】  
明久「H I D Y O S i N o K G a E s A s I  
n H o C」

明久「秀吉の着替え写真欲しい」

【教師のコメント】  
福原「先生は持っていません」

B A K A T O T E S T

ガキンツ！ と姫路とスキンヘッドの召喚獣の武器が重なりあつた。

「はっ！ バカでも流石に召喚獣の使い方は慣れてるみたいだな」

「人を点数だけで考えるのはどうかと思いますよ！ 私だって簡単に負けたりはしませんから！」

「おうおう言うようになったな姫路。 中学の時のお前だったらこんな戦い逃げてただろうに」

「っ……、」

「吉井明久がいなくちゃ何もできない泣き虫姫路が、吉井を助けるだって？ お前も冗談を言えるようになったんだな姫路さんよお」

「私は……、」

「戦いの最中に考え事してんじゃねーよ！」

姫路が一瞬だけ召喚獣に意識を外したところをスキンヘッドは見逃さず、姫路の召喚獣の大剣を上弾き返してガラ空きになった懐をバットのスイングのようにしてめり込ませた。

瞬間、ズドンツ！ と轟音が屋上に鳴り響いた。

「姫路さん！ テンメエエエ！」

明久がスキンヘッドに向かって走り木刀を振り下ろすが、振り向いたスキンヘッドの召喚獣がハンマーを構えて防がれる。

「ん？ 何だ何だ、ずいぶんと荒立ってるな吉井君よお。 そんなにあの女の事が気になるのか？」

「うるせえええハゲがつ！ そんな事考えてる暇があるなら増毛の方法でも考えてろよ！」

「これはハゲてんじゃねーよ！！ スキンヘッドだつ！」

ガラガラと瓦礫の中から姫路の召喚獣が出て来た。

「姫路さん大丈夫！？」

「はい、何とか点数は残っています」

ハンマーによる直撃はギリギリで避けたのか、姫路の召喚獣は低

い点数でも生き残っていた。しかし、すでにボロボロの姿で立っているのがやっとと言ったところ。

「ちっ……まだ戦死してなかったのかよ。雑魚の割には耐久力あったか」

「おいハゲ！ さつきから姫路さんに嫌み言いやがって、どう言うつもりだ！」

「またハゲって……、オレは事実を言ってるだけだ。そうだよな泣き虫姫路さんよお」

「お前また……、」

「吉井だつてそう思ってたんだろ？ 中学ん時に、いつつも姫路に付きまとわれて嫌だつたんじゃねーのか」

「僕がそんなこと思ってるワケないだろ」

「だつたら何で中学三年の時に失踪したんだよ。姫路が嫌で逃げたつてクラスで噂になつてたぜ」

このスキンヘッド。どうやら明久や姫路と同じ文月中学の卒業生のようだ。姫路が文月学園の生徒だと言うのを知っているのは、以前に学園内で姫路の姿を見たからなのかもしれない。

「……くっ、……僕の失踪と姫路さんは関係ない」

「だあつたら、何で失踪なんてしたんだよ。理由が言えないのは凶星だからなんじゃねーのか？ ああ？」

「だから姫路さんは関係ないって言ってるだろ！ 姫路さん、僕がハゲの召喚獣を押させているから、その間に止めを刺すんだ！」

「だあかああ！ ハゲてねえつつつてんだろうが！」

「早く止めを刺すんだ！」

「……………」

姫路は両手を拳にしてフルフルと小刻みに震わせている。

「どつしたのさ姫路さん！」

姫路の反応を見たスキンヘッドは口を釣りあげた。

「攻撃できねーよな姫路。誰かに助けてもらわなきゃ何にも出来やしないんだからよ」

「!……、」

姫路の反応を見たスキンヘッドはさらに口元を上げた。まるで自分の領域テリトリーに入った一匹のウサギを迷わせて、弱らせるのをただただ面白く見ているかのように。

「ほらほらどうした姫路？　せつかく吉井が助けてくれたんだ、さつさと攻撃してきたらどうなんだ？」

「……………、私は……………」

姫路はまるで言葉の攻撃から身を守るように両手を折りたたみ胸の近くで防御するかのように構える。姫路の全身は冷凍室に防寒具を着けずに入ったかのように震えが止まらなかった。

「お前は吉井明久がいなけりゃ何一つ出来やしねーんだよ」

スカイブルーが夕焼けのように真っ赤に染まり、そこから大粒の涙が流れていた。

ギリツ！　と歯を噛み砕きそうなほどの音を鳴らし明久がスキンヘッドに向かって一歩前に出た瞬間、明久の肩を強い力で引つ張られた。

誰だ、と半分キレ気味の状態で振り返ったそこには同じクラスの坂本雄二の姿が目に入った。

「随分と楽しそうな事してるじゃねーか明久。　オレにも混ぜてくれよ」

そこにいたのは雄二。　その隣にはワンピースを着た翔子が屋上の扉の前に立っていた。　雄二は先ほどまで大量にあった荷物を屋上の前に置いてから明久のところへ来ていた。　これは完全に参加モード。

「雄二……………それに霧島さんまで。　どうしてここに」

「そりゃこつちのセリフだ……………って言いたいが説明は後だ明久」

「さ、坂本雄二……………っ！　Fクラスの『神童』坂本か！？　それに何でAクラス代表がここにいるんだよ」

「よお、」と鬼のような低い声は、ドライアイスでも背中に入れられたかのようにモヒカン頭とスキンヘッドの背筋を凍らせる。

「テメエら、よくもオレの大事なクラスメイトを泣かせてくれたもんだな。覚悟……もちろん出来てるよな？」とニツコリと笑う雄二だが沸点がとてつもなく低いところで煮え切っていた。

「なっ夏川！ さっさと吉井の召喚獣に止めを刺すんだ！」

「っ……！ わ、わかった！」

「させるかよ、『試験召喚獣召喚【サモン】』」

雄二の目の前にお馴染の幾何学的な魔方陣が出現した。魔方陣から現れた文字は『群れを狩る狼』と書かれている。それがガラスのように砕けると魔方陣の中から足、腰、胴体、頭の順にプログラムが構成されて雄二をデフォルメした召喚獣が姿を現した。

スキンヘッドが再び意識を召喚獣に向けてハンマーを構えた。

雄二は召喚獣が召喚されると同時に最後に出て来た召喚獣の武器、身長の2倍ほどある銀槍をスキンヘッドの召喚獣の心臓に矛先を向けて投げはなつた。

「なっ！？ ちょ、ちよつと待つ」

た、と言う隙も入らず、銀槍は迷いもなく一直線に飛んで行き、狙った心臓に吸い込まれるかのようにズブリと突き刺さった。

そして、スキンヘッドの召喚獣の足元に幾何学的な魔方陣が出現すると、プログラムが分解されるように消えていった。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第四十九問】 鬼の眼をした狼

B A K A T O T E S T

【問題】 『英語 英文』

問 以下の問いに答えなさい

福原「Please put the newspaper back where you found it.」を日本語で答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「Please put the newspaper back where you found it.」

姫路「新聞を元の場所に戻しておいて下さい」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムツツ「Please put the newspaper back where you found it.」

ムツツ「あなたがそれを見つけたところに新聞を戻してください」

【教師のコメント】

福原「翻訳機を使って答えてはいけません」

【吉井明久の答え】

明久「Please put the newspaper back where you found it.」

明久「新しいパパを戻してください」

【教師のコメント】

福原「新しいお父さんとは気が合わなかったのでしょうか」

【教師の指摘】

福原「newspaper」新しいパパ」

B A K A T O T E S T

「……………」

雄二はボリボリと頭をかくと、翔子に視線を送った。

翔子は軽

く首を縦に振ると姫路のもとへと歩きながら鞆の中に手を入れていく。

「これ、良かったら使って」

再び鞆の中から手を出すと水色のハンカチが出て来た。

「ありがとうございます。えっと……」

「私は霧島翔子。あなたは？」

「姫路瑞希です。ハンカチありがとうございます霧島さん」

「ったく、せつかくの休日だって言うのに何してんだよ明久

」

「おいハゲっ！ 今さっき言ったことを全部取り消すって姫路さんに言っただけよ！」

「ちっ……わあったよ。誤れば良いんだろ誤ればよ。姫路さん

には大変失礼な事を言っただけで申し訳ありませんでした。これだけで言いださう……」

スキンヘッドの心のもっていない言葉に雄二の心のもった右フックが腹部に入り込んでいた。

「謝り方がなっていないなあお前。良かったらオレが教えてやろう

か？ ちと厳しいレッスンになるけどもな」

「ひっ……、す、すいませんでした！」

「オレに謝ってどうすんだよ。姫路に謝ってこい」

「は、はいいい！」

雄二の優しい声（恐喝レベル）で、スキンヘッドは姫路のところへもうダッシュで駆けつけそのまま土下座を繰り返した。

姫路は、慌ててスキンヘッドの顔を上げさせると、許してやるのかニッコリと微笑んでいた。その笑顔にスキンヘッドは再度土下座を繰り返している。よほど雄二の事が怖いのだろう。

「これで一件落着……って事にはなりそうにないな。明久、さっき出現した召喚フィールドってまさか……」

流石に雄二は状況の飲みこみが早かった。今の時点で召喚フィールドの学園外使用は明久と雄二しか知らない。

「それも聞かなくちゃならないんだけど、先にあいつらに聞かなくちゃならない事があるんだ」

「？」

明久は負けた事が悔しかったのか、その場で座り込んでいるモヒカン頭に視界を移した。

「この勝負は僕の勝ちだ。さあ早く葉月ちゃんの居場所を吐いてもらうぞ」

その言葉に戦いに負けて悔しがっていたモヒカン頭の口が釣り上がった。

「バアアカ。最初から人攫い何てしてねーよ。お前の大切な妹は、おもちゃ売り場で楽しくお買い物中だぜ」

「なっ……」

「オレたちは、お前……いや、お前からFクラスに恨みがあっただけだからな。そのためにあの妹の髪についてた髪留めと同じような奴を手芸店で買って来てお前を釣りあげたのさ」

手芸店と言うと、明久が葉月を探しに行つてモヒカン頭たちと出会った場所。こいつらは、葉月と同じ髪止めをその手芸店で買って出て来たところで明久を見つけたのか。

「どう言うことだ明久？ あいつらと何か取引でもしてたのか？」  
事情を知らないのだから明久たちの言っている事が何なのかが分からなかった。

「実は、葉月って言う女の子と一緒にデパートの買い物に付き合ってたんだ。それで、僕が葉月ちゃんと少し離れている隙に誘拐したって騙されてここに来てたんだ」

「そうだったのか。そうだ、それよりも葉月って言う子の安否を確認した方が良くないんじゃないのか」

「それはそうなんだけど」

「……、召喚フィールドのことか」

明久は首を縦に振った。

「翔子、悪いが姫路を連れて葉月って言う子の安否を確かめてくれ

るか？」

「わかった。吉井、その子の特徴は？」

「えっ、えっと、小学生5年生ぐらいで、赤髪をツインテールした女の子で、おもちゃ売り場にいるんだけど……」

「それだけあれば見つかると思う」

「頼んだぞ翔子」

明久から聞いた情報を頼りに翔子は姫路と共に五階のおもちゃ売り場に向かった。

雄二は翔子を見て、少し安心したような顔を見せる。きつと、

翔子にはこの事件に関わらせる訳にはいかないと思ったのだろう。

「霧島さん迷惑じゃないかな？」

「その子が安全かどうかぐらい翔子に任せても良いだろ。それよりもオレたちはオレたちの仕事がある。自分だけで何でも背負い込むな明久」

「……うん、わかったよ。葉月ちゃんは霧島さんに任せるよ」

「うしつ。さて本題だが、あいつの持つてる腕輪をどう思う」

「あれは僕たちが藤堂に渡された物と一緒にだった。たぶん、モヒ

カン頭も藤堂に何らかの理由を言われて利用されてるんだと思う」

「……狙いは明久か？」

「いや違うと思う。あいつらは、僕たちFクラスに負けたAクラスなんだ。それで僕と偶然出くわして復讐みたいなことで勝負を挑まれた」

雄二は視線を明久から悔しがっているモヒカン頭に移した。

「お前ら、さっきの召喚フィールドはどうやって出現させた？ 正直に答えろ」

少し怒っているのだろうか。雄二の声はいつもよりも低く感じた。

「こ、これだよこれ。この腕輪を使えば召喚フィールドをどこでも出せるんだよ」

明らかに態度が変わっている。さすが迫力ある雄二の存在感に

モヒカン頭も頭が上がらないらしい。

「ならその腕輪はどこで手に入れた？ 自分で作ったのか、誰かに貰ったのか答える」

「あ、ある男から貰った。だが誰かまでは言えない……それがこの腕輪を貰う条件だったからな」

ある男。これだけでほぼ後ろにいる人物の名前と顔が浮き彫りになってくる。

あいつだ……確実に藤堂歩が絡んでいる。

「どうする雄二？ 藤堂の居場所を吐かせて突き止める？」

「いや。それはさすがに無謀だろ。だが取りあえず、あいつらの腕輪は破壊しておいた方が良さそうだな」

「でも、あのフィールドって解除すると建物が壊れるようになってるよね？」

モヒカン頭は、召喚戦争が終わっても尚、召喚フィールドを出現させたままにしてある。藤堂からは解除方法は教えられていなかったのだろうか。

「あれは学園の召喚フィールドが融合したせいで学園自体に影響を及ぼしただけだからな。デパートには召喚フィールドがないから建物に影響は及ばないだろ」

なるほど、と明久は首を縦に振った。

雄二は視界を明久からモヒカン頭に向ける。

「そう言うワケで、その腕輪を外せ」

「そ、そんなこと出来るかよ！ こんな都合の良い腕輪を簡単に手放せるか！」

はあ……と雄二はため息をついた。

「あの時のオレと同じこと言ってやがる。何だか昔の自分を見ているようでイライラするわ」

「雄二。腕輪を壊すなら僕に任せてよ」

「ん？……ああ、お前の物理干渉能力で壊すのか。そうだなあいつら言うこと聞かぬーみたいだからそうしてくれ」

まだ召喚フィールドが残ったままで、明久は召喚獣も召喚させたままにしてあった。明久は召喚獣に意識を集中させて、モヒカン頭に向かって地面を蹴った。

だが、明久の召喚獣がモヒカン頭に接近している途中で召喚フィールドが突如消えた。

「なっ……！ 召喚フィールドが」

「は、はははっ！ 何だか知らねーが、これで召喚獣が使えないみたいだな吉井っ！」

「それは危険な物なんだっ！ 今すぐ壊さないと取り返しのがないことになるんだぞ」

「待て明久。 あいつの腕輪見てみる」

「え……？」

明久がモヒカン頭の腕輪を見ると、コンセントに水が入ったかのようにバチバチと青と黄色の閃光が出たと思った瞬間、ボンツとマングにある化学薬品を混ぜた時のような音を鳴らして腕輪がモヒカン頭から外れた。

そのまま地面に落ちた腕輪は衝撃でガシャンとクツキーのように粉々に砕けちった。

「腕輪が！ オレの腕輪がっ！ くそっあの野郎、不良品を渡しやがったのかよ！」

「あの腕輪、どうやら使い捨て腕輪みたいだな」

藤堂がモヒカン頭に解除方法を教えなかったのではなく、教える必要がなかったと言うことか。 どうやら雄二が使っていた腕輪の劣化品をモヒカン頭は使わされていたらしい。

「それじゃあ、もうあの腕輪をあいつらが使うことは出来ないよね」

「たぶんそうだろ。 しかし、まだあの腕輪が存在してたとはな…」

「こりゃ増産されてる可能性も考えるべきか」

「かもしれないね。 やつと壊したと思ったのに、まだ腕輪を使う奴が現れるのかと思うと気が持たないよ」

「さて、モヒカン野郎。 もう壊れちまったんだから誰に貰ったの

か教えてくれないか？ 何が目的でその腕輪を手に入れた」

「わ、わかったよ正直に答えれば良いんだろ」

意外にも素直に応じたのは、雄二の気迫の強さがあってこそだろう。もし明久ならこう簡単にモヒカン頭の尻尾をまかせる事は無理だった。

「別に目的とかそう言うのではない。ただ、腕輪を使えば学園外でも召喚獣が使えるって聞いたから貰っただけだ」

「それはどんなヤツから貰った？」

「名前は聞いてないが、三十代ぐらいの男だった。特徴って言えばくわえタバコぐらいしか覚えてないな。ああ後、男にしては女見たいにサラッサラで長い髪だったのを覚えてる」

それは明久と雄二の見た藤堂歩と重ね合わせれば100%と言って良いほど完全なる一致だった。これで確証を持てた。モヒカン頭たちに接触したヤツは藤堂歩だ。

「その男と最後に会ったのはいつだ」

「オレたちも、この腕輪を貰ったのが最近だから、それ以来は会ってない」

「……そうか」

「なあもう良いだろ？ これ以上聞かれても、オレだってほとんど面識のないヤツだったんだから情報はないぞ」

「どうする明久。まだ隠してる事があるかもしれないぞ」

「んん」。まあ雄二の顔を見てあの態度の豹変ぶりだし、嘘とか隠しことはしてないと思うよ。だから帰しても良いんじゃない？

僕も早く葉月ちゃんの安否も確認したいし」

それに姫路さんの事も心配だ。スキンヘッドから言われた事で落ち込んでるだろうし、何とか元気にする方法を考えておこう。

「ま、そう言う事だモヒカン野郎。今日は二人とも帰って良いぞ」

「ほ、ホントか！？」

「ただし、次にFクラスに喧嘩持ってくるならオレに言え。そんな時は、全力でAクラスをボコるって代表に言っときな」



B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十問】 声が聞こえる

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 短文』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『とつとつ』これを使って、短文を作りなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「長年使っていた、時計がとつとつ壊れた」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムツ「眠たいと うとうとしてたら 池落ちた」

【教師のコメント】

福原「何で、川柳みたいに答えるんですか？」

【吉井明久の答え】

明久「彼の家のトイレはTOTOだった」

【教師のコメント】

福原「他人の家をジロジロ見るのはよくないですよ」

B A K A T O T E S T

明久たちはモヒカン頭の腕輪を元の形がわからなくなるほど粉々にしたのを確認してから屋上を降りて、姫路と翔子、そして安否の気になる葉月のところへと向かっていた。

「そう言えば、どうして僕が屋上で戦ってるってわかったの？」

「そりゃ、あれだけデカイ音が上から聞こえてくれば、だいたい想像つくだろ」

「いや……普通は想像つかないと思うけどな。でも助かったよ」

「いくらお前が強いからって、Aクラス二人相手にするバカがいるかよ」

「まったくだよ。最初は見た目がバカそうだったから楽勝かなって思ってたら意外と頭良かったから、あの時は驚いたよ」

「人を見た目で判断するなってことだろ。オレだって明久みたいなのが元学年トップだった何て考えもしなかったからな。ありや言われなかったら一生気がつかねーよ」

「失礼だなあ……って言うか今考えれば、あの時に僕が名前を出さなかったら学園が崩壊することもなかったかもしれないだよな……」

「ま、それも運命ってことだろ。　過ぎたことは忘れる忘れる。」

（学園が崩壊したおかげって言うのはあれだが、翔子に想いを伝えられたしな）

そんなことを考えている雄二の携帯が着信音を鳴らした。

「お、翔子からメールだぞ明久。　葉月って子は、あいつらが言った通りおもちゃ売り場にいるらしいぞ」

「ホント?!　良かった葉月ちゃんあいつらに何もされてなかったんだね」

ほっと胸を撫でおろす明久。

翔子からのメールで、葉月のいる場所を聞き出した雄二と明久は迷うことなく動物のおもちゃが売られているエリアへと足を踏み入れた。そこには、動物のぬいぐるみやおもちゃがたくさん置かれている。

動物のおもちゃだけでも、三メートルほどの高さの棚がずらりと四列ほど横に続いている。　さすが、文月一の大型デパートは品揃えが豊富だった。

明久たちは、おもちゃ売り場に入ってから、商品を探す訳ではなく、子ども連れを一人一人確認しながら歩いていると「お、いたぞ明久」と、雄二が翔子を見つけた。　そして、心配していた葉月はモヒカン頭たちの言う通り、何事もなく楽しそうにプレゼント用のおもちゃを選んでいた。　ただ、その場に姫路瑞希の姿はどこにもなかった。

「あっ！　お兄ちゃんです！」と小さい葉月は明久の懐にダイレクタアタックを決めると、明久は涙目になっていた。　恐らく葉月の無事と痛みが重なっているのだろう。

「良かった葉月ちゃん。　無事だったんだね」

「……?　何かあったですかお兄ちゃん」

「ううん、何でもないよ。　それよりプレゼントは決まったの?」

「はう……まだ決まってるじゃないです。ゴメンなさいです」

「僕はまだ時間あるから、ゆっくり決めておいで」

葉月はニコリと明るい笑顔を下から覗かせて、先ほどまでいた場所にトコトコと歩いていく。それと同時に翔子が明久のもとへと少し心配な顔をしながら歩いて来た。

「霧島さん、葉月ちゃん見つけてくれてありがとうございます。ゴメンね何だか押しつけちゃって」

「気にしないで。それより姫路さんの事だけど、先に帰りますって言うて帰って行った」

「……、そつか。携帯番号とかって……」

翔子は首を横に軽く振った。

「そうだよ……」

やっぱりあのハゲに言われた事がよっぽどショックだったのか。

「明久、そんなに心配なら明日にでもプレゼント渡してやったらどうだ？ 姫路は同じFクラスなんだから渡せるだろ」

「……、うん。そうするよ」

「そんじゃオレたちはこれで。後はしっかり面倒見てやれよ」

「ありがとう。二人とも助かったよ」

「ん……まあ気にすんな。その……何だ、オレだってお前……だからな」

雄二は口の中にご飯でも入れているかのように、モゴモゴとした口調で明久にはそれがしつかり聞き取れなかった。

そのため代わりに翔子が明久に伝える。

「雄二はあの時……自分が暴走して皆を傷つけてしまった時、吉井に助けてもらったから、そのお礼に今度は助けるんだって張り切ってた。だから屋上で音が聞こえた時は雄二がいち早く駆けつけてくれたの」

「お、おい！ 別にそんなこと言わなくても良いだろ！」

「そうだったんだ。それにしても本当に地獄耳でも持ってるんじゃない雄二」

「ん？ そついや言つてなかつたっけ？ オレは人の声を聞き分ける『相対音感【ノイズキャンセラー】』って才能があるからだよ」  
「『相対音感【ノイズキャンセラー】』？」

「まあ簡単に言えば明久の言つたように、地獄耳つて事だな。オレは意識した人の声を半径五十メートルだつたらどれだけ小さな声も聞き盗る事が出来るんだよ」

雄二の生まれた時から持っている才能『相対音感【ノイズキャンセラー】』

例え四十メートル先の声だとしても意識を集中させれば目の前で喋っているかのようにハッキリ聞こえる才能。

ただし、あくまで音が聞こえやすいだけの才能に過ぎない。

美波の才能『絶対音感【サウンドレコーダー】』と似ているが、性能を比べれば圧倒的に美波の才能が上。美波は音を聞く訳ではなく、声・物体・生物・文字あらゆるものを自分で理解しようと考えただけで言葉が浮かんでくる。

それに比べて雄二の才能は、普通の人間が音を聞き取れる限界を超えた才能と言うだけで、聞こえて来る声を全て理解出来る訳でもない。ましてや記憶することすら普通の人間並みしか能力が発揮されない言わば、絶対音感の劣化版と言つたところ。

聞きたい声に意識して聞かなければ、雑音が混ざつて聞けたものではないため明久がモヒカン頭たちに関わつていた時の声も雄二は聞き逃している。

普段から人の声に意識を向けていれば話は別だが、雄二にはそんな趣味はなかった。

それでも、人間よりもはるかに超えた聴覚を持つ雄二は召喚獣たちの音を聞き取り、助けるために役に立った。

Aクラスとの試験召喚戦争の時、翔子が保健室のベッドの下でうずくまっている声を聞いたのが初めて役に立った瞬間。この才能がなければ翔子を探し出すことは不可能だったのか、もしくはその才能がなくとも雄二は翔子を探し出していたのかは雄二本人にしか

わからない。

「へえ便利な才能持つてるね。それなら、お宝本読んでても即座に隠せるね」

「バツ！ オレがそんな事のために才能を」

「……雄二、その話三秒以内に詳しく説明して」

「い、いやだからオレはそんな事を」

雄二が弁解する前に、ドスッ！ と言う音とともに雄二の視界に激痛が走った。

「ぎゃああああつ！！」

「そうだ！ 人の声が聞こえるなら姫路さんがどこに居るのかわかるんじゃないの？」

「いや、さつき調べたが、たぶんもう範囲外に出てるんだ。だから、今日のところは諦めろ」

「そつか……でも本当に助かったよ。ゴメンね霧島さん。せっかくのデートだったのに」

「私も吉井には助けてもらったから。それに、あの子を探している時に雄二に使いそうなおもちゃが見つかった」

明久は翔子のぶらさげている、おもちゃ売り場のレジ袋からスタングンのような物が見えた。

あれって……偽物だよな？ うん。おもちゃ売り場にそんな危険物が売ってる訳ないしな。

「んじゃ明久、また明日な」

「え、あ、うんまた明日ね」

余計な事を言っただけの雄二。明日まで生きてる事を祈るよ……。

【第五十一問】 長かった買い物

B A K A T O T E S T

【問題】 『英語 英文』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『That is not a dog but a cat  
t.』を日本語で答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「That is not a dog but a cat.  
」

姫路「あれは犬ではなく、猫です」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムツ「That is not a dog but a ca



t.  
」

ムッツ「それは犬ではなく、猫です」

【教師のコメント】

福原「言われなくとも、誰でもわかりますよ」

【吉井明久の答え】

明久「That is not a dog but a cat.

」

明久「あれは犬です ぶつとい猫ではありません」

【教師のコメント】

福原「どう見ても、猫です」

【教師の指摘】

福原「but a cat」ぶつとい猫」

【坂本雄二の答え】

雄二「That is not a dog but a cat.

」

雄二「あれは犬ではなく、豚猫です」

【教師のコメント】

福原「正解ですが、普通に猫でいいじゃないですか」

【教師の指摘】

福原「but a cat」豚猫」

B A K A T O T E S T

雄二たちと別れた明久は、葉月のところに行くと、その場でじつと売り物を見つめていた。

「葉月ちゃん、プレゼントで渡すおもちゃ見つかった？」

葉月は買おうとしている物が無いのか手には財布が握り締められているだけだった。

「はう……欲しい物は決まりましたですが、葉月のお金じゃ、あのクマさんのぬいぐるみが買えないです」

葉月が指差す方向に明久が目をやると、そこには一メートルほどの大きなクマのぬいぐるみがあった。

「このぬいぐるみが欲しいの？」と明久が聞くと、コクリと頭を下げる。

ぬいぐるみのタグに付けられた値札を見ると、確かに子どもには買えるような金額ではない。

「これはちよつと高いね」

葉月の欲しがっているクマのぬいぐるみは、8400円と小学生には大金だった。

明久は自分のポケットから財布を取り出し、お札入れを開けると五千円札1枚と、千円札2枚の合計7000円が入っていた。

明久は一人暮らしで、仕送りされている。今月分の仕送りが来

てから、明久は自分の記憶を取り戻して勉学に励んでいた。そのため、それほどお金を使っていなかったのか、少しばかり財布に余裕はある方だと思っていた。

「葉月ちゃん、今日はいくら持ってきたの？」

「今月のお小遣いを貰ったから、今は2000円あるです」

「2000円か。ちよつとここで待つてくれる？」

それを聞いた明久が少し考えて、何を思ったのか葉月をその場に残してどこかへ行ってしまった。

しばらくすると、明久が葉月の元へと帰って来る。

「葉月ちゃん、このクマのぬいぐるみを2000円で売ってくれるってさ」

「本当ですか?!」

「これなら、買えるよね」

「ありがとうございます、お兄ちゃん!」

葉月は嬉しそうにクマのぬいぐるみを抱きかかえて、レジまで持っていた。

これで葉月ちゃんが買ったことになるよね？

先ほど明久は、事前に店員さんにお金を渡していた。

『いらつしゃいませ』と女性店員が笑顔で答える。

『あの、すいません。あそこの動物のおもちゃ売り場から8400円のクマのぬいぐるみを買ってくる小学生の女の子が後で来るので、値段を2000円ですって言うてくれませんか？もちろん足りないお金は先に僕が出しますので』

それを聞いた店員は首をかしげたが何となく理解したのか『わかりました』と了承してくれた。

『ありがとうございます。あ、この事はあの子には内緒でお願いしますね』

明久は店員にお礼をして、自分の財布から6400円を取り出して葉月のところへ戻った。

「お兄ちゃん、クマのぬいぐるみ買えたですよ！」

葉月が会計を済ませている間に明久は動物のおもちゃ売り場で何かを探していた。

そこに大きな包装紙を持って葉月が帰って来た。

明久は、葉月の目線に合わせるために腰を落とす。

「良かったね葉月ちゃん。これでお姉ちゃんが喜んで元気になってくれるよ」

「はいですっ！今日はデートしてくれたお兄ちゃんに葉月からのプレゼントです」

すると明久のほっぺたに柔らかい感触があった。思わぬプレゼントに唖然とする明久。

「今日は葉月とデートしてくれて、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「お兄ちゃんは、優しいですね。葉月が大きくなったらお嬢さんにしてあげるです」

「それは楽しみだな。じゃあ葉月ちゃんが僕以外の人を好きにならなかつたら考えようかな」

無理だとわかってはいるが、明久は夢を壊さないように葉月に話を合わせた。冷静に答える明久だが実際は、少し嬉しかったのか明久は顔を赤くしている。

「早く帰って、お姉ちゃんにプレゼント渡したいです！」

「その荷物重いでしょ。僕が持ってあげるよ」

葉月が持つ大きな包装紙を見て、明久は代わりに持ってあげた。

「それじゃあ帰ろうか葉月ちゃん」

「はいですっ！」

【第五十二問】 お姉ちゃん

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『知らないことを人に聞くのはその時恥ずかしい思いをするだけですむ。聞かずに知らないまま過ごせば、一生恥ずかしい思いをする』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥【きくはいつときのはじ、きかぬはいつしようのはじ】」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムッツ「聞く前に調べる」

【教師のコメント】

福原「最近はネットで何でもわかりますからね」

【吉井明久の答え】

明久「聞いたのに教えてくれませんでした」

【教師のコメント】

福原「無駄な恥をかきましたね」

B A K A T O T E S T

長い間、話をしていたのか少し日が落ちて夕方になっていた。

「ずいぶん遅くなっちゃったね。お姉ちゃん心配してるかな？」

「あう……。お姉ちゃん怒ると怖いですけど、このプレゼント渡したらきつと許してくれるです」

夕日に向かいながら歩いていると、前から息を切らせて走ってくる女子が明久たちの前にやって来た。ずいぶん慌てた様子で走って来たのか、明久たちの前で止まると馬跳びのように上半身を曲げて呼吸を整えている。

「葉月っ！ こんな時間まで、どこに行ってたのよ！ 心配したでしょ」

明久と葉月の前に息を荒げた一人の女子が葉月を呼ぶのだが、明久は夕日が眩しくて誰なのか確認できない。

葉月は声でわかったのか「美波お姉ちゃんです！」と嬉しそうな

声を出して美波のところへと小走りで行く。

美波お姉ちゃん？

明久がその女子に近づいて行くと「ええっ……?!」と驚いた声を出す。

そして、女子は葉月しか見えていなかったのか、声を聞いてから「えっ……?!」とようやく明久に気がついた。

そこに居たのは、勝気な目に大きめのリボンで髪を束ねてポニテールにしている、それはまぎれもなく明久と同じFクラスの島田美波だった。

「まさか葉月ちゃんのお姉ちゃんて、島田さんのことだったの?!」

「何で吉井が葉月と一緒にいるのよ？」

「お兄ちゃんも、お姉ちゃんも知り合いだったですか？ お兄ちゃんは葉月と一緒に、このプレゼントを買ってくれたです」

葉月は明久の持つプレゼントの横に立ち指差した。

「もしかして、お姉ちゃんのために買ってくれたの？」

「はいですっ。いつも葉月を守ってくれてありがとうございます」

「お姉ちゃんのこと気を使ってくれたんだ、ありがとう葉月」

「良かったね葉月ちゃん」

「吉井もありがとう。葉月と一緒にプレゼントを考えてくれたんだ」

「僕は付き添いみたいなものだから、そのプレゼントは葉月ちゃんが考えたんだよ」

「そうだったんだ。でも、葉月の面倒を見てくれたんだし……」

「そうだっ！ お礼と言っては何だけど良かったら、うちで晩ご飯食べて行かない？ 今日、葉月と二人だけで食事だったから」

「そんな僕は出して何もしてないんだから、気を使わなくても良いのに」

「お兄ちゃんも、一緒にご飯食べるですっ！」

「葉月も吉井の事が気に入ってる事だし、今日ぐらい……ね？」

「そうだな……」と少し考え「島田さんたちが迷惑にならないって

言うのなら、せつかくだしご馳走になろうかな」

「じゃあ決まりねっ！　こう見えてウチは料理得意なんだから、楽しみにしててよね」

しばらく歩いていると、「ここが、ウチの自宅よ」と美波と葉月が足を止めた。

そこは、大きな一軒家が建っていた。

「凄い大きな家だね」

「言うほど大きくないわよ。　普通の家と一緒にだもん」

「いやいや、僕のマンションよりも立派だよ」

「お兄ちゃん、早く中に入るですっ！」

明久が美波の家に驚いている間、葉月は先に玄関の扉を開けて待っていた。

玄関の門を通ると家から門までの五メートルほどあるのだが、そこ一面には芝生の庭があり、門と玄関までは石で作られた道が続いている。

石の道はデザインのひとつとして軽くS字になっているのだが、人間の心理なのだろうか、明久は石の道の上から落ちないようにと、わざわざS字に沿って歩いていく。

ようやく玄関に着くと、葉月がスリッパを綺麗に揃えて待っていてくれた。　明久が持っている大きな包装紙を横に置けるように、スリッパを少し端の方で置いてあった。　葉月は小学生にしては、ずいぶんと気のきいた女の子である。

「いらっしゃいです、お兄ちゃん」

「ありがとうございます。　お邪魔します」

明久はスリッパに履き替えて葉月に誘導され、玄関に入って真っ直ぐ行くとリビングに入っていた。

「うわぁ！　広いところだね」



リビングに入ると、まず目に入ったのは敷居のない広々とした空間だった。白を特徴とした壁紙に、洋風な置き物が飾っており、一角には小さな和室も設けられている。

「壁がないだけで、普通の家だってば」

「僕もこの家に住みたいぐらいだよ」と明久は冗談で言ったのだが、美波は「えっ?!」と驚いた。美波は、独り言のように小さい声で「ウチは別に一緒に住んでも………」と顔を赤らめて言うも明久は気がつかなかった。

「島田さん、プレゼントここに置いて良いかな?」

「あ、うん」と少し残念そうな顔をする美波。少し明久の反応が見たかったのだろうか。

「お姉ちゃん、さっそく開けてみてくださいです」

美波は大きな包装紙をセロハンテープで止めてあるところから丁寧に剥がしていく。そして、中からは一メートルほどの大きなクマのぬいぐるみが姿を現した。

「お姉ちゃん、日本に来てから疲れてたです。だから元気になってほしいと思って、お姉ちゃんの大好きなクマさんにしました」

「嬉しい………ありがとうございます」

「お礼は葉月だけじゃなくて、お兄ちゃんにもしてあげて下さいです」

「えっ? あ、いや僕は何もしてないから」

「このぬいぐるみは、お兄ちゃんが買ってくれたですよ」

「な、何で知ってるの葉月ちゃん?!」と思わぬ言葉に驚くしかなかった。葉月には、明久がお金を出して買ったと言うことがバレていた。店員はそんな事をするような人には見えなかった。つまり、葉月は明久の行動を全部見通していたと言うことなのか。

「葉月だって子どもじゃないです。お兄ちゃんがお金を出してくれましたよね?」

まさかこの歳で、そこまで考える力があるとは明久は予想していなかった。それを聞いた美波は明久に目をやる。

「ウチ、こんな素敵なプレゼントされる何て思わなかった」

「いや、そんな僕はただ……あの時に助けてもらったから、お礼がしたくて」

あの時とは、雄二と試験召喚戦争を行った後、明久が体力の限界で足が動かなくなってしまうたところを美波に助けてもらった時のことを言っている。

「ウチは、肩を貸したただけなのに良かったの？」

「島田さんが助けてくれなかったら、僕は雄二を……大切な友達を失うところだった。だから、このクマのぬいぐるみほどの大きさの感謝の気持ちとして受け取ってほしいんだ」

「うん、ちゃんと受け取ったわね。でも、これはウチが貰いすぎるから、今度は料理で返すわね」

そう言っつて、美波は立ち上がりキッチンの方へと歩いていると、

「あ、そうだ」と思い出した美波は振り返る。

「吉井ってパエリア食べれる？今日はパエリアにしようと思っつたの」

「食べれるどころか、大好きだよっ」

「良かった それなら作りがいがありそうね」

「僕も何か手伝うよ。前からパエリアの作り方を覚えたいと思っつてたから」

「それじゃあ、野菜を切るの手伝ってくれる？味付けとかはウチがやるから」

「わかった。えっつと包丁は……っつと」

「……………」

二人の楽しそうな会話を聞いている葉月が、じっと見ている。

「お姉ちゃんとお兄ちゃんは、付き合ってるんですか？」

【第五十三問】 姉としての自信

B A K A T O T E S T

【問題】 『英語 英文』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『When I write a paper, I try not to use the words "always" and "everyone" if possible.』を日本語で答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「When I write a paper, I try not to use the words "always" and "everyone" if possible.」

姫路「論文を書く際には、「いつも」と「みんな」と言う言葉なるべく使わないようにしている」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムツツ「When I write a paper, I try not to use the words "always" and "everyone" if possible」.

ムツツ「レポートを書くとき、できれば、私は、「いつも」「と言う単語と「皆」を使用しないようにします」

【教師のコメント】

福原「同じ言葉を使うのは良くありませんからね」

【吉井明久の答え】

明久「When I write a paper, I try not to use the words "always" and "everyone" if possible」.

明久「私のパパ。世界のアメリカにトライしたまま帰って来なかった」

【教師のコメント】

福原「無事だと良いですね」

【教師の指摘】

福原「I write a paper」私のパパ」

福原「try not to use the words」世界

のアメリカにトライ」

B A K A T O T E S T

「なっ……！ 何言ってるの葉月ちゃん？！ 僕たちはそんな関係じゃないってば」

その言葉を聞いた美波が少し寂しそうな表情を見せる。 それを見た葉月は明久にキツイ一言をお見舞いした。

「お兄ちゃんはバカです。 だから、これからは『バカなお兄ちゃん』って呼ぶです」

「あ、あははは。 葉月ちゃんは冗談が敵しいな」と明久は少し涙目になっている。

まさか、呼び名が『お兄ちゃん』から『バカなお兄ちゃん』になるとは思ってもみなかったからである。

「こら葉月。 そんな事言ってるで、お皿並べるの手伝って」  
「はいですっ」

葉月は美波の持っている皿を取りに行く。 そして皿を受け取った時に、葉月は小さい声で「お姉ちゃん、頑張って」と応援した。 美波はそれを聞いて、頬を赤く染めた。

「ほ、ほら吉井も、材料切ってくれなきゃウチが何も出来ないじゃないの」

「？ 島田さん、何だか顔が赤いけど熱があるんじゃない？」

明久が心配そうに美波に接近すると、美波の顔は余計に赤くなっていく。

「き、気のせいよ！ 早く野菜切らないと教えてあげないわよ」

「ええっ?! 分かったよ、切りますっつてば」

料理を開始して早五分。 ようやく料理が始まった。

明久は一人暮らしで料理自体は得意なのか、パエリアに使う具材を慣れた手つきで切っていく。 美波は明久の切った具材を炒めていく。 途中、明久に調理方法などを教えながら慣れた手つきで、あつと言う間に完成して、葉月が綺麗に並べた皿の上にパエリアを盛り付けていった。

「それじゃあ、少し早いけど晩ご飯にしましょうか」

「……いただきます」

明久がパクツと一口食べると、美波は感想が気になるのか持つ手が止まる。 動かしている口をじっと見て、まだかまだかと待っている。

数秒後、明久の喉が動いた。 美波は祈るような思いで「どう?」

と明久に聞くと、

「うんっ 凄く美味しいよっ!」

その言葉を聞いて、ほっとした美波はようやく自分もパエリアを口にすることができた。

「うん、今日も上手に出来て良かった」

食事は、美波のドイツの事や明久の記憶の事などを話に入れながら、一時間ほどで完食した。

晩ご飯を食べ終わると葉月は疲れたのだろうか、リビングのソファで眠ってしまった。 美波は風邪を引かないように、そつと毛布をかけてあげる。

明久と美波は、同じ居間にある白いふわふわの絨毯の上に座った。

「島田さんは、葉月ちゃんのことを本当に大切に思っているんだね」

「ウチの親は共働きで忙しいの。 だからウチが葉月のことを守つてあげなくちゃいけないから」

それを聞いて明久は今日の事を話し始めた。

「……………実はね今日、葉月ちゃんが島田さんにプレゼントを買おう

としていたのは、いつも島田さんが、葉月ちゃんの事を助けてくれるから元気がないんだって言ってたよ」

「葉月がそんな事を……」

「葉月ちゃんは、公園で中学生ぐらいの男の子たちに強くなるにはどうすればいいのかって聞いてたところを僕が偶然見たんだ。そこで、僕が葉月ちゃんにどうして強くなりたいのかって聞いたら何て答えたと思う？」

その質問に美波は首を横に振った。

「守られてばかりだから、今度は自分が強くなってお姉ちゃんを守るんだって。でも強くなればお姉ちゃんが元気になる訳じゃないから、プレゼントを渡してあげたらって言ったら嬉しそうに喜んでたよ。島田さんを……お姉ちゃんを元気に出来る方法が見つかったからだと思う」

「それで、ウチにプレゼントを買ったために……。この子、そう言うところだけは大人なのよね」

「僕も今日、葉月ちゃんと一緒に買い物をして同じ事思ったよ。」

本当にしっかりとした子だよ」

「葉月も、自分は自分で何でも出来るようになって思うてるの。」

「まだまだ子ども何だからウチに頼ってくれても良いのに」

「でもそれだと一方通行じゃないか」

「ウチは……、ウチは葉月を守るのなら一方通行でもいい。この子はまだ一人で何も出来ない子どもなの。だからウチが守ってあげないと真っ直ぐ歩けないの」

「だったら島田さんも、まだ子どもじゃないか」

「ウ、ウチは、もう子どもって言える歳じゃないわよ」

「島田さんだけじゃない。僕だって、雄二だって、みんな子どもだよ」

「何言ってるの。意味がわからないわよ」

「島田さんは、目を閉じて耳を塞いで真っ直ぐ歩ける？」

「そんなの無理よ」

「どうして？」

「だって、方向感覚がわからなくなったら歩けないじゃない」

「僕は歩けるよ。目を閉じて耳を塞いでいても道を踏み外さないで真っ直ぐに」

「……？」

「僕の後ろには、仲間が支えてくれている。前が見えなくなっても仲間が道を教えてくれる。道を踏み外しても仲間が道を正してくれる。だから僕には目を閉じて耳を塞いでも真っ直ぐな道を歩いて行ける」

「そんなの……、そんなの人に甘えているだけじゃない。人に頼つてばかりじゃ、自分で道も歩けなくなるじゃないの」

「そうだよ。だから一人では真っ直ぐに歩けないんだ」

「バカみたい。ウチらはもう子どもじゃないの。自分の事は自分で出来なくちゃならない大人なのよ」

「だから島田さんも、子どもなんだよ」

「ウチをあなたたちと一緒にしないでよっ！」

「だったら何で葉月ちゃんに心配をかけてるんだ」

「っ……！」

「自分の事は自分で出来なくちゃならないのなら、何で葉月ちゃんにそれほど心配させるような事をしてるんだよ」

「そ、それは葉月の勝手な思い過ごしでウチは別に……」

「関係ないってか。島田さんは大人になれば一人で歩けるようになるらないといけないって言ってるけど、それなら葉月ちゃんはいつになったら一人で歩けるようになるんだ」

「そんなのいつになる何て分かるワケないじゃない」

「分からないんじゃない。島田さんが歩かせようとしなからだ」

「えっ……」

「自分は一人で歩けるようにならなくちゃダメだと言っておきながら、どうして葉月ちゃんを自分の力で歩かせてやらないんだ」

「葉月はまだ小学生なのよ。ウチが支えてあげなくちゃ真っ直ぐ」



歩けないからよっ」

「……違うな。小学生だろうと中学生だろうと、高校生、社会人……いつまでも葉月ちゃんは一人で歩けないよ。今のままじゃね」「何よそれっ。葉月がいつまでも子どもみたいだって言いたいのか？」

「怖いんだろ、一人になるのが」

「っ……！」

「葉月ちゃんから手を離して孤独になるのが怖くて手を離せないんだろ」

「違う……ウチはそんな事」

美波は寒さに震える動物のように、体を小刻みに震わせている。

「島田さんは、葉月ちゃんを支えているんじゃない。葉月ちゃんにしがみついて離さないダダをこねる子どもと同じなんだよ」

「ウチは……そんな子ども何かじゃ……」

「なら、もう一度聞く。葉月ちゃんが一人で歩けるようになったら、島田さんは自分の力で歩けるのか。目を閉じて、耳を塞いで、それでも前が見えるのか」

「……………」

「それが自分の事は自分で出来るって言った島田さんの今の心だ」  
美波の震えは大きく変わり、そして大粒の涙が流れて来る。

明久は後ろから美波の両肩を支えた。その手は弱くも強くもなく、それでもしっかりと美波の肩を離れないようにガシツと掴んだ。  
「！」

「わかったでしょ。これが一人になった時に見える景色なんだよ」  
「怖い……、怖い。ウチは葉月を一人で守れる自信がなくて、ただ他に頼れる人がいないからどうしたら良いのかわからなくなっ  
つて」

「島田さんは凄いや。日本の文化に慣れてなくて大変なのに葉月ちゃんを一人で守って来た。だけど少し頑張り過ぎだ」

「だってウチがいなかったら葉月が……………」

「大切な人を守るために頑張っているのに、その頑張りを奪っちゃダメだって分かってる。　だけど少しくらい助けてあげても良いでしょ？　僕だって島田さんの気持ちがわかるよ。　雄二を助けようとして足が動かなくなった時は頼れる人がいなくて怖かった。　だけど、島田さんが僕を支えてくれたから怖くなくなった。　だから今度は島田さんを僕が支える番なんだよ」

「吉井が……ウチを……？」

「大丈夫、目を閉じてても耳を塞いでも必ず僕が島田さんを真っ直ぐな道に連れてってあげるから」

「……約束してくれる？　ウチを真っ直ぐ歩かせてくれるって」

「もちろん約束する。　島田さんが道を見失わないように、こつやつてずっと支えてあげる。　だから今日ぐらいは肩の力を抜いてゆっくり休みなよ。　今は『お姉ちゃん』じゃなくて『島田美波』として」

「……うん。　ありがとう」

美波は葉月を探して疲れていたのか、いつの間にか眠ってしまった。

兄や姉って言うのは、これほど弟や妹の事を考えてくれてるんだ。　僕の姉さんも、そうだった……。　うん、今度帰ってきたら少しはお礼しなくちゃだな。

明久は、起こさないようにそつと寝かせて、風邪を引かないように自分の着ていたコートを上に着せる。　そのまま静かに立ち上がり、玄関で靴に履き替えていた。

「まだ寒いんだから、これ着ていかないと風邪引くわよ」

玄関で靴を履いていると後ろから声が聞こえてきた。　明久が振り向くと、そこには美波が明久が着ていたコートを持って立っていた。

「ゴメン起こしちゃった？」

「ううん大丈夫。まだ寒いんだから外に出る時はちゃんと温かくして帰らないと風邪引くわよ」

美波は、後ろから明久にコートをかけてくれた。

「ありがとう。じゃあ、また明日学校でね」

「ね、ねえ吉井……………その……………吉井の事、これから『アキ』って呼んでも良い？ その代わりウチの事を、『美波』って呼んで良いから」

「どうしたの急に？」

「その……………ほら、大切な人を守るために頑張っている人に、その頑張りを奪っちゃダメなんですよ。だから、ウチの頑張りを邪魔しないですよ」

「……………？ うん、僕は別に良いけど」

「本当！？ じゃあ今日から、吉井の事、アキって言うからね」

美波は吉井明久の事を明久と呼べる事がそれほど嬉しかったのか、まるで子どものように嬉しそうに微笑んでいた。

「わかった。それじゃあね、島田さ……………じゃなくて……………み、

美波」

いざ『美波』と名前で呼ぶと、照れているのか少し顔を赤くする明久。

「今日は、本当にありがとうアキ」と美波は意外と素直に、そして何より嬉しそうに明久の名前を言った。

「うん。 晩ご飯、ご馳走様でした」

明久は、扉を開けて力チャンと扉を閉めると、明久の足音が次第に遠ざかっていった。

「あう……………バカなお兄ちゃん、帰っちゃったですね」

美波たちの声が聞こえていたのか、葉月は目を擦って寝ぼけながら玄関までやって来た。

「……………葉月、今はまだ無理だけど、いつか必ずこの想いを伝えられるように、お姉ちゃん頑張るからね」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十四問】 孤独の寂しさ

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 ことわざ』

問 以下の問いに答えなさい

福原「『最後に残った物には、思いがけない良いものがある』を意味することわざを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「残り物に福がある【のこりものにふくがある】」

【教師のコメント】

福原「正解です」

福原「あまり欲を出さずに遠慮深い人には思いもかけない幸福がやってくることもあると言っことのようにです」

【土屋康太の答え】

ムッツ「……優勝トロフィーが貰える」

【教師のコメント】

福原「『残り物』ではなく『残り者』って事ですか？」

【吉井明久の答え】

明久「残り物には腹痛がある」

【教師のコメント】

福原「それ3日前ですよ」

B A K A T O T E S T

すでに時計は六時を過ぎていた。しかし四月の季節は日が落ちるのが遅いためまだ街灯に光をとすほどの暗さではなかった。

そうは言っても遅くなった明久は満腹の腹が苦しくならない程度の速さで自宅に向かって走っていた。

「……あれ、姫路さん？」

ふと文月公園に目をやった明久は昼間に寝ていたベンチのところ  
で姫路が寂しく、ちょこん座り込んでいた。

明久の足は考えるよりも先に公園の中へとつま先を向かわせてい  
た。

「姫路さん」と呼ぶと姫路は少し驚いた表情を見せて、明久だと認  
識したところで「明久君」と立ち上がって返事を返した。

「ゴメンなさい明久君。私、明久君に何も言わずに帰ってしまっ

て」

「そんな事、気にしてないから大丈夫だよ。それよりちょっと話があるから横　座つても良いかな？」

「はいっ」と微笑んだ姫路の顔は明るかった。だが、あの時の事があつてか姫路の表情にはどことなく寂しいと言つ声聞こえて来そう、夜の気温のせいか明久には余計にそう感じた。

「今日はゴメンね。せつかくの休日だったのに僕のせいで迷惑かけて」

「そんな事ないですよ。それに迷惑どころかウサギを見に来ただけなのに、まさか明久君に出会えて嬉しかったですから」

「それを言うなら僕の方こそありがとだよ。デパートに付き合つてもらっただけじゃなくて僕の過去の事を教えてもらえる何て思つてなかつたもん……だけど僕と会つたせいで、姫路さんまで召喚獣の戦いに巻き込んで、しかもあのハゲが姫路さんの事を悪く言つて姫路さんを傷つけて……」

一度会話が途切れた。この間とはとつもなく長く感じた明久は、空を見上げて何か話そうと頭の中を覗く。

「明久君も不思議だと思いませんか？」

「えっ？」

「中学生の時の私。副会長をしてたつて言いましたよね」

「うん。僕が生徒会会長で姫路さんが副会長だつて」

「それなのに、試験召喚戦争の時に点数がFクラス並みだつた事に明久君は不思議だと思いませんか？」

「そうだ……。そう言えば確かに僕はそう思っていた。」

モヒカン頭たちとの試験召喚戦争の時に、姫路は明らかに頭の良い点数とは言えない、良くてEクラスレベルの点数だった。姫路は風邪を引いて二年生になってから、まだ学園には来ていない。

となると点数は一年生最後の振り分け試験の点数がそのままの状態に残っている。副会長となれば成績は優秀と言つのが当たり前と言えは当たり前。誰も候補がなくて姫路の立候補だつたと言つ

ならわかるが……。

「私ね、昔から勉強が大嫌い毎日学校に行くのが嫌で嫌でお母さんによく怒られながら登校したのを今でも覚えています」

「姫路さんが、勉強嫌い……？」

「人は見た目で判断しちゃダメですよ明久君」

「え？ あ、ゴメン……で、でも、それならどうして副会長になったの？ 普通なら成績が良くなくちゃ立候補しても投票される可能性は低いはずだけど」

「私も中学に入った時は、まさか自分が生徒会に入る何て考えもしませんでしたから」

「……？ まさか、無理やり入れさせられたとか」

「そんなんじゃないですよ。私はただ……、」

彼女はそこまで言っただけ一度声を止めた。呼吸が続かないのではなく、自ら遮断するかのように声を飲みこんだ。そして空を見上げて、夜の空気を一度吸い込み再び口を動かした。

「ただ、私の事を優しくしてくれた人の隣にいつも一緒にいたかったから……そう思った時から今まで見るのも嫌だった勉強を必死で覚えたからなんです」

勉強が嫌いだって言うのに、その人のために僕みたいな才能がなくても必死に勉強してたんだ。それほど姫路さんにとって、優しくしてくれた人って言うのは特別なのか。

「その人は、とても頭が良くして私なんかじゃ手の届かない場所で、最初は無理だつて諦めたりもしました。でも、その人はいつも私を待っていてくれた。だから頑張れたんです」

「それで勉強が出来るようになった姫路さんは、副会長になれたんだ」

副会長になれたんだ、と明久は口に出してからすぐに思った事がある。

副会長になれるほどの成績が、なぜ文月学園ではFクラス、良くてEクラス低レベルの点数なのか。



だからこそ、姫路の話はそこで終わるはずもなかった。

「副会長になれたのは本当に嬉しかったです。 やっと同じ居場所に辿りついたんだって思うと毎日の学校が楽しみでした」

でした。 この過去形に明久はどこか嫌な予感と言う感覚が襲ってくるような気がした。

それはたった一秒後に現実となる。

「……だけどそんな楽しい日々は長くは続きませんでした」

「？」

「ある日、いつも私の隣に居てくれたその人は私に何も言わずに遠くへ行ってしまっただんです」

「何も言わずにどこかへ……？」

「こんな事になる何て思ってた私には、毎日泣いてそれでもその人は帰って来なかった。 そして私はまた一人になったと思っってしまった瞬間に、その人のために頑張った勉強もその人に会える学校も何もかもが嫌になって…… いったい私は何のために頑張ってきたのか分からなくなって」

ギリツ と奥歯を噛みしめる明久。 ベンチから立ち上がった明久は姫路の前に行き、そして姫路の両肩を動かさないように固定する。

「そいつがいなくなったから、自分の人生全部投げ出したのかよ」

「……えっ、」

「姫路さんは、そいつと一緒に居たいんだろ。 そんな簡単に諦めて良いのか」

「じゃあ今までのように勉強して、その人を待つて待つて待ち続け、やっと帰って来たのに、私の事を何も覚えてなかったらどうしたら良いんですか。 私が今まで勉強して来た意味がないじゃないですか」

「何でそこで勉強の話になるんだっ！」

「私があの人と一緒に居られるのは、勉強が出来たからなんです！」「本当に勉強だけが、そいつと一緒に居る方法だと思ってるのか！」

「……っ！……」

「勉強が出来るようになったら、そいつは姫路さんの事を思い出して今までみたいに一緒に居るのか？ だったら、一番最初に出会った時はどうなんだ！ 最初から頭が良かったからそいつは姫路さんと一緒に居たのか？ 違うだろ！ 姫路さんは勉強が出来ないから一緒に居たのか？ 違うだろ！」

「そいつは、姫路さんと居るのが楽しいから一緒に居たんだろうが……！」

「姫路さんは勉強が出来るようになりたいから、そいつと一緒に居たのか！」

「違う……私は……、私は……」

「だったら、そいつが帰って来て姫路さんの事を覚えていなかったとしても、そいつの心が変わってなけりや必ず姫路さんの事を視界に入れてくれるはずだ！」

「……本当に思い出してくれるでしょうか」

「人は人をそう簡単に忘れる訳ない。だから信じて待っていてあげたら良いじゃないか」

「信じて待っている……。そうですよね、私が信じて待っていないかったら、いつまでも振り向いてくれませんよね」

「それに、もし思い出さなかったら僕が叩いても思い出させてあげるよ」

「本当に……、本当にですか」

「そいつが姫路さんの事を忘れていたのなら、絶対に思い出させてあげる。だから涙を拭いて前だけを見るんだ」

姫路は涙を拭いて明久の前に明るい笑顔を見せた。その笑顔には今まで感じた不安がなくなっていた。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十五問】 新しいFクラス

B A K A T O T E S T

【問題】 『化学 元素記号』

問 以下の問いに答えなさい

福原「Be C N O Ar K Ca Ga As Y Nb  
Ag I Ta Ra Ac U No」

福原「以上の18個の元素名を答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「Be＝ベリリウム C＝炭素 N＝窒素」

姫路「O＝酸素 Ar＝アルゴン K＝カリウム」

姫路「Ca＝カルシウム Ga＝ガリウム As＝ヒ素」

姫路「Y＝イットリウム Nb＝ニオブ Ag＝銀」

姫路「I＝ヨウ素 Ta＝タンタル Ra＝ラジウム」

姫路「Ac=アクチニウム U=ウラン N=ノーベリウム」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムツ「BeCNOArKCaGaAsYN  
bAgITaRaAcUNo」

ムツ「ベクノアーク 蚊が俊敏 タラコウノ」

【教師のコメント】

福原「訳がわかりません」

【吉井明久の答え】

明久「CAGACNOBENKYOASI  
TaCaRaGaNbArU」

明久「化学の勉強、明日から頑張る」

【教師のコメント】

福原「今から頑張ってください」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

公園を出た二人は、帰り道が同じだったらしく途中まで一緒に帰りながら話していた。ようやく日が落ちて来たのか、夕焼けが少し薄まり映画館の上映開始のように少しずつ照明が消えていつてい

る。「やっぱり私、一人じゃ何も出来ないダメ人間ですね」

「それなら世の中の全員がダメ人間になっちゃうよ」

「え？」

「人の限界ってさ、一人だと結構簡単なところで終わっちゃうんだよね。でも誰かに助けってもらったりすれば、一人では限界だったところよりも高みを目指す事が出来る。だから姫路さんも僕にも雄二にもFクラスの皆にもどんどん頼って行けば良いよ」

「……Fクラス。そう言えば、私ってまだFクラスの人と会ったことがないので、今さら行っても歓迎されないんじゃないかって今頃になって怖くなってきました」

「大丈夫だよ。姫路さんみたいな可愛い子なら、Fクラスの皆は絶対に歓迎してくれるよ」

と、突然姫路が足を止めたため明久が振り返ると、姫路は少し照れくさそうに微笑んでいた。

「どうしたの姫路さん？」

「いえ、明久君に可愛いだ何て初めて言われたので、何だかおかしくって」

「そうなの？ ああ、そう言えば昔の僕って姫路さんに意地悪してたんだっけ。まったく姫路さんみたいな可愛い人を意地悪する何て自分で自分が憎いよ」

「でも、それが明久君の良かったところでもありますから」と姫路は明久に聞こえない、今にも風で飛ばされてしまいそうなほど小さな声で。

「姫路さん、帰り道ってどっち方面なの？」

明久が立ち止まった場所は、Y字になっている道。明久は右の方が帰り道らしく右の道に指を差している。

「……………」

すると姫路は少し黙ってしまった。

「姫路さん……………」と明久が姫路に近づいてようやく姫路は遠くへ行っていた意識が戻って来たかのように遅れて返事を返した。

「大丈夫？ 何だか気分が悪そうだけど」

「いえ……、今日は嬉しすぎて少し疲れちゃったのかもしれませんが、あ、私はこつちですので明久君とはここでお別れですね」

姫路は、それじゃあと行ってY字の左方向に向かおうとした時だった。

「あ、ちょっと待って姫路さん。 実は姫路さんにこれを渡そうと思ってる」

「？」

明久はポケットに手を入れて取り出してきたのは、マッチ箱ぐらいの大きさが包装紙で包まれている物。そこにはプレゼント用の赤いリボンが付けられている。明久は葉月が買い物を済ませている間に自分もおもちゃ売り場で買い物をしていた。それが今、明久の手元にある物なのだろう。

「今日は一緒にデパートに付き合ってくれたお礼と、これから一緒に学園生活を送る仲間として、プレゼントを贈るよ」

姫路は明久の手からプレゼントをゆっくりと自分の手に取る。

「これを私にですか？ ありがとうございます明久君。 開けても良いですか？」

「もちろん」と笑顔で答える明久。

姫路は嬉しそいで早く開けたいような気持だが、それを抑えて丁寧に包装紙を剥がしていくと、中から四角い箱が出て来た。

その箱を開けると、そこにはウサギの髪留めが入っていた。

「姫路さん、ウサギが好きだって言うから似合うかなって思ってたさ。」

ちょっと予想外の事があって良い物が買えなかったんだけど、気に入ってもらえるかわからないけど」

姫路は箱を抱きしめるように胸に当てて「素敵なプレゼントです」と嬉しそうに答えた。

姫路は自分の髪にウサギの髪留めを付けた。

「に、似合ってますか？」

恥ずかしそうに頬を染める姫路に明久は「すっごく似合ってるよ」。

「嬉しい……こんな素敵な一日だったのは初めてです」

「こちらこそ、素敵な休日ありがとう。今日、姫路さんに会えて本当に良かったよ」

姫路はニコツと笑顔で答え、軽く頭を下げると明久に背を見せて帰ろうとした。

「姫路さんっ！」と明久は、帰る姿の姫路を見て呼びかける。

呼ばれた姫路は明久の方へ振り返る。

「また明日、学校でね」と夕焼けが薄まったそこには、明久の明るい笑顔がハッキリと見えていた。

少し時間を置いた姫路は「また明日。学校で会いましょうね」と、また笑顔を見せた姫路は振り返り帰って行った。

次の日。

明久は朝から走っていた。

「もうっ！あの目覚まし時計買い換えてやる！」

今日から、しばらくの間は新校舎にあるFクラスになった。

旧校舎が壊れた現在、Fクラスは多目的教室の一つを借りて今日から勉強することになる。明久としては旧校舎のFクラスに特に思い入れもなく（三日の思い出ほど）、早く新校舎の綺麗な教室が見たいらしい。



制服のポケットから携帯を取り出すと、昨日の日付で文月学園からメールが届いていた。そこには仮教室の案内と書かれたタイトルと地図が添付されている。

地図には新校舎1階の昇降口を入れてすぐにFクラスがあると書かれている。そこで明久は、地図に書かれていた通りに昇降口に入った。昇降口もFクラスは旧校舎の方にあつたため、明久が新校舎の昇降口に入るのは初めてである。

流石に新校舎だけあり、昇降口も綺麗になつているため、明久は昇降口で少しばかり周りを見渡しつつも自分の靴入れを探して上履きを履き替えた。

そして、地図に書かれている通りに新校舎に入ってすぐFクラスと書かれたプレートが視界に入った。

「おお凄い。さすが新校舎だけあつてプレートも綺麗だ」

早速教室に入ろうとすると、「おはようございます明久君」

明久を呼ぶ可愛らしい声が後ろから聞こえて来た。振り返るとそこには姫路瑞希の姿があつた。

「あっ、おはよう姫路さん。ちょうど同じ時間に来てたんだね」

もじもじと恥ずかしそうにする姫路。

「えっと……実は、30分ほど前に学校には来てたんですが……、その……一人では恥ずかしくて」

「恥ずかしい？……、心配しなくても大丈夫だよ姫路さん」

「そ、そうですか？」

「うん。制服似合ってるよ」

「あ、……いえ、そう言う事じゃないんですが」

「それじゃあ、さっそく入ろうっ！」

教室のドアに手をかけ、勢いよく開けると、

「えっあ、あの明久君っ！」と心の準備が出来ていない姫路は慌てて扉を閉めようとするが遅かった。

いつもなら、この時間になつてもまだらな人数しかFクラスにはいないのだが、新校舎に早く入りたかつたFクラスのバカたちは朝

早くから集まっていた。

女子ひめじの声を聞いた瞬間、男子やせうたちは一斉に振り向いた。

「うおおおおおい吉井っ！ 誰だその素敵な女子は？！」

「お前ばっかり良い思いさせるかっ！ こちらの席が空いてますよ」

「おいテメエそこはオレの席だぞ！ こっちが空いてますからどうぞどうぞ」

「バカ！ そこはオレの席だってば！」

「お前は勉強してねーんだから地べたにでも座ってるっ！」

姫路を見た瞬間、教室の中の男子たちが一瞬で大騒ぎとなっていた。まるで今年の福男を決める戦いのように、我先に姫路に近づこうと教室は溢れ返っている。

明久は先に教室の中へと入って姫路の方に向きを変えて手を差し出した。

「このクラス、面白いでしょ」

ここに来るまでの間、ずっと考えていたFクラスの反応。それは、考えていた事とは全く反対の答えを出してくれた。これがテストなら赤点だけど、姫路の笑みは満点だった。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十五問】 新しいFクラス（後書き）

第二章これにて完結となります。

せつかなので第二章を振り返ってみようかと思えます。

実は当初の予定では第二章は葉月ちゃんをメインにした一話完結の短編モノでした。

そこに姫路さんを追加、常夏コンビの乱入と当初の予定が全て変更になり、第二章が完成しました。

今回はプロットを作らず書いたので、かなり雑な内容になっているかもしれません。デパート限定にしまったのが展開のグダグダ感が出ています。

作者自身、あまり満足した終わり方にならなかったのが悔しいところ。プロット作りは大切ですね。

こんな作品を最後まで読んでくださった方はありがとうございます。

途中で切った人は無駄な時間を使わせてしまいすいませんでした。それでは、しばしの休載とさせていただきます。

いつになるかは分かりませんが、第三章の開始を気長に待っていてください。

【第五十六問】 召喚者の才能 召喚獣の能力2

B A K A T O T E S T

【Fクラス】

<人物紹介> 『吉井明久』

二年Fクラスの戦力者の一人。

文月学園入学後すぐに、学園を崩壊させた人間。

その時に今までの記憶が失ってしまい、事件の真相は謎のまま。

今のところ、藤堂歩と関わっていたと言う記憶だけを思い出している。

過去を知る、姫路瑞希によると明久は今の性格とは全然違うらしい。

学力はAクラス。

本人が言うには、気持ちが高ぶると性格が悪くなるとの事。

不良と言った事ではなく、言葉使いが強くなる事があり、怒鳴りつけてしまっている事に熱が冷めてくるとやっと理解するらしい。

性格の温度差がある。

現在、観察処分者として召喚獣のダメージがフィードバックするよ  
うに設定されている。

<生誕才能> 『精神浄化【カタルシス】』

生まれた時から持っている才能……と言われている。

明久は記憶喪失で才能については自覚していないが、当時の明久を  
知る姫路瑞希が才能を持っていると説明している。

姫路によると外の傷は治せないが精神面の傷はどれだけ深く傷ついても必ず治せると言う才能らしい。

精神的な傷のため、それを感じるのは才能に影響された人物のみで、明久にはそれを実感する事は出来ない？ 詳しくは説明されてはいない。

明久の性格の変化は、この才能による効果が発動されているのではないかと明久は考えている。

人の傷ついた心を明久が怒る事で浄化させているのではないだろうか。

<覚醒才能> 『学習装置【ワーキングメモリ】』  
補習授業によって開花させた才能。

学力の記憶をなくしていた明久だったが、短期記憶能力によってAクラス並みの学力を持てるようになった。

<明久の腕輪> 『条件召喚型腕輪 絶対領域【レッドライン】』  
400点以上で使用可能な召喚獣の腕輪を、200点以上で使用する事が可能になる。

ただ、『学習装置【ワーキングメモリ】』で学力が上がったため、あまり腕輪を使用せずとも召喚獣の腕輪が使えるようになった。

<召喚獣の腕輪> 『擬似複製【ダミーアカウント】』  
召喚獣が二体に分裂する事が可能。

ただし点数を二分割させて召喚させるため、一体の攻撃力は半減されている。

本体である召喚獣を『主獣【メイン】』  
分裂させて召喚した召喚獣を『副獣【オプション】』

召喚獣の腕輪効果を解除する時は『副獣召喚解除【オプションカット】』とキーワードを唱えると解除される。召喚者である明久が腕輪の能力を解除すれば召喚獣の点数が元に戻る。

<召喚獣のテーマ> 『強がり狐』

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『坂本雄二』

小学生の頃から「神童」と呼ばれていた秀才。

二年Fクラスの代表だが、実力はAクラス並みでFクラスにとって最強の戦力者の一人。

学力はAクラス。主に数学を得意とする。

今現在、Aクラスの霧島翔子と結婚を前提に付き合っているとか噂が。噂の発信源はAクラスの代表から。

<生誕才能> 『相対音感【ノイズキャンセラー】』

生まれつき持っている才能。

半径五十メートルの範囲からは、音と言う音を全て聞くことが出来る言わば地獄耳。

それが例え四十メートル先の小さな声だとしても意識を集中させれば目の前で喋っているかのようにハッキリ聞こえる才能。

ただし、あくまで音が聞こえやすいだけの才能に過ぎない。

美波の才能『絶対音感【サウンドレコーダー】』と似ているが、性能を比べれば圧倒的に美波の才能が上。

美波は音を聞く訳ではないが声・動物・文字あらゆるものを自分で理解出来る言葉が浮かんでくる。

それに比べて雄二の才能は、普通の人間が音を聞き取れる限界を超えた才能と言っただけで、聞こえて来る声を全て理解出来る訳でもない。

ましてや記憶することすら普通の人間並みしか能力が発揮されない言わば、絶対音感の劣化版と言ったところ。

雄二自身は、人の声を盗み聞きするのに興味はなく、普段はあまり使っていないとの事。

<覚醒才能> 『完全攻略【クリアハンドレッド】』

小学五年生の時に開花させた才能。

全てにおいて『超える』と言う考えが働いている。

現在は、誰よりも翔子を守る想いを超えるために才能が働いている。

<雄二の腕輪> 『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』

本来、教師にしか起動できない召喚フィールドを擬似的に召喚可能にさせる腕輪。

擬似召喚フィールドの使用可能領域は制限されていないため、どこでも使用可能になっている。

現在は、学園長に渡っているため不明。

<召喚獣の腕輪> 『爆炎暗黒物質【ニユートリノ】』

700点以上を超える時に使用可能な腕輪。

現時点では、雄二のみ700点以上の腕輪が使える。

黒い球体が『光』を食らい、膨大な光を食らいきれなくなると爆発を起こして召喚フィールド内全てを焼き尽くす。ただし、使用後に500点を消費する。現時点では、400点以上の腕輪の能力は不明。

<召喚獣のテーマ> 『群れを狩る狼』

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『木下秀吉』

新学期初日に明久から告白を受けた超美少女。

秀吉曰く「男」と言っているが真偽のほどはハッキリしていない。

学力はFクラス。得意科目はこれと言っていないらしい。

その代り、演劇部に所属しているため演技力ならAクラス。

双子でAクラスに瓜二つの姉、木下優子がいる。

<生誕才能> 『真相心理【ポーカーフェイス】』

生まれつき持っている才能。

他の人の声や動物の鳴き真似が可能な才能。

しかし、姉である優子にも言えない才能の本当の能力があるらしい。

<召喚獣の腕輪>

現時点では不明。



<召喚獣のテーマ>  
現時点では不明。

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『土屋康太』  
ムツツリーニ。これだけ聞けば、ほとんどの男子は誰なのかわかる。

かなりの情報網が強く、どこからともなく秘密情報を持ってくる。ただし、本人の情報はほとんど知られていない。彼は否定するが、Aクラスの工藤愛子を意識しているとの噂。

<生誕才能> 『不正入手【フリーダム】』  
生まれつき持っている才能。  
あらゆる情報を不正に入手する才能。  
この能力によって、相手の行動を先読みする事が可能。

<召喚獣の腕輪> 『四面楚歌【ルバートカルテット】』  
本体以外に、同じ姿をした四体の召喚獣を出現させる事ができる。  
ことわざにある四面楚歌のように、敵を四体で囲い込み本体である召喚獣が止めを刺す。

<召喚獣のテーマ>  
現時点では不明。

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『島田美波』

ドイツからの帰国子女。

新学期から明久と同じFクラスに転校してきた。

美波は明久の事を「アキ」、明久は美波の事を「美波」と呼ぶようになった。

葉月と言う小学五年生の妹が確認されている。

<生誕才能> 『絶対音感【サウンドレコーダー】』

生まれつき持っている才能。

全ての言葉を理解する事ができる才能。

ドイツから帰国したばかりの美波は、すぐに日本語に適應する事が可能だったため苦労はしていない。

他にも、教科書やノートに書かれた文字を見るだけで名前がわかる。ただ、化学の実験や数学の数式の意味がわかっていても使い方や応用がわからないため語学以外は苦手。

日本語は分かるが、日本の文化には少し苦労している。

<召喚獣の腕輪>

急な転校で召喚獣と契約ができていないため、召喚獣の代わりとなる『代理型召喚獣【エルフ】』を学園長から借りて使用している。腕輪は設定されていないため使えない。

< 召喚獣のテーマ >

現時点では不明。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

< 人物紹介 > 『姫路瑞希』

明久の過去を知る人物。

外見では勉強の出来る女子に見えるが、どうも勉強は大の苦手らしい。

それでも、昔はある人に近づくために一生懸命努力して学力を上げて中学三年では副会長を受け持っていた。

しかし、ある理由から現在では成績が昔のように下がり現在ではFクラスになってしまった。

明久からプレゼントされた、ウサギの髪止めを毎日付けている。

< 生誕才能 >

現時点では不明。

< 召喚獣の腕輪 >

現時点では不明。

<召喚獣のテーマ> 『紅桜の乙女』

B A K A T O T E S T

### 【Aクラス】

<人物紹介> 『霧島翔子』

二年の最高成績者。

現在は、

雄二と結婚式はどこにするか考えているとのこと。

雄二と新婚旅行計画をどこにするか考えているとのこと。

雄二と新居はどこにするか考えているとのこと。

<生誕才能> 『完全記憶【フルコンプリート】』

生まれつき持っている才能。

一度見たものは全て覚えてしまう才能。

これにより、どれだけ難しい問題でも一度理解すれば、一生忘れる事がない。

応用として、相手の動きや癖を記憶して、行動パターンを先読みする。

<召喚獣の腕輪> 『光解離領域【フォトンベルト】』  
『光の領域』と呼ばれる空間に入る事ができ、光のように一瞬にして移動する事が可能。  
ただし、召喚獣を攻撃するためには光の領域から出てこなければ攻撃できず、さらには召喚者にも光の領域の中は見えていないため直線攻撃しか出来ないのが弱点でもある。  
雄二の召喚獣の能力には、能力効果が無効になってしまう。

<召喚獣のテーマ>  
現時点では不明。

## B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『工藤愛子』  
ムッツリーニで遊ぶのが大好きなボーイッシュ女子。  
アクラスの代表、霧島翔子とは仲が良いのか、よく一緒に話している。  
彼女曰く、ムッツリーニに好意を持っている事を完全否定はしなかった。

<生誕才能>  
現時点では不明。

<召喚獣の腕輪>  
現時点では不明。

<召喚獣のテーマ>  
現時点では不明。

## B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『木下優子』  
秀吉の姉。

特に情報は入って来ていない。  
秀吉に聞いてみたが、秀吉は答えてくれなかった。  
結論を言うと、謎多き女子だと言う事だけがわかった。  
Aクラスの工藤愛子とは仲が良く、よく一緒に話している。最近  
では翔子とも話している。

<生誕才能>  
現時点では不明。  
もしあるとしても、秀吉と同じ才能ではないと言う事だけが判明している。

<召喚獣の腕輪>  
現時点では不明。

<召喚獣のテーマ>

現時点では不明。

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『久保利光』

二年生の男子で最も成績が良い生徒。

あまり人とのコミュニケーションを好まないのか、素性はほとんど知られていない。

小説を読むのが好きなのか、出会う時は必ず片手に小説を持っている。

406

<生誕才能>

現時点では不明。

<召喚獣の腕輪>

400点以上に達しているのだが、試験召喚戦争で美波を見くびって一瞬で負けたため現時点では不明。

<召喚獣のテーマ>

現時点では不明。

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『常村勇作』

文月デパートでマナーの悪かった二人組の一人。

モヒカンっぽい、モヒカンじゃない、でもモヒカン頭のモヒカン野郎。

二年Aクラスの中ランクの成績者。

見た目はバカっぽい但实际上には成績優秀な生徒。

夏川と名前を組み合わせて、常夏コンビと言っている。

一時は『冷血の常夏コンビ』と呼称していたが、ある日を境に『常夏コンビ』に改名している。

<生誕才能>

現時点では不明。

<常村の腕輪> 『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』

本来、教師にしか起動できない召喚フィールドを擬似的に召喚可能にさせる腕輪。

擬似召喚フィールドの使用可能領域は制限されていないため、どこでも使用可能になっている。

雄二の使用していた腕輪とは違う型なのか、試験召喚戦争後にコンセントに水が入った時のように青白い光を放って壊れた。

どうやら使い捨て腕輪だったらしい。



<召喚獣の腕輪>

現時点では不明。

<召喚獣のテーマ> 『群れをなす狼』

B A K A T O T E S T

<人物紹介> 『夏川俊平』

文月デパートでマナーの悪かった二人組の一人。  
スキンヘッドだけしか印象のない男。

常村と同じく二年Aクラスの中ランク成績者。

姫路と明久と同じ文月中学の卒業生らしく、姫路の過去を掘り起こし精神的にダメージを負わせて楽しんでいた。

常村と名前を組み合わせて、常夏コンビと言っている。

一時は『冷血の常夏コンビ』と呼称していたが、ある日を境に『常夏コンビ』に改名している。

<生誕才能>

現時点では不明。

<召喚獣の腕輪>

現時点では不明。

<召喚獣のテーマ> 『色彩の猿』

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

## 【その他】

<人物紹介> 『藤堂歩』

文月学園の学園長である、藤堂カヲルの孫。

年齢が三十代前半と喫煙者と言う事ぐらいしか情報を知られていない。

祖母の学園長とは、どのような距離なのか不明。

何が目的なのか、召喚獣を学園外で使える腕輪を何に使うのかと言った行動が謎のまま。

<生誕才能> 『不完全攻略【デバッグミス】』

どれだけ理解して実験をしても結果は必ずミスが見つかってしまう。電化製品で言えば不良品しか作れない才能のため、明久や雄二に代役を任せて実験を繰り返し返している。

藤堂自身が使うと腕輪が才能に邪魔されて壊れる事を恐れているのだろうか。

<召喚獣の腕輪>

学園に登録していないため所持していないと思われる。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

<人物紹介> 『島田葉月』

小学五年生の女の子。

島田美波の妹で、ツインテールの髪形を気に入っている。

明久の事をなぜか『バカなお兄ちゃん』と呼ぶようになってしまった。理由は不明。

<生誕才能>

現時点では不明。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

<召喚獣の腕輪の種類>

『特殊系能力【キネシス】』

光の領域や分身と言った特殊な能力が使えるようになる。

ほとんどの召喚獣はこの能力に関する腕輪を持っている。  
能力によっては効果が強くなるほど、使用条件が必要になってくる  
物もある。

該当能力

『擬似複製【ダミアアカウント】』

『四面楚歌【ルバートカルテット】』

『光解離領域【フォトンベルト】』

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

『範囲系能力【レンジ】』

攻撃対象が複数の範囲に及ぶ能力なのだが、使用には召喚獣の体力  
を大量に使用する。

この腕輪を持っている召喚獣は少なく、3種類の能力の中で最も稀  
少種である。

該当能力

『爆炎暗黒物質【ニュートリノ】』

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

『打撃系能力【インファイト】』  
召喚獣そのものに攻撃力強化に関する能力だが、攻撃力の上昇が高まる程、効果が切れた時の副作用によって召喚獣の点数が下がってしまう。

該当能力

現時点では不明。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十七問】 魔女狩りの魔女（前書き）

第三章 『新人生歓迎会編』

【第五十七問】 魔女狩りの魔女

B A K A T O T E S T

草木も眠る丑三つ時。

文月町にあるマンションが建ち並ぶ所で10人の若い男たちが裏路地に迷い込んだある一人の男をまるで獲物を狙うハイエナのように囲んでいる。手にはナイフやスタンガンといった道具を持っている。もちろん手品に使うようなおもちゃではなく、リンゴが切れたり人を気絶させるほどの威力を持った武器。

その男は、ひよろつとしていても関わらず運動神経が良さそうな明久より少し高い身長で、髪形は短髪に近くメガネをかけて片手には愛読書なのか茶色いカバーが被せられた小説を持っている。

文月学園における二年Aクラス次席。 久保利光<sup>くほとしみつ</sup>。

学年次席の実力を持つ久保でなくとも、この状況を理解できないはずはない。だが知的な久保は周りの状況にも目をくれず、ただ愛読書である本を見るために視線を少しさげている。

「よお兄ちゃん。こんな時間にどこ歩いてんだ？ 良い子はオネネの時間じゃねーのかあ？」

周りを囲む男の一人がそう言うが、久保は眉ひとつ動かさない。ただ動かしたのは癖なのか右手の中指でクイツとメガネの位置を動かすだけ。呼吸の乱れもなく、黙々と愛読書のページを一枚めくる。

「なにシカトこいてんだテメエ？ こいつでブスリ殺つちまうぞ」  
久保は何も言わない。その代りパタンツと愛読書を閉じる音が静かな裏路地に響いた。

瞬間、男たちは少し反応を見せるが久保は中指でメガネの位置を

動かした。

そして、

「君たちは、僕と仲良くしてくれるのかい？」

初めて口を開いた言葉がこれだった。まるで状況の意味を全く理解していないこの言葉に男たちは互いに視線を合わせ、

「だははははっ！ 何言ってるのこいつ」

「サイツコウに面白れーなお前！ ああ良いぜ、お前は今からオレたちと仲間だ」

と、久保の両端の口が上に動いた。

「そうかい。それじゃあさっそく遊ぼうじゃないか」と右手をキヤッチボールの球を受け止めるように構えた瞬間、裏路地にドーム型の幾何学的な魔方陣が現れた。裏路地はマンションとマンションの間があまり広くはなく、実際には円形状に形成はされていないが、まるで虹のようにアーチを描くような曲線が久保を中心としたところから10mほどの範囲で広がっていく。

「試験召喚獣召喚【サモン】」と久保が軽く返事をする感じで唱えたのは、文月学園の試験召喚システムである召喚獣の召喚許可。

本来なら学園内であり、教師の立会いの下行われる試験召喚戦争などではか口にすることのない言葉が満月の下で、鮮やかな色を出しながら化学式、数式、漢字、英語と言った字が浮かび上がっていく。久保の前には幾何学的な魔方陣を形成して、空中には「魔女狩りの魔女」とガラスのような透明なプレートが、まさにガラスのように碎けてブロックとなったプロگرامから足を形成し始めた。そして、次に腰、胴、頭と作られると、そこには召喚許可を出した久保利光をデフォルメした姿が出現した。

瞬間、久保の召喚獣は手をクロスさせて腰の方に持っていく。

まるで女性が服を脱ぐ仕草のようにすると両腰が工事で溶接する時に光る火花のように激しく光り、そこから別次元のところから草を引き抜くようにしてクロスした両方の腕を前に持っていく。ようやく引き出した物は久保の召喚獣と同じほどの大きな両手鎌。見



るからに禍々しいオーラを漂わせるヴァイオレットは、まさに死神の持つ鎌のようだ。

コンクリートの上をシューズが擦る音が聞こえる。

「なっ……、何だよそれ！ テメエなにしゃがった!？」

最も久保に近づいていた赤い服を着た茶髪の男が服の色とは全く違う真つ青な顔へと変化していった。

久保は軽く答えた。 面倒くさそうな相槌を打つかのように適当に。

「遊びだよ」

言葉と同時に赤い服の男の目の前には、死神のような姿の小さな男が視界に入ってきた。そして恐怖の言葉を発する前に、その両手に持った死神の鎌が裁きを下すかのように十字架に斬りつけられた。

声はなくドサリとコンクリートの上に土のうでも上から落とした音と夜の冷えた空気が他の男たちの血液を遅くさせた。

「お、おい……」赤い服を着た男に近かった金髪の男が乾いた声で男に近づいて「な、何してんだよ、冗談だよな」とうつ伏せに倒れる赤服の男の肩に手を乗せて軽く揺らした。

だが赤服の男はピクリとも動かない。まるで捨てられた人形みたいにその場で地面と一体化するかのよう張り付いている。

「安心しなよ。ただ精神面を斬りつけただけだから、そのうち意識は戻る」

その瞬間、肩を持つ手の目の前に小さな足が見えた。

「……」  
金髪の男が、ゆっくり視線を上げると意外とすぐに顔を確認できた。そいつはあまりにも小さく人間とは別の生き物。 生き物と言っよりも死神の顔。

「う……、うわああああああ！」とあまりの恐怖に足が付いていかずその場で尻もちをつく死神は小さいながらも確実に1歩づつ金髪の男に近づき悲鳴と共に後ろに背もたれがないのに気が付か

ないまま落ちるかのように、疑いもなくそのまま地面へと倒れた。  
草木も眠る丑三つ時は、恐怖と言う名の目覚まし時計が鳴り始まった。

「さあ、僕と一緒に遊ぼうよ」

「うああああああっ！！」と我先にと体の動く者から久保から逃げるために後ろに振り向いて走って行く。

が、

「何だよこれっ！ 何でここから出られないんだよ！ くそっ！  
通せ！ オレを逃がしてくれ！」

恐らく久保が出現させたとされる、試験召喚フィールドの膜が張られているところで男たち数人がガラス張りに張り付くようにして集まっている。

「無駄だよ。 この召喚フィールドは僕の許可がなければ解除できない仕掛けになっている。 さあ諦めて僕と一緒に遊ぼう」

「来るな化け物！ テメエみたいなのに一緒に遊ぶ訳ねーだろ！  
さっさとここから出しやがれ！」

無表情だった久保の眉がピクンと動いた。

「そうか。 君たちも僕と一緒に遊んでくれないんだね」久保は召喚獣に指示を出して、言葉に感情を乗せないまま「君たちとは友達になれなかったようだね」と言葉を残して逃げ惑う男たち全員を斬りつけた。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十七問】 魔女狩りの魔女（後書き）

第三章 序章と言うことで投稿しました。

休憩がてら書いただけなので、本編開始はまだまだ先になります。

【第五十八問】 仮Fクラス（前書き）

投稿が遅くなってしまい申し訳ないです。

時間の都合でどうしても遅くなってしまいましたが、第三章本編を始めていきたいと思えます。

【第五十八問】 仮Fクラス

B A K A T O T E S T

季節は暖かさが増して、学園を彩っていた桜の道は緑色が一面を覆って涼しげな音を鳴らしている。新学期が始まって早一ヶ月が経過した世の中では、やっと新しい環境に慣れてきてようやくスタートラインから走り出したが、ここ文月学園は違う。

新入生歓迎会。

文月学園に新しく入学して来た新入生を在校生がもてなす学園行事の一つ。当日は各クラスが演劇や模擬店と言った出し物で新入生を歓迎すると言うもの。本来なら毎年新学期が始まってから一週間後に行われる予定だったが、今年は旧校舎が崩壊した事で一カ月遅れて明日の五月十三日に行われる事に決定した。

原因は他でもない吉井明久、坂本雄二による文月学園崩壊事件だ。ちょうど一カ月前。藤堂歩によってそそのかされた坂本雄二が学園使用した特殊な腕輪によって文月学園は形を残さず崩壊した。学園の旧校舎は、順調に再建築が進んでいたが建て直されるには、まだ一ヶ月ほどの時間が必要だった。

とは言ったものの、さすがに旧校舎がなくなったからと言って学園を休校にする事が出来ないため、旧校舎を使用していたクラスは、新校舎の多目的教室を仮の教室としてしばらくは使うことになった。ただ嬉しい事は、今までのFクラスの教室は昇降口から一番遠い場所で、それだけでも時間ロスになるが、新しく設置された新Fクラスは新校舎の昇降口すぐのところにあるため今までよりも少し遅く家を出ても大丈夫になった。それ以来はまだ時間があるから後5分だけと言って結局は前と変わらず遅刻ギリギリな訳だが。

そんな事を考えつつも、明久は今日も昇降口に入り、自分の下駄箱に手を入れた。

「……あれ、何か入ってる」

いつものように、靴を脱ぎつつ下駄箱に入っている上履きを視界に入れずに取るうとしたら、ガサツと言う軽い音と、靴の柔らかい素材ではなく少し硬めの素材の感触があった。

いったん手を下駄箱から手を抜いた明久は、下駄箱の中に目をやると一通の手紙が入っている。

「これって……」

下駄箱に紙。誰がどうみてもラブレターと言う言葉が最初に頭に浮かんでくる。

「ついに僕にも春が来たのかな?!」

思わず声が漏れてしまい、とっさに当たりを見渡した。この学園にはFFF団と言う謎の組織があるらしく、そいつらに知られれば生きては帰れないと言われている。まあ帰れないと言われていると言う時点で嘘だってわかるけれども、実際に遭遇したらそれはそれで後々面倒になりそうだ。

明久は一度手を離して辺りを見渡した。登校してくる哀れな野郎たちの視線を確認するために。

「よし、誰も僕に殺意を持っていない奴はいないな」

そして改めて手紙を手に取り、ちょうど人がいなかったためその場で手紙を開けてみた。

水色一色の封筒を開けると中には一通の手紙が綺麗に半分に折りたたまれて入っている。中からは女子が持っていたいそうな可愛い花柄模様の入った便箋<sup>びんせん</sup>。

「やっぱり、女子からだよね……、これって女子からだよね？ あついに僕にも青春の1ページが刻まれようとしているんだ」

明久はガッツポーズを取りながら、さっそく折りたたまれた手紙を開いて読んでみた。

『吉井君へ。今日の放課後、午後五時に校舎裏で待っています』

十五行書ける便箋には、たったこれだけの言葉がいかにも女子と  
言う感じの字で一行に書かれていた。相手からの名前はない。

明久としては、初めて会った時からとか、あの時、助けていた  
だいてゝとか、そんな展開を期待していたが、現実とは寂しいもの  
だ。

「いったい誰だろ？ 僕って学園に入ってからそれほど人と話した  
事ないのに」

まさか姫路さんが美波？ 困ったな、僕には秀吉と言う婚約者が  
いるのに。

「……いや、もしかして雄二あたりが僕を騙そうとして書いたのか  
も」

あの坂本雄二なら、こう言った事をやりかねない。明久はそう  
思うと自分で納得したが内心ショックでもあった。

「でも、もしかするとして事もあるし、帰りに行ってみようかな」  
そもそも今時は、携帯電話のメールがほとんどでラブレター何か脅  
迫状ぐらいにしか使われてないだろうと思いつつ鞆に封筒を入れて  
仮Fクラスの教室の扉を開けた。

仮教室は新校舎と言うだけあって、とてつもなく綺麗な教室。

さすがに豪華とはいかないが、新校舎にあるDクラスの教室と同じ  
感じ。Dクラスは言わば標準設備で、仮Fクラスも前のFクラス  
とは違い標準の机と椅子までもちゃんと配置されている。本来な  
らFクラスの設備がそのまま移動になるため机も椅子も配置されて  
はいないが、今回は試験召喚戦争とは関係ない出来事で、学園長の  
少しばかりの配慮と言ったところか。

「よお明久……って何で朝からテンション下がってんだよ」

明久は教室の後ろから入ると、それに気が付いた男が話しかけて  
来た。

声の方向に視線を移すと、教室の一番後ろの席で腕を頭の後ろで

組んで体重を後ろにしているからか少し椅子を浮かせて座っている男が明久の方を見ていた。

Fクラス代表の坂本雄二。あのAクラスとの試験召喚戦争が終わってからは、不気味なほど性格が変化していた。新学期初日は一匹オオカミのように吠えていた雄二が、まるで首輪をつけられた飼い犬のようだった。実のところ本当に首輪が付けられている訳だが明久は笑顔で雄二の横を通り過ぎて一番後ろ端の自分の席に座る。

「おいこら、この状況を見て何食わぬ顔で通り過ぎてんじゃねーよ」「あ、雄二いたんだ。ゴメン、逃げ出した野良犬が入って来たのかと思つたよ」

「こんなデカイ野良犬いたら教室が騒ぎになるだろうが」

「いやあゴメンゴメン。それで、その首輪はどうしたの？」

「……オレが翔子から逃げてばかりだったから、絶対に逃がさないようにと首輪をつけられた」

「今日も平和だね」

「どこがだよっ！」

明久はふと思った。翔子から逃げれなくなった腹いせに明久の下駄箱にラブレターと言う名の脅迫状を入れたのか。

「だからか」と明久は自分の椅子から立ち上がり雄二のところへ歩いて行く途中で教室の中を見渡した。

教室の席は、前のFクラスと同じ順番で座っているため、明久は美波の横、雄二の二つ横の窓際席。Fクラスの生徒は男女秀吉を合わせて四十八名いるため、縦六列×横八列で机が並べられている。姫路の席は美波の二つ前の席。ムツツリー二の席は、姫路の席から右に二つ飛んだところに座っている。

こうして見ると、すでにFクラスにはほとんどの生徒が教室に入っている。

姫路に美波、それに秀吉もすでに登校していると、誰が明久の下駄箱にラブレターを置いたのか推測できない。と言うか、



そもそもその三人からの手紙なのかどうかもわからない状態では詮索しようがない訳だが。

それとも、やはり目の前にいる坂本雄二が犯人なのか。

「ねえ雄二、このラブレ……」

その瞬間、明久の背中に南極の氷でも入れられたかのような感覚を覚え、咄嗟に口を縫い付けた。今の殺気は尋常ではないほどの殺意に満ち溢れていた。

辺りを見渡すと、何食わぬ顔でカッターナイフを手にして世間話をしている生徒たちが目に入った。まさか噂のFFF団って言うのはこのFクラスにいるって言うのか。だったら、ここは話題を何とか変更させないと。

「は？ ラブレ何だつて？」

「いや……えっと、ハトサブレって美味しいよね」

わずか二秒でフル回転させた結果がこれだ。

「お前、大丈夫か？ 昨日の回復試験で熱でも出したんじゃないだろうな」

「いや、回復試験の方は大丈夫だったよ」

「なら良いんだが。頼むから明日は休むんじゃないぞ」

「わかってるよ。明日は大事な新入生歓迎会なんだから風邪を引いても休まないよ」

そう。明日が新入生歓迎会の当日だ。ただ気になるのは新入生歓迎会に召喚獣を使う事がないはず。それなのになぜか昨日は試験召喚戦争を行う訳でもないのに回復試験を受けさせられた。

「ねえ雄二。どうして明日の新入生歓迎会に回復試験が必要だったの？」

「ん？ まだ言ってなかったか？ 明日の新入生歓迎会のもう一つのイベントで午後から行われる部活紹介を試験召喚戦争で紹介するんだよ」

「部活紹介を試験召喚戦争で？」

「呼び名は色々だが、正式名称は『部活紹介戦争』。部員の活動

の紹介と試験召喚戦争の紹介も合わせて見せるための、この学園特別歓迎会だそうだ」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十九問】 部紹戦争

B A K A T O T E S T

部活紹介戦争。

通称『部紹戦争』とも言われている、この部活紹介戦争には他に文字を変えた『武将戦争』と言う事から『戦国時代』と色々な呼び方で呼ばれている。

「目的は、試験召喚戦争の実演とどんな部活があるのか紹介するらしい。トーナメント形式で優勝すればそれだけ部員勧誘が有利になるって訳だ」

だから部活紹介戦争に向けて点数を回復させるのが目的だったのか。

……いやちよつと待て。部活と言えば汗を流し伝統ある文化を学ぶ場所だ。

「あのさ僕たち部活動してないんだから参加しないんじゃないの？」

「何言つてんだ明久。オレたちは立派な部活に入ってるだろ」

それを聞いた明久が、首をかしげて少し考えると口元が引きつった。

「……まさか、『帰宅部』って言うんじゃないよね？」

「それ以外に、何があるってんだ」

「帰宅部を勧誘してどうするのさ！」

汗水流さないあの帰宅部をこれ以上増やしてどうする。当の本人もまた帰宅部であり目の前の坂本雄二も帰宅部。もっと言えば、演劇部のホープであり美少女の木下秀吉を除いたFクラス全員は帰宅部だと言っても過言ではない。

もし帰宅部が優勝でもすれば、今年は下校が早い人数NO1にな

つてしまう。 そんな事をすれば文月学園に泥を塗るようなものだ。  
「どうしたのアキ？ また坂本と喧嘩してるの？」

「何かあつたんですか明久君？」

振り向くとポニーテールを揺らしながら明久のところへ歩いてくる島田美波と心配そうな顔をして手を口元に当てている姫路瑞希が明久の大声を聞いてやってきた。

それにしても、二人はスタイルが整ってるよな。 美波は特にスラッと伸びた足がモデルみたいだから勝手にイメージしてたけどこれは意外だ。

こうして姫路さんと美波が横に並んで見てみてやっとわかったけど、

「美波の方が小さいんだ」

「ウチは着痩せするタイプなのよっ！！」

美波の長い脚が伸びて見事に右の鎖骨辺りを蹴り飛ばし明久はフイギュアスケートのように空中で三回転しながらそのまま教室の床に叩きつけられた。

「ご、誤解だよ美波。 確かに美波の胸は小さいかもしれないけれど、僕が言ったのは身長的事で決して鎖骨辺りにヒビがあああっ！！」

どうしてだ。 どこで美波を怒らせる事をしたんだ？！ やっぱり女の子は背が低いのが嫌いなのかな？ でも世間では背の小さい女子の方が好みって人もいるぐらいだから気にしなくてもいいのに。 まったく美波はこういうところで勝気になるのがいけないよ。

「大丈夫ですか明久君？！」

姫路が倒れた明久のもとへ走り両手で頭を持ち上げる。 まるで包まれるかのように明久の顔が柔らかい何かが目の前に近づいてきた。

怪我は大丈夫だけど大丈夫じゃないよ姫路さん。 そんなに頭を上に乗って行かれると、とてつもない兵器が衝突してしまう。 でも人生で二度ないかもしれないこの状況を神様は許してくれるよね？

「明久、起きなかつたら殺すぞ」

僕は神を信じない。

雄二の言葉を聞いたと同時に明久は自力で立ち上がった。

「心配してくれてありがとう姫路さん。もう治ったから大丈夫だよ」

「そうですか。無事で良かったです」

どうしてそんなに悲しい顔をするの姫路さん。僕は死んだ方が良かったのかな？

「ところで、アキたちは何を言い争ってたの？」

「それがね、雄二が明日の部活紹介戦争に帰宅部で参加するって言うんだよ。帰宅部何て勧誘したって意味ないでしょ？ だから怒ってたんだ」

「それはさすがに怒っても良いわよね」

「そうですね。帰宅部は部活と言えませんが明久君が怒るのも当然だと思います」

明久の説明を聞いた姫路と美波が雄二の方に顔を向けると、雄二は呆れたように頭に手を当ててポリポリとかいた。

「お前らな……、オレが言ったことは冗談だったのがなぜ最初に出て来ない」

「え？ 帰宅部で参加って言うのは嘘だったの？」

「当たり前だバカ。オレだって帰宅部になっても参加したいとは思ってない」

「何だ雄二の嘘だったのか。まあそうだよな。帰宅部が優勝し

たところで特に意味もないもんね」

「それに無駄に点数下げるのも嫌だからな」

確かに雄二の言う事は正論だ。さすが神童と呼ばれただけある……のかな。

「なら僕たちは新入生歓迎会の出し物だけ頑張れば良いって事だね」  
「ま、そうなるな。どうせオレたちのクラスじゃ、まともな出し物何て無理だろうし、適当に終わらせとけば良いだろ」

雄二は新入生歓迎会に乗り気ではないのか、抜けたような声で答えた。

「何よ坂本。あんまり乗り気じゃなさそうな声出して。一応代表なんだからしっかりしてよね」

「そうですよ！せっかくのイベント何ですから楽しみましようよ」

「……そうだな」

「？」

まるで言葉が抜けてしまったような答えに、姫路と美波は首をかしげている。

「取りあえずこの話は終わりだ」と言いながら雄二は教室を出て行った。

「どうしたのかしら坂本？」

「何だか元気がなさそうですね。それに首輪のような物も気になりますし」

「あれ？アキもどこか行くの？」

「ちよっとトイレにね」と明久は微笑しながら教室を出て行った。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第五十九問】 部紹戦争（後書き）

投稿と内容のスローペース申し訳ないです。  
早くあの展開、この展開を書きたいですが、時間の都合で次回も遅くなります。

ちなみに、美波と姫路の背の高さですが作者の勝手なイメージです。  
公式設定とか調べる時間がなかったのでわかりません。

【第六十問】 手紙

B A K A T O T E S T

一階の男子トイレに入ると新校舎だけあってデパートにあるトイレ並みの広さが目に入った。手洗い場が5つあり、そこに先ほど教室を出て行った雄二が鏡に背を向けて腕を組みながら洗面台に腰掛けて立っていた。

「雄二、何か僕に用があつたんでしょ？」

雄二がトイレに行くのは、だいたい何か話がある時に黙って行く時がそうだ。

「なあ明久。 お前、さっきオレに何か確認しようとしたよな？」

確認……？ ああさっきのラブレターの事か。 ちょうど姫路さんも美波も秀吉もない事だし、この際犯人かどうか聞いてみようかな。

「えっと、あれはだけど」と明久がポケットに手を入れて何かを取り出そうとした時に、

「その手紙、何が書いてあつたんだ？」

ポケットから取り出そうとした手が止まった。

「……え？」

「お前のそのポケットに入ってるのは手紙だろ？ 中身は何て書いてあつたんだ？」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ どうして僕が手紙を持ってるって知ってるのさ？！ まさか、この手紙は本当に雄二が書いたやつなの？」

驚いた拍子にポケットから取り出した手紙を雄二につきだした。それを確認した雄二はため息混じりに答えた。



「……オレの下駄箱に入れられたやつと同じだ」

「オレのって、この手紙は雄二が書いて僕の下駄箱に入れたやつじゃないの？」

「さつきから何言ってるんだ明久。その手紙はオレが書いたんじゃないの？」

「たぶんと言っ言葉にどこか魚の骨が喉に刺さっている奇妙な違和感を覚えた。」

「何だ雄二が書いた手紙じゃなかったのか。……て言うか、雄二も手紙貰ってたのか」

「ああ、明久が持つてるその封筒と同じ柄のやつだった」

今持つている手紙は雄二が悪戯で書いた手紙ではない。ならば当にラブレターって事なのか？ そうなると秀吉は僕にしか興味ないから外したとしてこの手紙は姫路さんか美波ってこと？ だけど、二人に同じ手紙を渡す何て非常識としか考えられない。ましてやあの二人がそんな事をするとも思えない。

それどころか、

「まさか雄二もラブレター貰ってた何て……」と思わず口の中で喋っていた声が飛び出してしまった。

「へえやつはその手紙はラブレターだったのか。まさかこんなブサイクにも手紙を送る奴がいるとはな」

「残念だけど、その言葉は受信拒否させて送り返させてもらうよ」

それにしても雄二が手紙の犯人だと思っ手紙を出したのが不味かったな。 だけど僕と雄二が同時にラブレターを貰うって言うのは何か引っかかる。 でも、まだ雄二に見せたのは封筒だけで手紙の中身は見せていない。 きっとこの封筒の柄は女子に人気で偶然同じ柄のやつを選んだのかもしれない。 それなら中身さえ分かれば一目で違っって言うのがわかる。

「そうだ、雄二も手紙を貰ったのなら僕にも見せてよ。 もしかすると雄二が嘘をついてるって事もあるからね」

明久がご飯のおかわりを頼むかのように手を伸ばす。

「……いやそれがだな」と雄二は苦虫を噛みしめたような苦い顔を  
している。

「？」

あれ、そう言えばさっき雄二はこの手紙がラブレターだって言う  
のは知らなかったような言い方だったよな。

「手紙何て貰うの初めてだったもんで、その場で開けたら翔子に見  
つかってその場で燃やされて逃げようとしたらこれをつけられた」

そう言っただけで雄二は首のところを指差した。

ああだから首輪がついてるのか。 てっきり雄二の趣味かと思っ  
てた。

「まったく雄二はバカだな。 手紙って言うのは隠れてみるもんだ  
よ」

僕も言える立場じゃないけど。

「オレとした事が情けねえよ」

「つまり中身は何て書いてあったのか分からなかったって事？」

「読もうとしたところで翔子に焼かれたからな。 覚えてたのは明

久のその便箋の柄と同じやつって事ぐらいだな」

「え？ この便箋も同じやつだったの？」

「柄だけなら一瞬確認したから間違いないその柄だったな」

流れるように話を進めるために、雄二の話を聞きながら明久は封  
筒から便箋を取り出してしていると、雄二がその便箋を指差した。

「ここまで同じって事は、僕と雄二に出した手紙の主は同一人物っ  
てことになるよね？」

「少なくとも普通に考えればそうなるな。 もしくは集団でこの手  
紙をばら撒いている奴がいるって事だな」

「あ、でも中身が本当に同じ事を書いてあるとは限らないよね。

もしかしたら偶然が重なったってこともあるし。 その手紙の内容  
一行でも覚えてないの？」

「覚えてるとすれば、翔子の才能で偶然中身に視界を入れてたのな  
ら知ってる可能性もなくはない」

「才能かあ」

霧島さんの才能の名前は『完全記憶【フルコンプリート】』だったかな？

えっと……、

「確か霧島さんの才能って記憶能力だけ？　なら事情を説明して霧島さんに聞いて来ようよ」

「そりゃ無理な話だ」

「どうして？　聞くぐらい霧島さんだって怒らないでしょ？」

「翔子……と言うよりAクラスに行って聞くのが無理なんだよ。」

オレたちFクラスは試験召喚戦争以来Aクラスに嫌われてるからな」

「……それは言ってる。あの戦いがあったからね」

試験召喚戦争は勝てばクラスの入替えが出来る。もちろんFクラスがAクラスに勝たれた事が悔しいのは分かるけれどそれは決まりになってるのだから文句は言えない。でも、ここにいる坂本雄二の戦い方はあまりに外道だった。共に闘うFクラスの仲間を駒として扱い、本来はAクラストップの実力を持っている坂本雄二はAクラス戦になった途端その本来の力を出してAクラスを叩きのめした。あれは雄二の才能が暴走した結果が翔子を倒すと言う事しか頭になくあのような結果になったのは被害者の霧島翔子ぐらいしか理解していない。何も知らない生徒から見ればわざわざFクラスにまで落ちてから学力の差を試験召喚戦争で見せつけて遊んでいるとは思えない行為だった。おかげでAクラスには嫌われ、Fクラスの代表としてのプライドもボロボロになってしまっている。

…… Fクラスの代表か。

「そう言う訳だから、もしその手紙の相手が同一人物でオレも放課後に呼んでたのなら断りの一言でも言っといてくれ」

雄二は明久の横を通り過ぎてトイレを出ようとしたが明久は振り返って雄二を呼び止めようとした。

「待ってよ雄二。そのままが良いの？」

「どうせ翔子に止められるのがオチだ。それにオレは翔子以外に

興味を持つつもりはねえ」

「それもあるけど、さっきちょっと考えて思ったんだよ。 Fクラスの代表として今のままで良いのかって」

トイレから出ようとドアノブに手を伸ばした雄二だが、その手がピクリとエビのように跳ねて止まった。

「どう言う意味だ？」

「確かにあの試験召喚戦争でAクラスとは仲が悪くなったかもしれない。 でもFクラスの皆ともそんな関係じゃFクラスはバラバラになっちゃうんじゃないの」

「……あいつらは個人で動く人間ばかりだ。 オレが何かしたところで動くような真面目野郎は大していないだろ」

「そんな事じゃ、次の試験召喚戦争も新入生歓迎会の出し物もみんなバラバラになっちゃうかもしれないよ！ あの教室は、言うならば代表である雄二の教室のようなもんだよね？ だけど、今はあの有様だ」

「オレたちはAクラスを倒したんだから、もうすぐAクラスの教室が手に入る。 あいつらはそれだけありや満足してくれるだろ。」

「なら、それ以上の必要性は何もない。 明久だつて念願のAクラスが手に入ってそれで満足できたんだろ？」

Aクラスとの試験召喚戦争はFクラスが勝利を収めて終戦となった。 今は学園がこの有様でまだクラス交換はされていないが、後に旧校舎が再建された時にはFクラスの生徒はAクラスの生徒と教室を入れ替える事になる。

「そりゃ僕だつてAクラスの設備になれたのは嬉しいよ」  
霧島さんたちには悪い気もあるけど、これは戦争だからしかたがない事だ。

「なら、新入生歓迎会なんて適当で良いんじゃないのか」

「だけど……、」と反論するために声を出したがその後の言葉が見づからなかった。 頭の中を探るがぐちゃぐちゃになった言葉が何を言えば良いのか文章が思いつかない。 そしてそんな事を考えて

いる間にHRの始まる予鈴が鳴ってしまった。

「ほら行くぞ明久。また遅刻したら鉄人に生徒指導室送りになるからな」

「……………、わかった」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十問】 手紙（後書き）

6月の最後だったので、何とか時間を作って投稿できました。下書きなしの走り書きだったのでミスがありましたら指摘お願いします。

7月が終わるまでに前日編が終われるようにはしたいです。

【第六十一問】 クラスの出し物

B A K A T O T E S T

教室に戻ると、まだ座っていない生徒がちらほら。 どうやら鉄人こと西村先生はまだ来ていないみたいだ。 いつもなら予鈴と同時に来てるのに今日は忙しいのかな？

明久は取りあえず自分の席に座り、肘を支えにして窓の外を眺めた。

最初はラブレターを貰えて嬉しかったけれど、まさか雄二まで同じような手紙を貰っていたなんて。

しかも相手は誰かもわからず、ましてや他にも同じような手紙を貰った人がいるかもしれないとなると、いよいよこの手紙が怖く思えてくる。

今のところ共通点となるのは『Fクラス』と言うのが当てはまるけど、Fクラスの教室を見る限りではいつも通りの感じだ。 もし手紙を貰った奴がいるのなら必ず言動がおかしくなるに決まってる。とは言っても取りあえず今日の放課後になれば全てが解決すると思っし、

「そんなに考え込んでもしかたがないか」

「何を考え込んでもしかたがないのじゃ明久よ？」

窓に映る自分を見ながら考えていたら前から声が聞こえて来た。

そちらにゆっくり視線を変えると、男子用の制服を着た女子がとことと歩いて来ていた。

「おはよう秀吉」

「おはようなのじゃ明久」

声をかけると秀吉は自分の席にいったん座って肩にかかる程度の

髪を揺らしながら明久の席である後ろに振り向いた。

「今日は朝から雄二と何やらモメておつたが、何かあったのかの？」

「ああ、あれは雄二がちょっと冗談言つてただけだったんだ」

「そうじゃったのか。 てっきりまたいつものように喧嘩でもしておつたのかと心配しておつたぞ」

普段から見ると後姿もそうだが、女子の服装を着ていたら確実に女子と間違えそうになるほどの美少女、木下秀吉。

手紙を出したのが秀吉つて可能性もあるから、さすがに差出人かもしれない秀吉にこの手紙の事は話せないよな。

「ねえアキ」と隣からガラスを通して話しているかのような小さい声が聞こえて来た。 視界をそちらに向けると手をお椀の形にして口元に当てている美波が話しかけてきた。

「どうしたの美波、そんな小さい声で？」

一応明久も小声で美波に返答する。

「さつき坂本と一緒に出てったけど、何か話してたの？」

美波の右隣、つまり明久とは逆の席に雄二が座っているため、雄二に聞こえないように美波は声のボリュームを下げて明久に話かけてきた。

「別に何も話してないよ。 僕は普通にトイレに行つただけだから」

「そうなの？ 何だ、少し様子がおかしかったから瑞希と心配してたのに」

「なぜ島田と姫路は心配しておつたのじゃ？」

「坂本の首についてるのが気になったのよ」

「そう言えばワシも朝から気になっておつたの。 何か深い事情があるのかと思うて聞いてはおらぬのじゃが……明久は何か知っておるかの？」

「え？ えつとそれは……」

一応事情は知ってるけど、その事を話したら手紙の事をバラす事になるから正直に答えるのは危険だよなあ。 あんまり気にされるのも後々やっかいになるかもしれないしここは適当に話を合わせて



「ここだけの話なんだけど、あれは雄二の趣味らしいよ」

「……趣味……とな？」

「……趣味……ねえ」

秀吉と美波は同時に雄二の方向に目をやると雄二は不思議そうに頭を傾けている。

「ま、まあ趣味ならしかたがないわよね」

「そうじゃな。人には色々趣味があるものじゃからそっとしておくのが良いかもしれん」

ゴメン雄二。 何だか余計にややこしくなった。

「そう言う訳だから、これ以上あの首輪については詮索しないであげようよ」

「うむ、わかったのじゃ」

「瑞希にも後でそう説明しておくわね」

「全員揃ってるな」と低めの声が聞こえて来た。 Fクラスに入ってきたのは鉄人こと西村教諭だ。いつものように堂々とした態度で教壇の上に立った。

生徒たちは慌てて、自分の席に戻る。 それを確認した鉄人が教卓に手を置き、いつも通りの朝のHRが始まった。

いつものように出席を取って連絡事項を鉄人が淡々と説明している、普通ならここで暑苦しい声が終わるはずなのに鉄人は手に持っていた出席簿をパタンと閉じて教卓の上に置いた。

「さて、お前たちも知っているように明日は新入生歓迎会をする訳だが、Fクラスで何か出し物をしたいやつはいるか？」

「……メイド喫茶をやりたいですっ！……！！」「……」

か？ と言った瞬間教室からでた声は共鳴しあって手を上げる男

子全員が声を揃えて言った。いつもはバラバラなのに、何でも言うのだけは団結力が高いのか……。　　だけどメイド喫茶はちょっと僕も興味があるな。

目の前に座っている秀吉がメイド服を着たらいいよ感情が抑えきれなくなってしまうかもしれない。

「メイド喫茶だと？　何だか知らんが時間もない事だし、それに反対がなければ好きにすると良い」

「……よっしゃあああああつ！」「」「」

メイド喫茶を普通の喫茶と思ってるのか普通に案が通った。

ふと鉄人は自分の腕時計に目をやると雄二の方に視線を変えた。

「スマンが坂本、後はお前に任せても良いか？　明日の事でオレも忙しくてな。　内容が決まったら職員室に来て報告してくれ」

「了解です」

まだHRは始まったばかりなのに代表である雄二にバトンを渡した。　それだけ明日の新生歓迎会が忙しいって事なのかな？　まあ旧校舎が壊れたから去年とは色々違う方法になってるからかもしれない。

鉄人が教室を出ると、言われた通り代表である雄二が教壇の上に立ち、さっそくメイド喫茶の話が始まった。　あまり新生歓迎会に積極的ではない雄二だが、一応代表としての仕事はしっかりするらしく、教壇の上に立つと目の色が変わっていた。　そしてFクラスの生徒たちは一斉に雄二に注目した。

「んで、メイド喫茶を選んだのは良いがどうやって事を進めるのかは決まってるんだろうな？」

「……………」  
祭りのように賑わっていた教室は一瞬にして閑古鳥かんこどりが鳴くかのよう  
に静まり返った。

「まさか、メイド姿の女子を見たいから決めましたで終わらないよな？」

「……………」

「メイド喫茶がやりたいって言ったやつ、腕を頭の後ろに組んで舌を食いしばれ」

貴様はFクラスを殺人現場にでもするつもりか。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」とメイド喫茶を推薦した男子の一人が反論した。

「あの人は……確か……誰だっけ？」

「須川<sup>すがわ</sup>じゃよ明久。まだクラスの名前を覚えておらんのか」

僕が何気なく口に出すと秀吉が答えてくれた。 須川……ああそう言えばそんな名前だっけ。

「人の名前覚えるのはどうも苦手なんだ。 やっぱり男子の顔はあまり見たいものじゃないから顔を見る機会がないからね」

「ならまだワシの顔も覚えてもらっておらぬと言っことかの？」

「何言ってるのさ。 秀吉は女の子なんだから出会ったあの日から忘れる訳ないよ」

それにムツリーニから買った秀吉の秘蔵写真をいつも枕の下に置いて寝てるから絶対に忘れることはないよ。

「ワシは男じゃと言っておるのに……」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十二問】 四季の妖精

B A K A T O T E S T

須川君の事は噂で聞いた程度だけど、何でも彼女いない歴〃年齢で僕と同類の人間かと思つていたけれど、どうも女子に興味を持っていないらしい。だから男子生徒でありながら男子生徒に興味があるのではないかと噂されている。須川君は特に異常なんだ。

なぜか彼の周りには男子生徒が砂糖に群がるアリのように集まってくるらしい。その光景を見れば確かに男子生徒に興味を持っているように思えてもしかたがない。

「何だ須川、お前がメイド姿になつて接客するつて言うのか」

「止めてくれっ！ 自分で自分の姿をちよつと想像したら気分が悪くなつたじゃねーか。だいたいメイド服は女子しか着てはいけない法律があるのを知らないのか！」

そんな法律はないよ須川君。あれ？ て言うか女子にメイド服を着せたいつて事は女子に興味があるつて事だから、やっぱり男子生徒が好きだと言う噂は嘘だったのか。まあそうだよな、普通は男子生徒を友達以上の関係として見るやつ何ている訳ないんだから「だったら、どうやってメイド喫茶をするんだよ」

「鉄人が言つてただろ。 反対がなければ好きにして良いつて。」

それに、Fクラスには『四季の妖精』が居るじゃねーか！」

そう言つて須川が腕を伸ばした先には突然スポットを当てられた女子がいったい何事と言わんばかりにポカンとした顔で須川を見ていた。

「……………だ、そうだが、桜井<sup>オウケイ</sup>たちは賛成か反対かどっちだ？」

須川が指差した方向に明久も目をやると、そこに座っているのは

Fクラスの数少ない女子集団で『四季の妖精』と呼ばれているグループだ。雄二に質問されているのは、背中と腰の間ほどまで伸びたサラサラの薄茶色の髪とFクラスの生徒とは思えないほど背筋をピンと伸ばしている清楚なイメージの桜井恵<sup>めぐみ</sup>。

桜井はFクラスの第二クラス代表のような感じで何かと雄二のサポート役をしてきている。言うならば女子代表と言ったところ。

「私は、別にやっても良いけど？」

「はいはいっ！ 恵が良いのなら、あたしも賛成してあげるよん！」

桜井の隣に座っている女子が話に入ってきた。肩にバサッと覆いかかるほどの黒髪で、横の髪だけを赤いリボンでまとめてツインテールにしている明るい性格が特徴の、木原紅葉<sup>あきはひ</sup>は、右手をビシッと真っ直ぐ天に延ばして笑顔で了承している。

「その話、わたくしも賛成させていただきます」

近くの席から品のある声が聞こえた。そこに目をやると、文月学園指定の制服ではなくなぜか巫女さんのような服と若い女の子が着るような服装を組み合わせた新しい形の和服を着て椅子の上に座布団を敷いて正座をしている女子がいた。和服の袖を片手で持ってもう片方の手を上げている女子は姫路の髪形のようにふわっとした感じの茶色い髪が背中まで伸びていて、その一部が前に来ていて胸の方に流れている。

森野涼子<sup>もりのりょうこ</sup>は服装からしてどこかのお嬢様らしいが、なぜこの学園にいるのかはわからない。ただFクラスにいるのは彼女曰く、学力が問題ではなく和室の教室がここしかなかったからと言っていたから、もしかするとそれだけの理由で文月学園に入学したのかもわからないと明久は考えている。

そんな事を明久は考えながら彼女を見てみると、森野は前の席に座っている女子の肩を軽く叩いて呼んでいる。

「ユキちゃんはどうします？」

森野が呼んでいるのは同じく『四季の妖精』の一人。見た目は

中学生のような小柄な体型で肩にかからない程度のショートこがらしの黒髪。  
右のモミアゲ部分に黄色の髪止めを着けている木枯小雪こゆきも戸惑いながら雄二と森野に交互に目線をやると、

「あたしも？ んう……ちよつと恥ずかしいな」

「いいですかユキちゃん」

コホンと軽く咳払いをする。

「貴族たる者、メイド服を着られぬようでは王子様には出会えませんのよ」

「そ、そうなの？！ じゃあ着る！ あたしもメイド服着るっ！」

「ユキちゃんはご理解が早いですわね。坂本さん、そう言うことですので、わたくしもユキちゃんも賛成ですわよ」

「お、おう……女子が良って言うのなら、出来ない事はないな」

「ならば料理が作れる人材が必要だな！」

須川は思惑通りに事が進んだのがよほど嬉しかったのかテンションを上げている。

「ん？ メイド喫茶つてのはメイド服着るだけで良いんじゃないのか？」

「何言つてんだ坂本！ メイド喫茶はメイドさんと喫茶するからメイド喫茶なんだろうが！」

須川君、そこまでメイド喫茶にこだわる理由は女子にメイド服を着させて一緒にお茶を飲みたいんだね。

「ああスマン……オレ行つたことないからわからねーんだわ。須川はそう言う知識あるならここからは指示してもらえるか？ オレは今から鉄人に出し物をメイド喫茶にするって言いに行つて来るから」

「そう言う事なら俺に任せておけ！」

「んじゃ後は頼んだぞ」と雄二は須川にハイタッチをして教室を出て行つた。そしてメイド喫茶代表となった須川は教壇の上に立つて、教卓を思いつきり両手で叩いた。

「諸君！ まず第一に必要なメイドさんは集まつた！ 次にメイド

喫茶に必要なのは何だ!」

「写真撮影!」

「じゃんけん!」

「電話番号を聞く!」

「確かにそれらも必要かもしれない……だが! メイド喫茶で次に必要なのは腹を空かせて帰ってくるご主人様への愛の料理だろうが!

!」

「!!!」

「誰か……誰か料理を作れる人はいないのか?!」

「それなら、ウチが出来るわよ」

「料理なら、私は得意ですよ」

2人の声が重なり合った。その声は隣に座っている美波と少し離れた席に居る姫路が手を上げていた。

「島田と姫路は料理できるのか?」

美波はこの前御馳走になったから料理が得意なのは知ってるけど、姫路さんも料理が得意だつて言うのは知らなかったな。

「ウチは毎日、朝ご飯を作ってるから自信あるわよ」

「私も、小さい頃からお母さんに教えてもらいましたから、料理は得意ですよ」

「よし、それじゃあ島田と姫路に料理担当を任せよう。後は他に

程度でも出来るつて言うやつがいれば助かるんだが」

「アキも料理得意なんですよ?」

「え? ああそうだね。須川君、僕も多少の料理なら出来るから料理担当になるよ」

「木下も料理できそうよね?」

「うむ。ワシで良ければ料理の手伝いをするぞ」

「ダメだよ美波!」

「え? どうしてよ」

「明久よ、ワシはこう見えても料理は得意なのじゃが」

「秀吉は看板娘なんだから、料理なんて作ってたら人が集まらないじゃないか！」

「そうだぞ木下！ お前はうちの看板役として大切な役割があるんだから料理担当にはさせないからな」

さすが須川君、僕と同じ意見で良かったよ。君とは将来、一緒にお酒を飲めそうだ。

「ワシは娘ではないのじゃが……そこまで言うのであればしかたがないの」

「……料理担当ならオレがやるわ」

細々とした声の方向に目をやるとムッツリーニが姫路さんの席の前で足を曲げて団子のようになりながらカメラを構えていた。

「きやつ」と今まで存在に気づいていなかったのか、姫路さんはムッツリーニの声を聞いたと同時にスカートを押さえた。

「お前、料理できるのか？」

ムッツリーニは何事もなかったかのようにその場で立ち上がった。

「……いつも携帯食料を作っているから多少の味にはうるさいぞ」

「どうして携帯食料なんですか？」

「……張り込みだ」

姫路さんは首をかしげているが、何が言いたいのかそれだけでわかったよムッツリーニ。

「そうだな。これだけ料理担当が集まれば十分いけそうか」

Fクラスはバカの集まりだけど、結構そう言う得意な事を持っている人が多いのか、意外と早くメイド喫茶の話が進んでいった。



【第六十二問】 四季の妖精（後書き）

新キャラ登場です。

作者はメイド喫茶の知識が全然ありません。  
なので本来のメイド喫茶とは違う表現があるかもしれないのでこ  
了承ください。

【第六十三問】 第二次試験召喚戦争

B A K A T O T E S T

雄二はFクラスを出て新校舎の1階で、現在のFクラスとEクラスの前にある職員室に立った。

「失礼しまーす」

職員室に入ると、まるで祭りのように職員室内は教師と生徒で慌しくなっていた。

どうやら、他のクラスの生徒たちも雄二と同じように出し物の報告に来ていろいろらしい。

雄二は、人混みの中から鉄人を探そうとキョロキョロと視界を動かしたら体格の良い教師は他にいないため案外簡単に鉄人が見つかった。

あのデカイ図体じゃ迷子にもならねーな鉄人。

雄二は人混みを避けながら歩いていると鉄人は何やらパソコンに向かつて難しそうな顔をしている。

「鉄じ……………西村先生、Fクラスの出し物が決まったんで報告に来ました」

雄二の呼び声に反応した鉄人がこちらを向くが、その表情は相変わらず難しそうな顔をしている。

「おお坂本か、出し物はメイド喫茶とやらに決まったのか？」

「今、須川が話をまとめてるんで、たぶん大丈夫だと思えますよ」

「そうか」と鉄人はパイプ椅子の背もたれにも負荷をかけると錆びついた椅子が悲鳴を上げる。

「何かあつたんすか？」

「いやな、メイド喫茶とやらを俺は知らなかったもんで、さっきパ

ソコンで調べてみたんだがこの服装はどうやって調達するんだ？」

鉄人が指差すのはパソコンの画面に映し出される四角い画面。

雄二がパソコンに覗きこむと、そこに出ているのはメイド喫茶のサイトで、メイド服姿の女性が写っている。

「そっか、メイド服がなかったら普通の喫茶店になっちゃうのか」「服装か……さすがにメイド服を持参しているやつ何ていないだろうからな。」

「とりあえず、Fクラスはメイド喫茶として提出しておくが、もしこう言った服がないのであれば、普通の喫茶店にするからな」

「ならいったん戻って再度決めてくればいってことっすね」

「そちらで全部用意できるのなら別にかまわんと言っておけ」

「了解でーっ」

雄二は職員室を出ようと鉄人に背を向けた時、何となく目を向けるとそこに一人の女子がいた。

長い黒髪を背中まで伸ばし、まるで日本人形のように整った顔をした文月学園で知らない人はいないほど認知されているAクラス代表、霧島翔子は見上げるように山積みになされたような物の隣で立っていた。

「何してんだ翔子？」

「……雄二、ちょうど良いところに」

「？」

「雄二、今時間ある？」

「まあ少しならあるが」

翔子の隣には茶封筒のような物にぎっしりと詰められて山積みになっている。中身は……部活紹介戦争の資料か。

「まさかこれ全部翔子が持っていくつもりだったのか？」

「生徒会の仕事だからしょうがない」

「副会長の仕事も面倒くさいもんだな。やっぱオレがならなくて正解だったわ」

翔子は現在、文月学園の生徒会副会長をしている。一年の時に

生徒会書記をしていた翔子はそのまま副会長に任命された。生徒会は三年が会長、二年が副会長、一年が書記と会計と決まっていた。去年の会計は雄二が担当していた。

二年になって翔子の方が副会長に向いているという事になり雄二は二年から生徒会を脱退している。

「召喚獣を使ってもこれだけの量は持つていけないから手伝ってほしい」

「何だ、まだ召喚獣の操作に慣れてないのか？」

「普段から召喚獣を使うことはないから、こつこつ繊細な作業は苦手」

生徒会は明久のように物理干渉能力が召喚獣に追加されている。

普段は生徒会の仕事でこつこつした荷物運びなどは少ないが、新入生歓迎会や体育祭と言った大掛かりな行事のときは召喚獣を使って荷物運びをしなければならない。

「まあ手伝ってやらんこともないが」

そつだ、翔子に手紙の内容を聞くチャンスか。

「なら手伝ってやるから代わりに報酬としてオレからも条件がある」  
「条件？」

「お前がその条件を必ず約束するつてのなら手伝ってやる」

条件さえ出しておけば、翔子だって必ず答えてくれるはずだ。

「さあどうする」

「……雄二だったら、どんな恥ずかしいリクエストでもする」

「よし、じゃあ手伝ってやるよ」

恥ずかしい？ それに何で翔子は顔を赤くしてるんだ？ まあいいか。

翔子は召喚獣を使って重い荷物を四段重ねにして持たせ、雄二は自力で二箱を持って新校舎の二階の一番奥にある学園長室に向かっ

ていた。

「Aクラスは新入生歓迎会の出し物決まったのか？」

「私たちはメイド喫茶をする事になった」

「なっ……、Aクラスもメイド喫茶かよ」

「……Fクラスもメイド喫茶なの？」

「メイド喫茶にする……予定つてとこだな。さっき職員室で鉄人と話してたんだが、メイド服をどうやって調達しようか考え中なんだよ。翔子のところはメイド服ってのはどうするんだ？」

「……私が用意した」

「くっ、さすがお嬢様だけはあるな。メイド服ぐらいなら簡単に準備できるって訳か」

「メイド服を着るなら貸してあげる」

「オレが着なくていいのなら貸してくれ」

「……なら貸さない」

さりげなくオレにメイド服を着させようとしたが騙されないからな。

「ま、新入生歓迎会は売上勝負でもあるからな。敵に情けをかけられるのも嫌だからな」

とは言ってもメイド服なんかどうやって手に入れればいいんだ。

この際、森野に頼んで和服の喫茶店にするってのも考えておくべきか？

「雄二、運んでくれてありがとう」

「んお?! もうついたので」

いつの間にか学園長室前まで歩いて来ていたらしい。

「学園長、二年Aクラス霧島翔子です」

学園長室前の木を彫ったずいぶん高級そうな扉を叩くと中から返事が返ってきた。

「開いてるから入って来な」

「失礼します」

「ああ、あんたかい。大荷物運んでもらってすまないね。その

辺りに置いてくれるかい」

学園長室に入ると、白い長髪を背中まで伸ばして毛先の手前でゴム製の髪留めでまとめ結んでいる人物が、扉同様に木を彫った豪華な机と社長が座つていそうな椅子に座っている。

文月学園創設者にして学園長、藤堂カヲルは先ほどまで操作していた机の上に置かれたパソコンから翔子に視線を変えて荷物を確認すると部屋の隅を指差した。

「ババア宛に宅配便だ。 さっさとハンコ押しやがれ」

「なんだい、余計なやつが入って来たね」

「わざわざババアの荷物を運んでやったんだ、ありがたく思えよババア」

「クソガキがずいぶんと浮かれてるじゃないか。 よほど今の教室の居心地が良いのかね」

「まあ確かに前の教室よりははずいぶん快適な生活ができるようにはなったな。 だが、それも旧校舎が再建されたらもっと良い教室が手に入るからな」

「……雄二、その話はあまり口に出さないほうがいい。 Aクラスの皆が敵視してるから」

「んなことわかってるよ。 だがあれは試験召喚戦争の決まりだから文句は言えねーだろ？」

「……………」  
「それで、いつになったらAクラスとFクラスの設備が交換できるんだ？」

「お前さんは何を言ってるんだい？ AクラスとFクラスの試験召喚戦争は引き分けなんだから設備交換なんてないよ」

「……………は？」

浮かれたような顔をしていた雄二の表情は、暑さで溶けるアイスクリームのように崩れていった。

「……………?!」

逆に翔子は目を浴びようとするヒマワリのように顔が上がってい

く。

「確かにAクラスはFクラスに負けた。　だけどね、後日確認したらお前さんまで戦死したことになってるんだよ」

「なっ……!?!?　そんなバカな話が　」

その瞬間、針で刺されたかのような痛みが走った。　逆再生するかのように映像が戻り始める。

試験召喚戦争の後に戦死。　他でもない藤堂歩に騙されて明久と戦った時のか。

「あたしはシステムの異常と違ってただけど、お前さんの召喚獣がその日の放課後に召喚許可を出している履歴が残っていた」

「確かにあの時、オレの召喚獣は戦死した。　だがあれは試験召喚戦争は関係ないだろ」

「学園における規則、試験召喚戦争は設備交換承認するまで終戦とみなさない。　普通なら終戦後に召喚バトルをするやつ何ていないから忘れてるかもしれないだろうけど、規則は規則だよ」

「……っち」

反論は出来ない。　ババアの言っていることはムカつくが正しい意見だ。

だがFクラスにやつらにはオレが翔子と試験召喚戦争を持ちかけた代わりにAクラスの設備をやるって約束した。　あいつらだってAクラスの設備が手に入るからオレのバカに付き合ってくれたんじやねーか。　それなのに、結局設備は換えれませんでした何てあいつらにどんな顔すればいいんだよ……クソッ!

「ですが学園長。　あれは雄二を騙した人が召喚獣を使わせたのが原因だったんですよ」

「召喚獣を戦死させたことに変わりはない。　逆に変な腕輪を使った罰を与えても十分なぐらいだよ」

「そんな……」

「お前さんは、どうしてそこまでこいつの肩を貸そうとするんだい?　Aクラスを変更されずに済んだんだから喜んでもいいと思うけ

どね」

「ババアの言う通りだぞ翔子。 Aクラスのままになるのなら、別にババアに当たる必要はないだろ」

「あれはAクラスとFクラスの試験召喚戦争と言うよりも、私と雄二の喧嘩みたいな戦いだつた。確かにイレギュラーなことはあつたけど、Fクラスは試験召喚戦争で私たちAクラスを倒した。なら雄二の召喚獣が別のことで戦死したからって戦争を引き分けにするのはどうかと思うの」

翔子は雄二を見ていた視線を学園長に変えた。

「Aクラス代表として、Fクラスとの勝負に正当な結果を出すべきだと思います」

「翔子……お前」

真つ直ぐみる目の先にある学園長は翔子からの視線をじつと見つめ、ほんの少しだけ学園長室が静まり返つた。

「……まあ、あたしとしても試験召喚戦争の規則外のことには少々頭を抱えているのは確かなんだけどね」

学園長は緩んだ口元を少しだけ吊り上げた。

「……なら、この際ハッキリと決着をつけさせようかね」  
「待てよババア。 またAクラスと試験召喚戦争をさせるつもりなのか？」

また試験召喚戦争なんてしたら勝てるわけない。 あいつらもオレみたいな奴の命令なんて二度と聞くかどうかもわからないんだ。

「試験召喚戦争の規則の一つ、宣戦布告したクラスが負けた時三ヶ月の休戦命令が発生する。 お前さんの持っている手帳にも書かれているだろ？」

「ならFクラスもAクラスも試験召喚戦争は無理って事じゃねーか？」

「なにもあたしは戦争だけで勝負をしるとは言っていないよ。 そうだね、ちょうど新入生歓迎会を盛り上げたいと考えていたことだし、AクラスとFクラスで新入生歓迎会の売り上げが高かった方がAク



ラスの設備にするって言うのはどうだい？」

「はあ?!」

「もともと新入生歓迎会で出した売り上げで、それぞれのクラスで設備更新させる事になっている。今、お前さんたちが使っているAクラスやFクラスは去年の二年のガキどもが新入生歓迎会で稼いだ金で設備変更しているのさ」

文月学園の設備は学力に比例して設備がよくなる。ただ設備はあくまで教室のみで机やイス、他にもドリンクバーなどのオプション設備は新入生歓迎会などのイベントで勝ったクラスが上位設備にさせる事で今の設備が存在する。例えばAクラスの教室ならリクライニングシートや電子黒板と言ったものも卒業生たちが新入生歓迎会で出した売り上げを基にして増えていったという事になる。

こうして教室は毎年、売り上げに比例して教室を下級生が快適に暮らせるようにしていくシステムとなっている。学園が創設された当初は外見の設備だけがクラスごとに違うという仕組みであり、ラスの設備に差別かは存在しなかった。しかしこの設備更新システムが導入されてからは毎年、クラスの設備が豪華になっていき、ついにはAクラスとFクラスとの設備の差が天と地ほどまでになってしまった。

「それで今回は、設備の追加変更どころか設備そのものを変更させるって訳かよ」

「これなら学力が問題のお前さんたちFクラスでも対抗できるかもしれないだろ？」

「翔子はどうなんだ？」

「私は生徒会としても、新入生歓迎会を成功させたいから学園長の言う勝負に賛成してもいい」

試験召喚戦争ではなく売り上げで設備が手に入る。あいつらはメイド喫茶でかなりやる気を出している。それならもしかすると勝てるかもしれない。

「翔子がそう言うのならわかった。今ここにオレたちFクラスは

Aクラスに『第二次試験召喚戦争』を宣戦布告する」

「お互いに頑張って売り上げを伸ばすことだね」

あいつらには迷惑かけたんだ。何が何でも絶対にAクラスに勝つて約束を果たしてやる。だがその前に必要なことがある。

「翔子。今度はオレと翔子の戦いじゃなく、FクラスとAクラスの勝負だ」

「……Aクラス代表として、Fクラスには負けないから」

「Fクラス代表として、オレは全力でAクラスを叩いてやる。だから全力で戦うためにこの首輪を外してくれ！」

「……ダメ」

……………クソオ！！

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十四問】 妖精たちの日常

B A K A T O T E S T

学園長室まで荷物運びを終えた雄二は一人、新校舎一階に降りてFクラスの教室に向かって歩いていった。

「……結局、手紙の内容はわからずか」

学園長室を出てAクラスの前で翔子と別れる前に条件として手紙のことを聞いたが翔子は中身を見ていなかった。

「大して重要なことではないと思うがどうも手紙主の目的が見えねえ」

一人でぶつぶつと考え事をしながら教室に向かっていった時だった。

「きゃああああああああつ!!」

「っ……なつなんだ!？」

Fクラスから漏れた声は頭の中で考えるよりも先に足が動いた。声が聞こえたFクラスに向かって、一秒でも早くその場の状況を把握するために廊下を蹴った。

廊下を蹴って蹴って蹴って、ひたすら前に少しでも進むことだけを考え教室のドアを破壊するかのように開けた。

「……はあ……はあ」

息を切らせて教室の中を見た雄二の視界に入ってきたのは、机と椅子を掃除の時間の時みたいに残りに後ろに下げて広くなったスペースにメイド服を着た桜井恵の腹部に抱っこ人形のように抱きついて興奮している木原紅葉。

「きゃああああ可愛すぎるわよ恵っ!」

それを引き離そうと美波と姫路が必死に肩を引っ張っていた。

それもメイド服を着ているのは桜井だけでなく木原や美波や姫路、

少し離れたところで相変わらず教室の床に座布団を敷いて正座で座っている森野と隣で同じように正座して楽しそうに笑っている木枯も同じくメイド服を着ていた。

そして男子たちは血を流して（主に鼻から）倒れていた。

「ちよつと紅葉、いい加減に離しなさいって！ 借り物なんだから伸びちやったらどうするの」

「嫌だ嫌だ絶対に嫌ああああ！ せつかくのメイド服ハーレムを終わらせたくないもん」

「紅葉ちゃんワガママ言ったらダメですよ。恵ちゃんが困ってるじゃないですか」

「恵困つてないもん。それどころかメイド服脱がれたらあたしが困るんだもん！」

「いいかげんに………しなさああああいつ！！」

美波が木原の肩を一気に引っ張り、その反動で桜井から手が離れ木原はそのまま車のシートの背もたれと一緒に後ろに反るように倒れていった。

「ううう。あたしの夢を奪うなんて酷いよ美波」

「なっ………何してんだお前ら？！」

あつけにとられていた雄二がようやく我に帰った。

「坂本、メイド喫茶は危険よ」

「木原……お前そっちの奴だったのか」

「何を勘違いしてるのかな坂本君よ。あたしはコスプレ女子が好きてて訳じゃないよ。男の子だって服装が可愛かったら大好きだもん」

「ゴメンなさいね皆。紅葉はこう言う特殊な服装が大好きなのよ」  
先ほどまでメイド服を着ていた桜井は学園指定の制服に着替え終わっていた。

「桜井、お前いつの間に着替えたんだ？」

教室にいた男子は全員倒れているが、まだ最後の男子である坂本雄二が教室にいますというのに桜井は教室を出て行った気配もなく、

気がついたら着替えを済ませていた。

「ダメよ坂本君。女の子に着替えのことなんて聞いてちゃ」

「あ、いや、その……あまりに突然だったもんでつい」

「こちら、そこで弱腰になってどうするの。男の子なら、もっと積極的になりなさい。そんなんじゃ翔子ちゃんに愛想つかされるわよ」

なんか、お袋に怒られてるような気がするんだが。

「なら、どうやって着替えたのか教えてくれ。オレはお前に興味があるんだ！」

「坂本君がそう言う人だったなんて信じられません」

「やっぱり男ってみんなそうなのよ」

「誤解だ姫路、島田！今の話を聞いてただろうが」

「見た目で判断したらダメよ二人とも。男はみんなオオカミなんだから気をつけなさいね」

「さすが恵ね。今まで数々の告白を断ってきた伝説を持つだけあって知識が豊富ね」

「いろいろと勉強になりますね」

オレ、絶対遊ばれてるよな。

「さて冗談はこれぐらいにして、今のは『サイレントキラー寡黙迷彩』って言う気配を消す才能を使ったから感じなくなったの」

「気配を消すって凄い才能だなおい」

「目の前で着替えても人に気づかれないから、気配を消す事ならそこで倒れている土屋君以上の力かもしれないわね」

桜井は清楚なイメージだったが意外とだいたんな性格してんだな。

それで男どもは血出して倒れてんのか。

「それにしてもずいぶん早い着替えだな」

「前に木下君に早着替えの方法を教えてもらったの。私、朝が苦手手で着替えるのが遅いから木下君に相談した事があったね」

「そっぴやムツツリーニが秀吉の着替えシーンだけ撮れないって悔しがってたな。そりゃこれだけ一瞬で着替ええられたら無理だろ」

「あつ！ 着替えたらダメって言ったじゃんか恵っ！」

「はいはい。 当日にまた着てあげるから我慢しなさい。 美波も瑞希ちゃんも着替えちゃって良いわよ」

「そんなあ！ 明日まで待てないよあ」

木原はまるでおもちゃを買ってもらえなくてだだをこねる子供のように、じたばたと抵抗して両手両足を使い暴れている。

雄二は現場の状況に圧倒されながらも気持ち切り替えて教室を見渡した。

何でオレが職員室に行っただけでこんなことになってんだよまったく。 任せた須川はぶっ倒れてるし明久も意識がなさそうだな。

ムツツリーニもカメラを持ったまま気絶か。

……ん、そう言えば秀吉の姿がないな。

「島田、秀吉はどこに行っただ？」

「木下なら、演劇部の部屋に行ってるわよ。 このメイド服は木下が演劇部から借りてきてくれたものの」

なるほど演劇部か。 演劇に使う衣装が揃う演劇部ならメイド服の一着二着ぐらい用意されていてもおかしくない。 さすが秀吉、こう言う時は男らしくて頼りになるな。

「ならこのメイド服は当日も貸してもらえって事なのか？」

「そうみたいね」と桜井が制服に着替えたため今度のターゲットになった美波に磁石のように離れない木原を一生懸命引き離している。

「んうう、美波は恵と違って触り心地があたしと同じだからつままない」

「残念だったわね紅葉。 あんたよりウチの方が勝ってるわよ」

「でもこの前、明久に聞いたなら美波とあたしは大して変わらないって言ってたよ」

「坂本！ 今すぐ火をよこしなさい！ 燃やしてやる。 アキなんて燃やしてやるんだから！」

「さて島田。 落ち着くんだ」

「落ち着いてなんていられる訳ないでしょ!」

「明久は粗大ゴミだから燃やせないぞ」

「あつ……」

「坂本君、美波ちゃん……明久君は人間ですよ」と姫路は軽くツツコミを入れておいた。

「では、わたくしは十分堪能出来た事ですので、そろそろ着替えに行ってきますわね。行きましようかユキちゃん」

スツと立ち上がる森野に対して、生まれただけの子馬のようにふらふらとした木枯は正座した姿勢から四つん這いになっている。

「涼子ちゃん、あ、足が痛くて動けないよ」

「あらあらダメですわねユキちゃん。貴族たる者、正座で負けるようでは戦に出られませんわよ」

「あたしは別に戦いに行くことないんだけどな……」

「ふふふ、そんな事では王子様に置いて行かれますわよ」

「こんな事であたしの夢が崩れちゃうなんて嫌だよ」  
「しかたがないですわね。では足に血が通うまで待っててあげましょうか」

「お、お願いだからそこは触らないで涼子ちゃ、はうつ!」

木枯は、森野に楽しそうに監視されながら足の痺れとある意味戦っていた。

「それじゃあウチらも着替えに行こっか」

「そうですね。ちよつとこの服装だと苦しくなってきましたやいました」

「瑞希、また最近食べ過ぎてるんじゃないの? ウチなんてピツタリなんだから」

「え、えつと……」と姫路の声がリモコンでテレビの音量を下げていくかのように小さくなつていき「苦しいのは胸の方です」と消音になりそうなくらい小さい声で答えた。

「さつ、行くわよ瑞希」と笑って姫路の手を取る美波に対して「……美波ちゃん、顔が怒ってますよ」

「あうう待ってよ皆。あたしも一緒に着替えるのぉ！」  
メイド服を着ていた美波、姫路、木原、森野、そして痺れが治った木枯は着替えるために秀吉のいる演劇部の部室に向かっていった。  
やっぱ、このクラスをまとめるのは無理なのかもしれない。  
「はぁ……」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第六十四問】 妖精たちの日常（後書き）

才能や能力名の表記についてですが、横に読み方を書くか、上にルビとして書くかどちらが読みやすいでしょうか。

『寡黙迷彩【サイレントキラー】』 『サイレントキラー寡黙迷彩』

【第六十五問】 恋愛被い

B A K A T O T E S T

【問題】 『数学』

問 以下の問いに答えなさい

福原「三角形の面積の求め方は『底辺×高さ÷?』。?に当てはまるものを答えなさい」

【姫路瑞希の答え】

姫路「底辺×高さ÷2」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムッツ「底辺×高さ÷奥行き」

【教師のコメント】

福原「3Dですか」

【吉井明久の答え】

明久「底辺×高さ÷プライスレス」

【教師のコメント】

福原「お金で買えない価値がありますか？」

B A K A T O T E S T

いつの間にか眠っていたのか、気がつけば目の前が真っ暗だ。

いやこれは夜だから暗いんじゃないやなくてたぶん目を閉じているからだろう。なんとなくだけど自分は今夢を見ているって言う感覚の状態で起きようと思えばいますぐ現実の世界に戻れそうな気がする。

「……くん、……て……い」

「ア……、……なさ……」

まるで電波の悪い場所で電話をしているかのように誰かが僕を呼んでいる。その声はハサミで切られたみたいに言葉を理解できない。

夢と現にいたる感覚。 何度も聞こえる声を頼りに水中から飛び出すかのように明久は現実に引き戻された。

「……………」

光が目が届くと普段はあまりみることのない天井。そして僕を覗き込むようにして左右から二人の姿が見えた。こちらは普段からみているから簡単にわかった。

背中まで伸びた桜色の髪が前屈みになってだらんとカーテンのよ  
うに重力によって落ちていている姫路さん。そして勝気な目で大きめ  
のリボンで髪をまとめている姿はまるで金魚のような美波。

二人は明久が目を覚ますとさらに近づいてきた。

「大丈夫ですか明久君？」

「起きてるのアキ？」

二人の距離はほとんど同じなのに、どうしてだろう。 姫路さん  
の方が近くて美波の方が遠くにいるような感じがする。

もしかしてこれは、

「胸の遠近法つてやつか」

「ダメね。 まだ起きてないみたい」

目を殴られた。 裁縫の針で左右同時に。

「目がっ！ 目があああああっ！」

今日は新入生歓迎会のため通常授業は休みになってほとんど明日  
の出し物とかの準備に時間を使うことになっている。

Fクラスは秀吉の力で何とかメイド服を手に入れて、後は教室の  
飾りつけと姫路と美波が作る料理を考えたりとまだまだ予定が押し  
ている。

よほど時間がないのか教室では昼ご飯を食べながらも雄二が教壇  
の上に立って話は続いている。

「まあ、だいたいの予定は完成したな。 それじゃあ最後にスケジ  
ユールの確認をするぞ」

黒板にビツシリ書かれた計画を、雄二がノートでまとめていたの  
を読み上げる。

「まず、明日の午前10時から新入生歓迎会が始まるから、オレた  
ちメイド喫茶もそれと同時に開店だ。 料理担当の姫路と島田は、

それまでに仕込みを開始してくれ」

「……………」

教室からは一瞬、沈黙の音が聞こえた。

「……………」と、そうだった。 姫路たちは明日の買い出しに行ってもらったんだっとな」

明日のメイド喫茶で出す料理を考えるために、買い出し班の姫路、美波、荷物持ちのために明久、秀吉が買い物に出ている。

「次は、メイド担当の桜井たち四季の妖精は、着替えにどれぐらい時間がかかるかわからんから、そこはお前たちで考えて学校に来てくれ」

「その事なら心配しなくて大丈夫だよ坂本君よ。 なぜなら自宅からメイド服を着て来ればいいのだ」と腕をビシッと前に伸ばして親指を立てて木原紅葉が答える。

「それは校則違反になるからダメよ紅葉。 時間の事は私が考えておくから、ちゃんと制服で来るの」

「ええっ！ せっかく朝から恵に抱きつけると思ったのに」

まるで怒ったフグかエサを詰め込んだリスのように木原も顔をぶくつと膨らませる。

「校則は校則だから我慢しなさい」

「でもでも、涼子はいつも制服じゃないでしょ。 あたしも制服以外で登校したい」

「まあ……………」と森野はお上品に頬に手を当てる。

「校則以外の服装での登校はダメでしたの……………」？ わたくし知りませんでした」

「涼子は神社の関係で、あの服装を着ても良いの。 紅葉は神社の関係者じゃないでしょ？」

「はっう……………」あたしも神社の関係者になれば……………はっ！ あたしと涼子が結婚すれば良いんじゃないかな!？」

「涼子、お被いとかできる？ きつとこの子には悪霊がとり付いてるのよ」

「恵ゴメン！ そんなに怒らないですよ！」

「残念ながら、わたくしは『ふみつきのおおみかみ不月大神』をお守りする事ですので、そういった事はできませんわね。もしメイド服がダメなのでしたらドレスを着ると言うのはどうですか？ わたくしの家に数着ありますの」

「涼子ちゃん、それだとメイド喫茶じゃなくなっちゃうよ。それに話聞いてた？」

「ユキちゃん。王子様はドレスを着た女性が好きなのですよ」

「そ、そうなの？！ それならちよつと着てみたいかも」

「貴族たる者、ドレスを着れなくては王子様と話ことすら許されないのです」

「さすが王子様。まさに高嶺の花なんだね」

「お前らは本当に仲が良いな。このままじゃ話が進まないから、後は4人で考えておいてくれ」

雄二は、メイド服については四季の妖精に任せた。

「後は……」と雄二は自分のまとめたノートを上から順番に目を通していく。

「ああ、そうだ。 新人生歓迎会は、午後の部に部活紹介戦争があるんだ。 このクラスで参加するやつはいないと思うから大丈夫だが、恐らく部活紹介戦争が始まれば一年たちは9割近く見学にいくだろうから、まずは午後になるまでが勝負だ」

「……雄二」

どこからともなくムツリーニが雄二の隣に忍者服のような姿で現れた。

「偵察ご苦労ムツリーニ。 で、どうだった？」

「張り込み調査をしていて偶然聞いたんだが、どうも新人生歓迎会の時は召喚獣の召喚許可が出されるらしい」

「それはつまり、召喚獣を使っても客を自分たちのクラスに招き入れろってわけか。 ババアの考えそうな事だな」

「……それと他のクラスの出し物だが、BクラスとCクラスは同盟

を組んでやるらしい」

「BとC……確か代表は、根本ねもとと小山こやまか。あいつら噂だと付き合  
つてるとか言ってたな」

「……………」

言葉と同時に一人の男が教室から出ようとした。

「落ちて須川、殺すのは新入生歓迎会が終わってからだ」

「……ちっ、命拾いしたな根本きよつじ恭二」

須川亮。文月学園の秘密結社FFF団の会長とも言われている

その姿は、黒き衣装に身を纏い、罪を裁くための大鎌を持っている。

学園生活において男女が不純異性交遊にならないように学園内には100人ほどの偵察部隊が配置されているらしい。

「いざとなったらお前の才能で、あいつらに目に物見せてやれば良  
いさ」

「了解。『恋愛被い【エクソシスト】』と恐れられた俺の力を見  
せてやる」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十五問】 恋愛被い（後書き）

雄二の言っていた須川君の才能は『恋愛被い【エクソシスト】』の事ではありません。

これは二つ名みたいな感じですかね。



【第六十六問】 明日に向けて

B A K A T O T E S T

午後からは本格的にメイド喫茶の準備が始まっていた。

教室の机を小学校の給食の時みたいに互いの机をくっつけて四つ合わせた物を作り、喫茶店風を出すために机同士の席を感覚を広めにとつて並べていく。

「さて、と。取りあえずこんな形でいいだろう。後は、客に出す料理の材料の買い出しに行った食材班が帰ってくるのを

と言っていると、教室の扉が開いた。

「坂本、材料買って来たわよ」

そこに、ちょうど帰ってきた美波と姫路、その後ろから大安売りで大量に買い込んだ主婦のように明久が重そうな顔をしながら遅れて教室に入ってきた。

「明久よ、ワシが持つと言っておるのに」とさらに後ろから秀吉が少し困惑しながら入ってきた。

「秀吉に重い物を持たせる何て、僕の信念が許さないからね」

明久は限界になつている両手を解放するために買い物袋を広くなつた教室の床に置いた。ただし限界でも中身が崩れないように慎重に置いて行く。

「ぜえぜえと息を切らしながらその場で後ろに座りこむ明久に姫路が寄り添ってくる。

「ご苦労様でした明久君。手、大丈夫ですか？」

おもむろに明久の手を握ろうとすると、

「ぜ、全然問題ないよ姫路さん。ほらこの通り新品みたいでしょ」

とつさに手をグツパして見せる。

「それなら良かったです」

はっ！ しまった。 恥ずかしくて思わず見栄を張ったけど、これって姫路さんに手を握って貰えるチャンスだったかもしれないのに。

「う、うん。 これぐらい昼飯前だからね」

「実際、昼飯前じゃがの」

お腹をさすさすとしながら弱い声を出している。

「そう言えばそうだったね。 雄二たちはもうご飯食べたの？」

「悪いが先に食わせてもらった。 お前らも休憩入れて昼飯食べて良いぞ」

「それじゃあ僕らも遅めの昼食にしようか」  
すると、一人の声と手が拳がった。

「あの、もし宜しかったら料理の味見も兼ねてお昼ご飯にしませんか？」

ちょこんとウサギの耳のように手をつき出した姫路が下を向きながら控えめな声で答える。

「えっ！？ ホントに?! もちろん御馳走になるよ。 秀吉もそうしない？」

「そうじゃな。 お主らの実力とやらがどれほどなのか興味があるからの」

「美波ちゃんも良いですか？」

「当たり前じゃない。 ウチの料理の腕前見せてあげるんだから覚悟しなさいよ瑞希」

「わ、私だって料理だけは得意ですから負けませんよ美波ちゃん」  
姫路さんと美波の手料理を秀吉と一緒に食べられる何てこれ以上の幸せはないよ。

「それにしても、ずいぶんとたくさん買ってきたな。 明日使う食材分は学園が支給してくれるって言わなかったか？」

雄二が袋の中をガサガサとあさって中身を確認している。

「これは……スパイスか？」

その中から見慣れない入れ物を取り出した。

見た目は体育祭で使うリレーのバトンより少し小さめの筒状の入れ物。

シヤカシヤカと振ると中に入っている粉状の音が聞こえるため、もしかするとスパゲッティに使う粉チーズみたいなものかもしれない。

「これは何と書いてあるのじゃ？」

「さあ。オレにも読めん」

入れ物には日本語ではなく外国語で商品名が書かれている。

雄二はクルリと筒を回すと裏のラベルにはドクロマークが書かれているが刺激物の注意書きだろうか。

「瑞希がね、これぐらいの材料がないと美味しい料理が出来ないって言うのよ。しかも近くの店には売ってないから、わざわざ駅前まで行ったのよ」

「これだけはどうしても揃えたかったです。でも、これで美味しい料理が作れますよ」

「そりゃ期待できそうだな。じゃあ帰って来てすぐで悪いが、姫路と島田は料理の準備を家庭科室でやって来てくれるか。オレたちは、喫茶店を作る準備に入るから、出来たら呼んでくれ」

「わかった。行こ瑞希」

「はいっ」

「アキ、荷物お願いね」

「ええまた僕が荷物持ち？ 美波の方が力も強いんだから僕が持つていくので関節をそっちに曲げないでっ……！」

「さて、島田と姫路が美味しい料理を作ってくれてる間にオレたちは立派な喫茶店にするぞ」

「「「おおおおつ！」」」

先ほど机同士を合わせて大きなテーブルにした上に、保健室から使っていないシートを借りたのをテーブルクロスとして使う。

見た目も悪くなく、白い色が教室を明るくするだけでも非常に効果的だった。

「良い感じに出来たじゃねーか」

「……、」

明久がふと雄二の顔を見るやいなや、思わず息を噴き出した。

「何だよ明久、オレの顔に何かついてるのか？」

「いや何て言うか、朝の雄二は全然やる気なかったのに、いつの間にか子どもみたいに楽しそうにしているなって思ってたさ」

「う、うるせーな。ほら、最後のテーブルも作るぞ」と雄二はその場にいるのが嫌になって逃げ出すように、まだ完成していないテーブルの方に向かう。

「……まったく。あれじゃあ将来は頑固親父にでもなりそうだよ」  
口を少しだけ釣りあげて鼻から息を吐き出し、明久もまだ完成していないテーブルに向かった。

Fクラスのほとんどが男子生徒だったため、思っていた以上に作業の進行が早く進んで明久たちは少しばかり休憩していた。

「ううう……働き過ぎてそろそろお腹と背中が細胞結合しそうだよ」  
「もう少しの辛抱じゃ明久。今、島田と姫路が美味しい料理を作ってくれておるのじゃから我慢じゃぞ」

まるでアザラシのように教室にうつ伏せに倒れる明久に対して、同じくまだ昼ご飯を食べていない秀吉は四季の妖精たちと混ぜって教室を飾るための折り紙をリング状にする作業を続けていた。

「何で秀吉はそんなに元気なの？ やっぱアイドルはトイレに行かないって言うほどだから、美少女はお腹を空かせないって言うの

か

「ワシは演劇で肺活量を使うもんじゃから朝食は結構多めに食べておるのじゃよ。それと何でも言うがワシは男じゃからな」

少し自慢げに話す秀吉に対して明久は「やっぱり秀吉は美少女だね」と後半の声は耳に入っていないかった。

すると教室の扉が開き、全員が扉の方向に振り向いた。

「へえ凄く綺麗になったじゃない。これなら喫茶店って感じで良いわね」

そこには青色のチェック柄が入ったエプロンをした美波がいた。

いつものトレードマークの一つである大きめの黄色いリボンを外して家庭科で使用する白い三角巾を着けているためサラサラしている赤い髪が背中まで滝のように流れていた。

「おお島田か。そっちはどうなってる？」

明久も芋虫のようにゆっくりとした動きで遅れてそちらを振り向いた。

「それなら今、」

廊下からは美波の後を追いかけて来るように香ばしいニオイが教室に入ってきて来た。

「ッ……！」

瞬間、重くて今にも視界が暗闇に引き込まれるかのようだった明久の意識が現実に戻ってきて来た。

思わず両手を床について起き上がる。

「み、美波！」と明久はズカズカとした足取りで美波の手を握り締めめる。

「へっ?! ア、アキ……?」

「実は前から言いたかった事があるんだ」

明久の真面目な顔を見た美波は思わず加熱されて体が熱くなっていき顔が茹でられたタコのように真っ赤になっていく。

「う、うん」

ゴクリと喉を鳴らす。

「美波……ス……」

「ス……？」

「ス、ステ……」

「ステ……ッ！ えっ、そんな、みんなが見てる前で……そ、それに褒めても何も出さないわよ」

美波を握る手がさらに強くなり、いつそう顔が赤くなっていく。

そして力強い声で明久は言い放った。

「ステーキの焼き加減はミディアムレアでお願いし熱湯をかけられたように目が熱い！いいいいいい！！」

持っていた菜箸さいしほしが明久の両目に入った。

「な、何で怒ってるのさ美波。焼き加減を聞きに来たんじゃなかったの？！」

ふるふると体を小刻みに揺らし、握っていた菜箸がバキッと音を鳴らして木クズとなる。

「ふえっ？！」

「あんたは……どこまでウチの気持ち遊びを遊べば気が済むのかしらねえ」

美波の声は真夏のアスファルトの陽炎のように揺らいでいた。

「いや、えっと。美波……美波さん？」

ドンツと言う床を踏みつける音に尻もちをついて後ずさりする明久。

距離を詰めるように美波は小さく1歩前に出る。

「明久っ！ まだ間に合うから今すぐ島田に謝るんだ！」

心配してくれるのか雄二。Fクラス代表だけあって冷静さを失わないんだね。

「早くしないと教室がお前の血で汚れちまう！」

「僕より教室を心配するつもりか貴様はっ！」

「ああ、そうだ！」

いっさいの濁りのない純粋な声で雄二は言い放った。迷いもなく言いやがったぞこいつ。

「さあてアキ……どこから感覚を失いたい？」

今度は雄二を血祭りにあげてやるからな。

だがその前に、この場を生きて帰らなきゃならないんだ。

「さつきは悪かったよ。僕は美波の気持ちに気付いてあげれなかった。だけど今ようやく分かったよ。美波が言いたかった事。」

それは

「やっと分かってくれたのね。そうよウチはあんたの事が

」

「美波はミディアムレア派じゃなかったんだね。って何で折った菜箸を凶器のように持ち直してるの?!」

美波は菜箸をやり投げで今にも投げ飛ばしそうな持ち方に変わっている。

「形見として残したい部分はどこが良い？」

誰かこの中に精神科のお医者様はいらっしゃいませんか？

「待つのが島田よ」

いた。天使のようなナースが。

「そんなグロイ形見など誰もいらぬと思うのじゃが」

「僕は秀吉を信じてたのにつ！」

「明久よ。残念じゃが今回はお主が悪かったみたいじゃの」

「ああそうだな。そりゃ島田も怒るのも無理はねえ」

何でみんなは分かったかのように頷いているんだ。僕には何が

何だかサツパリだ。とにかく悪い事をしたって言うのなら謝るか生きる道はなさそうだ。

「ホントすいませんでした！美波の可愛いエプロンからステークのニオイがしたら、つい口が出てしまいました！だ、だから命だけは許してくださいっ！」

生きるための遺言は残した。後は出来るだけ命を守れるように

両手を顔の前でクロスさせて目を閉じた。

耳だけを頼りに聞こえて来る足音は目で見ていない分、リアルに感じ取れて目の前まで来ているのがわかる。

教室を踏むゴム製の上履きの音がこれほどまで怖く思えただろうか。

1歩。 また1歩。 ゴムが床を踏む音が大きくなる。そして、その足音が目と鼻の先で止まった。

「……………」  
明久は、ぎゅうつと目を閉じて美波から来る衝撃に備えた。

どこに来るかわからない衝撃を。

衝撃を……………。

……………。

「……………あれ？」

声の後にゆっくりと目を開けると、目の前にいたはずの美波の姿が見えない。

代わりに見えたのは背中まで伸びた赤い髪。

「……………？」

そのまま徐々に目を開けていくと見えて来る全貌は、赤い髪が落ちないように白い生地で覆っている。

その姿は初めて見たような光景。 だけでも、その姿は1+1よりも簡単な問題だった。

「美波……………？」

目の前に見える光景は、あまり見た事がなかった島田美波の後ろ姿だった。

美波は明久から背を向けながら、

「は、早く来なさいよね。 せっかく作った料理が冷めたら勿体ないでしょ」

そう言っつて美波は一人、足早に教室から出ていった。

「えっ？ あ、うん……………」



明久は嘩然としながらも、力の抜けた体を両手で床を支えにして立ち上がった。

「ではワシも昼ご飯の御馳走になってくるとしようかの。明久よ、早くせねばワシが全部食べてしまうぞ」

首をかしげる明久に秀吉がトンツと軽く背中を叩く。

「あ、待ってよ秀吉」

よく分からないが、何とか今日を生きる事が出来るみたいだ。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十七問】 発想の天才

B A K A T O T E S T

文月学園の家庭科室は新校舎1階の一番奥、つまり2階にある学園長室の真下にある。

本来、授業に家庭科の時間割はないが文月学園はこうしたイベントのために一般の学園に設置されている設備と同じようになっていいる。他にも音楽の授業はないが吹奏楽部のために音楽室は存在する。

「え？ ステーキはAクラスが作ってたの？」

先に行ってしまった美波に追いついた明久と秀吉は家庭科室に向かいながら話を続けた。

「ウチらの支給されたお金でステーキが買える訳ないでしょ」

「なんだあ……初めてステーキが食べられると思ったのに残念だよ」  
新入生歓迎会のための出し物に必要な費用もAクラスからFクラスで違ってくる。Aクラスはステーキでも余裕で出せるほどに對してFクラスはテーブルクロスすらも保健室で借りて来なければならぬほど天地の差ができていいる。

「ずいぶんとステーキにこだわるとはな」

「別にステーキって言う訳じゃないんだけど、ここ最近はお肉を噛んだ覚えがないほど食べてなかったからさ」  
せめて、すき焼きでも食べれたらな。

「新入生歓迎会が成功すれば、もしかすると雄二がおごってくれるかもしれないぞ」

明久は手で虫を払うように、

「ないない。あの雄二がそんな大層な事をする訳ないって」

と、家庭科室の前まで来た時、美波が振り返った。

「いいアキ。別に調理場には男子禁制って訳じゃないけど、危ないからふざけないでよ」

「一応僕だって料理人だし、それぐらいは心得てるよ」

「なぜそこにワシを入れてくれんのじゃ島田よ」

「木下は『秀吉』なんだから、禁制されるところなんてないでしょ」「ついに島田までワシを男と見てくれなくなってしまったの……」

美波が家庭科室の扉をガチャリと開けると、一気に中からの二才イと熱気がエアコンの排気口のように風が顔に当たった。

「うあつぷ」と思わず目を閉じる行動と顔の前に手を出す行動を同時に行う。別にサウナに入った時みたいな熱さほどではないが咄嗟に体が反応した。

ゆっくりとした動きで目を開けていくと、Fクラスの教室よりも少し広い場所には長めの黒いテーブルが数えきれないほど配置されている光景が見えた。見た感じでは20以上はある。

そのほとんどにテーブルを囲んで大勢の女子たちが調理をしている。人数はざっと50人はいるだろうか。一つのテーブルに6人は配置されて流れるように作業を続けていく。

まるで戦場のように声が飛び交い、炒める野菜が水分を飛ばす音を鳴らす。

「これはずいぶんと本格的な事になっておるの。男子禁制と言っても良いぐらいじゃな」

「今年は最近流行してるメイド喫茶の影響なのか、ほとんどのクラスが模擬店にするらしいわよ」

美波が先頭になって家庭科室を歩いていると一人の女子が真剣な顔をして鍋と向き合っている。

いつもなら背中まで伸びた柔軟剤でも入っていきそうなフワツとした髪を後頭部の辺りで折り返して背中より少し手前の方で髪止めしている姫路瑞希。

姫路は手のひらサイズのストップウォッチを持って、右手で赤い

取っ手のついたお玉を時計周りにゆつくりとかき混ぜていた。

「瑞希。アキと木下連れて来たわよ」

よほど真剣で周りが見えていなかったのか、美波の声を聞いて少しピクリと肩を跳ねさせてから姫路は振り返った。

「あ、お帰りなさい美波ちゃん。明久君と木下君はいらっしゃいます。そちらはもう終わったのですか？」

「後は飾り付けで完成かな。今、雄二たちが仕上げに入ってるよ」  
「姫路はどのような感じじゃ？」

「私の方も、もう少しで完成ですので待っててくれますか」  
「うん。楽しみにしてるよ」

少し微笑みをかけた姫路は、再び鍋に入った料理と向き合い真剣な顔つきに戻った。

「それじゃあ先にウチの料理から味見してよ」

明久たちも、真剣な姫路を見て邪魔はできないと思い、先に美波の料理を見る事にした。

家庭科室は調理場の中心に食べるためのスペースが設けられている。

テーブルにはすでに美波が作ったであろう料理が皿に盛りつけられた状態で置かれている。

「これって、オムライスだよな？」

白い皿の上には黄色と少し焦げ目を入れたオムライス。オシヤシなレストランで出されるような半熟タマゴではなく、食堂で出てくるご飯をタマゴで包んだやつ。

「前にテレビで見たんだけど、メイド喫茶ってオムライスを出すらしいから作ってみたの」

「見た目も綺麗で、良い感じだね」

お腹が減ってるって事もあるけど前に美波の家でパエリアを食べたからわかる。

このオムライスは絶対に美味しい。

「ではさっそく、いただいても良いかの？ ワシもそろそろお腹が

空いて限界じゃ」

「ううん」と美波は口元に手を当てながら自分の作ったオムライスに難しい顔で見ている。

「どうしたの美波？」

「何か足りないような気がするのよね」

「味付けが足りんと言っのの？」

「そうじゃないんだけど、何か後1つ足りない気がしてしかたがないの。ちよつと待ってね料理本で調べてみるから」

そう言っつて美波は、テーブルに置かれた自分のカバンから料理に関する参考書を取り出しペラペラとめくっていく。ちなみに料理本は学園の図書館から借りてきたらしい。

「ちよつとアキも調べるの手伝っつてよ」

「ええっ……もうお腹すいたんだけど」

「ウチのモヤモヤが取れるまで食べさせないから」

「うう、わかつたよ」

明久は美波のカバンから無造作に出された料理本の一つを手に取り、

「見た目も十分だし、これで完璧だと思っけどな」

「島田も料理担当になつたからには、手抜きを許さんのじゃろ」

秀吉も無造作に置かれた一冊を手にとってペラペラとめくる。

「そっかあ」

明久は、ふと美波の方に顔を向ける。

それにしても美波がこれほどまで熱心な姿を初めて見た。

前にパエリアを御馳走になつた時は、僕もパエリアの作り方を教えてもらうために必死だつたよな気がする。もしかすると美波もあの時の僕と同じなのかも。

ことわざに、休むことすら惜しいほど忙しいって言っのがある。

えつと確か『貧乏暇なし』。

でもそれは貧乏人の事を言っつから美波の場合はまた違っ言葉になるのか。

と、真剣な顔をしながら料理本を読んでいる美波の顔を見てや下に視線を下げた。

「美波は『貧乳胸なし』だね」

瞬間。反応すらできない一瞬間の間に明久の腹部にめり込んでくる拳があった。

「ぐはっあ！」

明久は腹部を押さえながら、ふらふらと後ろに二歩三歩下がる。

「思い出させてくれてありがとうアキ。何か足りないと思ったら真つ赤なトマトケチャップが足りなかったのよ」

「み、……美波。僕はトマトじゃないから残念ながらケチャップは出せそうにないよ」

「大丈夫よ。後でトマト味を足しておくから」

それ最初からトマトケチャップかけた方が正しいと思うよ。

「明久は島田を怒らせる天才じゃの」

家庭科室を監視していた教師に怒られた明久は、今度はちゃんとテーブルに座った。

「何で僕だけが怒られるのさ。美波だって暴れてたじゃないか」

「今のは明久が悪いと思うのじゃが。相手が島田じゃったから半殺しで済んだものの、あれはセクハラじゃぞ」

「お待たせ」と美波が先ほどあったオムライスの上に正真正銘のトマトケチャップをかけて明久と秀吉の前に出された。

「ちょっと冷めちゃってるけど味は美味しいと思うから食べてみて」「じゃあさっそくいただきますよ」

明久と秀吉は、さっそくスプーンでオムライスを一口、口の中へと運んでいった。

口の中で味を確かめ、ゴクリと飲み込む。

「うむ、美味しいのじゃ」

「凄く美味しいよ美波。この前のパエリアも美味しかったけど、このオムライスも最高だよ」

「良かった。自信はあつたけど、これで美味しくなかつたら、どうしようって思ってたわよ」

緊張の糸がほぐれたのか、美波はほつと絶壁を撫で下ろした。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ美波。これだけ美味しかったら、将来が良いお嫁さんになれるって」

「お、お嫁さん?! そ、そんなのまだ早いわよつ。それにウチらまだ学生だし……あ、でももう少ししたら」と美波には刺激が強いスパイスだったようで火を吹くように顔がみるみる赤くなっていく。

頑張つて働いた分、ご飯のありがたみが染み込んでくるよ。

そんな事を知らずと明久は午後を過ぎた遅い昼食を食べるのに必死になって聞こえてはいない。

「明久君、木下君、お待たせしました。私も完成したので味見をしてもらえますか?」

先ほどまでずっと鍋の前で真剣に調理をしていた姫路が、ようやく完成したのか明久たちのところへやってきた。

姫路は鍋だったため一度、調理場の方に向かう。

蓋を開けた鍋を覗きこむと、いろんな食材が一緒に煮込まれている。

「姫路さんはスープを作ったんだ」

「最近、ちよつとスープに挑戦してみたかったので」

「へえ、姫路さんは料理好きなんだね」

皿に入れられていくスープは、少し透明に近い色をしているが味が染み込んでいるようにも見える。

「料理好きと言うより生活の一部と言ったところですね。私、小さい頃から勉強より料理ばかり作っていたので」

話しながら3人分のスープが全員の前に並べられる。

「お口に合うかわかりませんがどうぞ」

3人は口を合わせて、いただきますと言いスープをゴクリと一口飲んだ。

3秒ほどの沈黙が続いた。まるで時間が止まったかのようには。「こ、こんなの僕らじゃ飲めないよ」と明久の一言で時計が動きだす。

「あの……私の料理は美味しくなかったですか？」

「こんな美味いスープ、僕たち庶民じゃ幾ら払ったら飲めるかわからないほどの美味さだよ姫路さん！」

「確かに、これは高級レストランに出されても良いぐらいじゃな」

「悔しいけど、これほど美味しい料理が作れる何て……。ウチの負けよ瑞希」

あれだけ買い込んだ食材を全て使った料理が不味い訳がなかった。「良かったです。間違えて変な物を入れてしまったのかと思いましたが」

姫路は、ホッと胸を撫で下ろした。自分から名乗りあげながら美味しくなかったらどうしようと思っていたが、そんな心配は一瞬で吹き飛んだ。

「姫路さんは将来、料理人になる予定なの？」

「いえ。これだけ美味しい料理が作れるのは『思考錯誤【フルコース】』と言う才能のおかげなんです」

姫路はその場にあつた料理本を手に取った。

「私はこう言った料理本や実際に食べた味から学んだ事を頭の中で思考錯誤すると、さらに上の味を出す事が出来るんです」

「つまり姫路は発想の天才なんじゃの」

「そんなのウチが勝てる訳ないじゃない。うう卑怯よ瑞希！」

「そ、そんな事言われなくても困りますよ美波ちゃん」

「でもこれなら、お客さんもたくさん来てくれるね」

姫路さんは風格からして料理が得意そうだと思っていたけど、まさかここまでのレベルだったなんて凄い。



「そうね。味で負けても売り上げでは勝つわよ」

「私だって負けません美波ちゃん！ まだまだ美味しくなるように考えます」

そう言って二人はまた料理場に向かっていた。

これで明日の準備は全て整い、いよいよ明日の新入生歓迎会を待つだけとなった。

いける。二人の実力があれば新入生歓迎会の出し物はFクラスが一番になれるぞ。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十八問】 手紙の相手

B A K A T O T E S T

【問題】 『国語 慣用句』

問 以下の問いに答えなさい

福原「とても疲れていると言つ意味を持つ『膝が  
まる慣用句を答えなさい』」  
『に当ては

【姫路瑞希の答え】

姫路「膝が笑う【ひざがわらう】」

【教師のコメント】

福原「正解です」

【土屋康太の答え】

ムッツ「膝が割れる」

【教師のコメント】

福原「疲れを通り越して痛みが走っています」

【吉井明久の答え】  
明久「膝ガクガク」

【教師のコメント】  
福原「一瞬、正解にしそうになりました」

B A K A T O T E S T

何とか放課後までに準備が全て終わった。

すでに体力は限界で今すぐ家に帰ってベッドの上に飛び込みたい気持ちだけど、今朝から気になっていたあの手紙の主と対面する時間だ。

結局、雄二は翔子に連れられて帰って行き明久が一人で確認する事になった。

明久は手紙に指定されていた通り、午後五時に学園の校舎裏に足を運んだ。

「っと、たぶんこの事であってるよね」

ちょうど校庭の死角になる校舎裏は夕焼けが校舎に遮られ少しだけ色素が落ちているかのように薄暗くなっていた。告白の場としてはどうも気持ちが悪いかにはなれず逆に心臓が張り裂けそうなほど緊張している。

「いよいよ……か」

口が渴く。喉が枯れる。足が重い。手が震える。

いったい誰なのか、どんな女子なのかと胸を躍らせながら歩き、辺りを確認していると少し先に誰かが立っているのが見えた。

その瞬間、気持ちが急ブレーキをかける。

「……、大丈夫だ」

明久はその場で一度大きく深呼吸をして再び足を前に出す。

その足取りは少し遅く感じているが実際は早く知りたいと言う気持ちに釣られて歩くスピードを上げる。

距離は十メートルほど。暗いせいか、まだ向こうは明久に気がついていない。

なおも近づいて行くとその姿がハッキリと視界に映った。

後ろを向いているため顔は見えないが肩まで伸びた髪は毛先が無造作に分かれている。

……ないと思うけど、まさか女装した男子だったりして。

そんな気持ちもあり、何となく距離をとった場所で明久は足を止めた。もしものためにすぐ逃げられるように。

そして錆び着いたロボのように、ぎこちない口が開く。

「あ、あの！」

明久が呼びかけると、ピクリと両肩を反応させてから180度振り返った。

「あら、もしかして吉井明久君？」

意外にもその人は『女子』ではなく『女性』だった。最悪の展開である女装男子ではなかったのは良かったが、まさか女性だとは考えていなかった明久は目を大きくさせる。

大人びた風格は年齢からして二十代後半。いや前半と言っても良いぐらい若い。

学園の制服も黒いため後ろから見た時は生徒かと思っていたが服装は学園指定の制服ではなく、OLの人が着ている黒いビジネススーツ。

スリムな体型にモデルのように伸びた足が見えている。憧れの

美人秘書みたいな女性は、驚いて意識がどこか遠くへ行っている明久を見て首を少し傾けた。

「えっと、聞こえてるかしら？」

「そ、そうです。こ、この手紙を出してくれたのってあなたですか？」

思わず見惚れていた明久はハッと現実に戻ると見せるようにしてポケットから手紙を取り出した。

その手はふるふると小刻みに振動している。

緊張と予想もしなかった年上の相手に言葉がビクついているのが明久自身もわかるほどだ。何せ相手は美人秘書並みなんだ。

明久のガチガチ感情が伝わったのか彼女は優しそうな顔で微笑み返した。

「ええそうよ。その手紙は私がおあなたに渡したものよ」と言つて明久の周りを見て、再び明久に視線を移す。

「あなたともう一人、坂本雄二君を呼んだはずんだけど……。彼はまだ忙しいのかしら？」

その言葉に咄嗟に反応した。

「え？もしかして雄二のところにあつた手紙もおあなたが置いたやつだつたんですか？」

目を大きくさせた明久に対して、彼女は少し予想外な返事が来て驚いた。

「あら、二人ともFクラスって聞いたからもう気づいてるのかと思つただけど、わからなかつたかしら」

「いえ、手紙の主が同一人物だつて言うのは何となくわかつてたんですが、正直こんな展開になるとは思わなかつたんで」

彼女は少し意地悪そうな顔をする、

「もしかして、ラブレターが来たとか思つちやつたのかしら？こんなオバサンからのラブレターなんかで期待させてゴメンなさいね」

「い、いえそんな十分お綺麗ですよ。逆に嬉しいぐらいですから！」

「あら嬉しい事言ってくれるわね」

何で焦ってるんだ僕は……。しかも何気に年上好きみたいな言いかたになってるし。

しかも名前も知らない相手に……。あつ、

「そう言えば名前をまだ聞いてなかったですよね？」

彼女はハツと思いだしたかのように両手を合わせる。

「私とした事が自己紹介もまだだったわね。ちょっと待ってね」

そう言いながらカバンからランプほどの大きさの黒いケースを取り出しながら明久の前で立ち止まった。

ヒールを履いているから近づいて来ると明久と同じぐらいの高さになった。

「はい、これ」

彼女は先ほど取り出した物をまさに告白する時のように丁寧に両手で差し出した。それを受けとるタイミングと同時に彼女は言った。

「私は森野麗華もりのれいか。文月学園の試験召喚システムを管理している者よ」

名刺には言葉と同じ名前が書かれている。それに付け加えるのなら、試験召喚システムの技能開発員と書いてある。

「技能開発……。ってプログラマーみたいな方ですよ？ 何でそんな人が僕に手紙なんて」

「色々聞きたい事が山ほどあると思うけど、その前に坂本君は今どこに居るのか教えてくれないかしら？」

「えつと雄二なら今日はここに来れませんかよ」

「そうなの？」

「なんなら今から電話で呼びますけど？」

森野麗華はおもむろに腕時計に目をやった。

「んう。来れないのなら仕方がないわね。ところで吉井君は今から少しお時間あるかしら？」

「ええまあ特に用はないです」

「お姉さん、ちょっとお腹空いちゃったから何か食べながら話しましょうか」

「はあ……良いですけど」  
「ずいぶんとマイペースな人だな。」

緊張で口が渴いていた事もあり、明久の提案でファーストフードの店に行きながら、学園生活はどうか色々話しながら歩いていた。「そう言えば吉井君はFクラスなのよね？　なら涼子と同じクラスじゃない」

涼子？　涼子ってクラスには森野さんぐらい……だから。

「え、……まさか」

「私、あの子のお姉さんなの」

「えええええ！？」

「そんな大げさに驚かなくても」

「言っちゃ悪いと思うけど、見た目も性格も似てなさ過ぎる。で

も二人とも綺麗なところは似てるかな。」

「す、すいません。　ちよっとビックリしたもんで。　あ、ここで

食べましょうか」

ちようどファーストフードの店があったため、さっそく自動ドアをの前に立つ。

「あらア。　この時間は結構学生が多いのね」

「そう言えばもうすぐテストが近いんだった。　これだと座れる場所があるかな」

「じゃあ私が席を探しておくから、吉井君は注文してきてくれるかしら？」

「わかりました。　森野さんは何か決めてあります？」

「私は飲み物だけで良いわ。　あと今日はお姉さんが持ってあげるから、何でも頼んで良いわよ」

「え、本当ですか？　そ、それじゃあお言葉に甘えて」  
丁度お金がなくて困ったところだったから助かる。

最近、明久の姉である吉井玲が明久の金の管理をするようになった。理由は以前に渡したばかりのお小遣いを全額使った事がバレたから。

葉月ちゃんのためとは言え、さすがに一気に使ったのは怒られても仕方がない。でも美波も姫路さんも喜んでくれたし後悔はしていないから良いけどね。

失ったモノは大きいけど、その分手に入れたモノの方が大きいから結果オーライだ。

「さて、久しぶりの外食は何にしようかな」

まだどれにしようか決めていなかった明久は客の後ろに並び店員さんの後ろにあるボードを見上げながら考えていた。

「お待たせしました。ご注文はお決まりでしょうか」と元気のあ  
る声が明久の並ぶカウンターの一つ隣から聞こえて来た。

何だ。向こうの方が進み具合が早かったんだ。

「えっと、チーズバーガーのセットを1つ」

「チーズバーガーセットを、お1つ」

店員は同じ品名を繰り返しレジを打つ。

ああチーズバーガーも美味しそうだな。

「それとテリヤキバーガー1つ」

同じように店員は繰り返しレジを打つ。

うん。テリヤキバーガーも捨てがたい。

今、注文している客はずいぶん共通点があっているような気がする。

「それと自由の翼を1つください」

「ご注文は以上で宜しいでしょうか？」

店員は繰り返し返さなかった。

「オレに自由をくれ」

「ご注文は以上ですね？」



店員はスマイル0円で注文を繰り返した。

大柄の男は店員にしつこく迫っている。

赤い髪を逆立てている180cm超えの大男はレジのカウンターに手をつけて

「って何してんの……雄二」

笑っているのに笑っていない店員さん。 それに対して必死になる坂本雄二。

実に変態の光景だ。

咄嗟に逃げようとしたけど、注文もまだだったから逃げられずに結局雄二に捕まった。

「んで、お前はその手紙の相手とデートって訳か？」

「そんなんじゃないよ。 森野さんがお腹空いたって言うからさ」

二人は茶色いプレートに注文したものを乗せて席に戻りながら明久は放課後の事を話した。

「ところで、さっきからオレについて来てるが、席はこっちで良いのか？」

「あ、そう言えば森野さんどこに座るか聞いてなかったな」

明久は辺りを見渡すが夕方の学校返りで学生が目立つ。 満席とはいかないがそれでもこれだけ多い人から一人探すとなると至難の技だ。

「そんじゃオレはあそこで翔子待たせてるから行くぞ」

「え、……あ、ちょっと待ってよ」と明久は視界を左右に動かしながら、特に行く宛てもないため雄二の方に歩いて行くと、

「あつ！ 吉井君こっちこっち！」

同じ方向には探していた森野麗華が片手を伸ばして明久を呼ぶ。

「良かった。 なかなか見つからなかったんで、どうしようかと思いましたよ」



り合っ。

「ゴ、ゴメンなさい！ 制服ビしゃビしゃにならなかった？」

「ゴホッゴホ……だ、大丈夫です」

「こっちも何とか平気……って何しれっとシャツを脱がそうとしてんだ翔子?!」

「……シミになったら大変」

気が付いた時にはシャツのボタン上3つを開けられていた。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第六十九問】 彼女のお願ひ

B A K A T O T E S T

「さつきはゴメンなさい。まさかそんなに驚くとは思ってなかったから」

「いやもう良いつすよ……」

言いながら手に取ったチーズバーガーを一口食べる。

「えっと、色々と展開はあつたけどこうして二人を呼べたワケだし、そろそろ話しても良いかしら」

「待て、その話は翔子が聞いても大丈夫なのか」

「ええ大丈夫よ。むしろ翔子ちゃんにも聞いてもらえると助かるかもしれないわね」

霧島さんに聞かれても大丈夫な話って事？ この人の目的が全然見えない。

「翔子はどうする。聞きたくなかったら少し席を外してくれ」

呼びかけに翔子は首を横に振った。

「……雄二と吉井だけだと少し不安だから私も聞いておく」

「そっか。だ、そうだから話を続けてくれ森野さんよ」

「わかつたわ。あ、先に断つておくけど、手紙はラブレターとかそんなんじゃないから安心してね」

「……私は雄二を信じてるから大丈夫」

「そうは言つてもお前、手紙見た瞬間破り捨ててたがな痛だだだ。肉を引つ張るな翔子！」

「あなたたちのアドレス知らなかったから、その……ちょうど昔使つてた便箋で書いてみたの」

彼女は恥ずかしそうに答える。まるで告白している女子のよう

に顔を赤らめながら。

なんだそう言うことだったんだ。

「いやあ正直、あれには騙されましたよ。 ついに僕にも春が来たんだあ何て喜んでたら雄二にも同じ手紙があるんですから。 ねえ雄二？」

「オレに振るなバカ」

さらに一口食べる。 雄二は会話に参加する気がないのか不機嫌そうに一人もくもくと口を動かす。

「んで、オレと明久を呼んであんたは何が目的なんだ？ どうせ腕輪の話なんだろうけど」

「察が良いわね。 私があなたたちを呼んだ理由は他にもない、あの学園を崩壊させた腕輪について詳しく聞かせてもらいたい」「学園崩壊事件についてはババアから話を聞いてるんだな？」

「一通りはね。 学園長は疑似召喚フィールドが使える腕輪については知らないけど、私はお見通しだから隠しても無駄よ」

「ああ分かってる。 こっちも真実とやらを聞きたいからな」

「あの、何で森野さんは腕輪について詳しいんですか？」

「私の仕事は学園長から依頼された腕輪のプログラムを作る事だからよ。 腕輪に関しては学園長以上の知識を持ち合わせてる」

「ああそう言う事ですか」

へえ。 じゃあ僕の腕輪も森野さんがプログラムした腕輪なのか。「話を戻すけど、あなたたちが学園を壊した時に使った腕輪は正規データではないもので作られた腕輪なの。 実際に被害にあつて分かると思うけど、あの腕輪はとても危険な代物」

森野さんもプログラマーとして責任を感じてるのか。 でもあれは藤堂歩が悪用したのが悪いんだけど、あいつの名前はここで言えないもんなあ。

「つまり、その危険な腕輪を回収するためにオレたちを呼んだってワケか。 だったら残念だが腕輪は今ババアが管理している。 それにババアは腕輪を危険度のないようにするって言うってたぞ」

「それは知ってる」

「ん？ それならオレたちを呼ぶ意味がないんじゃないのか？」

「問題なのは、その腕輪の今後の行方についてよ」

「腕輪の行方ですか？」

「明日の新入生歓迎会のイベントの一つ、部活紹介戦争の優勝商品になるのは知ってるかしら」

「あのババア。部活戦争を盛り上げるために腕輪で釣ろうって魂胆かよ」

「もう分かる通り、私があなたたちを呼んだのは腕輪が誰か他の人の手に渡る前に、部活紹介戦争で優勝してほしいって言うワケ」

「それなら僕らが参加するより、霧島さんとかAクラスの人に頼んだ方が確実じゃないですか？」

何せ僕らは最低ランクFクラス何だから効率が悪い。

腕輪の事情を知っている僕らに優勝してもらいたって言うのは分かるけど、Aクラスなら実力者が大勢いるんだから、そんな危険な賭けみたいな方法にしなくても大丈夫だと思うけどな。

「それは無理……」

「？」

「……ここ最近、通り魔事件があるのを知ってるかしら」

「通り魔事件？」

「ああ確かこの辺りで人が襲われたってニュースでやってたな」

そうなんだ。最近テレビとか見てなかったから知らなかった。

「……私も知ってる。通り魔にあった人はどこにも外傷がなくて見つかった場所では悲鳴もなかったって言う奇妙な事件で騒がれる」

「そう。奇妙な事件なの」

一度、口を閉ざした森野は、すでに氷が解けて温くなったコーヒを飲むと再び口を開いた。

「……まだ確証は持てないけど、その事件の犯人は別の特殊な腕輪を持った文月学園の教師か生徒」

「えっ！ 学園内に通り魔が?!」

でも腕輪で召喚獣を呼べるのは生徒と教師のみ。 奇妙な事件とならば召喚獣が関係しているのも変な話ではないけど。

「…なら、あいつの可能性は低いのか」

「? 何か言ったかしら?」

「いや何でもない」

雄二も通り魔の犯人が藤堂歩なんじゃないかって予想していたのか。 でも教師でも生徒でもない藤堂は人に危害を加える事は不可能だ。

だからあいつは僕と雄二に腕輪を使わせたんだもんな。

彼女はテーブルに置いたコーヒーに手を添えながら揺れる波紋を見つめる。

「私たちが開発している腕輪は本来、人間に害を及ぼす事はないけど、中には特別な技術で映像が物体に触れる『物理干渉能力』や映像が精神に触れる『精神干渉能力』って言うのがある」

精神干渉能力……? なるほど、それで外傷がない事件って事か。 「『精神干渉能力』は簡単に言えば、デジタルの電気を人間の電気信号に干渉させる腕輪。 これは将来的に意図的な方法で電気信号を操れる医学技術を目標として実験用に作られた試作品。 もちろん普通の人間が持っている事は有り得ない」

「それが通り魔の持つ腕輪ってワケか。 なら、その試作品を盗まれたのか?」

「本物は研究所で保管されているけど、おそらくデータを盗んで作られた腕輪の可能性が高いわね」

「んで、その通り魔が欲を出して優勝商品の腕輪を手に入れないように回収するってことか。 だったら尚更、明久の言う通りオレたちより翔子やAクラスに頼んだ方が確実なんじゃねーのか?」

「それがダメなの」と森野麗華は雄二の質問をバツサリと切り落とした。

「?」

「腕輪については色々条件があつて、ほとんどは点数が低い召喚獣を召喚する事は出来ない仕様になつてるの。だから犯人は学園の教師かAクラスかBクラスの生徒」

「なるほどな。犯人かもしれないAクラスやBクラスに参加してもらつて腕輪を回収するのは逆に危険だつて事か」

彼女はコクリと首を縦に振る。

「翔子ちゃんにも話を聞いてもらいたかつたのは、この事を耳に入れておいてほしかったからよ」

「……Aクラスに通り魔をする人はいないと思うけど、私も警戒しておく」

「大丈夫だよ霧島さん。Aクラスはみんな良い人たちばかりだよ」

「……私も代表として皆を信じてる」

「でも、通り魔の犯人はどうするんですか？」

「さすがに情報が少ない犯人をあなたたちに任せるつもりはないわよ。例え遭遇してもすぐに逃げてちょうだい」

「わかりました」

いくら何でも人を襲う犯人を捕まえるつて言われたら無理があるよね。

「にしても、聞いている内に色々と話が面倒な事になつてやがるな」  
「確かにもっと簡単な方法なら他にもありそうだけど。」

「……あの、学園長に不良品だつて言つて回収するのは？」

「そ、それは……」

なぜかそこで言葉に詰まる森野麗華。代弁するかのように雄二が口を開ける。

「ババアに言えないからオレたちに頼みに来たんだよ」

「！……………」

「どう言つこと？」

「回収しようとしている腕輪はババアが開発に関わっていない独自開発された代物つて事だよ。オレがババアに腕輪を渡した時に腕



輪の事を知らなかっただろ」

「そう言えばそんな事を言ってたような」

「確かに私は学園長から腕輪の回収ができない。　だけどその理由  
は私が腕輪を作ったからじゃなくて学園長の方が召喚システムの権  
力を持っているからよ」

「おいおい、誰があんたが作った腕輪だって言った？　オレはただ  
独自開発としか言っていないぞ」

まるで全ての謎が解けたかのように雄二は森野麗華を見てニヤリ  
と口を上げる。

「!？」

「あんた……学園を崩壊させた腕輪をオレたちに渡した人間が誰な  
のか知っているよな」

「っ……………、さあ知らないわね」

彼女は一瞬肩を震わせたように見えた。　それを誤魔化すように  
コーヒーのカップを手取る。

「今さらオレに嘘が通用すると思うなよ。　オレの『相对音感【ノ  
イズキャンセラー】』はあんたの声が嘘か本当か聞き分けれるんだ。

だから正直に話してもらおうか、森野麗華さん」

「だから私は何も知らないって」

坂本雄二はさらに口元を釣りあげて自信に満ちた顔をしながら「  
いや……………」  
「確実に言葉を耳に入れさせるために少しゆっくりと  
した口調で、

「藤堂麗華さんって言うべきか？」

刹那、森野麗華はカップを持ったまま冷凍保存されたかのように  
手が止まった。　そしてカップについた水滴がまるで汗のように滴  
り落ちる。

水滴は指を伝い、その先にあった薬指のリングに吸い込まれてい  
く。

「え…？ と、藤堂?!」

「いったい何を言い出すんだ雄二は。」

「……………」

「否定しないって事は、………… やっぱりそうなんだな」

森野は笑いを含めたタメ息を吐き出し、そつとカップをテーブルに置いた。

「まったく………… 最近の子は発想力の凄さに驚かされるわね」

「これでも神童なんて呼ばれてる人間なもんでね」

「どこから気づいていたのよ」

「しいて言うなら最初から想定した上で質問してたな」

「さつきから細かい質問をしていたのは、その才能の力で私の嘘を聞き分けるためだったのね」

「ああ、ありや嘘だ」と雄二はキツパリと切り捨てるように言った。

「………… え？」

「オレの才能は声で嘘か本当か何て聞き分ける事が出来るほど便利じゃねーよ」

「はあ、何て子なの…………。嘘を見極めるどころか自分自身が嘘をついてた何て」

頭に手を当て森野は雄二の嘘を見極める嘘の束縛から解放されたかのように肩の重荷が取れたように深いため息を吐いている。

「ちよ、ちよつと待ってよ。森野さんが藤堂ってどう言う事なの?!」

状況を飲みこめない明久は一人、蚊帳の外に投げ出されたような感覚だった。

「指輪だよ指輪。それ見りゃバカのお前でも、だいたい想像つくだろ」

首で示した方向に明久が目をやると、森野麗華の左手薬指にはシ

ルバーのリングがはめてあった。

「それって……もしかして結婚指輪……ですか？」

「ええ、そうよ」と言いながら彼女は結婚指輪にそつと触れた。

「じゃあ本当に森野さんは……」

「坂本君が言った通り、私は藤堂歩の結婚相手。夫の名を知ってるって事はやっぱりあなたに腕輪を渡したのは彼ね」

「ああそうだ。おっと、あいつの事はババアには言っていないから安心してくれ」

「……そう、……ありがとう助かるわ」

「あの、こんな事は言いたくないですが森野さんの名前が藤堂って言うのなら、僕らを騙すために呼んだんじゃないですか？」

「それは大丈夫……、とは言っても信じてくれないかもしれないけど、私は彼がこれ以上、人様に迷惑をかけないようにしたかったの」

「なるほどな」と雄二はあまり興味を持っていないような、そつけない返事をした。

「……吉井、信じてあげて。この人は嘘をついているとは思えない」

「霧島さん……」明久は視線の森野に移し考えるように目を合わせ「わかりました、信じます」と根拠のない返事をした。

「ありがとう。そう言ってもらえるだけで嬉しいわ」

微笑む彼女だったが、少しするとその表情はまたすぐに真面目な顔に戻った。

「被害者のあなたたちにお願いできる立場じゃないのは分かってる。でも彼がこれ以上危険な行為に走る前に止めたいの」

「だったらあの男の目的は何か話してもらおうか。場合によっちゃ無理やり聞かせてもらう」

威嚇するように森野を見る雄二に少し黙った森野は「分かったわ。私の知っている彼の全てを話す」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十問】 真実と目的

B A K A T O T E S T

「彼は……、藤堂歩は『完全な腕輪』を作ろうとしているの」  
「完全な腕輪？」

「藤堂には完成品を不完全な状態でしか作れない『不完全攻略【デバッグミス】』の才能を克服するために祖母である藤堂カヲルさんの技術を超える『完全な腕輪』を作るのが目的だった」

「そう言えば、オレに腕輪を渡して来た時にそんな事言ってたな」  
雄二に初めて藤堂が接触したのはAクラスとの試験召喚戦争後。  
釣られるように明久も記憶を呼び戻す。

「あ、それなら僕も同じような事聞かされたよ」  
「あの人も私と同じ試験召喚システムのプログラマーで、最初はただ単に実力を超えたいだけで動いていた。昔は真面目でいつも研究室に籠って真剣な姿を見て私も協力していた。でも、なかなか成功できないある日、彼は才能に取り憑かれたように別人になって腕輪のデータを持ち出してどこかへ行ってしまったの」

「……それって雄二と同じ、『負の才能』が原因だと思う」  
「だろうな。オレも才能に意識を乗っ取られてる感じがあった」  
「彼がいなくなっただけから私はずっと信じていた。信じて探し続けた。きつとすぐに戻ってくるって……だけど現実はそう甘くはなかったわ」

彼女の口はさらに重くなっていく。夕日が沈んで光が消えていくように。

「一年前、一人の生徒を巻き込んだ事件を目撃して、それで彼が間違った道を歩んでいるのに気が付いた」

一年前……？ 目撃って……ちよつと待てよ。

…まさか。

…まさか。

「その巻き込んだ生徒って……？」  
いや、聞かなくても分かる。その巻き込まれた人物が僕だって言うのは分かる。」

だけどここの耳で聞かなくちゃ信じられないから。

森野は言葉のポリウムをそのままに冷静な声で返す。

「今まで黙ってたけど、あなたを瓦礫の中から助けたのは私よ」

「……っ！？ 森野さんが……僕の命を……」

予想外の返答に声が出ているのかさえ分からなくなった。

この人が。この人が。

姉さんに聞いてもわからなかった命の恩人。運ばれて来た時の救急隊員に聞いても分からなかった命の恩人。

その人がやつと、……やつと分かった。

だけど、

「何で今まで教えてくれなかったんですか。僕を助けてくれた人をずっと探してたんですよ」

「あの時は吉井君が学園崩壊の時に使った腕輪を回収した事をバラしたくなかった」

腕輪？ そう言えば藤堂から渡された腕輪を使ったはずなのに気が付いた時にはもうなかった。あれは藤堂歩に回収されたのかと思っただけど森野さんが回収していたのか。

「それで今まで隠してたんですか……」

「今回も本当は私の正体をバラさないようにはしてたんだけど、まさか全部推理されちゃうなんてね。これで私の隠している事は全てよ」

「なら僕たちに藤堂が接触して来た理由は森野さんでも分からないんですか？」

「私が知ってるのは、彼がまだ彼だった時まで。才能に取り憑かれてからは彼の目的が何か分からない。だから今は腕輪を彼に渡

らせないように回収してるってワケよ」

「だいたいあなたの目的がわかった」

雄二は腕を組んで重い空気を吹き飛ばすように吸い込んだ息を吐き出す。

「だが事情はどうとして悪いが今回の話は」

「……雄二が腕輪を回収してくれるから安心してください」

「なかつた事につ……て、おい翔子、何言ってるんだよ」

「……同じ妻として、夫を助けたい気持ちは良くわかった」

「あんな翔子。藤堂歩はオレたちを巻き込んだ奴でもあるんだぞ」

「……あれは雄二が腕輪を使わなかつたら起きなかつた事件。人に罪を擦り付けるのは許さない」

「うっ……でもな」と雄二は声を大きくするがエンストするように

「……はあ。一度、翔子にスイッチが入るとどうしようもないか」

「僕も腕輪の回収の手伝いに賛成する。命の恩人が助けを求めてるんだから恩返ししなくちゃね」

「……ったく……わかつたよ。ホントお前らはお人よしだな」

面倒くさそうに頭をボリボリと呆れた顔と言うより諦めた顔をしている。

「そ、それじゃあ私のお願いを……？」

「あなたの思惑通り、参加して優勝して腕輪の回収してやるって事だよ」

彼女は声こそ出さないが嬉しそうに感情が高ぶる。

「良かった……ありがとう。本当にありがとう」

揺れるような声が口を押さえる手から溢れていた。

その後、森野麗華と別れて明久たちもそれから少ししてから店を出て帰り道を歩いていった。

「結局、森野さんの目的って腕輪を回収するだけなの？」

「ババアの腕輪技術を盗んで独自研究した森野麗華の技術をさらに藤堂歩が盗んで間違った方向に行ったのを、これ以上進めないように止めようとしてるんだろな」

「どうしてそこまでして助けようとするんだろ。自分の技術を悪用されたら普通怒ると思うけどな」

「さあなオレにも理解できねえ難問だ。それでもあの人は藤堂歩を助けるために必死なんだろ」

「……夫の間違いは妻が補う。それが夫婦って言うもの。だから雄二の間違いは私が補う」

「いつオレとお前が夫婦になったんだよ」  
「それで霧島さんは参加するように雄二に言ったんだね」

「正直、藤堂歩を助ける何て事はしたくなかったが、そうでもしないと泣かれでもしたら後味悪いだろ。だいたい被害者のオレたちに助けを求めるあの人もどうかしてるぜ」

「僕だって記憶喪失にさせられてムカついてるけど、そこは僕らも藤堂に手を貸してしまった共犯でもあるからね。それに命を助けてくれた恩も返さないかね」

雄二は自分に言い聞かせるように、  
「ま、女の泣を見て嬉しいとは思わねえからな」

投げ捨てるように言った言葉だが、その石はとても重く遠くには飛んでいかなかった。

日が落ちてなお部屋に明かりを灯さず、勉強机の小さな蛍光灯だけを頼りに参考書を広げもくもくとペンを動かす久保利光。

すると、横に置いてあった携帯電話が振動して着信を呼び掛ける。ペンを持ちながら空いている片手で折りたたまれた携帯を開くと非通知と表示された画面。

久保は躊躇う事なく通話ボタンを押した。

「……もしもし」



「どうだい腕輪の調子は」

受話器の向こうからは男の声が帰って来た。音声変換機を使っているワケでもなく普通の少し低めの声。

「まあまあ、と答えておきましょうか。まだ僕の目的は叶えられないのが残念です」

「君の目的にオレの腕輪の技術の採点を引かないでほしいものだ。

目的とやらは君の実力次第でどうにでも変えられるじゃないか」

「そう言うのなら、今すぐ僕の目的を叶えてくださいよ」

「ははっ、冗談を。言っただろオレは一人が良いのでね。君の目的を達成させたいのならその腕輪を使って他を当たってくれ」

「ところで用件はなんですか？ 僕は勉強で忙しいんですから切りますよ」

「明日は新人生歓迎会があるそうだな」

久保は机の上に置いてある置き型カレンダーに目をやった。

「ああそう言えば、そんなくだらないイベントがありましたか。ま、僕は参加しませんけど」

「おいおい、君の目的を果たせるせっかくのチャンスだろ。そんな事ではいつまで経っても変わらないぞ」

「不愉快だ。切らせてもらおう」

久保は舌打ちをして耳から携帯を離れた時、微かながら電話の向こうから久保にだけ聞こえるほどの音量が届いた。

「……………」  
内容に興味を示したのか離れた携帯電話を再び耳元に当てると徐々に音声が大きくなる。

「、これなら君の目的も果たせるし、オレもそれで目的を果たす事にも繋がる。だから協力してもらえないか？」

「そうですね……………良いでしょう。こちらで考えておきます」  
久保は電話を切ると携帯の画面を見つめた。

「……………藤堂歩。何が目的かは知らないが、僕の目的が果たせるのであれば……………」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十問】 真実と目的（後書き）

黒幕、藤堂歩の事実が分かったところで、何とか新入生歓迎会【前日編】を予定通り（ギリギリ）7月内で終わらせれました。

ぐだぐだな話が長いんだよ！

作者も読者の皆さんも思っている事でしょう。

読んでいて分かると思いますが第三章は、かなり展開を作り上げています。

第二次試験召喚戦争、部活紹介戦争、通り魔事件、隠し展開。

作り過ぎなのは招致の上で新入生歓迎会【当日編】をお待ちください。

【第七十一問】 新入生歓迎会

B A K A T O T E S T

新入生歓迎会当日の5月13日。

試験召喚戦争以外では普段静かなここ文月学園も、今日だけは朝から花火工場が爆発したかのように大きな声が教室から教室を挟んで飛び交っている。

いよいよ始まる新入生歓迎会に新校舎のFクラスもそれは同じだった。

「今日は、新入生歓迎会だ。 気合い入れていくぞ！」

「おおおおおおおっ！」

Fクラス代表、坂本雄二が教壇の上に立ち拳を天に上げると同時に雄二に視線を送っていた生徒たちも同じように拳を天に向けて叫ぶ。

「それと昨日説明したように、昼からの部活紹介戦争が始まる時間に新校舎ではAクラスからFクラスの全クラスで『妨害戦争』が行われる」

「その妨害戦争って、普通の召喚戦争とは違うの？」

「そうだな。 妨害戦争ってのは文字通り妨害するための戦争だ。

簡単に言えば、普通の召喚戦争で負けた奴が補習に送られる代わりに模擬店の参加資格がなくなるって事だ」

「それって仕事が出来なくなるって事だよね？ 何でそんな事を戦争にするのさ」

「ババアが言うには何が起こるか分からないから面白いんだとよ。

どこのクラスでも方法によっては逆転可能なチャンスがあるって言うゲームなんだらな」

「それじゃあ僕らFクラスみたいな最弱が売上を伸ばして他のクラスに戦争を仕掛けられたら意味ないじゃないか」

「明久の言う通りじゃぞ。いくらワシらがAクラスに勝ったと言えど、今度は他のクラスも連続して戦いを挑まれては流石のFクラスでも勝ち目がなかるうに」

「大丈夫だ秀吉。そのための作戦は考えてある。だから売上をワザと下げるような事も必要ないからな」

雄二はその言葉を言われるのが分かっていたかのように、余裕な返事を秀吉に返す。

「うむ。雄二がそう言うのであればワシは口出しせんがの」

他の生徒も雄二が考えなしに口を出す事はない事を知っているためそれ以上は聞かなかった。

「そう言うワケだから、全員新入生歓迎会が始まったら全力で一年のガキたちを持って成してやるんだ」

「おおおおおおおっ！」

「のお明久よ」

窓際の一番後ろから二つ目の席に座る木下秀吉が後ろを振り返った。

「雄二の事じゃが、ずいぶんと張り切っておらんかの？ 昨日は新入生歓迎会に乗り気ではなかったと思うのじゃが」

「きつとあれだよ。雄二も桜井さんたちのメイド服が見れるから嬉しいんだって」

「なるほどの。雄二も健全な男子じゃからの」

坂本雄二が教室設備の入れ替えを目的としたAクラスとの第二次試験召喚戦争を宣戦布告したと言う事を他の生徒に雄二はそれをあえて説明せず、第二次試験召喚戦争は妨害戦争としか言っていない。それでも勝つと言う事に変わりはないため、雄二の考えを知らずにFクラスの生徒たちはやる気に満ちていた。

そして時計は午前10時に針を差すと、ちょうど雄二の頭上にある放送機器からデパートの迷子センターと同じ軽やかな音を鳴らし

てから高橋先生の声が聞こえてきた。

「ただ今から、新入生歓迎会を行います。新入生の方々は、新校舎にて歓迎会を開いておりますのでご自由に見学してください」

すると、先ほどまで体育館で新入生の説明会があったのか、一斉に体育館から真新しい制服の学生たちが、まるで押入れに物を詰め込み過ぎて溢れたかのようにゾロゾロと出て来た。

「おっ、1年生の集会が終わったようだな」

体育館は、文月学園の裏側に作られている。文月学園はスポンサーによって多額の資金が入ってくるため体育館は一般の学校の3倍はある。文月学園全体の土地はそこらの金持ちよりも広いのだろう。

そんな無駄に広い体育館はFクラスから窓側を覗くとちょうど見える。

「もうすぐこの教室に可愛い後輩どもが来る。各自、割り当てられた配置で待機だっ！絶対に、成功させるぞっ！」

「おおおおおおおおおっ！」

昨日の坂本雄二監修の基に作られた完璧な役割分担で、Fクラスはかつてないまとまりを見せた。

坂本雄二がこれほどまでして新入生歓迎会を成功させようとしているのは、昨日のAクラスとの第二次試験召喚戦争の事が関係している。

新入生歓迎会で出し物の売り上げが勝った方が優勝となり、勝ったクラスが負けたクラスと設備を交換できると言う仕組み。もちろんAクラスが勝った場合は設備交換ではなく、設備向上の報酬があるのでだろう。

だがその事を知っているのは坂本雄二のみ。他のFクラス生徒はそんな事が行われているなど知る由もないのにも関わらず雄二以上に活気溢れている。

理由は教室に戻って来た四季の妖精たちのメイド服姿を見て興奮でもしているのか。

何はともあれ、体育館から帰って来た一年生たちは新校舎に入  
て来た。体育館は文月学園から少し離れた場所に作られているた  
め、一年生全員は靴を履きかえて行ききしなければならぬと言  
う不便もあるが、今回はそれが逆に功を奏したのか新校舎の下駄箱か  
ら一番近い仮Fクラスに向かって大勢の一年生が雪崩のように押し  
寄せて来た。

それを出迎えたのが「……お帰りなさいませ、ご主人様！」と  
「と四季の妖精によるメイド服の魅力によって新入生たちがさっそ  
くFクラスのメイド喫茶に来店。

ぞくぞくと来店する、お客さんでFクラスはあつと言う間に満席  
となり、順番待ちの行列もできるほどの好調な滑り出しで始まった。

午前10時から始まった新入生歓迎会は、お客の足が途切れるど  
ころか、美波と姫路の料理、そして四季の妖精による癒しが効果的  
となり、どんどんと忙しくなっていた。

時間は知らぬ間に過ぎて、現在午前11時30分。

「明久、8番テーブルの食器片づけて来い。ムッツリーニは6番  
テーブルを頼む」

「わかったよ」

「……了解」

「紅葉、2番のテーブルで注文宜しくね。小雪ちゃんは4番テ  
ブルをお願い」

「はいはいっ！」

「うん、わかった」

Fクラスのメイド喫茶は、メイドチームと料理チームで別れて分  
担している。メイドチームは桜井たち四季の妖精が中心となり、

その後ろを男子たちがサポートする。

簡単に言えば注文をメイドが行い、その伝票を男子が料理注文を伝える足となり手伝う。

ちなみに森野涼子は飲み物係としてお茶をたてる役割をしている。そして料理チームは島田美波と姫路瑞希を中心に、残りの男子は料理の材料運びやゴミ出しと言った雑用係。

明久と雄二とムツツリー二は片づけ担当になり、秀吉はメイド喫茶の看板娘として現在、教室の外で待っているお客の接客をしている。

調理する場所はFクラスの一角に設置されたスペースにある。するとそこから出て来たのはエプロン姿の美波が慌てた様子で明久のところへやって来た。

「誰か調理場の手伝いに来てくれない？ 人手が全然足りないのよ」

「手伝い？ 何人ぐらい必要なの？」

「そうね……出来れば三人は欲しいところかしら」

「三人はちよつと無理だよ美波。こっちもギリギリの人数だから最低でも一人しか手伝えないって」

「何とかしてよアキ。あんた三人に分身とか出来ないワケ？」

「あのね美波、僕が忍者に見えるの？」

「見えないけどアキなら三等分出来る気がするの」

「どこからその自信に満ちた目になるのさっ！ 怖いよ。その疑われない目が逆に怖いよ！」

「明久なら三等分出来るぞ島田」

振り返ると食べ終わった食器を持っている雄二がいた。

「雄二まで僕をからかわないでよ」

「冗談なんか言うとは思えない雄二に思わず怒りの言葉が出て来るが、それに対して坂本雄二は冗談を言いそうな顔はしていない。

「まさか本当にアキって分身できるの？」

「明久、召喚獣を出せ」

「召喚獣？ 何でいきなり召喚獣が出て来るのさ」



「良いから出してみる」

「……？ わかったよ……試験【サ】んぐつ……？！」

明久がその場で召喚獣を出現させようと言葉を出そうとしたところで雄二が明久の口に手を当てて止められた。

何が起こったのかわからない明久は、慌てた様子で雄二の手を払う。

「何だよ雄二。口を押さえたら召喚獣が出せないじゃないか」

「悪い明久。一年の前で召喚獣を出すのはマズイ。初めて見る召喚獣なんか見せたら模擬店どころじゃなくなるだろ」

雄二の視線の方に目を向けると、何が起こったんだ？とばかりに一年生が明久たちに釘付けだった。

「なら召喚獣出せないじゃん」

「それなら調理場であれば良いじゃない？ ちょうど暖簾で隠れてるから見えないでしょ？」

「そうだな。よし行くぞ明久」

「もう……、そんなに召喚獣が必要なの」

「良いから来い。すぐにお前でも分かるから」

何がしたいのか全く分からないが一年生が興味を持っているため、この場をしのぐには今は雄二に従うしか道はなかった。

【第七十二問】 午前の終わり頃

B A K A T O T E S T

「あれ？ 皆さんどうかしたんですか？」

調理場の中に入ると、昨日と同じように長い髪を首辺りで折りたたんでいる姫路瑞希が大きな鍋に入っている材料をかき混ぜていた。中には姫路だけでなく、雑用係の男子生徒もいるが、たった数人で役割分担はかなりの重労働なのかほとんどの生徒が疲れ始めて動きにキレがない。

「姫路、ちよつと悪いがここで召喚獣を出させてもらうぞ」

「召喚獣ですか？ 私は別に大丈夫ですけど、どうして召喚獣を？」

「ま、その話は召喚獣を出してから説明する。明久、召喚獣を出せ」

「もう人使いが荒いな……じゃあ出すよ。『試験召喚獣召喚【サモン】』」

明久は雄二の言われるがままに召喚獣の許可である呪文を唱える。すると明久の前には幾何学的な魔方陣が現れ、見慣れた光景がいつものようにプログラム処理によって吉井明久をデフォルメした姿の召喚獣が姿を現した。

ちなみに今日は妨害戦争があるため、一日中文月学園の設備全域には召喚フィールドが出現している。教科はランダム設定になっており全フィールドどこで何の教科になるかは運となる。

『Fクラス 吉井明久 英語 219点』

「お前、思った以上に点数低いな」

「あのさ、僕が天才だったとか言ってるけど、それって記憶が消える前の事だからね。これでも頑張って勉強した方なんだよ」

「……まあ良い。明久、ババアから貰った腕輪を使って能力を解放させる」

「腕輪？ ああこれね」

明久はポケットに手を入れて、再び手を逆再生のように戻すとドーナツ型の腕輪を取り出した。

『条件召喚型腕輪 絶対領域【レッドライン】』

文月学園学園長、藤堂カヲルが作った腕輪で、本来なら400点以上で解放できる召喚獣の能力を半分の点数、つまり200点以上で解放させる事が可能になる言わば公式違法アイテム。

「明久君。何ですかその腕輪は？」

「前に学園長が点数が低かったら観察処分者の雑用に使えないって言って僕にくれた腕輪なんだ。原理は良く分からないけど、こうやって腕に付けるとね」

言いながら腕輪をつけると、明久の召喚獣の左手首辺りが光だし、そこから同じようなドーナツ型の腕輪が現れた。

続けて『疑似複製【ダミアアカウント】』と唱えると、今度は明久の召喚獣の体が光だし、そして光が左右均等に分裂した。そのすぐに光が消えると、そこに現れたのは同じ姿の明久の召喚獣。

「召喚獣が二体？ もしかして、これが明久君が付けてる腕輪の能力なんですか？」

「これは僕の召喚獣の能力だよ。『疑似複製【ダミアアカウント】』って言って、点数を半分に分けて召喚獣を二体出来るんだ」

主獣の召喚獣は右手に木刀を持ち、副獣の召喚獣は左手に木刀を持っている。見た目は双子のように見分けがつかないため明久は召喚獣の木刀の持ち方を変えている。

「それじゃあ、その腕輪はいつたい……？」

「こうやって腕輪を付けると召喚獣の腕輪の点数が200点以上でも能力が使えるようになるんだ」

「200点で腕輪の能力ですか。 便利な腕輪ですね」

驚いている姫路の隣から、

「アキだけズルイわよね。 ウチだって英語と国語以外は点数低いから能力使える教科が限られてるのに」

「そんな事言われても、僕だってこんな腕輪が貰える何て思ってたんだから仕方がないでしょ。 って言うか、美波はもう召喚獣使えるようになったの？」

美波はハムスターのようにムスツと片方のほっぺたを膨らませる。

「……まだよ。 学園長つてば、いつになったらウチの召喚獣を使えるようにしてくれるのよ」

「きつと、旧校舎が壊れちゃったから美波の召喚獣に手をつける余裕がないんだって」

「それが理由ならウチはアキを恨むわよ」

「なんで僕だけ?! あれはこのバカが原因なのに……」

「ああ止める止める。 それより調理担当に三人必要だったんだよな? なら、これでちょうど集まっただろ?」

明久は一瞬考えてピクリと眉を動かす。 そしてゆっくりと雄二の方に目をやる。

「まさか……僕と僕の召喚獣二体を手伝わせるって事じゃないよね」

「物理干渉能力を持つお前の召喚獣が役に立つ時が来たんだよ。」

喜べよ明久」

ポンツと軽く雄二の肩に手を置く。

「あのね雄二。 召喚獣を一体操作するだけで疲れるのに、二体もそれに雑用係だ何て僕の体力が持たないんだけど」

ポンツと軽く明久の肩に手を置く。

「よく聞け明久。 姫路や島田と一緒に料理を作れる事は嬉しいと思わないのか?」

「それはもちろん嬉しいに決まってるよ」

「なら、それで死ぬるなら安いバイトじゃねーか」

「バイトで死にたくないんだけど……」

「わああ！ 明久君の召喚獣フワフワしてます！」

「召喚獣って本当に犬みたいよね」

二人が言い合っている間、美波と姫路は先ほど召喚したまま放置された召喚獣二体と戯れていた。

物理干涉能力。

文月学園の教師と吉井明久と生徒会の召喚獣に特別仕様で設定されている、映像が物体に触れる事が可能になる技術。

これによって、吉井明久の召喚獣は召喚者である明久だけでなく他の人でも召喚獣に触れる事が可能になる。 そんな物理干涉能力を持つ明久の召喚獣に姫路と美波が一体ずつに犬と遊んでいるかのように頭を撫でている。

「ああもうっ、あんまり僕の召喚獣に触らないでよ」  
物理干涉。

誰かが明久の召喚獣に触れると、その触れた感触は召喚者である吉井明久にも同じように感触が伝わってくる。 召喚獣との戦いで攻撃された痛みが10分の1がフィードバックされるのが一つの例である。

「でも召喚獣ってヌイグルミみたいで、こっやってギュツとしたくなっちゃいますよね」

そう言っつて、姫路瑞希は明久の召喚獣をひょいっと持ち上げて胸の中に包み込んだ。

「ねえ雄二。 やっぱバイトで死んでも良いかもしれない」

感触が伝わる。 つまり、そう言う事である。

「ホントよね」

美波も姫路と同じように召喚獣を胸の中に包み込んだ。

「美波、あんまり押し付けられないよ？ 胸が当たって結構痛いんだから」

一瞬で、明久の目の前に現れた美波は五本の指を固めて吉井明久の顔面に吸い込まれるように拳が真っ直ぐ伸びた。

「……雄二。 Fクラスは売上2位だ」

雄二の隣に現れたムツツリー二は、A4の紙を手にして説明を始めた。

紙にはAクラスや他のクラスで模擬店をしている売上情報。

なぜか、その手にはAクラスのメイド服姿の女子の写真と一緒に握られているが雄二はそれには一切口を出さなかった。

「……1位がAクラス、3位がBクラス、4位がCクラス」

Dクラスは模擬店ではあるが、駄菓子売りのため競争率には含まれておらず、Eクラスは運動部員が多いため、ほとんどが部活紹介戦争に参加するらしく模擬店はやっていない。

「やっぱAクラスが1位か。 予想はしてたが、さすがに設備のレベル差では勝てねーか」

Fクラスで用意した15の席には全ての客が座っており、廊下には旧校舎がないため下駄箱の付近に列を伸びている。 数はおおよそ50人程。

教室は一般の学校の教室よりも少し広く作られている。

普通の教室なら一番後ろの席は教室の壁に近いが、文月学園の新校舎の教室は一番後ろの机と壁には5mほどの広さがある。 これは試験召喚戦争で教室が戦場になった時を考えて広がっている。

そんな広い教室は、一年生全員がFクラスのメイド喫茶に来ているワケではないが、それでもかなりの人数はFクラスを目的に集まっているのが分かる。

ちなみに教室の一部には簡易調理場が設けられており、これによって家庭科室を往復する必要もなくなった。 これは旧校舎の教室だったらまず不可能だ。 色々ところ新校舎のFクラスは広さもあって使い勝手が良さそうだ。

「……予想以上に向こうは豪華な持成しをしている」

「AとFじゃ広さが違うからな。質は勝っても量では負ける。いや、質も向こうが上かもしれん」

Aクラスの教室は、BCDクラスを一つにしたほどの広さを持っている。簡単に言えば新校舎二階の半分がAクラスと言う事。

それに引き換えFクラスはAクラスの三分の一程度しかなく、さらには装飾する設備も一般レベルしかない。

「すいませーん。注文良いですか？」

「……オレが行ってくる」

ムツツリー二は呼ばれた女子生徒のところへ注文票とカメラを持って走って行った。

「ムツツリー二。カメラはいらんぞ」

メイド担当の四季の妖精たちも、さすがにこれだけの人数を四人でこなすのは不可能だったため代理として男子生徒が臨時で出向かなければならないほどだった。

「それにしても客は十分……か。そろそろ他のクラスが何か仕掛けて来る頃だな」

仕掛けるとは、新入生歓迎会中に他のクラスとの試験召喚戦争を行い客寄せを企む者が来ると言う事。

Fクラスが売上を伸ばしていると言う事は、それだけ他のクラスに客が集まらなくなる。

つまり客寄せをするためにはFクラスに戦争を仕掛けて客を奪う神様争奪戦争とでも言ったところか。

「すいません。注文お願いします」

「坂本君、そっちの注文お願いするわね」

まるで師走で忙しいかのように桜井は注文された食べ物運びながら雄二の前を通り過ぎていく。

しかたなく雄二は別の席から注文を呼ぶ声がしたため雄二は注文票を持って行く。

行きながら、この嬉しい悲鳴はいつまで続くのだろうかと坂本雄二は考えていた。

時刻は午後12時過ぎ。

午前中の賑わいも少しばかり落ち着いて来た。

おそらく午後から始まる部活紹介戦争を見学するために一年生の大半が体育館に向かって行ったようだ。

「そろそろ、召喚獣を使わなくても余裕が出来て来たから召喚解除するよ?」

「ありがとうアキ。今のところはウチらで大丈夫だから、あんたは部活紹介戦争の方に集中しなさいよ」

「お疲れさまでした明久君。明久君のおかげで本当に助かりました。ありがとうございます」

「そんな、お礼がしたいのはこっちの方だからね」

「?」

明久の言葉の意味が分からない姫路は、子犬のようにきよとんと顔を傾ける。

「ああ、いや、気にしないで姫路さん」

「明久、そろそろ体育館で部活紹介戦争の受け付けに行くぞ」

調理場の外から入って来た坂本雄二は、メイド喫茶用の服装から学園指定の服装に着替えてやって来た。

「ちょうど召喚獣を解除しようとしてたところだよ。『試験召喚獣

解除【ダウン】』」

声の後に明久の召喚獣二体の足元に幾何学的な魔方陣が出現した。そして、召喚獣たちはSFにあるワープみたいに映像がブレて消えていった。

「そうだ。姫路さんをお願いがあるんだけど、この腕輪を少しの間だけ預かっててくれないかな?」

「え? 私がですか?」



「部活紹介戦争でこの腕輪を使うのは卑怯かなと思つて使いたくないんだけど、どこかに置いておくと誰かが持つて行くかもしれないから預かつてほしいんだ」

「そう言う事でしたら大丈夫ですよ。私が責任を持つて預かつておきますね」

「ありがとう姫路さん」

明久は腕輪を外して姫路に手渡すと、後ろを振り返る。

「じゃあ行くうか雄二」

「今、ムツツリーニが秀吉を呼びに行つてるからもう少し待て。

その間に島田と姫路に説明しておく事がある」

「ウチらに説明？」

「何でしょうか？」

「午後からは妨害戦争でお前ら二人に召喚バトルを申し込む奴らが出て来るかもしれないから気を付けてくれ」

「その妨害戦争つて、坂本がいなくてもFクラスは戦争に参加しなくちゃいけないの？」

「今回はあくまで『妨害』が目的だからな。普通の試験召喚戦争とは違ってオレが戦死したところで戦争が終結したりはない。それどころか、雑用のオレが戦死したところで妨害にならないだろ？」

「つまり僕らのクラスで他のクラスに狙われる相手は美波や姫路さん、それに看板娘の秀吉や桜井さんたち『四季の妖精』つて事だね」

「そう言う事だ。おそらくオレたちが部活紹介戦争に参加中にごこのクラスが持ちかけて来るのは絶対だ」

「そんな……。坂本やアキがいなくなつたらウチらの戦力はほとんどゼロになるじゃない」

「そこはオレもちゃんと事前に対策を作つてあるから安心しろ。とにかく、島田と姫路は絶対に戦死するんじゃないぞ」

「うん、わかつた」

「わかりました」

「いざとなつたら、その腕輪を使つても良いからね姫路さん」

「えっ？……あ、……、はい。でも私の召喚獣の能力は」

「……雄二、大変な事になった」

姫路は喉に違和感があるかのような、ハッキリとしない返事をしている、どこからともなくムツツリー二が突然、坂本雄二の隣に現れた。

「ムツツリー二、秀吉はどうしたんだ？」

ムツツリー二は一瞬だけ会話の間隔を開けてから答えた。

「……秀吉がいなくなった」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十三問】 大きな二年と小さな三年

B A K A T O T E S T

「秀吉が……いなくなった……？ まさか、もう他のクラスが妨害に出たんじゃ！？」

「ムツツリーニ、秀吉が消える前に誰かが目撃したとかはないのか？」

「……秀吉が消える前に外で待っていた客の話だが、男と話していたらどこかへ行ったらしい」

「そいつが秀吉を誘拐した犯人かもしれない。雄二、今から捜しに行こうよ」

「お前少し落ち着け。何でもすぐに行動に移るのは勝手だが、それで状況が悪化する事だってあるんだぞ」

「だけど」強い口調で言いかけて明久は声を止めた。

「……分かった。こう言うのは雄二の方が得意だから任せるよ」「ムツツリーニ、他に何か情報はなかったのか」

「……秀吉と喋っていた男は赤い髪だったらしい。だが秀吉ばかりに目をやっていたせいで顔は見えていないそうだ」

「赤い……髪？」

明久の言葉に一同はある一人の男に注目した。

ジツと見る四人に「……はぁ」と雄二は想定内の反応に思わずため息が出る。

「情報は赤い髪に男子生徒。これを頼りに今から15分だけ秀吉を捜す」

いちいちツツコミを入れるのも面倒になった坂本雄二は話を本題に戻した。

部活紹介戦争の受け付けは午後12時より13時まで。

現在の時刻は12時半を少し過ぎた辺りを時計の針が差している。「それで見つからなかった場合は秀吉抜きで、オレたち3人が出場すると考えておけ」

「ねえ、ウチも木下を捜すの手伝おうか？ この時間はみんな体育館に行ってるからお店ガラガラだし」

「それなら私も行きますよ。一人でも多く行った方が見つかる確率は上がりますから」

「いや、もしかしたら秀吉がここに戻って来るかもしれんから、二人はここで待機だ」

「そんなのウチらじゃなくて、他の男子たちに任せておけば良いんじゃないの？」

「秀吉がいなくなっただって事を他のクラスに聞かれたら、場合によっては嘘の脅迫をしてくるかもしれん」

「さすがに考え過ぎだよ雄二。いくらなんでもそこまでして来ないでしょ？」

「……根本恭二」

隣で吐き捨てるかのようにムツツリー二が呟いた。

「根本？ Bクラスの代表がそんな名前だったような」

「根本恭二は卑怯な手口であれば何であろうと実行する。名の通り、根元から腐った人間だ」

「そう言う事でしたら分かりました。もし木下君が帰って来たら私と美波ちゃんが伝えますね」

「これ以上は時間がない。この事は二人に任せて、オレたちは新校舎を調べるぞ」

「わかった」

「……了解」

調理場を出ようと振り返った坂本雄二の顔は腹痛を我慢しているような汗が頬を伝った。

まるで隠したエロ本たからの場所がいつバレるか分からない綱渡りをし

ているかのように。

「ダメだ雄二。秀吉の携帯にかけたけどコールを繰り返してるだけだ」

新校舎の二階に上がりながら吉井明久は以前に登録していた秀吉の携帯番号に電話をしているが、耳元から聞こえて来るのは一定のテンポを繰り返したコールが続いている。

二階に上がり坂本雄二は真っ直ぐ伸びた廊下を見つめる。

「こつちもダメだ。秀吉の声を拾ってみたが、全く反応がない」  
雄二の才能は声を聴くのみのも才能。範囲内で秀吉が声を出さなければ無能になる。

「……この先はどうする？」  
ムツツリー二の視線の先はDクラス以上のクラスの教室。いつもなら普通の廊下だが、今ではそこは戦場と同じところ。  
「今の状況でここは一番怪しくて一番危険なところだ。むやみに相手クラスから注目を浴びるのが一番危ないからな。今は三階を探すぞ」

明久たちはそのまま、さらに上の階を目指して階段を上って行く。  
「ここが三階……。そう言えば初めて来た気がする」  
新校舎三階は、三年生の教室となっている。

見た目は二階の新校舎と変わらず、Aクラスが新校舎の半分を持ち、その半分をBCDクラスとなっている。ちなみに三年のEFクラスは四階にある。

「時間もそうないが、ここは一応奥まで捜してみるか」

「そうだね。もしかするとって事もあろうし捜してみる価値はある」

三人は少し早く歩きながら廊下を進み、廊下の両側にある教室を見ていく。

新校舎の奥に進んだところ。 ちょうどAクラスの前を通った時。  
「あれあれ？ デカユウジがこんなところにいる？」

雄二たちがAクラスの前の扉辺りを通り過ぎた時に、後ろからフワフワとした可愛い声が聞こえて来た。

ふと足を止めた雄二は後ろから明久とムツツリー二がぶつかつた。

「痛っ……！ ちょ、いきなり止まらないでよ雄二」

「……鼻を打った」

「いや、さっき誰かに呼ばれたような気が……して」

雄二が振り返ると、そこには見降ろさなければ見えないほど一際小さな姿があつた。

身長は雄二の半分ほど。 つまり100cmあるかないかぐらいの小さい少女は近くにいる生徒と同じ文月学園指定の女子の制服を着ている。

ワンサイズ間違えたのか、袖の先端が手よりも少し長いためだらんとしている。 スカートも今時の女子なら折るのが当たり前なのに逆に伸ばしたロングスカート。

「あっ！ やっぱリデカユウジだ。 わーい、ひっさしぶりい！」

言いながら嬉しそうに雄二のところへ走って来る。

長いスカートを気にしてか、その足取りは小さく、ちょこちょこ  
と音が聞こえそうだ。

そして雄二の手前でロケット花火のように飛び出した。

「んがっ……………」

瞬間、坂本雄二の腹にダイレクトアタックして来た少女に思わず息を吹く。

後ろにトントンと下がった少女は雄二たちの1m前で止まると両手を後ろに結んで下から覗きこむように顔を少し傾けている。

「つつつ……。 ったく誰かと思えばあんたかよ」

「相変わらずデカイよ。 わたしの首が筋肉痛になっちゃっ」

「そう言うあんたは相変わらず小さいな奈月先輩」

「これで標準なの！ ユウジがデカイんだよ。 このデカユウジ」

「雄二……」

「待て明久！ その携帯番号はいったん消せ！」

明久の携帯画面には三つの数字が打ち込まれており、今にも通話ボタンを押そうとしている。

「キサマ！ 霧島さんって言う素敵な人がいるって言うのに、まさかこんな……こんな少女と遊んでいたなんて！」

「待て待て。 お前は何を勘違いしてんだ」

「見る！ ムツツリー二の鼻血が止まらないじゃないか！」

指差す方向に雄二が目をやると、ムツツリー二は鼻を押さええているがそこから大量の血が溢れ出している。

「……これはさっき鼻を打ったからだ。 断じて少女に興奮したわけじゃない」

「むむむ？ 君たちは知らない顔だな。 もしかして新入生かな？」

少女は明久とムツツリー二の顔をジトとした目で交互に見つめる。

「こいつらはオレと同じ二年Fクラスだ。 あんた会長だったら生徒の顔覚えておけよ」

「そっかそっか。 わたしは三年Aクラス代表、さきさか咲坂奈月。 ついでに現生徒会会長をしちゃったりなんて」

まるで信号を渡る時に手を上げる小学生のように少女は握手を求めて手を伸ばす。

「あ、どうも。 Fクラスの吉井明久です」

「……土屋康太」

「お前ら、このちっさいのが会長だったのには突っ込まないんだな」

「何を言ってるのさ雄二。 小さいのに会長って言うギャップは日常だよ」

「……世の常識だ」

「お前らの常識だろ、それは」

「ところでデカユウジたちは何でこんなところに来てるの？ 二年生は模擬店で忙しいんじゃないの？」

「ちょっと人捜しをしてるんだが、ここに二年の生徒が来なかったか？」

「二年生はデカユウジが来るまで誰も来てないと思うよ？ その子は男の子？ 女の子？」

「『秀吉』だ」

「ひでよし？ ひでよ……ひでよし？ んう……ひで……よし子？」

「秀吉知らないんですか？！ あの美少女の秀吉ですよ！」

「ふえ？ 美少女なのに秀吉？」

「はあ……奈月先輩は生徒に興味持たないからな」

「それで生徒会会長によく立候補しましたね……」

「し、知ってるもん。あれでしょ、あれ……ううんと……えつとね」

言葉を重ねるごとに少女の声がだんだんウルウルと震えている。

「子どもじゃないんだから泣くなよ。ああもう聞いたオレが悪かった。そんな小さな脳じゃ熱暴走起こしかねん」

「ムツツリーニ、今すぐ須川君に連絡を。二年Fクラス坂本雄二を処刑させるんだ」

「……火炙りも追加しておこう」

「デメエらの頭はショットしやがれ！」

雄二は大きいため息を吐いた。

「それより、ここに秀吉はいないんだったら、オレたちだけで部活紹介戦争に参加するぞ」

泣きやんだ少女は目をゴシゴシとしながら。

「グスツ……あれ？ デカユウジ、部活紹介戦争に出るの？」

「ちょっとワケありだな。こいつらと帰宅部で参加するつもりなんだ」

「そつか。じゃあまた後でね」

「ああ、暇だったらオレたちの試合観に来てくれよ」

うん。と少女は答え、少し時間を使ってしまったため明久たちは急いで部活紹介戦争の行われる体育館に向かった。



「本当に秀吉なしで参加する気なの？」

「他のやつらを仕事から引き抜くと、模擬店の方にも影響が出る可能性があるからな」

新校舎を出て学園の裏に向かう途中にある柱時計の針はもう13時に近づいている。

「試合は最大四人まで参加可能だが、三人でもこのメンツならなんとかなるだろ」

「……秀吉の安否はどうする」

「そつだよ。このまま秀吉が見つからなかったらどうすんだよ」

「受付が終われば、オレたちが試合に出る時間になるまでは自由に行動できる」

言い終わりと同時に三人は体育館前で立ち止まる。

「受付が終わり次第、秀吉搜索を再開させるぞ」

二人が同時に首を縦に振り、坂本雄二は体育館の扉を開けた。

体育館の中では、すでに新入生や部活紹介戦争の参加者や暇で見に来た二年生や三年生が集まって、体育館は祭りのように大賑わいとなっている。

「うわぁ……凄い人だね」

初めての試験召喚戦争を見たいがために、多くの新入生が体育館を埋め尽くしていた。

体育館は、部活紹介戦争のための召喚フィールドの準備が済まされておき、4つの召喚フィールドが『田』のように分けられている。

「その様子じゃ木下見つからなかつたみたいね」

明久たちが歓声の熱気に飲みこまれて止まっていると、そこに現れたのは島田美波。

「美波?! 何でここに美波がいるのさ?」

「もし木下が見つからなかったらウチが出てあげようと思って待ってたのよ。瑞希にはちゃんと言って来たから」

美波は40cmほどの大きさの召喚獣を両手で大事に抱きかかえていた。

「どうやってエルフを連れて来たの? 学園長室は二階だから危険なはずなのに」

「恵に頼んでウチの姿を消して連れてつてくれたからよ」

「姿を消す?」

「桜井のは確か『寡黙迷彩【サイレントキラー】』だったか? あれは他の奴も消せるのか」

「桜井さん、そんな才能を持つてるのか」

「……羨ましい。それがあれば更衣室を覗き放題」

「ん……? じゃあ二階に秀吉を見なかったか?」

「教室全部を見たつてワケじゃないけど、木下はいなかったわよ」

「そうか……ま、せっかく来てくれたんだし、島田に参加してもらうか」

「戦力は多い方が良いからね」

「……問題ない」

『部活紹介戦争に参加予定で、まだ申し込みをされていない生徒は、ステージ上に集まってください』

体育館のステージ上に座っている高橋先生の声が聞こえてきた。

明久たちは言われた通り、体育館のステージ上に向かうと、横長の机と少し錆びれたパイプ椅子に座る高橋先生が待っていた。

机の上には、新入生歓迎会のプログラムが書かれた紙が並べてあり、そこには『部活紹介戦争で、あなたに合った部活を探してみてください。』と大きく紙面に書かれていた。

その下には、優勝者には例の腕輪『代理召喚型腕輪 起動【アウエイクン】』の写真が貼られている。

「部活紹介戦争に参加する方たちですね? 部活名と参加者名を記

入してください。今回の試合は勝ち抜き戦ですので、最初に参加させる人を一番下に書いてください」

高橋先生から渡された紙に、雄二が代表として記入していく。

渡された紙には、部活名とエントリナンバーが1〜4までの名前を書くとこころがあり上から坂本雄二、吉井明久、ムッツと書いたところを二重線で消して横に土屋康太と書いて、最後に島田美波と記入を終えた。

「じゃあこれをお願いします」

記入した紙を渡し高橋先生が、記入漏れがないか確認すると、「はい、確認しました」と言って、小判ほどの大きさの白いプラスチック製の物に『6』と書かれた番号札を雄二に渡す。

「これは、あなたたちの部活名を番号にしたものです。この部活紹介戦争では部活名を伏せてありますので、その番号を覚えておいてください」

手際良く高橋先生はテーブルの横一列置かれた山積みの資料を慣れた手つきで集めトントンと角を揃える。

「詳しい内容は、こちらの紙に書いてありますので参考にしてください」

雄二が資料を貰い、四人はいったん体育館の隅に集まった。

「それにしても凄い人だね。今さらだけど緊張して来たよ」

「最初ウチなんだからプレッシャー与えないでよね。それで、ウチはいつ出れば良いの？」

雄二は貰った資料をペラペラとめくる。

「最初の試合は13時30分からだ。良かったな島田、部活紹介戦争開始早々から出番だ」

「ううう余計に緊張して来た。はあ……何だか胸が苦しい」

「心配しなくても大丈夫だよ美波」

「アキ……ウチに気を使って」

「だって、ブラで苦しくなるほど胸はないんだから目が焼けるように熱い……いいいいいい……」

「流石だな明久。 自らの体で島田の緊張を和らげるとはな」

「……肉を切って骨も断たれる」

体育館に響く吉井明久の断末魔と共に新入生歓迎会のもう一つのメイン、部活紹介戦争は始まった。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十三問】 大きな二年と小さな三年（後書き）

生徒会会長初登場です。

秀吉を誘拐？したとされる赤い髪の男の正体は。

雄二は何かを隠している？

そんなこんなで、ここでようやく半分と言ったところでしょうか。  
さて、次回からは部活紹介戦争開始です。

久しぶりのバトル展開なので、才能とか能力の予習をお願いします  
！

【第七十四問】 二人の天敵

B A K A T O T E S T

「今からオレは秀吉を捜して来るから、明久とムツツリー二は島田の護衛を頼む」

「僕も一緒に行くよ」

「オレ一人で十分だ。それに狙われる可能性のある島田の安全を確保するために二人は残れ」

「なら絶対見つけてきてよね」

「そつちも初戦負けとかすんなよ」

未だ見つからない木下秀吉の搜索は雄二が引き受け一人体育館から出ていった。

その頃、美波は第一試合から出場する事になり、先に召喚フィールドの中に入って行った。

「ウチでも勝てる相手でありますように」

そつ祈りつつフィールドの中央に歩いて行くと、すでに対戦相手が召喚フィールド内で待機していた。

すると対戦相手が美波に気付いたのか「お姉様っ?!」と言う女の子の音が響く。

女子の声に聞き覚えのあった美波が対戦相手を見ると「み、美春みはるっ?!」と同じ様に声を出した。

美波のことを『お姉様』と呼ぶのは二年Dクラスの清水美春しみず。嬉しそうな清水美春に対して島田美波は逆の顔をしている。

「どうしてお姉様が日本にいるんですか?!」

「それはこつちのセリフよ! 何で美春がここにいるのよっ?!」

「今日は仕事がオフだったんで日本に戻って来たんです。お姉様

「こそ、どうして日本に？」

「ウチは帰国子女で文月学園に転校したのよ」

「転校？……まさかっ！」何かを思い出したかのようにハツとして「美春に会いに、わざわざ来て下さったのですね！」

「そんな訳ないでしょ」

（前に美春が日本の学校に通つてるとは聞いてたけど、それが文月学園だったなんて）

「ここで会えたのも運命です。 今日こそお姉様を撮らせてください！」

オレンジ色の髪で、縦ロールのツインテールが揺れている。 その手にはカメラを持っている。

それもただのカメラではない。 女子高生が持っているカメラと言えば手軽なデジタルカメラだが、彼女が持っているのはプロのカメラマンが持っているような高価なやつ。

と言うのも清水美春は、『瞬間判定【シャッターチャンス】』と言う才能を持っており、現役高校生にしてプロのカメラマンである。

『瞬間判定【シャッターチャンス】』は、黄金比を見極める事ができる才能。

黄金比とは最も美しいとされる比率の事で、主にアテネのパルテノン神殿やピラミッドの形、そしてモデルなどが綺麗に見えるのも黄金比が関係している。

美春は見た瞬間に黄金比の計算を叩きだし、その最も美しい瞬間を見つけることができるらしい。

「だからウチはそんなスタイル良くないって言ってるじゃないの」「いいえ。 初めてお姉様と出会った時から美春は感じていました」以前、仕事でドイツに行く事になった美春は、途中で道に迷い途方に暮れていたのだが、そこに美波と運命的な出会いをした。

美波は『絶対音感【サウンドレコーダー】』のおかげで日本語を話せるため、美春を助けたのが全ての始まり。

美波の事を『お姉様』と呼ぶのも恩を忘れぬようにとの事。

「黄金比を持つ人なんて日本にもドイツにも他にいない。どうしてウチなのよ？」

「確かに今まで数々のモデルをこのカメラに納めてきました。ほつそりとした足、くびれ、腕……完璧な黄金比はたくさんいます」

「ならウチに執着する必要もないじゃない」

「美春が興味を持ったのは、そのペタンコです！」

美春がビシツと腕を真っ直ぐに伸ばした先は美波の胸。とっさに胸を隠す美波。

「黄金比でもないその胸がどうして美春を引きよせるのか、その秘密を知りたいのです」

「そんなのどうでも良いじゃないのおお」

「ですが、せっかく日本でお姉様と再会出来たのに、まさか最初の相手になる何て……」

「悪いけど美春にだけは絶対負けないわよ」

「これも運命の赤い糸で結ばれているがゆえの試練なんですね」

「試験召喚獣召喚【サモン】」

二人の声が重なると美春の1m前で地面が光だした。

幾何学的な魔方陣と共に空中でガラスのようなプレートが現れる。そこには『猪に追いかけられた者』と書かれ、亀裂が入った瞬間、

砕け散ったガラスの破片が魔方陣からプログラムされた召喚獣が足元から形を作っていく。

美波はエルフのため召喚許可を出さなくてもすでに召喚されているが、ホログラムの召喚獣に触れるためには召喚許可を出さなければならぬ。

美波の召喚獣の許可が終わった頃に美春の召喚獣が完成した。

見た目は清水美春をデフォルメした姿に猪の子ども、つまりウリポーを頭に乗せてフードのようになっている。

右手に構えている武器はグラディウスと言う古代ローマ時代に使われていた刃渡り70cmほどの剣。

装備も古代ローマの軍団兵に支給されたロリカ・セグメンタタと



言う曲げた鉄板を板金で重ねて作られた甲冑で、古代ローマ兵をイメージした召喚獣。

「お姉様のその小さくて美しい胸が、美春の才能に火を点けました。どうしてそこだけが黄金比にならなかったのか、今ここでじっくり教えて下さいっ！」

美春は軟体動物のように両手をなめらかに動かして、同じように美春の召喚獣も武器を持っていない左手を軟体動物みたいに手の指を動かす。

指を動かしながらエルフ、と言うより美波に近付いてくる。

「嫌な手つきでこつちに来させないでよっ！ エルフ、あの召喚獣に手加減なしで攻撃して」

「美春の邪魔をする者なら、例えお姉様の召喚獣だろうと容赦はしません！」

それぞれが召喚獣を召喚すると、2人の召喚獣の頭に点数が表示される。

『数学 Dクラス

写真部 清水美春 132点』

VS

『数学 Fクラス

帰宅部 島田美波 95点』

先に動いたエルフは強靱な脚力でいつきに距離を縮める。

反応出来ないうちに美春の召喚獣の懐に入り、容赦なしのストリートを食らわせた。

だが、美春の召喚獣にギリギリで横に避けられた。

「しまった！」と美波が詰まる声を出すと、まだ真っ直ぐに進む力が働いているため動けないエルフに美春の召喚獣が振り返って後ろ

をとった。

「エルフ避けて！」

だが美春の召喚獣は武器を構えない。何を思ったのか美春の召喚獣は武器を捨ててエルフの胸に手を当てる。

言うなら後ろから目隠しされた時のように。

「お姉様の使っている召喚獣は男の子かと思いましたが、良く見ればこの感触はお姉様にそっくりです。まるで、お姉様の魂が宿ったかのようです」

エルフに性別はないが、機械に胸を入れる必要もないため学園長は男子型として作っているのだが、美春の召喚獣が触ると美波と同じ感触らしい。

そもそも、清水美春には吉井明久のように物理干渉能力が存在しないのだから召喚獣が触った感触など伝わるはずもないのだが、美春には何かを感じるものがあるのだろうか。

「ウチだって男子よりは多少の成長してるわよっ！」

美春の召喚獣を振り払い後ろに下がらせる。

「美春っ！ あんた、ウチと戦う気あるの？」

「美春が戦うのは、お姉様の邪魔をする豚共だけですの」

またしても軟体動物のような動きで美春と召喚獣は手を動かす。

美波は美春の召喚獣と戦っていると言うよりも、美春本人と戦っていると言っても過言ではない。

「美春が攻撃して来なくても、ウチは容赦なく攻撃するわよ」

エルフは、美春との距離4mを一気に縮めて、美春の召喚獣の目の前で直進から急に方向を変えて斜め左に飛んだ。

左足で踏みこんで召喚獣の真横で止まり、美春の召喚獣に向きを変えながら右足で地面を踏み込んだ。

向きを変えたと同時にエルフの五本の指に力を入れる。

そして重心移動させた全身の動きから繰り出される重い一撃が顔面に叩きつけた。

反動で後ろに吹き飛んだ美春の召喚獣は美春の真横を通り過ぎ、

1秒後に美春の後ろで衝撃音がフィールド内に響いた。

「そんな……っ?!」

振り返ると、壁にめり込んだまま指の一本さえも動かない清水美春の召喚獣。

右手で持っていた剣が手から滑り落ちてカランカランと音を立てた。

「ずいぶんとあっけない終わり方になったわね美春」

「お姉様が美春を殴る何て……」

「ウチは殴ってないわよ!」

「……これが愛の拳と言うやつですねっ! お姉様はそこまでして愛してくれて美春感激です!」

「もっつ! どうしたらウチの気持ちを理解してくれるのよっ?!?!?」

試験召喚戦争は終わったものの、美波の悩みの戦いは続いていた。

『数学 Dクラス

写真部 清水美春 0点』

V S

『数学 Fクラス

帰宅部 島田美波 95点』

「美波帰って来ないね……」

試合が終わったにも関わらず、美波は明久たちのところに戻って

来ていない。

「どうやら清水美春にどこかに連れて行かれたらしい。」

「……ちようど良い。次の相手はオレが出たかった」

「どうしたの？ ムツリーニが真剣な顔をする何て珍しいね」

「……相手は写真部。ならばオレの予想通りの奴が出て来る」

「そっか。美波も帰って来ないみたいだし、お願いするよ」

「ムツリーニは美波と同じ召喚フィールドの場所に行った。」

「よおムツリーニ。まさかお前が俺の相手になるとはな」

「ムツリーニの10m先から聞こえて来たのは男の声。」

「だがその姿は『女子』の制服を着ている。」

「……根本恭二。相変わらず気持ち悪くて吐き気がする」

「ムツリーニの対戦相手はBクラス代表の根本恭二。」

「おそらくカツラだろうが、背中まで伸ばした赤い髪を揺らしながら中央に近づいて来る。」

「今日こそ、俺の女装姿を写真に収めてもらうぞ」

「……俺は女以外で写真を撮る趣味はない」

「今の俺は素敵な女子じゃないか！ さあお前のそのカメラで俺を撮ってくれ！」

「根本恭二は女装が趣味。」

「文月学園に入学したばかりの時は、普通に男子生徒の制服を着ていた。」

「しかし、ちようど去年の新入生歓迎会の時に、写真部が新入生を入学させるため写真撮影会をしていた。」

「根本は昔から評判が悪く、写真部の撮影会を見て面白半分でコスプレをしたのだが、思いの他、着心地が良かったのか、これをキッカケに新たな扉を開いてしまった。」

「そして後に文月学園には素人でありながらプロ顔負けの写真を撮る男がいると聞いた根本がやがてムツリーニを見つけ出し今にいたる。」

「……話すだけ時間の無駄だ」

「なら俺が勝つたら、今度こそムツツリー二のカメラに納めてもら  
うぞ」

「……………死んで魂が成仏しても撮らない」

「試験召喚獣召喚【サモン】」

2人の前に、幾何学的な魔法陣が現れ、そこからデフォルメされ  
た召喚獣が姿を現す。

『伊賀の問題児』と書かれたプレートがガラスのように砕け、そ  
こから忍者をイメージした姿に小刀を二本持ったムツツリー二の召  
喚獣が出現した。

同じように根本恭二の目の前には『魔女の悪戯』いたずらと云うプレート  
が現れプログラムによって根本をデフォルメした姿を作っていく。

根本の女装が召喚獣にも影響しているのか、装備はフリフリの可  
愛いドレスに身を包み、顔もバッチリ化粧を決めている。

武器は一眼レフカメラ。

二体の召喚獣が召喚完了すると両方の頭に保健体育の点数が表示  
された。

保健体育 Bクラス

写真部 根本恭二 403点

VS

保健体育 Fクラス

帰宅部 土屋康太 488点

「この日のために保健体育の点数を上げておいて正解だったようだ  
な」

「……………後で眼科の予約をしておこう」とムツツリー二は、試合開始

と同時に目を瞑った。

「俺を見るムツツリー二！」

「……お前如き、目を使わずとも倒せる」

「それは」言いながら根本の召喚獣の腕輪が光り、「どうだろうなっ  
！」

根本の召喚獣が武器であるカメラを構えた。

その瞬間、召喚フィールド全体に一瞬だけ強烈な閃光が走る。

それは暗い部屋でカーテンを開けた時の眩しさ。

徐々に光りが戻る。だが何かが変わった様子はない。

「……っ?!」

ただ、ムツツリー二は何か気付いた。

「……動けなくする能力か」

ムツツリー二はそれでも目を開けない。

「『永久保存【ベストショット】』はフラッシュに当たれば数秒の間動けなくなる。これで勝負は決まりだな」

根本は、召喚獣に隠させておいたハンマーを取り出して動けないムツツリー二の召喚獣に向かってハンマーを振り上げる。

「……、」

ムツツリー二は顔色一つ変えない。

地面を蹴り勢いに乗せて高く飛び上がり、ムツツリー二の召喚獣まで2mほどのところでムツツリー二が冷静に叫んだ。

「……『四面楚歌【ルバートカルテット】』」

するとムツツリー二の召喚獣の腕輪が光り始め、4つの光がムツツリー二の召喚獣の後ろに落ちると、同じ姿、同じ小太刀を持った召喚獣が現れた。

すぐさま分身の1体が忍者のような俊敏な動きで根本の召喚獣の攻撃をギリギリで止めた。

「なっ、なんで動けるんだ?!」

「……光に当たらなければ動ける。そうお前が言ってただろ」

腕輪の能力で出現した1体のムツツリー二の召喚獣が根本の召喚

獣のハンマーを弾いて重さで後ろによろめいたところに、続けざまに2体目の分身が武器を持っていない右手を押さえ、すかさず3体目と4体目がそれぞれ両足を押さえた。

身動きが取れなくなったところで、ムッツリーニの本体の召喚獣がようやく動けるようになったのか、手を握ったり開いたりして確認している。

『永久保存【ベストショット】』の停止する効果が切れたらしく、ムッツリーニの召喚獣本体は根本の召喚獣のところへ近づいて行く。「……根本。お前に一つだけ教えてやる」

その動きはゆっくりと歩く速さで。あくまで冷静に近付いていく。

「なっ……なんだよ」

「……盗撮こそが、人間の最も自然な姿を撮る事ができる」

ムッツリーニの召喚獣が根本の召喚獣の首を一刺しした。

「……撮られに来るようでは、まだまだ未熟者だな」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十四問】 二人の天敵（後書き）

↳ 新しい才能・能力・テーマ説明

Dクラス 清水美春

才能 『瞬間判定【シャッターチャンス】』

説明 黄金比を測る能力。

能力 不明。

テーマ 『猪に追いかけられた者』

Bクラス 根本恭二

才能 不明。

能力 『永久保存【ベストショット】』

説明 フラッシュに当たったものは5秒ほど動きが停止する。

テーマ 『魔女の悪戯』

Fクラス 土屋康太

テーマ 『伊賀の問題児』



【第七十五問】 楽園と地獄

B A K A T O T E S T

「あなたの言う通りに、秀吉をFクラスから連れ出したぞ」

坂本雄二が居る場所は、人気のない静かな場所。

そこは文月学園の東に建てられている新校舎の近くにある特別棟。音楽室や図書館などがある特別棟には今日は授業がないため一人の生徒も出入りして来ない。

「誰にも見つかっていないでしょうね？」

「一年の生徒に見られたらしいが、オレの顔までは見てないそうだ」

「まあいいわ。これであなたたちFクラスの売上も右肩下がりになるわね」

一階の階段下に出来た小さなスペースで雄二と話しているのは女子。

だが階段の死角で相手が誰なのかまでは見えない。

「こんな事でオレたちのクラスの売り上げを落として、そっちの売上を伸ばせると思ってるのか？」

「私はFクラスの戦力を下げるのが目的よ。売上なんてどうでも良い」

「はっ……人を操っておいでどうでも良いとはな」

「抵抗しようとしても私の命令は絶対よ」

「確かにあなたの言葉には逆らえないらしいな。　　ったく、ずいぶん趣味の悪い才能持ってやがんな」

「素敵な、と言ってくれる？　　だいたいあなたが私の魅力に惚れたのが悪いのよ？」

「『猟犬愛好【ラブリードッグ】』ねえ。　　男を操る才能とは恐れ

入ったよ。女つてのは怖い怖い」

「男が弱いだけよ。どいつもこいつも私の魅力で簡単に操れるんだから」

「だが、秀吉だけは操れなかった……、と」

雄二は少し嫌みを言うように呟いた。

「木下君には私の才能が無効になるのよね。おかげで手間がかかったわよ」

「ま、せいぜい尻尾を出さねーよう頑張れよ」

「あなたは、そのお似合いの首輪を付けて私に尻尾を振ってなさい」  
雄二は振り返り、

「狂犬てのはいつご主人様に噛みつくか分からねーぜ」

「その余裕、どこまで続くかしらね」

「なら、一つだけ言っとくけどよ」と歩みを止めた。

「何……？」

坂本雄二は振り返らないまま首を少し横に向けて、

「いくらオレを操ったところで、Fクラスは崩れやしないぜ」

「ずいぶんと自信があるみたいね。どこからそんな言葉が出てくるのかしら」

雄二はまた歩きだした。

「テメエのクラスと違って、首輪を外して代表ひんの言う事を聞かねえ自由気ままなヤツの集まりだからだよ」

「ただいまあ」

試合を終えた明久たち三人がFクラスに入ると、客が一人もいない教室に四季の妖精たちが座っていた。

「あつ、帰って来た！ 試合どうだった？ 勝てた？」

一人机の上にグデツと腕を伸ばしていた木原紅葉がスクツと立ち上がる。

まるでエサを見せて反応した犬のように。

「ウチと土屋で何とか勝ち越しよ」

「二人ともカツコ良かったよ」

「良いなあ。あたしも観に行きたかった」

「そっちは売上とかどうなの？」

「昼過ぎになってから全然全くダメダメ。でも他のクラスからの妨害も今のところなしかな」

「そっか」と言いながら明久は教室を見渡す。

秀吉を捜す之行って先に体育館を出て行った雄二の姿はまだない。もちろん秀吉の姿もありはしない。

「秀吉と雄二、まだ帰って来てないんだね」

「木下君がどうかしたの？ そう言えばずっと見当たらないわね」  
紅葉の後ろから桜井が話に入ってきた。

「どうかしたって、秀吉もがっ」

喋っている途中で明久の口が突然防がれた。

明久の後ろから小声で「秀吉の事は桜井たちには言わない明久」  
後ろを向くとそこにいたのは坂本雄二。

状況を把握した明久がコクコクと首を振って雄二が手を離す。

「秀吉なら演劇のヤツに呼ばれたとかで出て行ってるぞ」

「あら坂本君お帰りなさい。どこか行ってたの？」

「ちよつと用事があつてな。それより皆は昼飯食ったのか？」

「ここにいる皆はお客さんがいない間に済ませてるわよ」  
「なら、そろそろオレたちも昼食にするか」

「それでしたら私の料理食べてくれませんか？ 皆さんのために用意して待ってたんです」

エプロン姿の姫路瑞希は漆塗りで金箔の模様が書かれた、いかにも高級そうな入れ物を持ってやって来た。

「それ姫路さんが作つたの？」

「瑞希あんたいつの間にそんなの作ってたのよ」

「美波ちゃんが体育館に行った時にです。簡単な料理ですが作ってみました」

「簡単って……それでその量なの……。料理が得意なウチでもこんな無理よ」

「どうしたんですか美波ちゃん？」

「なんでもない」と美波はムスツと答える。

「じゃあせっかくだし、屋上で食べようよ」

「そうだな。ちよつと都合も良い」

教室の時計は14時を過ぎたあたり。

明久たちは遅めの昼食タイムのため屋上に向かった。

新校舎の屋上は4階を上った先にある。

「秀吉だが、色々捜してはみたんだが結局見つからずだ。スマン」

3階を上っている途中で雄二が話を切り出した。

「そっか……。あれからFクラスに妨害戦争をしてくるクラスもなかったみたいだし、誰が何のために秀吉を誘拐したのかな」

「まだ誘拐と決まったワケじゃないでしょ。木下にも都合があるのかもしれないじゃない」

「心配なのも分かりますが、あまり考え過ぎると、いざって時に体力が持たないですよ明久君」

「……そうだね。ちよつとだけ体を休めるのも大切だよね」

「私の作った料理はリラックス効果もあるので、たくさん食べてくださいね」

「楽しみにしてるよ」

リラックス効果がある料理なんて初めて聴いたような。ま、料理の天才の姫路さんならそれぐらい当たり前で作れるのかも。

話している間に屋上の扉前までたどり着いた。

そして雄二が扉を開けると外からの光が眩しくて一瞬目を閉じた。

「……………」

ゆっくりと目を開ける明久。 しいに目が慣れていき視界を広げていく。

だがその先の光景に思わず必要以上に目を見開いた。

「……………ここって屋上だよな？」

「学園の一番上なんだから屋上だろうな」

そこにはコンクリートの世界ではなく緑の世界が広がっていた。

新校舎の屋上は屋上と言うより庭園になっている。

最近ではエコロジーの言葉が世間一般化したここ文月町も最近になって緑を増やそうと言う計画が増えている。

それは文月学園も同じで学園の屋上には多種多様な植物が生えていて、地面はもちろん天然の芝。

「ウチら何だか違う世界に来たみたい」

周りに目を泳がせながら歩いていると、ちょうど真ん中には噴水が建ててある。

そこから出て来る細かい水が水やりの代わりにもなっているようだ。

「さすがババアだな。まさかここまで新校舎を豪華にしてるとはな」

「ここにお金使うなら旧校舎のボロい障子とか壊れた机の修繕費に使ってほしいよね」

「皆さん、ここでご飯食べませんか？」

少し離れた声の方に視界を移すと姫路が噴水近くにある木製のテーブルとイスのところに行った。

「お口に合うか分かりませんが、好きだけ食べて下さいね」

「じゃあいただき」まで言ったところで、

「あ、ゴメンなさい。お箸を持ってくるのを忘れたので今から取って来ますね」

「それなら、ウチは飲み物買ってくるわね」

姫路と美波は屋上から出て行った。

「別に手でも良かったんだけどなあ」

「マナーってもんがあるだろ。少しぐらい我慢しろ明久」

「でもムツツリーニは食べてるよ」

「……すまない。今日は朝から撮影が忙しくてゴバツツ！」

オニギリを口に入れながら喋っていたムツツリーニが突然吐血した。

「ムツツリーニ?!」

「どうしたんだ?!」

「……………」

すでに意識を失っているのか返事がない。

「まさか、料理に毒でも仕込んであったのか?」

「姫路さんがそんな事するワケないよ」

「違う。他のクラスの誰かが姫路の料理に毒を仕込んだのかもしれないって事だ」

「でも部活紹介戦争が始まってから他のクラスの生徒が来た何て言っただけだよ」

「なら……まさか本当に姫路が……?」

「雄二は考え過ぎだよ。きっと美味し過ぎて吐血しただけかも」

「それはそれで困る話だが」

「こんな綺麗に出来てる料理に毒が入るワケないよ」

明久はオニギリを一つ手にとって、

「いただきます」

明久はパクリとオニギリの半分を食べた。

「ど、どうだ明久？」

「うん。お米の柔らかい食感がバリバリと音を立てて、噛めば噛むほど走馬灯が見える斬新なゴバツ！」

「明久っ！！　しっかりしろ明久！」

ムツッリー二同様、明久もオニギリを食べた瞬間吐血した。

だが運が良かったのか意識がある。

「ゆう……………じ……………だ」

今にも壊れそうな機械が喋っているかのように明久は言葉を切りながら喋る。

「？」

「……………クロ……………だ」

「黒？　何が黒いんだ」

「オニ……………ギリに……………クロ……………」

最後に言いかけたまま明久は意識を失った。

「何よアキ。自分だけトマトジュース買ってきてたの？　せつかくアキの分まで買って来てあげたのに」

吐血したのが、美波にはトマトジュースに見えるらしい。

「よ、よお早かったな二人とも」

「あれ？　皆さん先に食べちゃったんですか？」

「あ、ああ腹が減り過ぎて待てなかったみたいだ。　そ、そうだと田。　悪いがオレにもトマトジュースを買って来てくれないか？」

「坂本もトマトジュース？　うん、別に良いけど」

頭に疑問符を浮かべながら美波は再び屋上から出て行った。

美波がいなくなったのを確認した雄二が姫路に視線を動かす。

「ちよつと姫路に質問なんだが」

「何でしょうか？」

「このオニギリに何か味付けしたのか？」

「はい。 皆さん疲れていると思ったので、 隠し味にクロロホルムをたくさん入れてみました」

「……………」

坂本雄二は姫路の言葉に頭を抱えた。

「この前やつてた刑事ドラマでクロロホルムには睡眠効果のあると言っていたので試しに入れてみたんです」

「姫路、クロロホルムって何か知ってるか？」

「調味料ですよね？」

「そ、そうか……………」

『思考錯誤【フルコース】』を持つ姫路瑞希は、 美味しい料理を作る才能として発揮されるのだが、 思考が暴走すると常識の範囲を超えるらしい。

「あの。 もしかして坂本君のお口には合いませんでしたか？」

「ああ……………いや、それはだな」

「いやあ姫路さんの料理は美味しいよね雄二」

「明久……………お前生きて」

「……………一人一箱でもいける美味さ」

「ムツツリー二も……………」

「そんなに気に入っていただけでしたら、 遠慮せず全部食べてくださいね！」

「ほらほら、 姫路さんが言ってるんだから雄二も遠慮しないで食べなっつて」

「お、お前ら……………目が死んでるぞ」

雄二の肩を持つ明久の手に力が入る。

「どうしたのさ。 雄二も一緒に黄泉の国に行こうよ」

雄二の肩を持つムツツリー二に手の力が入る。

「……………共に行こう。 地獄へ」



B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十五問】 楽園と地獄（後書き）

（新しい才能）

？クラス 匿名希望

才能 『猟犬愛好【ラブリードッグ】』

説明 雄二曰く、男を操る能力。

秀吉誘拐の犯人は雄二。ただ裏で操っている黒幕が？

やっぱり姫路さんは危険料理を完成させてしまいました。  
幸いな事に店を出した料理には入れていなかったそうです。

【第七十六問】 妨害の火種

B A K A T O T E S T

明久たちは昼食後も次の部活紹介戦争の試合まで時間を使って秀吉を搜索。

今は少し休憩をとるために、新校舎西側にある芝生の広場で休んでいる。

「本当に秀吉どこに行ったのかな」

「これだけ捜して見つからないってのも変な話だ」

「……学園外まで連れ出された可能性もある」

「そんな事になったら警察沙汰だろ」

「いつその事、皆にお願いして捜してもらったら？」

「秀吉も大事だが、オレたちは部活紹介戦争で優勝する事も大事だろ」

坂本雄二が木下秀吉を連れ出した犯人である以上、雄二は秀吉の場所を知っている。

だが、雄二を糸で操っている黒幕の支配によってか場所を教えなかった。

「そう言えば、次の試合って何時から？」

「次はつと……15時30からだな」

「じゃあもう少しで体育館に向かった方が良いね」

「……誰か来た」

ムツツリー二の視線の先をたどって明久と雄二も動かす。すると芝生を踏む音が三人に近づいてきた。

三人がそちらに目をやると、

「翔子……？ 何でお前がこんなところに来てんだよ」

ずいぶんとご機嫌が優れないのか、翔子は怒った顔をしている。

「雄二、これが何なのか詳しく説明して」

後ろに隠していた手に持っていたのは、片手で持てるほどの大きさの黒い物体。

そこにはレンズのような物がそこに埋め込まれている。

「何だこれ……?」

「とぼけても無駄。女子更衣室に盗撮カメラを仕掛けたのは分か  
つてる」

「なっ……盗撮カメラ?! ちょっと待て翔子。オレがそんな事  
するワケないだろ」

「そうだよ霧島さん。雄二がそんな事が出来るワケない」

「明久の言う通りだ。オレにそんな勇気が」

「だって雄二が仕掛けるなら霧島さんだけを撮るはずでしょ」

「なに適当言つてんだ teme は!」

「……言ってくれたら撮らせてあげる」

「お前は顔を赤くするな!」

「雄二ならそれぐらい当たり前だもんね」

「待て待て、よく考えてみるよ。だいたいオレがどこで盗撮カメ  
ラを」

「ムツツリーニから」

「手に入れて、どうやって」

「ムツツリーニが」

「仕掛けるんだよつておいつ!!」

「……明久、オレに罪を被せるな」

「死刑執行。雄二……最後の言葉はなにが良い?」

「オレは無実ダアアアアアアアア!」

スタンガンによる青白い電撃と共に、雄二の叫び声が校庭に響く。  
それと同時に、どこに隠れていたのか突然生徒が集まって来た。

まるで雄二の叫びが戦いの合図になったかのよう。

「……今から A クラスは妨害戦争を仕掛ける」

「んなっ……嘘だろ!？」

今確認できるのは女子ばかり。Aクラスの男子生徒は一人もいない。

あくまで盗撮犯撃退のために仕掛けた戦争のようだ。

「これって結構ヤバい状況だね？」

「ねえ坂本君。今の話って本当なのかしら？」

一瞬ゾクツとするような冷たい声が雄二の後ろから聞こえて来た。「分かるよその気持ち。あたしは女だから覗きたい放題だけど、男子は許されないからね」

「さ、桜井……木原……っ！」

「アキイ……。本当の事言わないと死ぬかもしれないわよ？」

「今なら痛い目を見るだけで助けてあげますよ明久君」

「み、美波……姫路さんまで……！」

「男性たる者、女性に興味を示すのは健全で宜しい事です。ですが、盗撮と言うのはわたくしめも許せませんわね」

「あたしが捜してる素敵な王子様なら、そんな事しないよ」

「……Fクラス女子まで向こう側についた」

「こっ言う時は……いったん逃げるぞ！」

「やっばそうなるよね」

「……一時撤退」

三人は生徒の隙間を狙って逃げ出した。

「あっ！ 待ちなさいよアキっ！」

「逃げるって事は本当なんですネっ!？」

「……雄二、絶対に逃がさない」

三人は後ろを振り向かず、とにかくどこでも良いから走った。

場所はどこか、距離はどれぐらいか、そんなの考える暇もなかった

だひたすら追いかけて来る女子集団から逃げるために足だけを前に動かした。

「このまま、体育館に向かうぞ。体育館内は妨害禁止だから」

「それより何でこんな事になってんのさ」

「それはこつちが聞きてえよ。いつからオレは盗撮犯になってんだ」

「……おそらく根本が仕掛けた罠だ」

「どうしてそんな事が分かるの？」

「……盗撮カメラは根本が愛用しているメーカーと同じタイプ」

「根本の野郎、売上上位のAクラスとFクラスで戦争させて戦力減らそうとしてんのか」

「……すまない。根本がオレに恨みを買ったのが原因だ」

根本恭二はムツツリー二に写真を撮ってもらえなかったのがよほど悔しかったのか、今度は犯罪レベルにまで手を出してきた。

「じゃあ、本当に雄二は盗撮してないって事なの？」

「つたりめーだ！ だいたいオレはお前らと一緒にだっただろ」

「でも美波の試合が始まってから一人で秀吉捜しに行っただじゃないか」

「あ、あれはだな……」

雄二が言い訳を考えようとふと目線を上に動かした瞬間。

ズドンッ！ と言う轟音と共に明久たちの目の前で何かが地面に衝突した。

まるで隕石でも衝突したかのように大量の砂煙が辺り一面を覆い、明久たちは慌てて足を止めた。

「……雄二、どこに逃げても同じ」

明久たちが走って来た道からは聞き覚えのある声。

「翔子……っ！ ってことは今の飛んできたのは」

再び進行方向に目を向けると、砂煙の中から小さい物体が姿を現した。

ブワツと砂煙をはらって出て来たのは霧島翔子をデフォルメした

召喚獣。

召喚獣の身長ほどある日本刀が不気味な光沢を出している。

「どうすんの雄二。 僕らが霧島さん相手に勝てるワケないよ」  
翔子と召喚獣は徐々に明久たちに近づいて来る。

まるで追い込み漁のように三人は集められ背中を合わせる。

普通なら召喚獣を通り越せば良いのだが、翔子は生徒会副会長。  
生徒会には物理干渉能力が備わっているため迂闊に近づけば斬られる可能性がある。

「この中で一番戦えるのはオレだが、部活紹介戦争のために点数は  
温存しておきたい」

「なら、また逃げるの？」

「今のところはそれ以外にない」

明久は何かを思い出したように、

「そうだ。 妨害された時ように、何か作戦考えてたじゃんか」

「あれは桜井たちの力が必要なんだよ」

「この無能バカが！」

「テメエに言われたくねーよっ！」

「……試験召喚獣召喚【サモン】」

突然、誰かが召喚獣の召喚許可を出した。

「ムッツリーニ……？」

「……行け。 ここはオレが残る」

「そんな無茶だよ。 前の試験召喚戦争で霧島さんに勝てなかった  
じゃないか」

「……これはオレが招いた事だ。 行け明久、後は頼む」

「行くぞ明久」

「でもっ！」

雄二は肩を掴み無理やり引っ張る。

まるで言う事を聞かない子どもを連れて行く親のように。

「いいから行くぞ」

「……っ、わかった」

明久と雄二が翔子の召喚獣の横を通り過ぎた時。  
直後。

霧島翔子の召喚獣がその場から姿を消した。

1秒も経たない一瞬で翔子の召喚獣は4mあった距離をゼロ距離にしてムツリーニの召喚獣の目の前に現れた。

同時に日本刀を振り下ろし左手に持った小太刀との衝突によってガキンツと金属音が校庭に響く。

「……………」  
互いの召喚獣がカチカチと武器を重ねたまま、その場で力押しで耐えている。

「……………吉井の言う通り、私に勝てるワケがない」

徐々に日本刀でムツリーニの召喚獣を押し始めた。

ギリギリと金属の削れる音がムツリーニの召喚獣に近づいていく。

その時。

「……………誰が言った」

ムツリーニの召喚獣は右手に持った小太刀を強く握る。

「……………っ！」

助走をつけた小太刀は勢いに乗せて日本刀を弾き返した。

それどころか衝撃は翔子の召喚獣ごと後ろに吹き飛ばした。

すぐさま翔子の召喚獣が空中でクルリと回転して向きを戻し、地面に足を付けて前に視線を動かした瞬間、

目の前に小太刀があった。

それに気づいたのは、

ズドンッ！ と地面に叩きつけられていた時だった。

「……………負けた相手に二度と勝てないと誰が言った」



【第七十六問】 妨害の火種（後書き）

ムツツリーニと翔子の戦いは次回。

【第七十七問】 寡黙の戦い

B A K A T O T E S T

『保健体育 Aクラス  
霧島翔子 453点』

V S

『保健体育 Fクラス  
土屋康太 488点』

「……………」

寡黙な二人は言葉を交わさない。

無駄に自分を主張しないからこそ感情はすぐさま戦闘態勢に移行させる。

翔子の召喚獣は左手で日本刀の鞘さやの根元を持ち、右手で柄つかを握り締めて、鞘を持ったまま親指で鐙つぼを軽く押し上げて柄を一気に刀身を引き抜いた。

同時に翔子の召喚獣の腕輪が光り、『光解離領域【フォトンベルト】で光の領域へ入って姿を消そうとする。

「……………簡単には逃がさない」

その、ほんの数コマだけ先に動いていたムツツリー二の召喚獣が、小太刀を構えて一気に距離を縮めて接近した。

「速い……………っ!!」

一瞬感情に流された翔子は召喚獣に対する意識を薄めてしまった。

消える直前でムツツリー二の召喚獣の持つ小太刀が攻撃範囲まで届き咄嗟に日本刀で防ぐと能力が解除された。

召喚獣が装備している防具も多少の重さに変化があるため、鎧姿の翔子の召喚獣とムツツリー二の忍者服では行動の速さが違う。

ただ装備の違いで速さが極端に変わるワケではない。

「……前のオレは点数が低かった。それを忘れるな」

ムツツリー二の召喚獣は両手の小太刀を上手く使って翔子の召喚獣に少しずつダメージを与えていく。

ダメージは簡単には入らない。それでもヤスリで石を削るように少しだが確実に。

右手の小太刀を日本刀で防がれると、左手の小太刀で喉元を狙って斬りつけた。

だが刀が触れる直前で翔子の召喚獣は後ろに下がって光の領域に入った。

四次元に似た別次元の光間移動によってムツツリー二の真後ろに瞬時に移動すると、空中で日本刀を振り下ろした。

一瞬の出来事でありながら、ムツツリー二は見極めて小太刀で受け止めるのではなく召喚獣をギリギリ攻撃範囲外に避けさせた。

翔子の召喚獣が日本刀を振り下ろした力が殺しきれない間にムツツリー二の召喚獣が振り返り、再び喉元を狙おうと小太刀を振り上げた。

それでも光の領域に入られて逃げられる。

その行動は、5秒にも満たない。

「……やっかいな能力だな」

翔子の『記憶で先読みする才能』。

ムツツリー二の『直感で先読みする才能』。

まるで二人は詰み将棋をしているかのようだ。

『完全記憶【フルコンプリート】』は相手の行動、癖、呼吸、全てにおいて完全に記憶して次の攻撃パターンを先読み出来る。

だが『不正入手【フリーダム】』は、次の攻撃がどこから来るの

か読む能力。

次の行動にあるだろうと言う可能性を先読みする方法と、次に何が来るのか分かる先読み方法。

つまり『不正入手【フリーダム】』は『完全記憶【フルコンプリート】』にとつて相性が最悪と言える。

「この攻撃も避けられる何て、どこまで私の行動を読んでいるの？ さつき入った光の領域から出て懐に入った翔子の召喚獣の攻撃も、ムツツリー二の召喚獣はギリギリで後ろに避けていた。」

「……オレの才能は、次の行動を解析する能力だ」

翔子がいくらムツツリー二の行動を先読みしようと、次の行動と言う膨大な可能性を人間の脳では限界があり集中力も欠けてくる。

だがムツツリー二には関係ない。

最後に残った可能性の答えを出すのが才能だから。

「そつちの才能の方が、よっぽどやっかいな能力」

「……『四面楚歌【ルバートカルテット】』」  
ムツツリー二の召喚獣の腕輪が光ると4つの光りが召喚獣の周りに落ちた。

そこに現れたのは召喚獣をコピーしたかのような、見た目が全く同じ姿のムツツリー二の召喚獣。

「……一度に5体の行動を先読みする事は、まず不可能だ」

『四面楚歌【ルバートカルテット】』で出現した召喚獣は全てが自ら意志を持って行動している。

それはさつきの5倍の可能性と言う先読みをしなければならぬと言う事になる。

「それでも私は負けない。 Aクラス代表の力を見せてあげる」

「……追いつめられたバカは何をするかわからない」

ムツツリー二の召喚獣が5体、一斉に突撃した。

5体は前方に2体、中央に1体、後方に2体の陣形を作つて、前方2体が翔子の召喚獣の左右に別れて小太刀を構えて同時に攻撃を入れる。

右から攻めた召喚獣の攻撃を弾き返されるが、左からの召喚獣の攻撃がすぐそこまで迫っていた。

直撃。　そうムツツリーニは思った。

しかし翔子の召喚獣は日本刀だけを光の領域に入れて光の速さを利用して高速で武器を移動させると2体目の攻撃を弾き飛ばした。

休む間もなく中央の1体が直線攻撃を仕掛ける。

それを、縦振り攻撃で中央の召喚獣は地面に叩きつけられた。

まだ攻撃は終わらない。　残り4体。

今さつき弾き返した前方の2体が再び攻撃に向かわせるが日本刀で薙ぎ払られる。

前方の攻撃を弾くために後ろを向いている状態の翔子の召喚獣に、後方の2体が背中を狙って攻撃に入る。

翔子の召喚獣は攻撃を喰らう前に光間移動で後方の2体の後ろを取って2体同時に斬りつけようとしたが、またさつき弾かれた前方の2体が体制を整えて後方の2体を守るために日本刀を前方の2体が防いだ。

その隙に後方の2体が後ろを振り向いて、前方の2体が防いでガラ空き状態の翔子の召喚獣の腹部を狙って小太刀を突き刺した。

が、それも光の領域で回避された。

それが結果的に最悪な事態になった。

今の前方による攻撃で前方の2体、後方の2体の4体が綺麗に真横に揃ってしまった。

それも全員がさつきまでいた翔子の召喚獣の方を向いて無防備状態となっている。

「っ……マズイ！」

「気づくのが遅い」

4体の後ろに現れたと同時に。

「これで終わり……」

翔子の召喚獣は日本刀で斬る、ではなく刺した。

4体の召喚獣が真横に揃っていると云うのに、たった1体の召喚

獣に焦点を合わせて日本刀で心臓を突き刺した。

「っ……………！！」

いつも寝むそうな顔のムツリーニは目を見開いた。

だからこそ分かる。その刺された1体の召喚獣が本物だと言う意味が。

「召喚獣の本体は最初から解っていた」

「……………本体とコピーは見た目で判断できない」

「私は召喚獣を見ていない」

霧島翔子の意外な答えに疑問符を浮かべる。

「私はずっと土屋の目を見て召喚獣を特定していた」

「……………オレの目だと？」

「土屋はこの突き刺している召喚獣にずっと目を向けていた。だから簡単に召喚獣の本体を見極める事ができた」

翔子の才能、『完全記憶【フルコンプリート】』は全てを記憶する能力。

それは、瞳の動き1つすらも完全に記憶してしまう能力でもあったため、ムツリーニの召喚獣の本体が最初からバレていたらしい。

「……………、オレは『完全記憶【フルコンプリート】』の能力が嫌いだ」

「残念だけど、この勝負は私の」

翔子が勝利宣言をしようと心の中でガッツポーズをとった時。

ブシャアアアアと言う音と共に翔子の召喚獣から大量の赤い液体が飛び出した。

「えっ……………?!」

普段冷静な翔子の声が驚いて裏返った。

ムツリーニの召喚獣に後ろから日本刀を刺して決着がついた。

そのはずなのに、翔子の召喚獣が突然、大量の血が噴き出したのだ。

「……………嫌いな能力だが、その才能を逆に利用させてもらった」

「何が……………起きたの……………？」

翔子は辺りを見渡した。

近くにいる分身は本物だと思っていたヤツを含めて『5体』いた。倒した時は確か4体。

「っ…………！」

とっさに一番目に倒した中央の分身の場所に視線を動かした。

いない。

いない。

いない。

地面に叩きつけて倒したはずの分身の姿がどこにも見当たらない。

「…………死んだフリは古典的ではあるが今でも使えるトラップ」

中央にいたムツツリー二の召喚獣は、翔子の攻撃で戦死したかと思っていたが、実は攻撃を当てられる瞬間に日本刀をギリギリで横避けて、叩きつけられたかのように見せかけるために自ら地面に伏せて、翔子に戦力外通告させておいたらしい。

「最初から私の行動を読んでいたらどうなの？」

「…………前々から、そうやって戦っていた。ただそれだけの事だ」

「……………、そう」

たった一言。

寡黙な翔子はそれ以上質問を続けるよりも自分の中で自問自答しているのか少しだけ黙った。

「……………、」

すると、翔子はゆっくりと歩きながらムツツリー二に近づいて目の前で立ち止まった。

「……………私の負け」

『保健体育』

Aクラス

霧島翔子

0点

保健体育  
土屋康太

Fクラス  
268点

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第七十七問】 寡黙の戦い（後書き）

二人とも、もっと喋ってくださいよ。

【第七十八問】 操られた者たち

B A K A T O T E S T

「ちょっと待て明久。あそこに誰がいる」

雄二を見ると指差している。明久はその先に視線をたどった。

あいつ、デパートの時にいたヤツだ。

そこに立っていたのは、モヒカンのようでモヒカンではない。

でもやっぱりモヒカンばい頭の男が仁王立ちしていた。

「久しぶりだな、坂本雄二」

「テメエは…… A クラスの常村か。何の用だ」

「ふんつ。いちいち言わなくても、分かってんだろ？」

モヒカンは制服のポケットに手を入れて、手を戻すと白い紙が一緒に出てきた。

「……ああそうだな、オレと」

「この婚姻届にハンコを押してもらうために」

「戦うつて事だろ？ ……ちょっと待てモヒカン！ テメエ今何て言った!？」

「二度も言わせるな。お前に勝つてこの婚姻届にハンコを押してもらつ」

「男子にもモテモテだね雄二」

「冗談じゃねーっ！ 誰がこんなモヒカン野郎と人生歩まなきゃならねーんだっ！」

「誰がこんなゴリラと結婚しなきゃなんねーんだよ。こいつを良く見ろ」

モヒカンが裁判で勝訴した時のように紙を広げている。

そこに書かれていたのは、霧島翔子と言う名前と坂本雄二と言う

名前。

「お前、それをどこで……いや、まさか！」

「試験召喚獣召喚【サモン】」

モヒカン頭の目の前で幾何学的な魔方陣が出現した。

そこからモヒカンをデフォルメした召喚獣が姿を現す。

「代表に頼まれたんだよ。お前をここで足止めするようになってな」

「ちっ……行け明久。あいつはオレが相手してやる」

「霧島さんと結婚できる口実が出来たからってワザと負けないでよ？」

「んな事わかってる。あいつから婚姻届を奪い返してやる」

「試合の方は僕が一人で勝つて来るから任せて」

明久はモヒカンの横を通り過ぎて体育館に向かって走った。

「坂本オ……今度は前みたいにはいかねえからなあ」

モヒカンは以前に文月デパートにて雄二に瞬殺された事があった。

「ゴタゴタは良いから、さっさと始めんぞ。試験召喚獣召喚【サモン】」

モヒカンと同じように雄二の目の前に魔方陣が出現すると、デフォルメされた召喚獣が出現した。

武器を持っていない雄二の召喚獣は右手を左の腰に持つて行く手のひらサイズの幾何学的な魔方陣が腰に出る。

そこから日本刀を抜く仕草と共に火花を散らしながら銀色の長槍が召喚された。

対戦教科である『数学』の点数がそれぞれの召喚獣の頭に表示される

『 数学                    Aクラス

常村勇作                417点』

雄二とモヒカンの召喚獣が同時に地面を蹴った。

だがモヒカンの召喚獣の速度が異常なまでに加速して、雄二の召喚獣は激突して吹き飛ばされた。

「なっ……！」

吹き飛ばされた雄二の召喚獣は、すぐさま槍を地面に刺して足と一緒にブレーキをかけると数メートル後ろに下がったところで止まった。

「どうしたんだ？ さっきまでの威勢はもう消えちまって降参するか？」

「誰がお前に頭下げるかっての」

雄二は持ち前の冷静な判断は一瞬乱した心を静めて平常心を取り戻す。

今の動きの変化は常村の召喚獣の能力だろうな、と雄二は冷静に分析をする。

モヒカンの召喚獣を細かく観察してみるが、ブーストのような加速装置を装備している感じはない。

雄二は再び召喚獣を直進させダッシュで近づかせた。

俊敏な動きで召喚獣の距離を縮めて攻撃範囲内に入るところまで来たが、モヒカンの召喚獣が動く気配はなかった。

それなのに攻撃範囲に入った途端、またしても突然の加速で雄二の召喚獣は吹き飛ばされた。

無駄な事を、とモヒカンは言うが、雄二には無駄な事ではなかった。

今の行動でモヒカンの召喚獣の能力を解析したからだ。

「脚力を瞬間的に上昇させる能力か」

「正解、と言いたいところだが少し間違っているな」

すると、召喚フィールドの床に矢印の書かれた召喚獣サイズの正方形パネルが魔方陣から出て来た。

パネルはモヒカンの召喚獣と雄二の召喚獣の間を一直線に4枚現れた。

パネルとパネルの間は3mほどの感覚を開けてあり、矢印の先は全て雄二の召喚獣に向かっている。

「残念賞のお前には、正解つてのが何か今そいつを教えてやるよ」

モヒカンの召喚獣が一番手前にあつた矢印パネルを踏んだ瞬間、雄二の召喚獣に向かつて急加速した。

さらに先に設置されている直線のパネルを踏むと、さらに加速して先ほどよりもスピードが上昇した。

「っ……………！」

雄二は、真つ直ぐ迫って来るモヒカンの召喚獣が攻撃範囲に入るまで武器を構えて待つ。

攻撃範囲に入ったと同時にカウンターを狙つた雄二が槍を突き出した。

瞬間だった。

「誰が、素直に直線攻撃すると思う？」

「!?!」

モヒカンの召喚獣は、雄二の召喚獣の槍が当たる寸前でモヒカンの召喚獣の足元に右の方向を向いているパネルが出現。

それを踏むと体は正面を向いたまま反復横飛びのように真横に移動した。

モヒカンの召喚獣が1mほど横に移動すると、またも足元に前進パネルを出して、それを踏んで雄二の召喚獣の左側に来ると、さらに左の方向パネルを出現させて攻撃途中で動けない雄二の召喚獣を吹き飛ばした。

今度は体勢を戻せず体を地面に滑らせて校庭の土煙が舞い上がる。「こいつは『自動目的【オートパイロット】』。ベクトルパネル

を自由に出現させる能力だ」

「……そう言う事かよ」

「どうした坂本。結局は口だけで何にも出来ないクズだったのか？」

「テメエも十分、口だけで何にも出来ないクズ野郎だがな」

「ああア……？」

「せっかくオレが攻撃チャンスを3度もやったつてのに、まだ倒せない口だけの雑魚だつて言つてんだよ」

「テメエ………目上に対する口の利き方がなつてねえなあ。母ち

やんから教えてもらつただろうが」

「悪いな。オレのお袋は呆れるほどの天然で、そんな事を教えてもらつた事がないんだよ」

「だつたら教えてやるよ。Aクラスの力つてのをよおッ!!」

「またも召喚フィールド内にパネルが現れた。」

「しかし今度の数は先ほどとは比べ物にならないほどだった。」

「指の数ではまったく足りない。ざつと100枚はあるだろうか。召喚フィールド内全体が正方形のパネルがタイルのように張り巡らされた。」

「矢印の方向は数が多すぎて方向に法則性が見えない。」

「テメエにはガツカリだぜ！ 所詮本気を出したオレには手も足も出せないんだからよオオッ！」

「モヒカンの召喚獣が目の前にある前進パネルを踏んで加速した。」

「途中で左に向いたパネルを踏んで、その次は前進のパネルを踏み行動を予測されないように色々なパネルを踏んで移動を繰り返している。」

「……………」

「坂本雄二が見ている視線の先はモヒカンの召喚獣ではなくフィールドに張り巡らされたパネルを観察するようにキョロキョロと動かす。」

「どうしたよ坂本オ！ どころから来るか分からねーから目が泳いで

んのか」

「……………」

坂本雄二は答えない。

ただ口元を釣りあげた。まるでクイズ問題の答えが分かった気分になった時のように。

「これで決着としようか！ お前の敗因はオレに攻撃を当てられないことだ！」

モヒカンの召喚獣は、いろんな方向の矢印パネルを踏んでどこから攻撃するかわからない。

さらにはパネルを踏む毎に加速していくため、すでに目で確認できないほどの早さになっている。

「終わりだ坂本オオオオオッ！」

「ペラペラ喋る野郎だな。能力の弱点簡単に教えてどうすんだよ」  
雄二はつまらなさそうに口を開いた。

「お前の能力は最初に踏んだパネル、加速する速度、パネルの位置。この三つを逆算すれば答えなんて楽勝だ」

雄二の召喚獣が向きを180度変えた。

何も無いその場所に、坂本雄二の召喚獣が構えた槍を躊躇なく突き刺した。

「なっ……………」

そこにはモヒカンの召喚獣が刺さっていた。

さっきまで何もなかったその場所には、まるで槍に吸い込まれたようにモヒカンの召喚獣が心臓を一突きされて力が抜けたようにダランと腕が垂れた。

「数学ならオレの得意分野なんだよ。Aクラスなら、こんな計算出来て当然だろ？」

「っ……………くそっ！」

常村勇作

0点

V  
S

☐ 数学

Fクラス

坂本雄二

345点

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第七十八問】 操られた者たち（後書き）

操られた者たち？ モヒカンとは違うのでは。

雄二は才能で操られているのに対して、モヒカンはデパート事件以来、代表である翔子に頭が上がらないと言う意味で操られています。戦いにおいては翔子は弱いですが、立場においては強いですからね。さすがAクラス代表。

〜新しい能力〜

Aクラス 常村勇作

能力 『自動目的【オートパイロット】』

説明 地面に出現した四方の矢印を踏むと矢印の方向に速度が上昇する。ただし空中での方向転換は不可能。

【第七十九問】 十三番目の猫

B A K A T O T E S T

体育館の扉を開けると、部活紹介戦争が始まった頃よりもさらに熱気と歓声で盛り上がっていた。

そろそろ決勝戦に近い事もあるのだろう。

まだ明久たちは1戦しかしていないが、部活紹介に参加するのは自由なため、ほとんどは部活紹介に参加しないで模擬店たのしみを優先させている。

「良かった。何とか時間ギリギリで間に合った」

体育館にある円型の壁掛け時計はもうすぐ試合開始時刻になりそうだった。

急いで明久が召喚フィールドの中へ入って行くと、すでに対戦相手が待機していた。

「いやあ、お待たせしてすみませんね。ちよつと色々あつ……て」  
思わず前に進む足が考えると言うより勝手に止まった。

近づいてようやく見えた次の対戦相手に吉井明久は目の前の光景を理解するのに時間がかかった。

「何じゃ明久。ワシの顔に何かついておるのかの？」

「……ひで……よし……？」

明久の目の前に立っていたのは、どこにもいなかった秀吉の姿があった。

だからこそ、明久は目の前にいる美少女が木下秀吉なのかと言う疑問を持ってしまった。

「うむ。ワシはお主の知っておる木下秀吉じゃぞ」

「無事だったんだね秀吉！ もう心配したじゃないか」

「スマンかったの。ワシはこの通り元気じゃったぞ」

「で、でもちよつと待ってよ。秀吉は誰かに誘拐されたんじゃないのか？！」

「誘拐とまでは行かぬが、連れ出されたのは確かじゃ……その事については、後々話すでしょうかの」

まるで秀吉は犯人が坂本雄二だと言う事を知っているような言い方。

だがなぜかその事を吉井明久に説明しようとはしない。

「何で犯人を知ってるのに言ってくれないのさ。まさか脅されて口に出したら何かされるとか？！」

「映画の見過ぎじゃよ明久。心配せずともワシは大丈夫じゃよ」

「それなら教えてくれてもいいのに……」

「それより、今は部活紹介戦争の勝負といこうではないか」

「ちゃんと説明してよ！ 僕らどれだけ心配したと思ってるのさ！」

「ううむ……そこまで心配してもらうとは思っておらんかった。

ならば、ワシに勝負で勝てたら教えるでしょうかの」

「えっ……？」

「ワシは演劇部として出場させてもらっておるのじゃ。ちよつど

明久と勝負もしてみたかったからの」

「秀吉……何で……」

「ワシを連れ戻したければ、ワシを倒す事が条件じゃ明久よ」

分からなかった。

今の秀吉が誘拐されたと言うのに、どうしていつも通りにしているのか。

「試験召喚獣召喚【サモン】」

声と共に秀吉の目の前に幾何学的な魔方陣が出現する。

魔方陣からは『猫に招かれた者』と書かれたプレートがガラスのように砕けて木下秀吉をデフォルメした姿が完成した。

テーマの意味は干支の番外、つまり13番目の干支『猫』から来ている。

干支と言えば12番目までであるが、『猫』は新しく出来た13番目の干支。

木下秀吉と言えば男でも女でもない『秀吉』と言う新しい性別と被せてあるのだろう。

見た目は神社にいる巫女さんの姿。赤と白の色が鮮やかに調和している。

召喚獣は右手を振り払って横に伸ばすと、そこから武器である薙刀が魔方阵によって出て来た。

「明久も早く召喚獣を出すのじゃ」

実は誘拐つてというのは嘘で演劇部で出場するから、それを僕らに言えなかった？

だから秀吉は一緒にいなかったんだ。きつとそうだ。

秀吉はムツリ二に相談して、誘拐されたように見せかけただけかもしれない。

そう考えれば納得も出来る。

だから、

「試験召喚獣召喚【サモン】」

秀吉が戦いを挑んで来たと言うのなら、戦う理由はそれだけで良い。

もしも本当に誘拐されていたとしても理由は後でも良い。

「秀吉が無事だったのなら、それで良い」

「明久の力、見せてもらうぞ」

明久の前に現れたのは、少し昔風の学ランに武器は木刀。

「友達だからって手加減なしたからね」

「腕輪についてはどちらが勝っても恨みっこなしじゃからの」

そして、2人の召喚獣の頭に『化学』の点数が表示された。

『化学

Fクラス

演劇部

木下秀吉

58点

V S

『 化学                    Fクラス  
帰宅部                    吉井明久                    268点』

この点数なら一瞬で終わらせる。

試合開始と同時に思わず口元が釣り上がる。

「ずいぶんと余裕じゃの」

「悪いけど、この勝負一撃で決めさせてもらっよ」

「戦いは何も点数だけとは限らんぞ明久」

薙刀を構えた召喚獣が空高く飛び上がった。

秀吉はそれほど良い点数ではないため、動きは明久に完全に見切られているのか、秀吉の召喚獣が攻撃をしてくるまで動かない。

「食らえ明久っ！」

秀吉が間を詰めて、大きく縦に振ったところを明久の召喚獣が横に避けた。

確かに避けたはずだった。

なぜか避けたと同時に吉井明久の召喚獣が吹き飛ばされた。

「なっ……！！？」

「手加減はなしじゃと言っておろう明久。 気を抜いておれば、ワシには勝てんぞ」

明久は避けたはずの攻撃が当たったのか理解できなかった。

「っ………今のは驚いたよ。 ここからは本気で行く」

「それで良いのじゃ。 集中しておらぬとワシの攻撃は避け切れんからの」

再び、秀吉の召喚獣が薙刀を構えて明久の召喚獣に攻撃をしかける。

「どうやって攻撃が当てられたのか分からないけど、攻撃の軌道がわかっていれば防ぐことぐらい簡単だ」

「それは、どうかの？」

秀吉の召喚獣はさっきと同じように空中に飛んで上からの振り下ろす攻撃を地面についたと同時に止めて、明久の召喚獣の横に移動した時を狙い薙刀を横から斬りつけた。

「そうくると思ったよ！」と明久は秀吉の攻撃を見切って、横からの斬りつけられる攻撃を防ごうと木刀を縦に構える。

「残念、ハズレじゃ」

秀吉の召喚獣が薙刀で横から斬りつけるようにモーションを見せたが途中で止めた。

止めたと言うより切り替えた。

さっきまでの『横斬り』から『突き』に攻撃体制を変えて、縦に構えていた木刀をすり抜けて薙刀が明久の召喚獣に突き刺さった。

「ぐっ……」

フィードバックでの痛みを堪える明久。

点数では圧倒的に明久が有利のはずだが、完全に秀吉が明久を押ししている。

「どうじゃ明久よ。ワシもなかなかの強さじゃろ？」

「秀吉がこんなに強かったなんて。まるで僕の行動を予測してるみたいで怖いよ」

「それは『大きく縦振りの攻撃だから、横に避けて反撃しよう』と考えたのを知られたようで？」

一瞬、ピクリと体が震えた。

秀吉が明久の声を真似たせいで、まるで自分の声が勝手に外に漏れたと言う感覚になった。

「何で……僕の考えた事が……」

「明久にはずいぶんと心配かけてしもうたし、お詫びと言ってはあれじゃが特別に教えてやるうかの」

秀吉は一呼吸入れた。

「『真相心理【ポーカーフェイス】』の能力について」

「それって、人や動物の声を真似できる能力だよね？ 前に秀吉が言ってたじゃないか」

「それは演劇部に入ってから覚えた演技の一つじゃよ。才能は関係しておらぬ」

よく刑事ドラマなどで犯人が使っている声を変換させて、特定されないようにする『音声変換機』と言う物があるが、秀吉はそれを使わなくても自分の声帯を変換させる事が出来る。

ある意味それも才能の一つではある。

「なら『真相心理【ポーカーフェイス】』の何を教えてくれるって言うのさ」

「才能の本来の能力についてじゃよ」

「本来の能力……？」

秀吉は、大きく息を吸い上げて、

「ワシの才能は『人の心を読む』と言う能力なんじゃよ」

「人の心……、っ……！ だからさっきの僕の行動が分かったのか。でも何で今まで嘘をついてたの？」

「人の心を読まれて誰も嬉しいとは思わんからの。じゃから、なかなか言う事が出来んかった」

今まで誰にも才能の事がバレなかったのは、『真相心理【ポーカーフェイス】』の能力でもある。

嘘をついている事が誰にもバレない表情を見せる。

故に【ポーカーフェイス】の名がついている。

秀吉が以前、Aクラスとの試験召喚戦争で優子に対して、犬の鳴き真似で勝負すると言うふざけた作戦で戦って負けてしまった。

だが『真相心理【ポーカーフェイス】』の本来の能力で優子の心を読むことが出来るため秀吉の勝ちは決まっていた。

あの時、優子の心を読む事で耳栓をしている事に気がついていたが、それを言わなかったのは、以前、姉秀吉きょうだいでありながら、優子の趣味の事に興味を持った秀吉が悪いと思いつつも興味本意で優子の

心を読んでしまい、優子には変わった趣味があると言う事を知ってしまい絶対に言えなかったのだ。

もしそれを言ってしまうえば、才能の能力がバレて自分の命がないと直感したのだろう。

「ワシの才能は、人の心を読む事じゃが、応用すれば戦闘用にも使える才能なのじゃよ」

例えば、と言った秀吉は明久の召喚獣に薙刀を振り下ろした。

「っ……………！」

明久はとっさに木刀で薙刀を構えたが、やはり攻撃方法を変更して召喚獣の真横で薙刀を寸止めた。

「明久が今何を思っているのかを読む事で、次にどのように行動してくるのかを知り、攻撃に備えることができると言う訳じゃな」

秀吉は攻撃を止めて召喚獣を後ろに下がらせた。

相手の情報を知ると言う点では、ムツツリー二の才能『不正入手【フリーダム】』と似ているところがある。

違うのは、ムツツリー二は行動が読めて、秀吉は心が読めると言う事。

つまり、秀吉の才能はムツツリー二の才能をレベルアップさせたようなものだった。

「僕の考えは全てお見通しして訳か……………これはやっかいな相手と戦う事になっちゃったな」

「これも勝負じゃ。スマヌがこの勝負ワシの勝ちのようじゃの明久」

秀吉が最後の攻撃に出た。

しかし明久は何を思ったのか、突然目を閉じてしまった。

「……………、」

作戦を立てているのか真剣な様子で意識を集中させている。

秀吉は召喚獣が明久の召喚獣に接近させつつ、明久の心を読んだ瞬間だった。

「なっ、何を考えておるのじゃ明久っ！　ワシは男じゃと言うてお



ろっつー!!」

秀吉が明久の心を読んだ瞬間、秀吉が意識を乱して召喚獣の動きが止まった。

「もうダメじゃないか秀吉、気を抜いたら僕には勝てないよ?」

笑顔で答える明久にハツとした秀吉が自分の召喚獣に目を向けた時には、

「しまっ……!!」

秀吉の召喚獣が明久の召喚獣から強烈な1撃が食らわされて吹き飛んでいた。

そして、そのまま秀吉の召喚獣の点数が『0』と表示されて、明久と秀吉の部活紹介戦争は決着がついた。

「そんな……ワシの『真相心理【ポーカーフフェイス】』が利用される事があるなど」

「利用なんてしてないよ。僕は純粋に秀吉の事を考えていたら秀吉が勝手に僕の心を読むからだよ」

「ううむ……負けてしもうたのは認めるのじゃ。しかし明久よ! お主はいつもワシの事を何とっておるのじゃ!」

「あはは、そんなの決まってるじゃないか」  
吉井明久は笑顔で答えた。

『 化学 Fクラス  
演劇部 木下秀吉 0点』

V S

『 化学 Fクラス  
帰宅部 吉井明久 216点』

「大切な友達だよ」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第七十九問】 十三番目の猫（後書き）

資料集めに調べた干支に関する話は面白かったです。

なぜ猫が干支にないのか。なぜネズミが1番目なのか。興味があれば調べてみてください！

ちなみに『猫』が新しい干支と言うのは作中だけの設定です。

〈新しい才能〉

Fクラス 木下秀吉

才能： 『真相心理【ポーカーフェイス】』

説明： 人の心を読む能力。

元ネタ： 深層心理

〈雑談〉

ニュートリノは光速より速いらしい。

ん？、翔子のフォトンベルトが雄二のニュートリノに負けた……。  
凄い発見を先取りしていたようです（自己満足）。

【第八十問】 決勝戦の相手

B A K A T O T E S T

二人の戦いが終わり、体育館の隅で明久は勝った褒美を貰っていた。

「……雄二が秀吉の誘拐犯？」

「うむ……」

そう。勝てば秀吉を誘拐した犯人を教えると言う条件。

「またまたあ。勝負はついたんだから嘘ついてもダメだよ」

「じゃからワシは本当の事を言うておろう。お主もよく知っておる坂本雄二がワシを誘拐した犯人じゃよ」

「……、……？」

今、秀吉を誘拐した犯人の名前を聞いています。なのに秀吉の口

からは耳にタコが出来るほど聞き慣れた名前。

何かの冗談。いくら説を考えようとしても、結局はそれしか思いつかない。

「ホントに雄二なの？」

「お主が混乱するのも分かる。しかしこれは事実なんじゃよ」

「あの野郎、ぶっ殺す。霧島さんがいるのに秀吉にまで手を出すなんて」

「待つんじゃないよ。雄二にも理由わけがあつてワシを誘拐したんじゃない」

「理由なんてどうでも良いよ。僕は雄二を殴らないと気が済まない」

「雄二は何も言うてはおらぬが、ワシは『心を読む』才能を持つておる。じゃから何が目的なのかも知つておる」

「売上の作戦か何か知らないけど、いくら何でも僕らに内緒で秀吉を誘拐した何て許せない」

「雄二は悪くないのじゃ。ワシを誘拐したのは雄二の意思ではなく、そうするように仕向けた者がある」

「……？ 誰かが雄二を操ってるって事……？ いったい誰が操ってるのさ」

「Cクラス代表の小山友香じゃ」

「……、え……っええ！？ あの学園一、真面目で有名な『風紀委員【レギオン】』の小山さんだよな？」

明久自身、小山友香との面識はないが以前から学園で噂を聞いた事があった。

「ワシも正直、雄二の心の中が本当なのか疑いたくなったのじゃ」

二年Cクラス代表、小山友香は学園の中で一番と言えるほど真面目な性格で、成績はCクラスと中ランクだが、その性格は完璧と言われ文月学園の『風紀委員【レギオン】』にも任命されている。

「小山さんがそんな事するような人には見えないのに」

「ワシも本人と会ったワケではないからの。それに人の心を読むと言つのは褒められたものではなからう。そう簡単には使いたくはないのじゃよ」

「何であんな真面目な人が雄二なんかを……」

そんな彼女が雄二を操って誘拐させるなど明久たちには到底理解できなかつた。

だが不純異性交遊を取り締まる『風紀委員【レギオン】』の指揮官である彼女なら操る能力を持っていても不思議ではない。

軍団を意味する風紀委員の指揮官にとって多勢を指揮するには操る能力がどれほど強力になるだろうか。だからこそ、何かを理由に彼女が雄二を操っている黒幕の可能性は否定できない。

「とにかく直接雄二に会って話をつけよう」

「うむ」

「あれあれ？ 君は確かデカユウジの友達君」

よし行こう、と気合を入れて体育館を出ようとした時、明久たちの背中から聞こえて来た可愛らしい声で足を挫かれた。振り返ると誰もいない。

視線を少し下げるとやっとわかった。そこには咲坂奈月がチョコンと立って手を振っていた。

少女は三年の教室前で会った時とは違い、寒い季節でもないのに茶色のロングコートに白いマフラーを首に巻いている。

さらにはニット帽も被ったりと冬の寒さ対策バッチリな女子高生になっていた。

「どうしたんですかその格好」

「もうすぐ冬が来るからねエ。これぐらい着ないと寒くて死んじ

やうの」

「は、……はあ」

冬と言つた夏すらまだ来ていないのに、と疑問符を浮かべている。

「えっと……君の名前は、よし子君だった？」

「よし子はこっちの秀吉です。僕は吉井明久ですよ咲坂先輩」

「この子が捜してた、よし子君？ えっと……女の子？」

「『秀吉』ですよ」

「ワシは男じゃ」

ぐいぐいと秀吉は明久を引っ張り、耳元に手を近づけて小さい声で話す。

「なぜ、ワシが『よし子』なのじゃ明久よ」

「ちよっと色々あつて秀吉の事は『よし子』って名前になつてるみたい」

「その色々で何があつたのじゃ……」

「じゃ自己紹介。わたしは三年Aクラスの咲坂奈月。生徒会会

長してるんだよ」

「ワシは二年Fクラスの木下ひで……木下よし子じゃ」

相変わらず人の名前を覚えない少女はいつものようにニコニコと笑顔を絶やさない。

マイペースなところが咲坂奈月と言う性格なのだろう。

「咲坂先輩、もしかして応援に来てくれたんですか？」

「そんなとこかなあ」言いながら明久たちの周りを見て、さらにジ  
ト目にして360度グルグルその場で一回転。

少女は本当に小学生みたいに、いちいち可愛い仕草をする。

「デカユウジいないの？ 人混みでも目立つのにどこにも見当たん  
なあい」

敬礼するように目の上に手を当てて体育館をジロジロと観察して  
いる。

「雄二なら外ですよ。今から僕ら雄二のところに行くところだっ  
たんで、一緒に来ますか？」

「何かあったの？」

「今、Aクラスから妨害戦争仕掛けられてるんです」

少女はニコツと笑い、

「なら行かなくても大丈夫だよ。デカユウジはやれば、ちゃあ  
んと出来る子だからね」

「は、……はあ」

「それより友達君はこっちが優先でしょ」

少女は明久の手を掴んでグイグイと引っ張って行く。

まるで遊園地で次の乗り物に乗りたくてしかたがない子ども  
のよう。

「ほらほら、決勝戦なんだから一緒に登場した方がカッコイイ  
でしょ」

「えっ、あ、ちょっと先輩？」

「えへへ、楽しみ楽しみ」

秀吉は二人の背中を見ながら、

「……………、うむ。あの咲坂会長が雄二以外に興味を持つとは、  
珍しい事もあるんじゃない」

部活紹介戦争決勝戦。

召喚フィールドは今まで『田』の配置になっていたが、最後は体育館の中心に配置が換わっている。

演出と言つのもあるが、決勝戦となれば一年生だけでなく二年も三年も興味を持ってぞろぞろとやってくるため観客席を広めに取る目的もある。

「まさか先輩が決勝戦の相手だったなんて」

「生徒会は必ず決勝戦に参加するように設定されてるの。だからつてわたしが弱いつて思っっちゃダメだよ」

「Aクラス代表でもある先輩を弱い何て思えませんって」

相手は、3年Aクラス代表で生徒会会長を務める咲坂奈月と言う少女の実力は底知れない強さと明久は戦う前から分かっている。

「じゃ、さっそく始めよつか」

「試験召喚獣召喚【サモン】」

2人が同時に召喚獣を召喚すると、2人の前に幾何学的な魔法陣が現れる。

そして明久の前には少し昔風の学ランに木刀を持った召喚獣が、奈月の前には、『群れを護る狼』と言うプレートがガラスのように砕け散って、そこからプログラムされた召喚獣が姿を現す。

奈月の召喚獣は防寒対策用のコートとフードを頭に被って、ベースとなる生き物がオオカミだからか雄二の召喚獣に似ている。

さらに武器も雄二の召喚獣と同じコルセスカの槍を持っていた。

召喚獣の武器は、それぞれが全て違う武器ではなく、こうして同じ武器になる事もある。



ただし、武器が同じだからと言って召喚獣の腕輪の能力までも一緒にはならない。

それこそ召喚獣の腕輪は全くの同じと言う能力は存在しない。

『総合教科 Aクラス

生徒会 咲坂奈月 7238点』

V S

『総合教科 Fクラス

帰宅部 吉井明久 3867点』

決勝戦は総合教科が選ばれたため、現代国語、古典、数学、物理、化学、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育の10教科を合計した点数になる。

「な、7000点オーバー?!」

「これが生徒会会長さんの強さなのだよ。 どう、驚いた?」

「7000点つて鉄人並みに強いじゃないですか!」

奈月はAクラス代表と言うだけあって、教師が持っている点数並みの強さ。

この学園の教師は、学園長の10000点を頂点として、鉄人の8000点、高橋洋子の7000点、そして各教科の教師の6000〜5000点が標準になっている。

大半の優等生なら4000点を超えれば十分な成績になるはずだが、そう考えれば生徒会会長の実力と言うのが分かる。

二年代表の翔子の総合教科の点数は今までで4762点を叩きだしている。

ちなみに、明久が学年一位だった事もあったが、一年生までは一

般のテストと同じ上限100点になっている。雄二は翔子より成績が良かったが、それも二年生になるまでの話。

あくまで二年生になって上限解除された時点での最高成績は霧島翔子となる。

翔子は記憶能力のおかげでここまで点数を取る事が出来るのに対して、奈月は才能とは関係なしに、何となく答えがわかると言うメチャクチャ少女。

マイペースな少女に世の中の常識は通用しない。少女が決めた事が世の中の常識となる。

一部の生徒は、今まで常識だと思っていた事が本当に常識だったのかと疑ってゲシユタルト崩壊する。

ゲシユタルト崩壊とは一つの漢字を何度も書き続けると、こんな漢字だったっけ？ と、漢字の形態が崩壊する現象を意味する言葉。

そのため、生徒たちは摩訶不思議能力を『常識崩し【ゲシユタルト】』と命名しているらしい。

「友達君も結構点数あるんだね。それならちょっと楽しめそ」  
召喚獣の操作は神経を使うため攻撃、防御と言った簡単な指令を

するだけがやっと。  
それなのに奈月は軽く扱つように槍をクルクルと回す余裕すらある。

「あんまり僕を見くびらない方が良いですよっ！」

明久の召喚獣が木刀を握り締めると7mの距離を一気にゼロ距離に減らした。

もちろん、こんな攻撃は奈月にとって簡単に避ける事など雑作もなかったのだが、あえて明久の召喚獣の攻撃を槍で受け止めた。しかも片手で。

「良い動き。召喚獣も使いこなしてるんだね」

ギリギリと音を立てる武器と武器で押し合いながら、

「ねえ。君がデカユウジの性格変えてくれたの？」

「え……？」

「何だか性格変わったよね。久しぶりに会ってビックリしちゃった」

「それはたぶん、霧島さんが雄二の性格を四角から丸にしたんだと思いますよ」

「そっか。あの子ずっと頑張ってたんだ」

「雄二も何だかんだで、僕たちFクラスのために頑張ってくれてるんですよ」

「……嬉しい」

「えっ……？」

ガキンツ！ と奈月の召喚獣が木刀を振り払ってバク転しながら下がった。

「デカユウジは一人で何でも出来ると思って人に頼らなかつた。

でも、こうして友達と一緒に楽しそうにして嬉しかったな」

「そう言えば、先輩と雄二ってどこで知り会ったんですか？」

「んと去年だから、わたしが生徒会副会長になってからかな。荷物の整理で高いところが届かなくて困ってたら偶然通ったデカユウジに手伝ってもらったの」

あの雄二が人助け……。考えられない。

奈月は嬉しそうに続ける。

「だからね、わたし初めて人の名前を頑張って覚えたんだよ。おつきい人だからデカユウジって」

「……もしかして先輩は雄二の事が好きだったり？」

「うん、好きだよ」

やっぱりそうか。でも雄二には霧島さんがいるからなあ……。

「デカユウジは、わたしの夢を叶えてくれる人だから」

「え？ 夢を叶える？」

「高いところの荷物が取れたり、電車のつり革に掴まれたり、自販機のジュースを好きなの選べたり。わたしの夢をデカユウジが全部叶えてくれたから」

つまり奈月は異性として好きと言うより、願いが叶うから好きと

いう感覚なんだろう。

だが、明久は少し考えてみた。

身長の低い奈月を雄二が抱きかかえている姿を。

「今すぐ警察に電話した方がいいですよ」

「ふえ?!」

「あんなロリコン野郎と一緒にいたら、いつ先輩に危険が及ぶかわかりませんよ!」

「デカユウジは優しいもん!」

「だから危ないんですよ。あんな危険なヤツと関わったらダメですって」

奈月はムスツと頬を膨らませてハムスターのようになってる。

「友達君でもデカユウジを悪く言うのは許さないよ!」

言いながら奈月の召喚獣の腕輪が光り出した。

すると奈月の召喚獣が両手を前に構えると目の前に30cmほどの円形魔方阵とその周りに5つの小さな円形魔方阵が出て来たと思えば、そこから弾丸のように高速回転した槍、正確には槍の形をした氷が明久の召喚獣目がけて飛び出して来た。

「っ……なっ! いきなり卑怯ですって!」

咄嗟に横に回転したが5本の氷槍の内、2本が明久の召喚獣の右腹部と左肩に突き刺さった。

「がはっ……!」

明久の召喚獣の痛みが明久にもフィードバックして腹部と肩を押さえる。

「デカユウジの友達なら、もっと仲良くしなきゃダメだよ」

いつも笑っている少女が初めて明久の前で怒った顔した。それ

だけ雄二をバカにされる事が頭に来たのだろうか。

「『凍結槍【アイスキャンデー】』」

怒りが治まらない奈月の攻撃は容赦なく続けられた。

あの可愛らしい姿とは裏腹に、Aクラス代表である咲坂奈月の実力は本物。

本気の戦いは明久の実力では天と地ほどの差がある。

召喚獣の前にさつきと同じ魔方陣が出て来ると、今度は7個に増えてる。

「当たりクジ2本追加」

弾丸のように魔方陣から弾き出された氷の槍が痛みで地面に手をついている召喚獣に向かって一直線に飛んで来る。

分かつてはいるが明久は痛みで集中できない。

その場で動けない明久の召喚獣は木刀で何でも良いから適当に振り下ろした。

「がつ……つつう……」

痛みの声を口の中で叫んで明久は右腕を押さえた。

「右腕に2本。右足に1本。当たり3本追加」

8個の魔方陣が奈月の召喚獣の周りに規則性のない適当に張り付けたように出現すると、同じくして8本同時に氷の槍が弾丸のように弾き飛ばされる。

どうやら5本をベースに槍が刺さった本数を追加させる能力らしい。

「それって卑怯過ぎでしょ」

「ほらほら、避けないとまた当たりクジ増えちゃうよ」

「つ……『疑似複製【ダミーアカウント】』」

言葉に反応して明久の召喚獣の腕輪が光りだして、その光が召喚獣全体を包み込むと思えば、二つに分裂した。

やがて光が消えると、そこから全く同じ姿の明久の召喚獣が姿を現したと同時に、副獣が主獣の前に立って氷の槍を叩き割った。

「おお！ 分身能力カツコイイ！」

「……はあ……はあ……突っ込めっ！」

息を切らせながら明久は指令を出して副獣が地面を蹴って奈月の召喚獣に距離を詰めた。

目の前で木刀を振り上げ、

「いけエエエエエエエエ！」

武器を持たない奈月の召喚獣に木刀を振り下ろした。  
ズドン！　と言う音と共に奈月の召喚獣は叩きつけた。

痛みを堪えながら明久は視線を上げて召喚獣の方に目を向けた。  
だがそこで見えたのは、

「武器は防御にも使えちゃう優れモノなんだよね」

召喚獣の目の前で槍と槍が網目状に氷が膜を張って、まるで氷の結晶の形をした防御壁が木刀の一撃を全部受け止めていた。

「……っはぁ……そんな……」

「残念だけど、この勝負はわたしの勝あち」

氷の壁が一瞬で気化されたように消えると、再び魔方陣が出て来た。

その場所は明久の召喚獣を取り囲むように。

「ジ・エンドだよ」

「……………」

氷の槍が弾丸のように飛び出して副獣が八子の巢にされた。  
と同時に、

奈月の召喚獣の背後から明久の召喚獣が木刀の矛先を召喚獣に向けて近距離まで来ていた。

「っ……………」

「副獣はあくまでダミー。こっちが本命ですよ先輩」

奈月の召喚獣がすぐさま後ろに方向を変えながら槍の武器を召喚した。

が、

2歩も3歩も遅すぎた。

木刀で吹き飛ばされた召喚獣が背中から地面を5mほど滑って、すぐさま立ち上がるうとしていた奈月の召喚獣に明久の召喚獣が渾身の攻撃を腹部に突き刺して召喚フィールドの壁にぶつかった。

「いててて……フィールドバックする何て久しぶり」

壁に叩きつけられた奈月の召喚獣は、弱る気配を見せずにすぐに立ちあがって来た。

「やっと……1撃」息を切らせながら奈月の点数を見ると「……まだ……全然か」

奈月の点数は少ししか減っていない。いや、明久が減り過ぎていると言う方が正しい。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

呼吸をするたびに凍りついた息が白くなって吐き出される。

奈月の召喚獣の能力が使われるたびに温度が急激に下がっているため、まるで砂漠から冷凍室に入れられたと言ってもいいほどの温度差が明久の体力を一気に奪って体が勝手に震えだす。

「ずいぶん息が上がってるけど大丈夫？」

防寒服を着ている奈月も白い息を吐き出して体を小刻みに震わせている。つまり、ここは真冬並みの気温なのだろう。

「何でも……ない……です……早く続きを」

明久は体を震わせながら召喚獣に意識して木刀を構えさせようとした時だった。

カランカラン と、軽い木製の音がフィールドに小さく響く。

聞こえた先には明久の召喚獣がまるで彫刻のように武器を構えた体勢で動かなくなっている。

「……はぁ……はぁっ、」

奈月の召喚獣が能力を使っているのが原因なのか、寒さで召喚獣への集中力が低下した明久は木刀を構えると言うモーションすら出来ないほど感覚がマヒしている。

手が震え、足が凍ったように動かなくなり、頭を上げて前を見る事すら困難になって来た。

だんだん見える景色が陽炎のようにユラユラと揺らしながら、落とした木刀を拾わせるように意識を召喚獣に向けると、召喚獣は何か前のめりになって木刀に手を拾おうとした時。

そのままスローモーションを見ているかのようにゆっくりと前のめりに倒れていき、ドサツ と、土のうでも落とした鈍い音と共に明久の召喚獣は地面に倒れたまま動かなくなった。

「あれっ……っ？」と奈月が声を出した直後、

ドサツ と、同じような音が明久の立っていた場所から聞こえ、奈月が召喚獣からそっちに視線を素早く反応させる。

そこにいたのは、召喚獣とシンクロしたかのように同じ体勢で前のめりになって倒れている吉井明久の姿があった。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T



【第八十問】 決勝戦の相手（後書き）

（新しい能力）

Aクラス 咲坂奈月

能力： 『凍結槍【アイスキャンデー】』<sup>㊦</sup>

説明： 5つの魔法陣を基本に敵に刺さった氷槍の数だけ次の攻撃回数が増える。 また防御としても使える。

元ネタ： 5本入りのアイス（当たりつき）

【第八十一問】 干渉能力

B A K A T O T E S T

「……あれ？ どこだここ？」

明久が目を覚ましたところは、見慣れない天井。

独特な薬品のニオイが脳を刺激して眠っていた脳を働かせたところで、自分がベッドで寝ているのに気づき、少し重めの布団をのけ反らせて体を起こした。

「やつと目が覚めたのか」

そのまま顔を横に向けると雄二、秀吉、ムッツリーニがベッドと囲むようにして見守っていた。

「雄二……？ それに皆も、どうしたの？」

「お主が試合中、急に倒れたんじゃないよ」

「つたく、部活紹介戦争の途中で倒れるバカがいるかよ」  
まだ完全に脳が働いていないのか、状況整理が追いついていなかった。

明久は必死で記憶を遡り自分が最後に何を覚えているのか思い出した。

数秒後に、最後の記憶に辿り着くと「そうか僕、あの後倒れたんだ」

雄二は呆れたように、ため息をついてから、

「事情は奈月先輩から聞いた。倒れたのは、お前が物理干渉を持っていたからだだよ」

「物理干渉？」

「物理干渉があると、能力の属性も現実にも干渉するんだよ」

雄二は続ける。

「干渉出来ないヤツと戦っても『物理痛覚【フィードバック】』で痛みしか感じないが、物理干渉を持つ者同士、つまり生徒会とお前みたいなヤツが戦うと冷たいとか熱いとかの『属性痛覚【クオリア】』まで伝わってくる仕組みだ」

召喚フィールドは咲坂奈月の能力が氷だからか気温がどんどん低下していた。

そして明久の召喚獣に何本も氷の槍が刺さり、それがフィードバックして体温を奪っていたらしい。

本来ならそんな現象はありえないのだが、物理干渉を持つ者同士が戦うと、召喚者たちは武器の痛みだけではなく属性の痛みも追加されることになる。

属性能力は自身の能力であろうと干渉するため、奈月が体育館に来た時に防寒具をしていたのは自分の能力干渉対策だったのだろう。

「奈月先輩は明久が物理干渉能力を持っていると知らなかったらしい。まあ当たり前の話だがな」

「幸いな事に、凍傷にもならず軽い睡魔に襲われただけのようじゃ」

「そっか。能力まで干渉する何て今まで知らなかった」

「……今の時点で会長以外、干渉ありの属性能力が使える者はいない」

「オレも属性能力持ちだが、今は生徒会辞めて干渉ないからな」

明久は少し考えてみた。

もし生徒会副会長が坂本雄二だったら、Aクラスとの試験召喚戦争でどうなっていたのかと。

あの時は、翔子の攻撃で先に戦死していたから雄二の爆炎に巻き込まれる事はなかったが、あのまま生きていれば大火傷レベルの属性痛覚がフィードバックしていたのかと思うと真冬に手を背中に入られた感覚になった。

「……あの頃の雄二が不良で良かったよ」

「？　しっかし、お前が倒れて奈月先輩泣きやますの大変だったんだぞ」

「先輩は今どうしてるの？」

雄二はグイッと親指を立てて後ろを差した。

「……あ、」

後ろにあるベッドを見ると、小さな女の子がスウと小さな呼吸をしながら眠っていた。

目にはまだ泣いた後が残っている。

「これでも会長だから、人一倍責任感だけは持ってたんだよ」

「先輩にも悪い事しちゃったな。それに先輩を怒らせちゃったし」

「脳が小さいからすぐに沸点超えるだけだ。本気で怒ってるワケじゃないから気にすんな」

「そう言えば明久よ。雄二に怒る事があったのではないかの」

「そうだ。雄二、秀吉を誘拐したってどうということなのさ」

「バラしたのか秀吉」

「明久が勝てば教えると言う約束をしてもうたからの」

「……ま、別に今さらバレても仕方がねーか」

意外にも雄二はあっさり答えた。

「じゃあ小山さんが雄二を操ってるのも本当なんだね」

「……っ！ 何で明久がそれを知ってた。秀吉にも話した覚えはないぞ」

「ワシの才能で雄二の心を読ませてもらったのじゃ。今さらではあるがスマヌ」

雄二は深くため息をつく。なにせ、秀吉の才能の事は明久以外に話した事がないのだから、まさか秀吉がそんな才能を持っていたなど知るよしもない。

「他のヤツには話してないだろな？」

「うむ。知っておるのはここにおる者だけじゃ」

「ねえ何がどうなってるのか説明してよ」

「わかった。だが絶対に公言しないと約束しろ」

全員は同時に頷いた。

雄二は一呼吸置いてから、

「犯人はオレを操って何かをしようとしている。最初は秀吉を誘拐してFクラスの売上妨害かと思っただが違う。あいつが見てる先は別の事だった」

「別の事？」

「おそらく犯人の目的は四季の妖精や島田や姫路を戦死させる事だ」  
秀吉の誘拐でもFクラスにはかなりのダメージになる。だが、それでも売上を確実に止めるならメイドと調理士を消すのが最も有効になる。

「なら今すぐ桜井さんたちに教えてあげなくちゃ」

「それは無理だな。今、桜井たちは盗撮犯として追いかけている。盗撮犯が言ったところで聞きいれるワケないだろ」

「むしろ戦いを挑まれるのがオチじゃな」

「……根本が邪魔をしなければこんな事にはならなかった」

こんな時に盗撮犯として疑われるなんて。まるでタイミンクを見て根本君が罠を仕掛けて来たみたいじゃないか。

明久は自分に言い聞かせて思い出したかのように、

「まさか……、」

「ああ。何もかも根本恭二と小山友香の計画した作戦だ」

BクラスとCクラスは組んでいたとムツツリー二は言っていた。

「二人はグルだったのか」

「雄二よ、少し聞いてもよいかの」

「何だ？」

「なぜワシを軟禁させずに体育館に置き去りにしたのじゃ？」

確かに秀吉を誘拐したと言うのに、手放しにしておけば簡単に逃げられる。しかも、雄二が犯人だと知っている秀吉は明久たちに説明する可能性は高い。

「オレもそれには疑問を感じていた」

雄二も命令に背く事は不可能なのだから、これも小山の命令によるもの。だが普通なら小山の考えている計画に支障が出るのは明白のはず。

「おそらく秀吉を誘拐させたのはフェイクだ。秀吉が盗撮カメラを仕掛けるようにオレたちが計画した作戦だと理由を作るためのな」  
もし教室に秀吉がいれば、盗撮カメラを仕掛けた証拠がなくなる。そこで小山は雄二を操って秀吉は盗撮カメラを仕掛けるために出て行ったと言うアリバイ工作をしようと考えていたのだろう。

「秀吉を軟禁しなかったのは、秀吉が明久たちに伝える事で内部戦争を起こさせることも出来たからだ」

「つまりワシはオトリと言うワケじゃったのか」

「オレも、最初からそこまで考えてるとは予想出来なかった」

「根本君も考えたね。美少女の秀吉なら女子更衣室に侵入しても何の疑いもないよ」

「ワシは男じゃから大問題じゃぞ」

おそらく仕掛けた本人は小山友香と見て間違いない。彼女が女子更衣室に入ろうと何の疑いもないのだから。

「それで秀吉が仕掛けたカメラを発見したAクラスが僕らを盗撮犯と疑わせて、守りの硬い美波たちを教室から出したって事だね」

よく考えてみれば出来過ぎた話だ。新校舎にある女子更衣室は各学年1つだけしかない。そこにAクラスだけでなく、BクラスもCクラスも他のクラスの女子が入りする可能性があるのに、ピンポイントでAクラスが発見するようになっていた。DとEクラスは新入生歓迎会で着替えることはなかったが、BとCクラスなら発見される可能性があった。つまりそれは、BとCクラスが仕掛けた罠と言う可能性が高いということを事前に知らせていたんだ。  
「ヤツらはAクラスとFクラスの戦力を同時に減らして、戦争が終わったところを狙って来るだろうな」

「それが今、順調に進んでるって事だね」

「ワシらはまさに根本と小山の手の上で転がされておったのじゃな」  
「考えが甘かった。あの時に二人がグルだと気づいてれば操られる前に対策を練れたんだが」

「そう言えば、操られてるのにこんな事僕らに教えても大丈夫なの

？」

「犯人の能力は『命令』。 ようは命令だけは逆らえないがそれ以外に支配されちゃいない」

「なるほどの。 さっきから小山の名前を出さぬのも『命令』なのじゃな」

「ま、オレが言わなくてもお前らにはバレバレなんだが」

「まさか秀吉の能力で正体を知られるとは小山さんも考えてないもんね」

「オレが話せるのはこれぐらいだ。 ムツツリーニ、今の状況はどんな感じだ」

ムツツリーニは持参しているパソコンを開くと学園中に仕掛けられている隠しカメラ（ローアングル）が画面に表示される。

根本の策略で女子更衣室に仕掛けられたカメラは別として、これが見つければ誤解として通じるワケもないだろう。

「…… Aクラス女子、Fクラス女子共に依然学園を搜索中」

パソコンに映っている3つの画面には、桜井と木原、森野と木枯、美波と姫路でペアになり学園を搜索している様子が映っている。

「翔子を倒しても怒りは治まらなかったか」

「霧島を倒した事で逆に怒っておるのじゃな」

「さて、と、根本が次にどう動くかわからねえが、オレたちが先に桜井たちと戦ってBクラスが割り込めねえようにするぞ」

「仲間同士で戦うって事？」

「それだと根本君の目的と同じだと思っただけだ。」

「安心しろ。 別に戦死させるつもりはない」

戦死させないで戦うとなれば、勝負を始めて攻撃しなければ良いのか。

「良かった。 それなら僕でも賛成だよ」

「じゃが桜井たちは特殊な才能の持ち主と聞いておる。 容易な事ではなかるう」

「問題はそこだ。 木原と森野……特に森野の才能は四人の中で一

番厄介だ」

「森野さんの才能って何なの？」

「……降霊術（こうれいじゆつ）」

「こうれいじゆつ？」

「簡単に言えば、『口寄せ』ってヤツだ」

ああ、ゲームとかでもある精霊とか妖精とか召喚獣を呼び出すやつか。

……あれ、……、召喚獣？ いや、まさかね。

「雄二たちは見た事あるの？」

「見た事はないが、森野は不見月神社の巫女さんだからな。たぶん神様とか召喚するんじゃないか」

不見月神社は現在の文月町にある神社。合併して『文月』になる前の『不見月』の名を今もなお受け継ぐ神社は文月町どころか日本中で一番有名な神社とも言われている。

「ワシが以前姉上に聞いた話じゃが、試験召喚戦争の時に廊下におった攻撃部隊でも全く歯が立たなかったそうじゃ」

試験召喚戦争と言えばAクラス戦の時か。あの時は森野さんが先陣を切って僕らをAクラスに届けてくれたっけ。今考えてみれば、あれからAクラスが追って来なかったって事は全滅させたって事だよな。

「Aクラスさえも勝てない才能かあ……」

『降霊術』……、どんな能力か分からないけど、

「神様相手に喧嘩売ったらバチ当たりそう」

「……触らぬ神に祟りなし」

「森野と木枯の二人に出会った場合、最悪逃げることを考えておけ」「じゃが妨害を妨害する方法は可能として、根本と小山はどうするつもりじゃ」

「四季の妖精を確保すれば、それでヤツらの目的も狂ってくるはずだ」

雄二はポケットから取り出した携帯の画面を見て、



「もう少しで決勝戦が始まる。後の事はお前らに任せるが大丈夫だな」

明久は戦死していないが、途中退場となった事で敗戦扱いになって残った雄二が決勝戦に参加する。

「こっちは強力な戦力が集まっているんだから大丈夫だよ」

「うむ。ワシは召喚獣が使いぬが騙し打ちなら出来るかもしれん」

「……多少の戦力なら残ってる」

「よし、作戦は四季の妖精及び島田と姫路との戦争による妨害対策だ。オレは決勝戦が終わってからすぐに教室に戻る」

「了解じゃ」

「……（コクリ）」

「んじゃ、行くわ」

雄二はスツと立ち上がり、後ろですやすやと眠っている少女に振り返り、

「起きる奈月先輩。そろそろ時間だぞ」

「……………」

肩をゆさゆさと揺らしながら起こしてみるが少女は夢の世界に鍵をかけたかのように帰って来ない。

「つたく、こんなに寝て何で身長伸びねーんだよ」

雄二は眠ったままの奈月を自分の大きな背中に乗せた。

「……、あ、あのさ雄二。雄二と先輩ってどういう関係なの？」

「はあ?! そんなの聞いてどうすんだよ」

「……雄二がロリコンだから危ないって言ったら怒ったから」

「まて明久。先に何でオレがロリコンになってるのか説明しろ」

「雄二が小さい女の子が好きだからだよ」

「あのなあ……………」

「だってそうじゃないか! 現にそうやって先輩に対して優しくしてるじゃない」

「バカバカしい。茶でも飲んで寝てろ」

あしらうように雄二は保健室の扉に向かいながら、

「腕輪の事はオレに任せろ。 そっちは妨害に備えておけ」

「うむ。 任せろのじゃ」

「じゃあな」と片手をヒラヒラ振って雄二は保健室を後にした。

「何で雄二怒ってたのかな？」

「明久には分からぬかったかの？ あの二人は、まるで親子のようにみえるじゃろ」

「……大は小を小は大を。 互いが助け合ってバランスが取れている」

「親子……、」

秀吉の言葉にグチャグチャになっていたパズルの形が分かったよう気がした。

坂本雄二と咲坂奈月は付き合っているワケでもないのに、決して切れない繋がりがある。

それはきつと彼氏彼女と言うよりも親子関係に近い。

「……そっか。 だから奈月先輩は、」

父親をバカにされた事を怒っていたんだ、と。

「ゴメンねユウジ」

体育館に行く途中で目を覚ました少女は、ちょこちょこと言う足取りで雄二の横についていく。

「ん、何がだ」

「ユウジの友達傷つけちゃった事」

「はあ……まあそんな事で落ち込んでんのか。 ちっさいんだから下向くと今まで以上にもっとチビになるぞ」

「これが標準だよ！ 皆が大きいだけだっただけ」

「へいへい。 あんま気にするとまた背が小さくなるぞ」

「むっ。 またそうやって」

ポンツ、と雄二が奈月の頭に手を乗せる。

「あんま考え過ぎんなよ。 あんたはそうやって怒ったり笑ったりしとけば良いんだよ」

雄二は奈月の前を振り返ると、さっき買ったココアの缶を下から投げた。

「わっ、と、と」

「それ飲んでさっさと決勝戦始めるぞ。 一年のガキが楽しみにしてんだからよ」

「あ、待ってよデカユウジ！」

少女の小さな両手で持つ缶は、

「……………」、「少女は小さく微笑み」…………えへへ、あつたかい」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第八十一問】 干渉能力（後書き）

（物理痛覚と属性痛覚ってなに？）

物理痛覚【フィードバック】

明久 VS 雄二 明久は痛みだけ伝わる。

属性痛覚【クオリア】

明久 VS 奈月 両者は痛みの他に、熱い・冷たい・痺れるなどが追加される。

属性痛覚【クオリア】 その2

奈月 VS 雄二 奈月は痛みの他に奈月自身の能力で冷たさを感じる。

簡単な話、RPGの戦闘と考えるとただければOKです。

【第八十二問】 恋愛戦争

B A K A T O T E S T

「いったいどこに逃げたのよ坂本君たち」

「追い詰められたネズミはどこまでも逃げると思うよ」

桜井と木原は盗撮犯となつている雄二と明久とムツツリー二を追つて学園を捜し回つている。

ここは文月学園の西にある芝生の広場から少し北に向かつた植林地帯。通称デートロードと言われているアスファルトで作られた真つ直ぐな道の両脇に5mほどの針葉樹のような広葉樹の木が2m間隔で植えられている。

なんでもここですれ違つた男女は交際が上手くいくなどと、この鳥が噂を運んで来たのか今学園中で話題になつている場所。

普段ここは静かな場所で、逃げるならこの道を通る可能性があると思つた二人は左右を分担して捜しているところ。

木々のせいで日光が届きにくく少し暗いのが怖いのか、桜井は木原の右腕をガツシリと固定しているため進みにくそうに歩く。

「でも何でバレるような仕掛けをしたんだろね。明久たちなら絶対見つからない場所に仕掛けるはずなのに」

「仕掛けること自体が犯罪なのよ紅葉」

「男子なんだから女子の着替えに興味があるのは仕方がないよお。」

恵も大目に見てあげたらいいのに」

「法律で決められてるんだからダメな事はダメ」

「さすが将来は弁護士。だけど悪戯でそんなに騒ぎになるかな」

「悪戯目的だとしても犯罪になる事は許されないのよ」

「でも、真実つて言うのは目の前に見えるのが全てとは限らない

んだよねえ」と突然足を止めた。

「どういう意味？」

釣られて桜井もその場で足を止める。

「た・と・え・ば、試験召喚獣召喚【サモン】」

木原の目の前に幾何学的な魔方陣が展開された。

「見えないところで、あたしたちが狙われてるってこーと」

『龍に焼き払われた者』と書かれたプレートがガラスのように砕けてそこから木原紅葉をデフォルメした姿と、西洋に登場すると翼を生やしたドラゴンの姿を合わせた召喚獣が登場した。

見た目は白色のドラゴンで、背中には翼があり頭に二本の角が先端の方で、くねっと曲がっているよくある典型的な西洋龍。

もちろん翼は飾りではなく召喚獣はバサバサと重量感ある翼を羽ばたかせて滞空している。龍型召喚獣は本来設定されていない召喚獣で、木原紅葉専用の召喚獣になっている。

龍型召喚獣は小さい姿でデフォルメされた姿は可愛らしい動物に見えるが、それとは裏腹に迫力のある重低音で雄叫びを出す。

と、木々の間に隠れていたのだろうかゾロゾロと人が集まって来た。

集まったのは1人2人どころではなく、数はざっと40、50人はいらるだろうか。

1人2人なら偶然とわかる。だがこの数で偶然など有り得ない。まるでそこに来る人間を待ち構えているかのように。

「あら、女の子二人にその数でナンパかしら？」

「そう言った事は冗談でもやめて貰えますか」

集団の中から、ひよろつとした体型の1人の男が腕を後ろに組んで桜井たちの前に現れた。

声に張りがなく、喋る言葉全てが一定の音程なのが冷静な男と言っ印象を感じる。

「どうして『風紀委員【レギオン】』が私たちの邪魔をするの」

「我々はCクラスとしてFクラスに妨害を仕掛けようと思っまして

ね」

桜井たちの前に現れた生徒は全員が男子生徒と言うところに驚かないのは、Cクラスは代表である小山友香を除いて男子生徒の集まりだと言うのは学園で常識だから。

Cクラスは全員が『風紀委員【レジオン】』に配属しているため、言わば不純異性交遊監視クラスと言ったところ。男子生徒がこれだけいても何も動じる事はない。

「ねえ恵。意外とこの人たちが盗撮の犯人だったりしてね」

いつものユルイ口調ではなく、少し真面目な表情で話す木原。

「なにバカな事言ってるの。Cクラスって私より硬物の人たちの集まりよ」

「こう言う真面目な人の方が、意外と規格外な行動とるもんだよ」桜井は男子生徒に視線を移した。

改めて見てみると、真面目な男だが桜井はこの集団、いやこの男には前々から気に食わない事があった。

ここにいるのもそうだ。彼らはこの場所がカップルの出来る場所だと噂が立つてから監視するようになり、出会いを求めて集まる者を虫のようにあしらっている。

学園側から見れば仕事熱心な集団だが、恋愛を楽しみたい学生から見れば邪魔でしかない存在。それが桜井も気に食わないらしい。「こんな時でも真面目に仕事してるのね。ちよっとは楽しんだらどうかしら」

「仕方ありませんよ。我々は代表の命令には逆らえませんが。とは言いましても、我々はあなたたち二人が規則に反する者として排除するつもりでしたが」

「前にも言ったけど、私たちは男子とそんな関係になってないわよ」「ワタシが言いたいのは、あなたたち二人の関係が不純だと言っているんですよ」

「女同士で仲良くしちゃダメだって言うの?」

「女性に抱きつくのが仲良くですか? 他人から見れば女性同士が

付き合っているように見えるのですが？」

「こんなの今時の女の子には当たり前よ」

少し嫌みな言い方で続ける。

「あ、そっか。女子と縁のないあなたたちにはわからないわよね」  
「学園において恋愛は学力に必要ありませんから」

男子生徒は相変わらず平均的な音程で返事をする。それが逆に桜井の頭にカチンと来る言い方だったのか、

「それって負け犬の遠吠えってヤツじゃない？ モテないからって他の人達の恋愛を邪魔して楽しいのかしら？」

いつも真面目で優しい桜井恵とは別人のように男子生徒を煽るような言い方になっている。よほど、この男子生徒が嫌いなのだろう。

「学園を乱すような者たちが健全な者に刺激を与える方が邪魔だとワタシは思いますが」

「その言葉そのまま返させてもらうから。あなたたちがいると普通の恋愛も出来ないって女子たちが嫌がってるわよ」

男子生徒は頭を抱える。

「……ああ言えばこう言う。わからない人ですね。単刀直入に言いましょうか」

「奇遇ね。私も言いたい事があったの」

「試験召喚獣召喚【サモン】」「」

男子生徒と桜井の目の前に幾何学的な魔方陣が展開される。

「……試験召喚獣召喚【サモン】」「……」  
後ろにいた他の男子生徒も次々に召喚獣を召喚していく。

桜井の前方に展開された幾何学的な魔方陣からは『染まらないカラス』と書かれたガラスのプレートが砕けて、桜井のデフォルメ召喚獣が出現する。

見た目は桜井の姿だがその背中にはカラスを象徴させる黒い羽根



を生やしている。

墮天使の姿を想像すると一番しっくりくる。

だが実際に召喚獣のテーマは違う。

桜井の将来の夢は弁護士。己の主張を他者の言葉で染められな  
いと言う意味から黒いカラスをイメージしている。

時に裁判官が必ず黒服を着ているのは何色にも染まらないと言う  
意味がある。桜井の召喚獣もその意味が込められているのだろう。

『現代国語 Cクラス

海道祐平 198点』

『現代国語 Cクラス

男子生徒 他29名』

VS

『現代国語 Fクラス

桜井恵 312点』

『現代国語 Fクラス

木原紅葉 54点』

「……312点。思った通りだ」

男子生徒は何が面白いのか口元を釣りあげた。

「やはり、あなたは点数操作でFクラスに振り分けていましたか」

「それがどうかした？」

「あなたも坂本雄二と同じくAクラスでも潰すつもりでしょうか？」

「そんなのあなたに関係ないでしょ」

「まあ理由は何でもいいです」

後ろに組んだ手を解いた男子生徒は右手を前に、つまり桜井たちに向けて、

「いつも通り二人一組になって左右に別れてください」

「……おおおおおおおっ！！」「」

ひよろつとした男の言葉に周りの男子生徒たちが声を荒げて召喚獣が突撃した。

「数で勝とうってつもりね」

距離は10m。まるでヒツジの大移動のように召喚獣たちが近づいて来る中、

「はいはい。ここからは、あたし木原紅葉が大活躍するんだよ」  
木原はパチンッと指を鳴らすと、マジックのようにどこからともなく分厚い本がポンツと木原の目の前に浮いて出て来た。

タイトルも何も書かれていない本は、洗ったばかりのTシャツみたいに真っ白な表紙で、空中で浮遊している本に両手を伸ばすと召喚獣を召喚する時に現れる幾何学的な魔方陣の球体版が本を包み込んだ。

球体の中で本が勝手に開くと1ページに1つの魔方陣が書いてある。これは幾何学的な魔方陣と言うよりも円形に星の形が書かれている魔法の術式に近い魔方陣が赤く突然光ったと思えば、連動するかのように空中で飛ばたいている木原紅葉の召喚獣の足元に『火』と書かれた魔方陣が展開されると同時に全身発火現象が起こった。

龍型召喚獣の鱗が金属を高温で溶かした時のように、神々しい光で真っ赤な鱗へと変化すると、何もかも噛み砕きそうなドラゴンは口元を大きく開けた。

次の瞬間、大きく吸い込みながらドラゴンは首を持ち上げ視線を天に向けてと魔方陣が展開され轟と鳴き叫ぶと大量の火炎弾がミサイルのように飛び出した。

数は指では数えきれない。とにかく魔方陣からはロケット花火

のように次々と吐き出され、自動追尾ではないため狙いを定めない火炎弾は放物線を描きながら集団で固まっているCクラスの召喚獣のいる地面へと激突した。

ズドドドン、と言つまさにミサイルが落ちたような轟音によつて辺り一面を煙で覆った。

「にははは、敵さん早く逃げないと死んじゃうぞお」

「紅葉……あなた、いきなり過ぎるわよ」

「だって、こうしたら敵さん減るでしょ」

「敵さん怖がつて、腰抜かしてるじゃないの」

指差す方に木原が視線を動かす。

そこには地面に両手と尻餅をついて、腰を抜かしている男子生徒があちこちいる。それもそうだ。火炎弾など落とされて平常心など保てるワケがない。

あ、そつか。と木原は放心状態のCクラスに向かつて少し大きな声で手を振りながら、

「敵さん怖くないよお。今のは召喚獣にしか効果がないただの映像だからあ」

「バカな……今のは召喚獣の能力」

あまりに一瞬の出来事で男子生徒は考える事すら、たつた今できるようになったところだ。分かったところでようやく全身の震えが和らいだ。ほんの少しだけ。

冷静な男も心臓はバクバクと太鼓を鳴らしているはずだ。

「『三獣血統【ケルベロス】』って知ってる？　これがあたしの才能なんだよお」

「ケルベロス？　あのギリシャ神話に出て来る『三属性の番犬』ですか」

「そ。あたし木原紅葉は何と、ケルベロスを呼べる魔法が使えちやう召喚術師なんだよねえ」

木原紅葉の才能、『三獣血統【ケルベロス】』。彼女は魔法と言つが実際に木原紅葉が魔法使いと言つワケではなく、言つなれば

召喚獣が使っている能力を人間である木原紅葉が使用できる才能。

しかも召喚獣ではなく木原紅葉本人が使う才能のため、召喚獣の点数が400点以上なくとも使用可能。

もちろん、ただの映像のため人間に当たったとしても痛みを感じる事はなく、炎で焼かれようが電撃で痺れさせられても人間には無害でダメージがあるのは召喚獣だけ。

紅葉にも物理干涉能力がないため痛覚運動や属性痛覚は起こらない。あくまで木原が召喚獣の能力を使えるだけであって、召喚獣同士の戦いと変わらないと言うこと。

「メチャクチャだ……まさか代表と同じ『異体生』だったとは」  
男子生徒は腰を抜かしたまま少し震えた声を出す。

ち、ち、ち、と木原は人差し指を振って得意げな顔をしながら、  
「あたしは『特体生』。ちよつとだけ特別なんだよね」

「特体生だと……、」  
人間の才能でありながら人間離れた能力の所有者を『異体質生徒』と呼ばれている。

これは島田美波や木下秀吉などが所有している才能の事を言い、  
使い方によっては危険性のある才能は『異体生』に指定される。

木原紅葉の場合はさらに危険性が高くなり、人間離れを超えた才能を持つ者を『特異体質生徒』または『特体生』と呼ばれている。

この男が『異体生』で驚くのは、男子生徒は『異質生徒』、通称『異生』と言う『異体生』よりも危険性が低い一般的な才能所有者のためだろう。

どつりでメチャクチャなワケだ、と男子生徒は少し驚くが木原の説明を聞いて納得出来たのだが、足の震えがまだ止まらず、生まれたばかりの仔馬のように立ち上がる。

「さ、作戦変更します。残っている者は今より木原紅葉に集中攻撃」

「……お、……おおおおおっ！」「」

木原の点数が低いため威力自体はそれほど強くなかったのか、半

分ほどの召喚獣は生き残っていた。

「あれ？ 敵さん逃げるところかやる気になっちゃった」

「責任取りなさいよ紅葉」と呆れた様子で桜井は頭を抱える。

「はぁーい」

まるで子どものように手を高く上げ、球体幾何学魔方陣の本がさつきと同じように、今度は青色に魔方陣が光りCクラスの空中に巨大な魔方陣が展開された。

男子生徒たちは日の光りを浴びようとするヒマワリのように一斉に同じ方向に顔を向けると、そこには大きさは直径20mほどの魔方陣に古代文字や星座、方位、漢字が浮かび上がっていく。

「何か来ます！ 全員武器を頭上に構えてください！」

見た目は召喚獣を召喚するような幾何学的な魔方陣は青色に強く光った瞬間、中心に『水』の文字が浮かびあがると、

「雨……？」

展開された魔方陣からは地面に跳ねて靴がずぶ濡れになる大粒の雨が周りの音をかき消すほどの勢いでCクラスに叩きつける。

雨など降らしてどうするつもりだ、と男子生徒が考えた。

その瞬間だった。

重力によつて降っている大粒の雨が飴細工のように伸ばされて形が変化していくと、槍の形をした水が重力に逆らうことなく無数に降ってきた。

「……うあああああつっ！！」「……」

槍はもちろん召喚獣と同じくデジタル映像なのだから人間に刺さるワケでもないのに、Cクラスの生徒たちは逃げ惑っている。いや、例えわかつていたとしても人間の本能で反射的に危険から避けようと脳が指令を出してしまうのだろう。

逃げる事に必死なCクラスたちは召喚獣に意識する事を忘れて、まったく動かない召喚獣の的は木原の出した槍が次々と召喚獣たちに突き刺さって戦死していく。

そして数秒後、槍の雨は巨大な魔方陣の消滅と共に通り雨の如く

過ぎ去った。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第八十二問】 恋愛戦争（後書き）

〈新しい才能〉

Fクラス 木原紅葉

才能： 『三獣血統【ケルベロス】』

説明： 三属性の能力を召喚獣に与える。 現在は『火』と『水』が確認されている。

〈才能所有者の分類方法〉

危険度『低』： 『異質生徒』または『異生』

一般的な人間が所有している才能。 ほぼ無力に近い。

危険度『中』： 『異体質生徒』または『異体生』

一般常識では考えられない才能を所有している者。

危険度『大』： 『特異体質生徒』または『特体生』

非現実の領域に踏み込んでいる者。





木原が桜井の腕に抱き寄った。

「万能な才能も、ついに人知を超えた存在になったというワケですか。これは面白い話だ」

「才能が万能だと思わないで。強すぎる薬には必ず副作用があるの」

「それは傑作だ」

男子生徒は微笑しながら、

「本来、才能とは始犬召喚獣【大神】によって生まれた者の全てに平等に与えられる」

男子生徒はまだ笑う。嬉しそうに最高に人をイラつかせるような顔で、

「あなたは欲を出して神から失樂園の罰が与えられたんですね」

「あたしは望んで才能を手に入れたワケじゃない。望んで『男性恐怖症』になつたり何かしない！」

『特体生』は『異体生』よりも才能が優れているが、『特体生』の者には才能の副作用が存在する。

坂本雄二の『完全攻略【クリアハンドレッド】』が暴走した時も副作用に近い。雄二の場合は『特体生』に近い『異体生』と言ったところ。才能自体が暴走するのが原因で起こる副作用。

だが木原紅葉の才能は違う。それ以上の副作用が彼女の心を崩していた。

「『男性恐怖症』？ つはは、そんなバカな話を聞き入れると？」

「別に信じなくても良いよ。だけど、これだけは覚えておいて」

桜井は抱き寄せる木原の手をギュツと握った。

「世の中には女の子同士で友達以上の関係になりたい人だっているかもしれない。でも、あたしと恵の関係はそんな生優しいものじゃないよ」

「……、なるほど。あなた方には、とても辛い過去があったのですね」

さっきまで人をバカにして笑っていた男が一瞬で平常心に戻った。

「え？……、」

意外過ぎる。あの男が同情するような人間とは思えない。

そう。だからこそこの男は、

「冗談にしては面白い内容でしたよ」

感情を入れない言葉が平気で言える。

「しかし、残念ながらその話には矛盾点がありますね。男が苦手なら、なぜワタシと話が出来たのでしょうか」

「私が『寡黙迷彩【サイレントキラー】』で紅葉の『男性恐怖症』を消してるからよ」

『寡黙迷彩【サイレントキラー】』は姿を消せると言っていたが、実際には『姿を消す才能』ではなく『気配を消す才能』で、相手が姿に気づかないため姿を消しているように見える。それは桜井恵の才能の本質は『認識』とも言える。人も動物も物体もそこに存在している認識によって他人に気付いてもらえる。

そこで桜井は考えた。木原紅葉の『男性恐怖症』の原因ともなる『男性』と言う認識を才能で消して相手を『人間』と認識するようになった。

「あたしは男子に恋愛感情が持てなくなったけど、恵が助けてくれたおかげで男子とも話せるようになった」

「……、異性に興味を持てなくなった……、？」

男子生徒は表情を変えない。

「ほう、」

いや、少しずつ口元を釣り上げている。

「それは我々にとって最高の人材ではありませんか。木原紅葉さんには是非『風紀委員【レギオン】』に入っていたいただきたいですね」

「あなたね……、桜井は深いため息をついて「もういい。私、やっぱりあなたたち『風紀委員【レギオン】』が大っ嫌い」

「ええ結構ですよ。嫌われるのは我々の特権ですから」

「……、！」

世の中には、言葉、言葉が人をイラつかせる人間がいる。それ

は桜井たちの目の前にいる男子生徒もそうだ。優越感に浸っているヤツほど他人を見下すような言葉しか言えない。

だからこそ普段は穏やかな桜井恵も、

「恵、怒ったら負けだよ」

「っ……！」

思わず握っていた木原の手を強く握りしめていた。

「言葉に踊らされたらダメ。向こうは妨害戦争であたしたちをここで止めようとしてるんだよ」

「おや、バれてしまいましたか。演技と言うのは、なかなか難しいものですね」

召喚獣が全員戦死した以上、妨害戦争は出来なくなった。それでもCクラスは妨害を続ける方法として桜井たちを逃がさない方法に変えて来たらしい。

それが人をバカにする言葉で寄せ付ける方法。

だが桜井は疑問に思った。

「ちよつと待つてよ。Cクラスはもう模擬店は出来ないんだから妨害の意味ないでしょ」

「ええ。別にCクラスは最初から売上なんか関係ありませんから」  
「？」

「模擬店にしたのは四季の妖精を妨害するため。我々はそのために参加したまでです」

「それって、あなたたちにメリットないじゃない」

確かに他のクラスに妨害するために参加しても何も利益など生まない。

妨害はあくまで売上変化に伴う企画なのだから、妨害だけを目的にしても意味はない。

「これは代表の命令。我々『風紀委員【レギオン】』はそれに反することは出来ない。それが彼女の『猟犬愛好【ラブリードッグ】』の怖いところですよ」

言葉では妨害戦争と言えるが、実際にやっている事は誘拐に近い。

だが小山友香の才能『獵犬愛好【ラブリードッグ】』は最大50名の男を支配する能力。

Cクラスは小山友香を除いた49名。最後の1人が坂本雄二と言う事になる。

つまりここにいる全員は小山の命令に逆らえなくなっている。

「小山さんは何が目的なの？」

「先ほどから申しているでしょう。あなた方、四季の妖精を潰すことですよ。そのためにワザワザ盗撮カメラを仕掛けて外におびき寄せたんですから」

「つ……！？まさか紅葉が言ったのは本当だったってこと」

「だから言ったでしょ。ああ言う人ほど怪しいって」

桜井たちの行く手には40人ほどの壁が立ち塞がる。

「ここまで教えてあげたんです。さて、そろそろ我々の計画を遂行させていただきますよ」

命令に忠実に従わなければならない彼らは桜井たちを止めなければならぬ。例え召喚獣が倒されても桜井たち本人の動きを止める事は可能なのだから。

「そこを通してって言ったら？」

「無理やりにも押さえつけます」

「セクハラで訴えるわよ」

「訴えるなら代表にしてくださいか。今の我々は命令に従っているだけです。もし逃げたければ殴っても構いませんよ」

「私、傷害罪で捕まるの嫌なんだけど」

「おい、その貧弱野郎！桜井さんに殴ってもらうだ？そいつは聞き捨てならねエ」

桜井たちの後ろから張りのある男の声が聞こえて来た。

振り返るとそこには一人の男子生徒が腕を組んで仁王立ちしている。

その後ろからは、ゾロゾロとまた男子生徒だけが20人ほど歩いて来る。

「……また面倒な人が出てきてくれましたね。親衛隊が何の用ですか」

「桜井さんの手を汚すなど、この俺が黙っているだけでも思ったのかクソレギオンどもが」

「あなたは……Dクラスの平賀君」

白装束に身を包んで背中に『桜井命』と大きな刺繍が入れているのはDクラス代表、平賀源二。彼らはDクラスで結成した『桜井親衛隊』と言うグループで桜井恵を女神として崇めている。

だが当の本人は、そんなグループがあるなど知るワケもない。

平賀は桜井に目を向けると、

「さ、ささささ、桜井さん」声を裏返して「か、か感動の再開は後にしましょう」

古くなったロボットのようにかくかくとした動きで顔をCクラスの方に向けると人が変わ<sup>やっ</sup>つたように、

「ここは俺たちが外道<sup>やっ</sup>らを押さええます。今すぐ逃げて下さい」

平賀源二は極度の緊張体質。いつもなら普通なのだが、桜井恵を見ると緊張して声が裏返る。

「Dクラスは妨害戦争に参加してないはずでしょ？ どうしてあなたたちが」

「まあまあ良いじゃん恵。この人たちが助けしてくれるなら、お言葉に甘口だよ」

「う、うん。えっと、それじゃあお願いね」

平賀は桜井たちが背中を向けて走ると同時に、振り返って桜井の姿を見えなくなるまで瞬き一つしなかった。

「やりましたね平賀隊長！ 今月で3回目の会話に成功したじゃないですか」

「ああ嬉しくて前が見えねエ。今日の帰りに鯛でも買って帰るか」

「ふんつ。キサマには腐った鯛がお似合いだな」

今度はDクラスとは反対方向からゾロゾロと男子生徒の集団がやって来た。

「ちつ……『FFF団』か。お前たちは招待した覚えはないんだが」

「それはこっちのセリフだ。ここは我々FFF団の監視下にある。無断で侵入するとは良い度胸だな」

黒装束に身を包んだ男はFFF団会長、Fクラスの須川亮。

『桜井親衛隊』と『FFF団』と『風紀委員【レギオン】』は学園の三大勢力とも言われライバル関係にある。

「ふっ、女にモテナイ野郎の集まりが何を監視してるって？ 覗きの間違いだろ」

「モテナイのはキサマらの方だろ。何が『桜井親衛隊』だ。ストーカーと間違ってるんじゃないか」

「ほお……親衛隊を侮辱するとは良い度胸だな。この際、どちらが上なのか、ここで白黒つけようじゃないか」

「名案だな。我々、FFF団の名において親衛隊など潰してくれらるわ」

「実力の違いを見せてやろう」

「お、お前たち……我々『風紀委員【レギオン】』に歯向かうつもりですか」

「うるせエ！！ この奴隷貧弱野郎がア！！」

B A K A T O T E S T

【第八十三問】 才能の副作用（後書き）

く明久のつぶやきく  
秀吉に看病されて幸せなう。

【第八十四問】 学年の秀才 VS 学園の天才

B A K A T O T E S T

文月学園の体育館は夏を先取りしたかのように熱気で室温が上昇している。

中心部に作られた決勝戦用のステージに坂本雄二と咲坂奈月が向かい合って、その中間に二年Aクラスの担任である高橋先生がマイクを持って立っていた。

「教科は先ほどと同じく総合教科となりますので上位腕輪が使えるのでしたら使用しても構いません」

上位腕輪は1教科で700点以上を獲得した者にだけ、学園長から能力の使用と能力名を教えてもらえる。

先ほど明久が使用出来なかったのは、明久は1教科で700点を取った事がないため。

「説明は以上です。 それでは、お互い召喚獣の許可を出してください」

高橋先生がステージから降りると同時に、

「試験召喚獣召喚【サモン】」

二人は声を揃えて召喚許可を出すと幾何学的な魔方陣が二人の目の前に現れる。

雄二のところには『群れを狩る狼』と書かれたプレート。

奈月のところには『群れを護る狼』と書かれたプレート。

また同時にガラスのように砕けると、シンクロしたように互いの召喚獣が姿を足元から現していく。

雄二の召喚獣は特攻服に銀色の槍。

奈月の召喚獣は防寒服に銀色の槍。



こうして見ると、二人の召喚獣は双子のように似ている。

『総合教科 Aクラス  
生徒会 咲坂奈月 5846点』

V S

『総合教科 Fクラス  
帰宅部 坂本雄二 4137点』

雄二はもともと翔子よりも成績が良いが、才能『完全攻略』【クリアハンドレッド】』の効果は翔子を守るために使っているため二年になってから学力が以前よりも低下して、ずっと翔子に負けている。もちろん、それで才能が二年当初のように暴発する恐れはない。

今は翔子を守る意外超える対象になっっていないから。

「そっぴや、奈月先輩と戦うのって始めてだったな」

「デカユウジは成績の事しか頭に入ってなくて召喚獣に興味持ってなかったもんね」

「……さあ昔のことは覚えてねえ」

「じゃあどれだけ強くなったのか、先輩として見てあげるね」

「お互い手探りなしの本気モードで行こうじゃねーか」

「OK。一瞬で負けたりしちゃダメだからね」

「言われなくとも」雄二の召喚獣が地面を蹴って「分かってるっつーの！」

距離を詰めながら雄二の召喚獣の持っている槍全体が突然アルコールに引火したかのように炎を吹き始めた。

「『炎槍武』【メゾフォルテ】』」

槍を後ろに引つ張って力を加えた槍は奈月の召喚獣に向かって突き刺すように腕を伸ばした。槍そのものは召喚獣の手に持ったままで、槍の形をした炎が轟と音を立てながらレーザー光線のように飛び出した。

「『凍結槍【アイスクャンデー】』」

奈月の召喚獣から魔方阵が発動する。

奈月の召喚獣の前に現れた5個の魔方阵から弾丸のように氷の槍が弾き飛ばされ、その内の1本が炎の槍と激突した。

ジュウウウウ！ と焼け石に水をかけたような音と一緒に水蒸気となった氷が召喚獣たちの周りを白い煙で包み、まるで霧のように召喚フィールド内の視界が悪くなっていく。

だが雄二はそのまま奈月の召喚獣に正面から走った。

「『炎槍武【メゾフォルテ】』」

赤く燃える炎の槍の熱が水蒸気を吹き飛ばして、そのまま高く飛んだ召喚獣は一回転をして威力を上げて一気に急降下した。

「『凍結槍【アイスクャンデー】』」

奈月の目の前で50cmほどの召喚獣より大きめの魔方阵から氷の盾が発動。そこに燃え上がる槍が激突すると、一瞬にして水蒸気となる。

「なっ……?!」

常識的に考えれば、そうなるはずだった。今度は水蒸気にはならず、まるでロウソクの火を吹き消したかのように一瞬で炎槍から火が消えた。

だからこそ坂本雄二は困惑した。

さっきまでメラメラと燃えていた槍が氷の壁に衝突したと同時に炎が消えたのだから。

消されたと考えるべきなのか。まるでマジックのように槍だけが寂しく残る。

「『炎槍武【メゾフォルテ】』」

雄二は能力の発動を叫ぶが、何も起こらない。

ゲームのようにMPがなくなったワケでもないのに故障したかのように何の反応も見せない。

「『炎槍武【メゾフォルテ】』。『炎槍武【メゾフォルテ】』……くそっ！」

「炎が氷を溶かすって思ってるでしょ？ その常識は、わたしに通用しないよ」

「っ……！」

何かが来る。そう咄嗟に判断した雄二は召喚獣との間合いを開けようと後方に下がると同時に奈月の召喚獣の目の前に魔法陣が展開され、5つの氷槍が高速回転しながら飛んできた。

「ちっ、またそれか」

試しにもう一度雄二は能力を発動すると、今度はちゃんと発動した。原因を考える暇もない雄二は炎で槍を包みこませて、目の前に来た2本の槍をまとめて振り払った。だが、氷槍に触れた瞬間炎が掃除機で吸われるように槍から引き離されて氷の中に取り込まれ溶かせないまま2本の氷槍が召喚獣に突き刺さる。

「それが、奈月先輩の能力なのか」

「わたしの常識では炎は氷に吸収される」

「むちゃくちゃだな。熱移動にも常識があるだろうっての」

さすが『常識崩し【ゲシュタルト】』なんて言われるだけあるな。だが坂本雄二は口元を釣りあげた。雄二にとって奈月の常識離れた発想など何度も体験して来ているのだから。

だからこそ、次の切り替えは早かった。

「だったら、」雄二の召喚獣は両手を前に伸ばした。

「『銀河自爆【ニユートリノ】』」

直後、召喚獣の伸ばす手の先からスーパーボールほどの大きさの『黒い球体』が何個も集まってバランスボールほどにまで膨れ上がっていく。

「『炎』が『氷』に吸収されるのは常識だとしてよ、」

球体の膨張に比例しながら、まるで映画館で上映が始まる時のよ

うに体育館の明るさが少し暗くなっていくと、召喚獣に刺さった氷槍が膨張した熱エネルギーによって溶かした飴のようにドロドロと溶けて水になった瞬間に油に水をまいた時の音と共に蒸発していく。「『爆炎』ならどうだろうな？」

「んとね。それは吸収できないかな」

「……へっ。オレの勝ちだな奈月先輩」

膨大な光で吸収しきれなくなった、黒い球体は一瞬にして高熱の塊となり逃げ場を失った炎の風が球体を破壊して大爆発を起こした。ズドン！ とミサイルでも爆発したかのような音と大量の煙が視界を奪う。

いくら奈月の炎を吸収する氷でも、これは防ぎようのない。

「どうだ奈月先輩。オレも強くなっただろ」

雄二は炎で見えないが、すでに勝ち誇った目をしていた。

「確かに『氷』は『炎』に勝てるけど『爆炎』には負ける」

煙の向こうから、その声が聞こえるまでは勝てたと思っていた。

「でも『絶対零度』に『爆炎』は勝てないよ。これがわたしの常識」

雄二の召喚獣の『銀河自爆【ニュートリノ】』によって、召喚フィールドが炎に包まれていたのはほんの一瞬だけだった。

奈月の声が聞こえた途端、炎が収縮するののように煙が晴れていく。

「そんな………」

奈月の召喚獣の目の前にはバランスボールほどの『白い球体』があった。

そこに雄二の召喚獣の炎が掃除機のようにどんどん吸収されている光景。

「『氷河来襲【アキシオン】』」

「お、おい。それってまさか、オレと同じ………暗黒物質能力」「デカユウジの能力は『光』を吸収して威力を増幅させる能力だよね。わたしのは『熱』を吸収して威力を増幅させる能力なんだよ」

「熱……？」

「『氷河来襲【アキシオン】』は熱が高いほど威力が上昇する能力」  
雄二の能力はまさに頂点と言えるほどの超高温熱量。

「っ……………！」

だからこそ、奈月が次に言いたい事がわかった。

「この勝負、わたしの勝ちだよ」

「くそっ……………くそオオオオオオオオオオ！！」

『総合教科 Aクラス

生徒会 咲坂奈月 4356点』

VS

『総合教科 Fクラス

帰宅部 坂本雄二 1264点』

決勝戦の終わりは少し味気なかった。

奈月は最後の攻撃で雄二の召喚獣にトドメを指さなかったのは、雄二の超高温熱量を吸収して増幅した奈月の『氷河来襲【アキシオン】』を発動させれば属性痛覚で奈月は凍傷になる可能性もあったから。

もし発動していれば騒ぎになっていたかもしれないのを考えた上

で奈月は味気ない終わり方を選んだ。

花火工場でも爆発したかのような大歓声の中、優勝部活である生徒会の咲坂奈月が体育館のステージに上がり、優勝賞品である『代理召喚型腕輪 起動【アウェイクン】』を受け取り、部活紹介戦争は無事に幕を閉じた。

体育館の隅で表彰式を観ていた雄二のところに優勝商品の腕輪と賞状とトロフィーを小さな両手で持って前が見えないのかフラフラと不安定な動きでやってきた。

「優勝おめでとう奈月先輩。 やっぱ奈月先輩には勝てねーな」

「はい。 これあげるね」

奈月の小さな右手には、何としても手に入れたかった腕輪。

「なっ!?!? おいおい、せっかくの優勝賞品なんだぞ」

「わたしは生徒会の仕事で参加したからね。 それに欲しかったんでしょ、この腕輪」

「……あ、ああ。 まあな」

「だからあげる。 これは、わたしからの大変頑張りました賞だよ」

「ははっ、何だそれ……… 本当に貰っていいのか?」

「そんなにわたしが信じられないのお?」

「いやそうじゃねえんだがよ。 ま、貰っていいのならありがたく受け取らせてもらうぞ」

本当は自分で勝って手に入れたかった、と雄二は少し悔しかったが背に腹は代えられず遠慮なく腕輪を受け取る事にした。

理由は他にもあった。 腕輪の事情を知らない少女が、事件に巻き込まれる可能性もあったからだ。

このまま何も知らせず腕輪を手に来た事は逆に運が良かったのかもしれない。

「ありがとな」

「約束」と奈月は雄二の前に小さな手を伸ばし、さらに小さな小指を差し出した。

「ん?」

「雄二の居場所が出来た友達、ずっと大切にするんだよ」

「ああ、分かってるよ」

「えへへ、約束だからね」

小さな指は雄二よりも小さいはずなのに、なぜかとても大きくみえた。

奈月は賞品が重くて疲れたのか、壁際に置くと自分も体育座りして壁にもたれかかると少女は少し寂しそうな顔をして初めて召喚獣を観て興奮しながら体育館から出て行く生徒たちを眺めながら、

「……ねえデカユウジ。わたし、会長さんの意思継げるかな？」

「ん？ まあ玲<sup>あ</sup>さんは変わった会長だったからな。あんたには無理だろ」

「そこは素直に、そうだなって言うてくれないのに」

「今まで奈月先輩が玲さんに勝てた試しないだろ。とくにスタイルとか」

「む、胸はまだ成長してないだけだよ。明日には玲さんみたいになってるもん」

「そっぴや勝てたと言えば、前に玲さんと召喚バトルで勝つて言つてたがあれからどうなったんだ？」

「無理だよ、会長さんの能力強すぎ」

「そりゃそうか。さすがの奈月先輩でも『遅刻厳守【タイムカード】』に勝てるワケないよな」

去年文月学園を卒業した明久の姉である、吉井玲は前生徒会会長をしていた。

そんな玲の召喚獣の能力は『遅刻厳守【タイムカード】』。召喚獣や物体の『時間』を操作する能力。

ここで言う『時間』とは動きを封じたり、タイムスリップするという事ではなく『劣化』のこと。

存在するもの全てにある生まれてから死ぬまでの『時間』、つまり寿命と考えると早い。

簡単に言えば相手の召喚獣の武器が劣化によって攻撃力を低下さ

せたり、点数の劣化によって体力を減らしたり、または思考の劣化によって召喚獣が召喚者の命令意識に反応出来なくすると言った、とにかく何でも劣化させる召喚バトルにおいて『時間』は最悪の能力。

以前、翔子がFクラスとの試験召喚戦争で明久に言っていた、勝てなかった相手とは玲の事で、『光解離領域【フォトンベルト】』は通用しなかった。

『光解離領域【フォトンベルト】』は四次元に似た光間空間と言う次元に侵入する能力なのだが、四次元とは立体と時間で出来た存在のため『時間』を操る玲の能力では空間に劣化が起こり光間空間への侵入が出来なかったため負けたいらしい。

「やっぱ会長さんが最強だったんだよ。あんなの勝てる人いないって」

「今年の二年は特に強い能力所有者が8人揃ったらしいから、中には奈月先輩どころか玲さんの能力よりも強いヤツが出てくるかもよ」「それじゃデカユウジは、わたしにも勝てない弱々だからボコボコにされるね」

「あのなあ……これでも一応学年最強クラスなんだぞ。だいたい奈月先輩とは能力相性が悪かっただけだし」

「見苦しいぞおデカユウジ。さっきは素直に奈月先輩には勝てねえって言ってたじゃん」

「ぐっ、いちいち必要ない事は覚えてんのな」

「でもそれなら負けないように、わたしも会長さんみたいにもっともつと強くならなくちゃね」

「ま、何でも玲さんを意識するより、奈月先輩は奈月先輩の学園にすれば良いんじゃないかねえか」

「じゃあ、みんなの身長を小さくしたい」

「やっとな自分が小さいの認めたか」

「ち、違うよ！ 皆を標準サイズにするって事だよっ」

「それに全員小さくなったら、誰が高いところの荷物取るんだよ」



「そっか。じゃあこのままでいいや」

「相変わらずマイペースだな。ま、そう言うヤツの方が生徒会長に向いてるのかもな」

雄二のポケットがブブブ、と振動した。携帯電話から誰からかの着信らしい。

慣れた手つきで片手で折りたたまれた携帯を広げると、画面に映る名前を見た雄二は通話ボタンを押さずにパタンと折りたたんだ。

「どうしたの？」

「ちよっと呼び出した。んじゃまたな」

「うん。たまには生徒会室に遊びに来てね」

振り返り「気が向いたらな」言いながら手をヒラヒラとさせて雄二は体育館を出て行った。

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第八十四問】 学年の秀才 VS 学園の天才（後書き）

（新しい能力）

Aクラス 咲坂奈月

能力： 『氷河来襲【アキシオン】』

説明： 『熱』を吸収して攻撃力を増幅させる暗黒物質。

元ネタ： アキシオン（暗黒物質の一つ）

Fクラス 坂本雄二

能力： 『炎槍武【メゾフォルテ】』

説明： 攻撃力を上昇させる炎の槍。

元ネタ： 『演奏部』と音楽の強弱法『メゾフォルテ』

小メモ：

雄二の能力名を『爆炎暗黒物質』から『銀河自爆』に変更しました。  
なぜ変更したのか？

雄二にカツコイイ名前に変えろと言われたので、奈月の能力ついでに1分で考えました。

【第八十五問】 人の心と気持ち

B A K A T O T E S T

新校舎から離れた特別棟は今も誰も出入りがなく静かな音しか聞こえない。

一階の階段下にある小さなスペースには、腕を組んでイライラとした表情を見せている小山友香が待っていた。

「これはずいぶんご機嫌斜めじゃねーか、小山友香さんよ」

雄二は少し冗談交じりに鼻で笑いながら、

「いや、ご主人様と言うべきか？」

「誰が木下君と接触しなさいと言ったかしら？ 勝手に行動しないで」

「別にあんたの命令がなかったら行動するなどは言われてねえぜ」

「っ……！ まあいいわ。あなたには最後の仕事してもらおうよ」

坂本雄二は面倒くさそうに、

「それは嫌だ……って言ったら、どうする？」

「何言ってるの。私の命令からは逆らえないって知ってるでしょ」

雄二は呆れたようにため息をついた。

「正直もう面倒になって来たわ。真面目なあんたが何するのかわかって操られたフリしてたが、Fクラスを潰すだあ？ 呆れてバカになりそうだ」

「な、……私を裏切るって言うの！？」

雄二は口端を少しだけ釣りあげた。

「人聞きの悪い事言うなよ。オレは才能に操られてねえんだから、最初からあんたに手を貸した覚えはない」

「私の才能は男子なら絶対に操る事が出来るんだから、そんな事ありえない」

「ああその事だが、どうもオレの才能があんたの能力を相殺してんだな」

「っ……そんな意味の分からない理由で私の能力が無効化されたって言うの」

「ま、そう言うことだな」

あまりに面白くて思わず嘖き出しそうになった。

真面目なヤツは他人の言う事を疑う事なく鵜呑みにするピュアな性格だ。

小山友香の才能は命令に逆らえないと言う才能であって嘘を付けない才能ではない。

そこを坂本雄二は逆に利用して、才能は無効化されると言う誰でも疑いたくなる理由でも、それっぽい口実を付ければ真面目な小山なら全部鵜呑みにするだろうと考えた。

案の定、小山は知らぬ間に坂本雄二の言葉に騙されていることを知らない。だが、それは少し刺激が強すぎた。

「ふざけないで……私は……っ」

感情が溢れて思わず言いかけた口を強く閉じた。

「……………、なあ小山。お前は何が目的なんだ？ そんなにFクラスが嫌いなのか」

「別に嫌いでも何でもないわよ。私は坂本君を操ってFクラスの戦力を落とすのが私の目的」

「そこまでしてオレにこだわる理由はなんだ。根本と何をするつもりなんだ」

「どうして根本がそこで出て来るのよ。今は関係ないじゃない」

「一応オレはあんたより学力は上だ。そんなくらい推理するなんて簡単なんだよ」

「……………私だって知らないわよ。だけどそんなの私には関係ない。ただ命令に逆らわないようにするだけ」

「命令だと……?」

「っ……!」

その言葉に小山は眉を動かした。

「小山……お前まさか……、」

思わず口に出してしまった小山友香の顔は、みるみる険しくなっ  
ていき、

「根本に操られてんのか?」

彼女は両手をギョツと握りしめた。

「操られてないけど、そうしなくちゃ……そうしなくちゃダメなの  
……」

両手で顔を覆っている小山を見て、苦虫でも噛んだような嫌な気  
持ちが込み上げて来る。

真面目な小山がこんな事になってんのは、根本の仕業か。

「なら弱みでも握られてんのか?」

根本恭二が小山を操っていると言うのは今思えば変だ。 あいつ  
はそんな才能は持っていない。

「………違う。ただ約束を守ってもらうため。ただそれだけ

が目的だったのよ」

「約束?」

「私は根本が好きだったの。 だけど付き合うには命令を聞く条件  
が出された」

「そこまでして根本が好きだったのかよ」

「最初は些細な命令しかなかった。 だけど、今回はFクラスを潰  
す命令で坂本君を操れって言われたの」

彼女は顔を上げることすら力が入らない。

「本当はこんな事したくなかった。 私の才能はこんな事に使いた  
くなかったのに」

彼女は言葉に感情を入れることすら力が入らない。 立っている  
事すら困難になった小山はペタン、と正座するように尻餅をつく。  
「私なにしてたのかしら。 何であんな人のために………今頃に

なつてバカみたいに思えるわね」

「ホントお前バカだよ。せつかくの歓迎会だつてのに何でテンション下げられなくちゃならねえんだ」

坂本雄二は呆れたようにグシャグシャと頭をかきながら小山の方に歩いて行く。

「こちとらAクラスに勝つて設備手に入れなきゃなんねえつてのに、付き合うために操られてただつて？ バカバカしくて笑えてくるわ」

二人の距離は5m。

「いくつか質問だ。お前は人を操るのが好きでこんな事をしたのか？」

「……………」

彼女は口に出さなかった。

だから彼女は別の方法で答えるために首を横に振った。

違う、と。

二人の距離は3m。

「お前は事情があつてオレを操るしかなかったんだな？」

「……………」

再び彼女は言葉の代わりに首で答えた。

コクリ、と縦に。

二人の距離は2m。

「お前は今でも根本恭二の事が好きなのか？」

彼女は少し間を置いてから、ゆっくり首を横に振った。

「じゃあ最後に質問だ」と坂本雄二は小山友香の目の前で足を止めた。

二人の距離は1m。

「オレにどうしてほしい？」

「えっ…………？」

喋る力もなかったはずの彼女の顔は自然と上を向いた。

「お前の最後の命令。まだ聴いてなかったよな」

再び顔を上げる力をなくした彼女は地面を見ながら震えながら絞

るような声だが、それでもしつかりとした口調で。

「私の……最後の命令よ」

彼女は唇をギュツと噛みしめる。

「……私は………根本恭二と別れるって伝えて来なさい」

尻餅をついた小山の頭に包まれるような大きな手が触れた。

「ご主人様の命令は絶対だからな。必ず伝えてやるよ」

「くそつ、冗談じゃない……面白半分でやったただけだったのに何でこうなるんだよ」

学園の新校舎から離れるように逃げて走っているのはBクラス根本恭二。

額に汗の粒を垂らすほど走ったのか、焦っているのか分からないが根本恭二は女子用の制服を着ている事を忘れるほど、とにかく出来るだけ速く走って人に見つからないように何度も後ろを振り返りながら走っていた。

「こんな事ならFクラスなんざに手を出すんじゃないな。坂本に見つかれば殺されかねんぞ」

と、突然壁にぶつかったような衝撃の反動で根本は体勢を崩して尻餅をついた。

「つつつ、」

「よお根本。そんなに慌ててどこ行こうってんだ？ オレも連れてってくれよ」

「さ、坂本雄二？！ な、何でお前がここにいるんだ」

「テメエの汚ねえ声を嫌々ながらこの地獄耳で聞きつけてやったんだよ」

「お、俺は忙しいんだ。そこをどいてくれ」

「まあそう言うなよ」雄二は根本に手を差し伸べ「ほら、いつまで尻餅ついてんだ」

「バ、バカにするな」と根本は差し伸べられた左手を払おうとした時、

雄二はヒョイ、と払う手を避け尻餅をついている根本の胸ぐらを鷲掴みにして無理やりこっちに引っ張りあげた。

「なっ……!!」

距離は10cmもない。

息がかかるほど近い坂本雄二の顔は睨みつける鬼のような形相になっっていた。

「わ、悪かった謝るから。Fクラスにはもう手を出さないからその手を離してくれ」

「言え。テメエは小山に何をした？」

「な、何の事だ。俺は別に何もしていなくっ……」

さらに距離は近づく。

「正直に答える。テメエは小山友香に何をしたんだ」

「わ、分かった。教える。教えるからその手を離してくれ」

後ろに押し出すように手を離すと、1歩2歩とよろめいた根本は曲がった女子用のネクタイを整え、

「ったく、何なんだよ……、ああもしかしてお前」こちらを振り向いて「あいつの事が好きなんだろ」口元をゆるめて微笑しながら「だから俺に嫉妬してんだな。何だよ、そう言うことなら喜んでお前にくれてやるよ」

「あア？」

「俺は別にあいつに興味ねえから。あいつが好きだ好きだうるさいから面白半分で言う事を聞くな付き合っつてやるって言っつてやっただよ。そしたらマジな反応して本当に言う事聞くんだけ？」

身だしなみを気にしている根本は雄二に話しながら、自分の制服に目を向けて続ける。



「あの真面目な顔見ると今でも笑えてくるな。それなのにあのバカ、何の役にも立たねえんじや意味ないよな。　　だいたい俺は女装に興味はあるが女に興味なんざねえんだよ」

言った瞬間、根本恭二の頬に拳が突き刺さり景色が回転した。

「つつ……何すんだよ」と頬を押さえながら坂本雄二を睨みつけると、雄二は根本のところへズカズカ歩いてくる姿に一瞬恐怖を感じた。

「テメエは小山の気持ちを知りながら笑ってやがったのか。あいつは必死だったんだろ。お前の言う事を聞けば付き合えるって心を痛めてまで頑張ったんだろ。それをテメエはヘラヘラ笑ってやがったのか！」

「ちよつと待てよ、俺が悪いみたいない方すんなよ。条件は出したが強制的に命令したワケじゃないんだから俺は悪くないだろ」

地面に転がったままの根本の胸ぐらをまた持ち上げて、右手を強く握った拳が根本の顔面に突き刺さると赤い液体が噴き出した。

「テメエの事情なんて知るかよ。あいつは泣いてたんだぞ。好きな奴のために自分がやりたくもない事を泣きながらオレを操ってたんだぞ！　お前はそれを笑うのか！　笑って見てたつてののか！」

口と鼻から赤い液体を垂らしている根本の頬をまた殴る。

「がはっ……はあ、はあ……さつきから何度も何度も」根本は雄二を押しつけ、「殴ってんじやねえ！」

ふらふらとした動きの根本が拳を作り坂本雄二の頬を殴り飛ばすが、地面を踏み込んだ雄二は転ぶような無様な姿は見せなかった。

「ひっ……」

根本恭二は背筋を凍らせ後悔した。さつき殴り飛ばした相手は人間なんて生易しい生き物じゃないことを。まるで歯が立たないモンスターから逃げる映画のシーンのように足が震えて立っている事すら嫌になった根本はそのまま地面に尻餅をついて化け物から逃げるように後ろに下がる。

「何ビビってた？　人を殴った事もねえザコの拳程度でオレが倒

れるかよ」

「ちっ、違う……し、仕方がなかったんだ。実は俺も操られて言う事を聞かなかったら俺の『男装写真』が公開されるかもしれないなかつたんだよ」

雄二は口の中から溢れ出て来る血を地面に吐き出し前に歩く。

「な、お前、これ以上殴れば、どうなるか分かってんだろうな！」

それでも坂本雄二は歩みを止めることなどない。前に確実に踏み込み、確実に根本恭二との距離を縮めて行く。

「お前の男装写真だア？ そんな悪趣味な野郎がこの世にいると思つてんのか？」

「っ……！？」根本の行きついた先は、コンクリートで出来た学園の壁。逃げ場を失った根本はそれでも坂本雄二と言う化け物から離れようと壁に体を張りつける。

「や、止める坂本！ わ、わかった。この事は俺とお前の二人だけにしてやるから、な？」

「そう逃げんなんて。テメエに言わなきゃならねえ事があるんだよ。だからよオ……………」

五本の指に力を入れて出来た頑丈な拳は根本恭二の顔面に吸い寄せられるように、

「ちよつとそこまで、ツラ貸せやああああ！！」

B A K A T O T E S T

【第八十五問】 人の心と気持ち（後書き）

く明久のつぶやきく

主人公は僕なんですけど。

小ネタ：投稿したら、この章の文字数が4444字でした。  
F団の仕業でしょうね。

F  
F

【第八十六問】 最悪の出会い

B A K A T O T E S T

雄二が保健室を出て言うてから30分程度が過ぎてからFクラスの教室に戻ると、時計はちょうど時間は16時の針を差した。

毎年そうだが、やはり部活紹介戦争が開始された昼過ぎの学園は一年生が一人もいなくなって売上がガタ落ちは逃れられなかった。

教室には誰もいない。本来ならFクラスの生徒が暇そうにしているところだが、女子は盗撮犯捜しで外に、FFF団は女子を捜しに（主に出会いを求めて）外出中のため現在のFクラスは休日のように静かだった。

「しかし、ワシがおらぬ間に盗撮犯とされておったのは驚きじゃったの」

明久は一人昼食を済ましていなかった秀吉のために教室で簡単な料理を作るために、秀吉とムツツリーニは調理場の近くの椅子に座わって話しながら野菜を炒めている。

「誤解だよ秀吉。 例え僕が盗撮したとしても仕掛けるなら秀吉の更衣室にするよ」

「男の裸を見て何が嬉しいのじゃ」

「……………（ブルシャアアア）」

「何てハレンチなんだ秀吉は—！」

「なぜじゃ！ ワシは男じゃぞ。 裸が見たいのであればいくらでも見せてやるぞ」

「……………（ブルシャアアア）」

「ああもう、床が血だらけじゃないか」

「ワシが悪いと言うのか……………」

「はい秀吉」と秀吉の前に置かれた出来たての野菜炒めには姫路が使った食材の残りにしてはずいぶん豪華になっている。それだけ姫路の料理は豪華だと言ったことか。

「うむ、うまそうじゃの」

「そりゃそうだよ」明久は自慢げに鼻をすする。「この料理のメニューは『秀吉風野菜炒め』だからね」

「ワシ風とはどんな味じゃよ……」

「ささ、冷めないうちに食べちゃって」

「では、いただくでしょうか」

明久は秀吉の前の席に座り、秀吉の背後に映る体育館に視線を向けた。

「今頃、雄二は奈月先輩と戦ってるところかな」

「心配症だの明久は。雄二のことじゃ、必ず勝って腕輪とやらを手に入れて帰ってくるじゃろ」

「……だが会長は氷の属性能力。そう簡単にいかない」

「え、何で？ 氷なら雄二の能力は有利でしょ」

「うむう……明久は会長の事を知らんようじゃの」

「？」

「会長を相手にする時は世の中の常識などあてにならぬ。下手をすれば炎は氷が弱点ともなりうるのが会長の恐ろしさなのじゃよ」

「言われてみれば、奈月先輩って無茶苦茶だったもんなあ。それを聞くと雄二勝てるか余計に心配になって来た」

「ま、あの様子では自信があるようじゃし、ここは一つ信じてみようではないか」

「……去年の会長よりはマシ」

「じゃのお……去年の部活紹介戦争は恐ろしい光景じゃったからの」  
「なにに？ そんなに凄い戦闘だったの？」

明久は去年の新入生歓迎会が始まる直前で事件を起こして記憶を失っているが、それから入院と自宅謹慎で去年の新入生歓迎会の際は学園行事を一つも体験してないため一年生と同類。

「……む？ 今さらじゃが去年の会長の名字は『吉井』じゃったの」「あ、もしかして姉さんの事？」

詳しくは知らないが、記憶を取り戻すために以前に姉である玲から文月学園の卒業生だとは話を聞いた事があった。ちなみに後一年、生まれる年が違ったら姉のお古の制服を明久に着せるつもりだったらしい。

「おお、やはりそうじゃったのか。 思えば明久と、どことなく似ておるの」

「そんなに見つめられると照れるよ秀吉」

「なぜ顔を赤らめておるのじゃ……」

「でも姉さんが会長って言うのは初耳だよ。 それで、姉さんの何が凄かったの？」

「明久の姉上……玲会長は、決勝戦の戦いで二年生全員を相手にして一人で全滅させたのじゃよ」

「ええ?!」

「それどころか、召喚獣の能力の干渉で召喚フィールドまで破壊する事態になったのじゃ」

玲の能力は『劣化』。 能力を発動すると人間には見えない『粒子』が広がり、それに触れると劣化するような仕組みで召喚フィールドに干渉した粒子がフィールドの寿命を加速させて破壊した。

ちなみに、明久のような観察処分者で物理干渉能力を持っている者の寿命を劣化させるような危険性はない。 フィールドバックするのは痛みと属性。 つまり、例えば物質が触れていても『劣化』には属性がないため人間には無害となる。 もし干渉するような事があれば能力者である玲にも悪影響が及ぶため使用は控えているところだろう。

「姉さん……昔から無茶苦茶してたんだ」

「ワシはあの能力が学園最強と言われる意味をこの目で焼き付けられたのぉ」

「……あれは絶対に敵に回したら終わる」

「いや、一応姉さんでも人間だからね？ そんな化け物でもないからね？」

それにしても姉さんが会長で最強の能力か……。僕の能力は分身……良いとこ全部姉に持ってかれた。

「はぁ……」

「そこまで落ち込まぬとも良かるうに」

「違うんだ。ちょっと生まれてくる速さに後悔してるだけだよ」

「うむ？」

「あらあら、ずいぶんと騒がしい声がすると思えば、あなたたちではありませんか」

ゆっくりとした口調な女の声が聞こえた。

明久の後ろから、ゆっくりとした動きで教室に入って来たのは、

「も、森野さん……木枯さん」

「疲れて休憩する予定でしたが、まさかこんなところで隠れていらつしゃったのですね」

「聞いて森野さん。あれは誤解で僕らは盗撮なんてしてないんだよ」

「う、嘘付きはダメだよ吉井君。ちゃんと謝ればみんなも許してくれるのに」

「やっぱりダメか。根本君が犯人だったと言ったとしても人に罪を擦り付けるなって言われるのが見える。こういう時に雄二がいてくれたら何かと理由を作って解決させてくれるかもしれないけど、僕の頭にある数少ない知識じゃ結局これしか思いつかない。」

「くっ……」明久は手を前に伸ばして「試験召喚獣召喚【サモン】」  
「やっぱりこういう時は召喚獣で戦う意外選択肢はなさそうだ。」

「あらあら。わたくし歩くのが疲れてしまつて戦う気力がないのですか」

「涼子ちゃんは休んで。ここはあたしが吉井君たちと戦うから」  
「そうですね。ではお言葉に甘えさせていただきますわね」

近くにあった椅子に持参の座布団を敷いていつも通りに正座で座

る森野。

明久は秀吉とムツツリー二のいる後ろに下がると小さな声で、

「一番危険な森野さんが疲れて参加できないみたいだし、木枯さん相手なら何とかなるかもしれないよ」

「お主ら二人なら召喚獣で妨害を維持できるかもしれないの」

「……勝算はある」

「なら満場一致って事で」

「……試験召喚獣召喚【サモン】」

ムツツリー二が召喚獣の召喚許可を出した。

前方に展開される幾何学的な魔方阵から二人のデフォルメした召喚獣が姿を現す。

「試験召喚獣召喚【サモン】」

木枯小雪の目の前には『眠りから覚めた姫』と書かれたプレートがガラスのように砕けるとそこから木枯をデフォルメした姿の召喚獣が現れた。

木枯はどこかの城の姫様のような純白なドレスを着た召喚獣。

装備はレイピア。

三体の召喚許可が終わると、それぞれの召喚獣の頭の上に点数が表示される。

『現代国語 吉井明久』

Fクラス 254点

『現代国語 土屋康太』

Fクラス 56点

VS

『現代国語 木枯小雪』



明久は奈月に負けたが、実際には途中敗退という事になっていたのが幸いして召喚獣は戦死させられず少ないものの点数は残っている。

これなら楽勝だ、とすでに勝利宣言をした明久はどこか余裕な顔をしている。

実際には勝ってはダメなのだが、これだけ戦力差があればダメージも軽くて済みそうだ。

しかも木枯の点数は格段に低い。容姿は成績優秀に見える木枯だが、やはりFクラスと言うだけあって点数は彼女の本性を物語っている。

「僕が先に攻撃を仕掛ける。そこにムツツリーニのスピードで応戦して」

「……待て明久、木枯の狙いは」  
「大丈夫だよ、油断はしないって」

明久の召喚獣が地面を蹴って木枯の召喚獣の距離5mを強靱な脚力で一気に縮める。

地面を蹴って2歩目で空高く飛び上がると、少し弱めに握った木刀を振り上げて一撃で倒さないように加減して振り下ろした。

木枯小雪の召喚獣は反応出来ずにその場で止まっている。これなら絶対に当たるはず。

そう。常識的に考えれば木刀は確実に当たっていた。  
「なっ……え、」

だからこそ明久は、召喚獣がまるで電池切れの機械のように木刀を振り下ろした体勢のまま木枯の召喚獣の目の前で止まったことが理解できなかった。

「さ、さすが吉井君。もう少しで間に合わなかった」  
声にハッと我に帰った明久は視線を木枯に向けると彼女は手に何

か持っていた。

見た目は新品のチョークほどの大きさでシャーペンのような形から赤い糸のようなレーザー光線が真っ直ぐ伸びて明久の召喚獣に当たっていた。

「召喚獣が動かない……っ！」

「何じゃと!？」

まるで網に掛かったように召喚獣はびくともしない。

「この、このっ……ああもう、何で動かないのさ!」

手を動かす、足を曲げる、何でもいいからどんな動作でもいいから召喚獣に命令意識を送るが召喚獣はピクリとも反応を見せない。

「だ、大丈夫だよ。ちゃんと動くから」

ほら、こうすれば、と木枯が手に持っているレーザーポインタを明久の召喚獣の右足に当てると、さっきまで無反応だった召喚獣が右足を動かして体育の授業の時にやる回れ右で180度クルリと回ってムツツリー二の召喚獣の方に振り向いた。

「なっ、勝手に動いた……!？」

「操作能力じゃムツツリー二! 明久の召喚獣に攻撃されるぞ」

「……分かってる」

木刀を構えてこちらに向かって来る明久の召喚獣に左手に持った小太刀で明久の召喚獣の木刀とガキンツと重なりあった。

「……っ重い……っ」

思った以上の衝撃で30cmほど後ろに押され、木刀が目の前まで迫って来た。

咄嗟に右手の小太刀で重ね合わせて威力を上げるが、それでもまだ力押しに勝てず両手の筋力をフルに使って弾かれないように耐える。

「ムツツリー二!」

「……待てと言ったはずだ明久」

「ご、ゴメン、ムツツリー二」

明久のすぐ敵に突っ込む性格がアダとなって、一瞬の判断ミスで

吉井明久の召喚獣は敵になった。

明久の召喚獣はBクラス並み。　今まで自分が使っていた召喚獣が敵に回ればやっかいな相手だ。

どうしよう。　この点数の差ではムツツリー二が戦死させられる。

「明久よ、召喚獣は動かせぬのか」

「さつきから意識させてるけど、全然動かないんだ」

木枯の召喚獣の点数では能力は使えない。　おそらく明久の召喚獣が勝手に動いているのは木枯の才能の力だろう。　椅子に座ってお茶をすすっている森野の才能だと可能性を考えるが、森野の才能は『降霊術』と言う能力とは違うだろう。

「どうやら、あのレーザーのようなものを何とかせねばならんようじゃな」

秀吉の視線の先にあるのは、木枯が操作している赤く光っているレーザーポインター。

明久の召喚獣を自由にさせるには、装置を壊すか、あのレーザーを消すのが最善策と考えていい。

何とかして僕の召喚獣を邪魔させる方法を考えなくちゃ。

物理干渉能力で召喚獣を無理やり動かすのは……いや、召喚獣は人間の何倍も強くて人の力程度で動くワケないか。

秀吉の召喚獣は僕が戦死させたから参加は無理だし、森野さんは敵なんだから力を貸してくれるワケない。

誰でも良いから、もう一体召喚獣がいたら邪魔出来るのに。

「……………」

召喚獣が……もう一体……？

「そつだ、」

おもむろにポケットの中に手を入れる明久。

「どうしたのじゃ明久。　何か方法があったののかの」

「木枯さんが操作できるのは一体だけみたいだから、僕の召喚獣が分身すれば一体は操られずに使えるかも」

「なるほどの。　じゃがお主の点数では無理ではなからうか」

「そこで、この腕輪の出番なんだ………、け、ど」  
だがいくら捜しても手には物体が触れる感触がない。

「あ、………」  
思い出したかのように顔を上げる明久に秀吉は小動物のように首を傾けて疑問符を浮かべる。

腕輪は調理場の手伝いが終わった時に姫路さんに渡したままだった。

当の持ち主は現在の所在不明であり敵対関係。

それでも、

「カムバツク姫路さん！」

「なぜ姫路なのじゃ明久?!」

あの時、あの場所には秀吉がいなかったため明久の言っている意味がわからなかった。

「………つぐ」

その間にもカチカチと重ねている小太刀の金属音がムツツリー二の召喚獣に近づいていく。

「……無理だ。これ以上は弾かれる」と言った瞬間。

ムツツリー二の召喚獣の目の前で吉井明久の召喚獣が車と衝突したかのような衝撃音と一緒に真横に吹き飛ばされた。

「つたあああああ!!」

フィードバックした痛みで叫ぶ明久が地面を転げ落ちていると、

「何やってんだ明久」

「雄二!?!」

耳にタコが出来るほど聞き慣れた声は森野たちが入って来た後ろの教室からではなく、前の扉から。腕を組みながら扉に腰掛けて立っていたのは決勝戦が終わったばかりの坂本雄二。

根本恭二と争った後だと言うのに、坂本雄二の制服に汚れ一つな

い。ただ口を少し切った後があるだけ。

雄二はさつき召喚獣で吹き飛ばした『何か』に視線をやると、

「ああ悪い。お前の召喚獣だったのか」まるで小学生が演劇で緊張しながら台詞を言うように「あまりに醜い顔だったもんで敵かと思っただ」

「何そのワザとらしい言い方は！ 分かってただろ！ 分かってて吹き飛ばしたでしょ！」

「落ち着くのじゃ明久よ」

「あらあら、盗撮犯が自ら来ていただけなのは好都合ですこと」

「さ、坂本君も白状してみんなに謝ったほうが良いよ！」

「森野と木枯だけか。桜井と木原はどうしたんだ」

「お二人でしたら外で捜しているところだと思いますわよ」

雄二は独り言のように、

「ってことは、そう簡単には帰って来ないな」

「どうしてくれるのさ雄二。僕の点数結構減っちゃったじゃないか」

教室の後ろの掲示板に叩きつけられた明久の召喚獣は何とか生きていたが、50点ほど引かれていた。

「いちいち細かいんだよお前は。オレも参加すんだから良いだろ」

「む？ そう言えば雄二よ。お主の点数が残っておると言うことは優勝したのじゃな」

「ホントだ！ さすが雄二。奈月先輩にも勝てる何て凄いじゃないか」

秀吉が言うまで完全に忘れていた。学園最強と言ってもいいくらい強い奈月先輩を倒すなんてさすが雄二だ。

「いや、余裕で負けたよ。点数が残ってるのは事情があつてのことだ」

「え、負けたの！？ じゃ、じゃあ腕輪はどうなったの」

雄二は明久たちのところへ近づいて、

「大丈夫だ、ちゃんと手に入れた。それより、まずは」

雄二は明久の召喚獣に視線を移すと、寝起きのようにフラッと立ち上がった召喚獣が木刀を構えて掲示板を蹴って向かってきた。

「この状況の説明が欲しいところだ」

ガキン！ と木刀と槍がぶつかり合って教室に響く。

以前に明久と召喚バトルしたところのある雄二にとって、明久の攻撃は慣れているのか余裕な表情を浮かべながら槍で弾き返すと、明久の召喚獣は木枯の召喚獣の横に、雄二はムッツリー二の横にバツクした。

「僕の召喚獣が木枯さんに操られてるんだ。あの、赤い光線をどうにかすれば僕の召喚獣は元に戻れると思う」

操られるねえ、 とつまらなさそうに答えた。

「……今日はよく聞く言葉だ」

明久が指差す方向に雄二が視線を動かした。

「赤い光線……あれが木枯の才能か」口元に手を当てて独り言のように「リモコン？ いや、赤外線とは違うな」さらに視線を木枯に向けると「あれは……普通のレーザーポインターだな」さらに目を細めて「こいつは、もしかして……」

坂本雄二の口端が三日月のように曲がった。

「何か方法あるの？」

「お前ら、ちよつとこつち来い」

ちよい、ちよい、と指で呼ばれた明久たちが雄二の近くに集まった。四人はスポーツの試合前に意気込むように円陣を組んだ。

「……って感じた」

「なるほどの。さすが雄二じゃ」

「……安い注文だ」

「ホントに大丈夫なんだよね？」

「ああ。んじゃ初めての共同作業って事で足引つ張んじゃねえぞお前ら！」

「あ、あたしの『赤外誘導【ブラッドガイド】』は運命の赤い糸で絶対に解けないんだから！」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第八十六問】 最悪の出会い（後書き）

（新しい才能）

Fクラス 木枯小雪

才能： 『赤外誘導【ブラッドガイド】』

説明： 光を当てると召喚獣を操る事ができる。 明久曰く、操れるのは一体までと予測している。



【第八十七問】 運命の赤い糸

B A K A T O T E S T

右側のムツツリー二の召喚獣と左側の雄二の召喚獣が同時に地面を蹴った。

横一列で走っていたムツツリー二と雄二の召喚獣は言葉をかけることもなく、こちらから見て左側、つまり雄二の召喚獣の直線にいる木枯の召喚獣目がけて同時に挟むように左右を取った。

ムツツリー二の召喚獣は向きを木枯の召喚獣に変えると小太刀を強く握り真っ直ぐ突っ込み、『炎槍武【メゾフォルテ】』で炎の槍に変えた雄二の召喚獣は槍をバットののように持ちかえるとホームラン宣言で大きく振りかぶった。

「そ、そんな攻撃じゃ当たらないよ」

すぐさま木枯の召喚獣を後ろにジャンプさせて下がらせた。

木枯が明久の召喚獣を下がったため、雄二とムツツリー二の召喚獣が正面に向き合って、まさにムツツリー二をホームランする状況になった。

が、

ムツツリー二の召喚獣が空中でクルリと回転してバットのようになり振りかぶっている槍に足を乗せ、そのまま急加速させて隣にいる明久の召喚獣に大砲のように突撃した。

咄嗟に木枯は明久の召喚獣を後ろに飛ばせて避けさせる指令を送った。

だが、

「えっ、あ、あれ?!」

明久の召喚獣は電池がなくなって止まったロボットのよう動か

なかった。

「その召喚獣は僕のだ。勝手に動かされたら困るよ木枯さん」

さっきは動かなかった召喚獣がムツツリー二の攻撃をヒラリと避けた。無駄に後ろに飛ばせる事なく、興奮した牛を避ける闘牛士のように、たった1歩足を動かしただけのシンプルな動きで。

召喚獣に指令を送って細かい動きにさせるのは普段から使い慣れていなければ不可能だ。

そう、だからこそ召喚獣が動かした人物が誰なのかわかる。

「木枯さんの召喚獣、懐がガラ空きだよ」

木枯の召喚獣に攻撃すると思わせ明久の召喚獣に攻撃する。だがこれもフェイクで。

木枯は自分の召喚獣が安全だと思っていたのか完全に忘れていた。明久は演劇の『木の役』のように立っている木枯の召喚獣に渾身の一撃（倒さない程度）で吹き飛ばして黒板に叩きつけた。

「嘘……え、……何で……」

彼女にとってショックだったのは召喚獣が吹き飛ばされた事、ではなく自分の才能が無効化されたこと。

ペタン、と音が聞こえるように崩れ落ちた木枯は黒板で倒れる召喚獣を見て言葉が出なかった。

「あらあら、ユキちゃんの才能が破られるなんて初めてですわね」

「な、何で光らないの？ こんな時に故障しちゃったの？」

カチカチ、とチョークサイズのレーザーポインターにあるボタンを何度も押してみるが、赤い光線が発生しない。

「壊れちゃいねえよ」線香の火を消すように炎を纏った槍を振り払って「もう一回使ってみな」

「……………あ……………」

雄二の言った通りレーザーポインターを押してみると、ちゃんとレーザー光線が発射された。

「何で……………どうして……………」

「知ってるか木枯。レーザーポインターってのは光を増幅させて

発射させてんだ」

「そっなの……?!」

「んで、オレの『炎槍武【メゾフォルテ】』は光を喰らって攻撃力が増幅させる能力だから才能は無効化されたってなワケだ」

『炎槍武【メゾフォルテ】』は雄二の400点数以上で使用可能になる。光を喰らう事で武器の攻撃力を上昇させる効果がある。

「そ、そんなあ……」

雄二は最初レーザーポインターを見て気がついた。

木枯の才能は召喚獣に赤い光線を当てると操れる能力。それはつまり、光自体が木枯の才能だと言う事に。

召喚獣に触れるには物理干渉能力がなければ召喚獣に干渉できないのだから、市販されているレーザーポインターでは召喚獣に触れることなく貫通してしまうところを雄二は感知していた。

光が物理干渉しているのであれば後は簡単な話。雄二の能力で光を吸収してしまえば、レーザーポインターは威力を削がれて明久を操れなくなる。

「……………」

僕は雄二が来るまでテンパって何も出来なかったのに、一瞬でこんなことまで計算したなんて。結局、僕は頭が良い何て言われても知識力があるだけで判断力が足りなさ過ぎるんだ。

何も考えないで一人で突っ走るのは悪い癖なんかじゃない。バカの発想なんだ。

明久は軽くため息をついてから一人つぶやくように、  
「僕ももう少し考えて行動できるようになれば雄二みたいになれるかな」

「ひ、酷いよ坂本君……あたしの大切な『運命の赤い糸』だったのに」

「お、おい泣くことないだろ」

「お主が女子を泣かせるとはの」

「……最低な男」

「お前らな……」雄二は目を擦って泣いている木枯を見て近くにあった椅子に座りながら頭をグシャグシャとする。

「あらあら、泣いていては王子様に会えませんわよ」

地面にペタン、と女の子座りしている木枯の隣にやってきた森野がサラサラとした黒髪を撫でる。

「うう。でもお、あたしの赤い糸が切られちゃったんだよ」

「何で木枯は『運命の赤い糸』にこだわるんだ？」

「……あたし、家が貧しいから、将来は綺麗なお姫様になって幸せになりたい。だから、あたしと結ばれる素敵な王子様に出会う為に探してるの」

「ユキちゃんは、小さい頃からずっと憧れていたそうですよ。

ですから、わたくしが時々開催しているパーティにお誘いしてますの」

「それで森野は王子様に会えないって、よく言ってたのか」

森野涼子は、超が付くほどのお嬢様。それはAクラスの霧島翔子すら上回るほど大富豪で、木枯は将来の相手を探すために森野に手伝ってもらっているらしい。

雄二は腕を組んで難しい顔をしてから、木枯に目を合わせた。

「なあ、『運命の赤い糸』ってどういうもんか知ってるか？」

「生まれた時から将来結ばれる男女の小指に付けられる赤い毛糸のこと、だよな？」

「オレは違うと思う」

「雑誌とか絵本でも書いてあったから間違いないよ」

「木枯が考えてる『運命の赤い糸』は、簡単に切れる安っぽい毛糸と一緒に、すぐに縁を切るバカップルどもの事だ」

「ち、違うよっ！赤い糸は絶対に切れないんだから！」

「あらあら、ユキちゃん。少し落ち着いてはどうでしょうか」

「だって坂本君が……」

「お主も落ち着くのじゃ。木枯の夢を壊すのはどうかと思うのじやが」

「そうだよ。メルヘンチックで良いと思うけどな」

「そ、そこまで言うなら坂本君の『運命の赤い糸』はどういうものなのか教えてよ」

「そうだな……、少し考えると意外と簡単に答えが出た。

「錆びてボロボロになった鎖くわだな」

「鎖？ それに錆びてボロボロのどこが『運命の赤い糸』なの？」  
確かにメルヘンチックというよりホラーに近いように思える。

「『運命』なんてのは、そう簡単に見つかんねえよ。二人を繋ぐ新品の鎖が何年経っても切れずに残って、赤く錆びついたボロボロの鎖を見た時に、ようやく『幸せ』つてのに気付くんだ」

「赤く錆びついた鎖……、……それが坂本君の『運命の赤い糸』」  
「夢のねえ現実的な話だが、結局は何でも後になってありがたさが分かる」

あの雄二がこんな事を言えるなんて。

雄二と翔子の関係が変わったのは学園が崩壊した辺りから。

あの時、二人に何があったのかは知らないけど、雄二がここまで変わるなんて霧島さんはやっぱり凄いな。

「……、あたし間違ってたのかな」

「間違っちゃいねえよ。ただ恋愛なんてのは誰でも簡単に出来るが、本当に相手を好きになるのは難しい。それこそ『運命』の相手に出会わない事には『赤い糸』で終わるだろうからな」

「……、そっか。坂本君の言いたかった事、少し分かったかも」

「ま、恋愛つてのは人それぞれの考え方だが、ただ相手を待っているだけじゃ何も変わらない。木枯の言う赤い糸が存在するなら、まずは自分で決めて自分で前に進むことだな」

「自分で決めて自分で進む……、……そっか、少しだけ分かった気がする。ありがとう坂本君」

「オレも多少のアドバイス教えてやるから頑張れよ」

「うん！」

「さて」森野は両手を軽く叩く。「仲直り出来た事ですし、この辺

にいたしましたようか。　そろそろお客さんも戻ってくる頃でしょうから」

「ん、だが二人は盗撮の件で怒ってるんだろ？」

「戦死していないとは言えユキちゃんも負けですから、わたくしたちはもう妨害する資格はありません」

「まあお前らがそう言うってくれるんなら、こっちは助かる」

「坂本君たち、こんなところにいたの?!　はあ……どうりで見つからないワケね」

「やつほーっ!　紅葉のお帰りだよお!」

教室の前から、元気よく手を上げている木原と、疲れ果てた様子の桜井。

「あらあら、ずいぶんと賑やかになって来ましたわね」

「まずい。　せつかく森野さんと戦争回避出来たって言うのに今度は桜井さんと紅葉と戦う事になる。」

「あ、あの桜井さん。　あれには深い事情があつて」

「アタフタと手を動かす明久を観て桜井が口から息が漏れて微笑する。」

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。　状況は把握してるから」

「え?」

桜井の顔つきはすぐさま真剣に変わる。

「私たち、さつきCクラスの人から妨害戦争を受けたの。　それで盗撮の事も全部教えてもらったから」

「Cクラスが桜井さんたちに妨害……やつぱり雄二の言った通り四季の妖精を潰そうとしてたんだ。」

「その様子だと、勝ったってことだよな?」

「紅葉が全滅させてくれたわよ。　それから須川君と平賀君が応援に駆けつけてくれたの」

坂本雄二はそれを聞いて教室の時計を観て目を細めた。

「よし。　女子たちには後で説明するから、今すぐ全員をここに集めてほしい」

「急にどうしたのさ？」

「もう時間がないんだ」

雄二は大きく息を吸い込んで、

「今からオレたちFクラスはAクラスに宣戦布告する」

B  
A  
K  
A  
T  
O  
T  
E  
S  
T

【第八十七問】 運命の赤い糸（後書き）

（坂本注意報発令）

坂本雄二付近にいる生徒は今すぐ暖を取ってください。

また、この章を読んだ方も今すぐに暖かいココアを飲んでください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8302q/>

---

バカと日常と試験召喚戦争

2011年10月28日08時07分発行